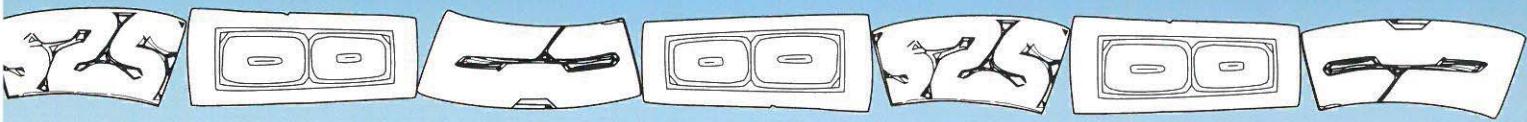


紀要

沖縄埋文研究 5



論考

貝志川島岩立遺跡出土人骨の再整理

・・・片桐千亞紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美 (1)

南島爪形文土器文化研究史 ······ 伊藤 圭 (25)

沖縄における貿易陶磁研究

···瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 (55)

発掘調査概要

首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析とその検証

···山本正昭、上田圭一、矢作健二、石岡智武 (77)

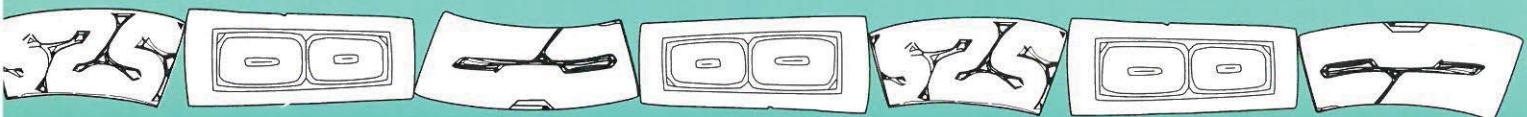
掛保久防空壕 ··西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター (111)

報告

海からの贈り物 ······ 岸本義彦 (141)

文献紹介

多和田眞淳「東苑隨想」・「東苑隨想 その二」 ······ 安里嗣淳 (147)



2007年
沖縄県立埋蔵文化財センター



写真1 遺跡全景

下田原貝塚（しもたばるかいづか）

下田原貝塚は、八重山諸島の竹富町波照間島北側海岸に所在する標高3～9mの石灰岩低台地に形成された集落跡で、南琉球新石器時代前期（約3,500年前）に位置づけられている。

発掘調査の歴史は古く、金関丈夫氏らによる1954（昭和29）年、早稲田大学八重山学術調査団による1958（昭和33）年に行われた学術調査のほか、沖縄県教育委員会により1984（昭和59）年から1985（昭和60）にかけて土地改良計画に伴う範囲確認調査が実施されている。

これまでの発掘調査により、柱穴や炉跡、溝状遺構が検出されるとともに、「下田原式土器」と呼ばれる宮古・八重山諸島特有の土器や局部磨製石斧などの石器類、貝製品、骨・牙製品などの多様な遺物が数多く出土している。また、当該遺跡の東側に近接する無土器遺跡の「大泊浜貝塚」より層位学的に古いという、両遺跡の時期的前後関係を明らかにしたことでも知られている。

なお、下田原貝塚の主体文化層（第Ⅲ層）から得られた木炭による放射性炭素年代測定結果は、 $3,660 \pm 70$ y BP、 $3,740 \pm 80$ y BPとなっている。

このように、下田原貝塚は沖縄戦後に行われた発掘調査の原点となる遺跡として、また、宮古・八重山諸島新石器時代編年の標識遺跡としても重要な遺跡であり、県指定史跡となっている。

（仲座久宜）



写真2 石斧出土状況



写真3 下田原式土器



写真 1 遺跡全景

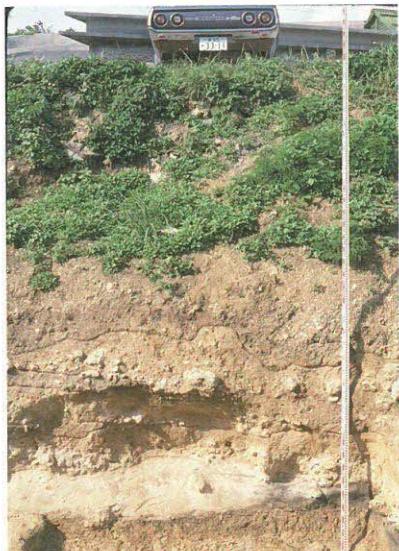


写真 2 土層壁面



写真 3 爪形文土器

野国貝塚群 B 地点 (のぐにかいづかぐん B ちてん)

野国貝塚群 B 地点は沖縄本島中部西岸の嘉手納町字兼久に所在する。国道 58 号線沿いの標高 3 ~ 5m の海岸砂丘地に立地する沖縄新石器時代前Ⅱ期～Ⅲ期（縄文時代早期～前期）に属する遺跡である。1955 年に多和田眞淳氏によって発見され、その後、高宮廣衛・嵩元政秀両氏によって地表踏査が行われ、九州縄文時代前期の轟式土器が採取されている。また、新田重清氏が曾畠・轟系土器を採取しており、その地点が野国貝塚群 B 地点である。

発掘調査は沖縄県教育庁文化課が 1982・1983 年に実施している。層序は 8 枚からなるが、土器文化の相違で三つに別けられている。すなわち、上層から前Ⅲ期の条痕文土器や室川下層式土器、中層から前Ⅱ期の爪形文土器（ヤブチ式土器、東原式土器）、下層からは爪形文土器に先行すると考えられる無文で薄手の土器が出土している。

その他の遺物では爪形文土器に伴って刃部磨製石斧や敲打器（ハンマー）、砥石などの石器類が数多く出土している。また、食料残滓としてのイノシシ骨や貝類もこの時期の遺跡としては例のない出土量である。

このように、当該遺跡は琉球列島の土器文化の起源を解明する上で欠くことのできない重要な遺跡である。

（小橋川 剛）

沖縄埋文研究

第5号

目 次

卷頭カラー図版

野国貝塚群B地点

下田原貝塚

論考

具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理	片桐千亜紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美	1
南島爪形文土器文化研究史	伊藤圭	25
沖縄における貿易陶磁研究	瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志	55

発掘調査概要

首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析とその検証	山本正昭、上田圭一、矢作健二、石岡智武	77
掛保久防空壕	西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター	111

報告

海からの贈り物	岸本義彦	141
---------	------	-----

文献紹介

多和田眞淳「東苑隨想」・「東苑隨想 その二」	安里嗣淳	147
------------------------	------	-----

英文 ABSTRACTS	林 徹
--------------	-----

具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理 ～焼けた骨の存在から見た葬法に焦点をあてて～

Reorganization of the Skeletal Remains from Shiitachi Site, Gushikawa Island
- Fired Bones and Burial Method -

片桐千亜紀・小橋川剛・島袋利恵子・土肥直美
Katagiri Chiaki, Kobashigawa Takeshi, Shimabukuro Rieko, Doi Naomi

ABSTRACT: This paper presents the result of studying skeletal remains unearthed from Shiitachi site in Gushikawa island of Izena-son, Okinawa prefecture. The site is located on a sand dune below a rock shelter that faces the ocean, and it had been used as a cemetery for a certain period of time. The site was excavated from 1977 to 1981 by the Izena-son Board of Education, with support from Okinawa Prefectural Board of Education. As a result, a number of Jomon-period skeletal remains were recovered. Most of the bones that were found did not reflect an anatomical layout; instead, the specimens were chiefly collected bones and were organized into a proper manner for purposes of study.

Based on this reorganization, the number of buried bodies was estimated to be 62. Not only dried bones (63%) but also fired ones (37%) exist in the collection. The latter consists of a "bleached-and-fired group" (bones burned after an initial burial period, 24%) and a "body-fired group" (bones burned in the process of cremation, 13%). Therefore, this site includes a certain proportion of cremated bodies.

This site shows an early stage of aerial sepulture practice that is commonly known in Okinawa, and is considerably important for clarifying the prehistoric culture of Okinawa. Further examination and evaluation of the site is required.

1. はじめに

南西諸島における先史時代の葬墓制研究については、1981年に嵩元政秀氏・當間嗣一氏によって集成された「考古学上よりみたる南島の葬制について」(嵩元・當間 1981) があり、南西諸島においても葬墓制は多種多様にわたることが指摘されている。その数年後、沖縄県地域史協議会によるシンポジウム(沖縄県地域史協議会 1989)が行われるなど、1980年代は活発な葬墓制研究が展開されている。近年では新里貴之氏が1980年代以降の資料を追加しつつ集成を行い、整理している(新里 2004)。しかし、このように研究が進展する中でも後述する「焼けた骨」についてはあまり注目されていないのが現状と思われる。

本稿は伊是名村具志川島岩立遺跡の発掘調査(伊是名村 1977・78・79・81)で検出された人骨群の再整理を行ったものである。この調査は1976年~1980年まで伊是名村教育委員会が主体となって実施された。そもそもこの再整理は、土肥が主体となって2004年~2006年の3ヶ年間にわたり実施した、うるま市具志川グスク崖下地区の学術調査の成果が契機となった。その成果は今後まとめる予定であるが、この遺跡からは焼けた人骨が層をなして多量に確認された(沖縄タイムス・琉球新報

2006.11.14 朝刊参照)。のことから、南西諸島の先史時代には死者を「火」で焼いて葬送する「習慣」もあった可能性が考えられ、これまでに確認されている焼けた人骨が検出された遺跡の人骨群を見直すこととした。

岩立遺跡は沖縄貝塚時代前期後半から中期と考えられる人骨が岩陰から大量に検出され、焼けた人骨も含むことが報告されている(伊是名村教育委員会 1977~79、81)。さらに、報告者によって「焼く行為を一連の埋葬行為・儀礼の中の一つとして、位置づけることも可能であろう」(木下・中村 1979)と指摘されていることは重要である。このことから、当該遺跡は焼けた人骨に着目しつつ再整理を実施するために必要なデータがそろっている。

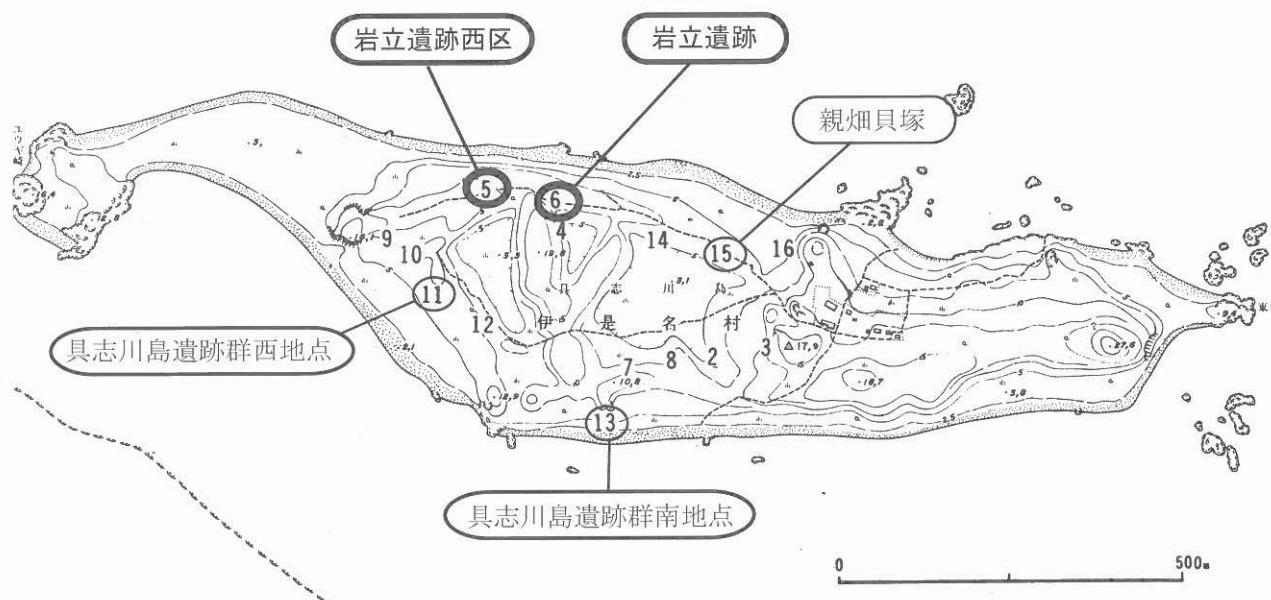
沖縄県立埋蔵文化財センターでは平成 18 年度から具志川島岩立遺跡西区の発掘調査を再開(1989 年~1992 年に西区では初めての調査が実施されている)しており、前回の調査よりさらに下層からも人骨層が検出された(岸本・片桐 2006)。

そこで、これまでの岩立遺跡での調査成果をまとめ、集団の推定個体数と焼けた人骨との割合や、遺構としてのまとまり等を把握することを目的として、墓地として機能した時期の岩立遺跡の実態に再度迫ってみることとした。

2. 遺跡の概要

岩立遺跡は沖縄県島尻郡伊是名村具志川島に所在する砂丘遺跡で、「具志川島遺跡群」の一部として位置づけされ、村指定(1982.11.1 指定)の岩立遺跡と岩立遺跡西区に分かれている(第 1 図)。2つの遺跡は 1970 年代に大規模な採砂工事が行われて遺跡のほとんどが破壊の憂き目にあったが、もともとは一連の遺跡であったと思われる。現在は岩立遺跡も岩立遺跡西区も岩陰にわずかに残存するのみで、垂直に切り取られた遺跡断面が自然の風雨を受けながら露出し日々壊滅の危機に瀕している。

具志川島遺跡群は 1960 年代にその存在が知られて以来、2 度の発掘調査が行われており、先史時代の重要な情報を多量に有する遺跡群として認知されている。1 度目は 1976 年~78・80 年にかけて、



第 1 図 岩立遺跡の位置(伊是名村教育委員会 1977 第 3 図より転載、一部加筆)

※ 地図内の番号は 1975 年表面踏査の遺物確認地点



第2図 具志川島の位置

伊是名村教育委員会が主体となり沖縄県教育委員会の協力のもとで4次にわたって発掘調査が実施された。この調査を便宜的に具志川島遺跡群発掘調査の第1期とする。2度目は1989年～1992年にかけて4次にわたって実施された。1989年は沖縄県教育委員会が主体となって実施した「北部リゾート地区遺跡分布調査」の一環として実施され、1990年～1992年までは伊是名村教育委員会が主体となって実施された。この調査を便宜的に具志川島遺跡群発掘調査の第2期とする。現在、2006年より沖縄県立埋蔵文化財センターが第3期目の発掘調査を実施している。

2度にわたる具志川島遺跡群発掘調査の結果、岩立遺跡では高宮暫定編年前IV期～V期と考えられる多量の人骨を含む層や、前III期と考えられる面縄前庭式系統の土器群が、炉跡等の生活址を示す遺構と共に確認されており、沖縄県の先史時代を考える上で重要な成果が得られている。

3. 遺跡の調査研究略史

岩立遺跡発掘調査の研究史について人骨検出層の状況に焦点をあてて述べる。

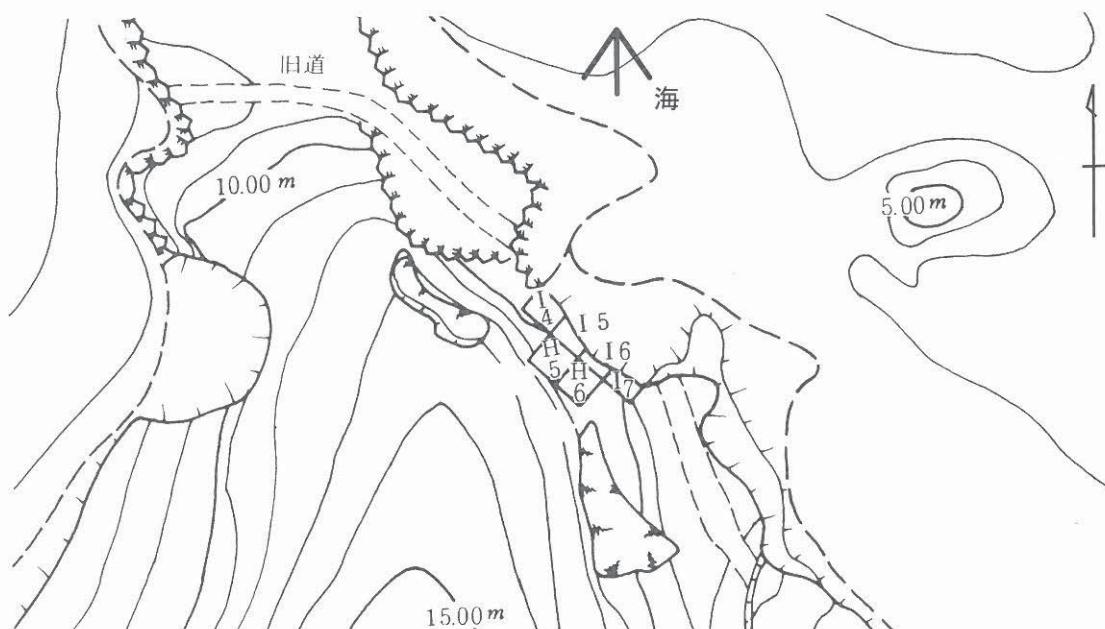
3-1 具志川島遺跡群の発見

伊是名村本島の遺跡が紹介されたのは戦後になってからである。多和田真淳氏・新田重清氏・嵩元政秀氏によって伊是名村の遺跡調査が行われ、4遺跡が紹介されている（多和田 1960）。具志川島に遺跡が存在することは高宮廣衛氏によって紹介された親畠貝塚（高宮 1966）が初めてと思われる。その後、1970年代になり前述した採砂工事が行われたことも契機となり、1975年に実施された沖縄県教育委員会による遺跡分布調査の結果、具志川島の様々な場所で遺物散布地や遺物包含層を確認し（第1図）、「具志川島遺跡群」として島の重要性が認識され、岩立遺跡の存在も明らかとなった（この時点では具志川島遺跡群として存在が知られていただけで、「岩立遺跡」は命名されていない）。

以下、人骨層の調査経過に焦点をあて概略する。

3-2 第1期調査

1977年～1980年の4次にわたって実施された。第1次調査（1976年）では具志川島中央に600



第3図 岩立遺跡発掘調査（第1期）グリッド設定状況
(伊是名村教育委員会 1980 第5図より転載、一部加筆)

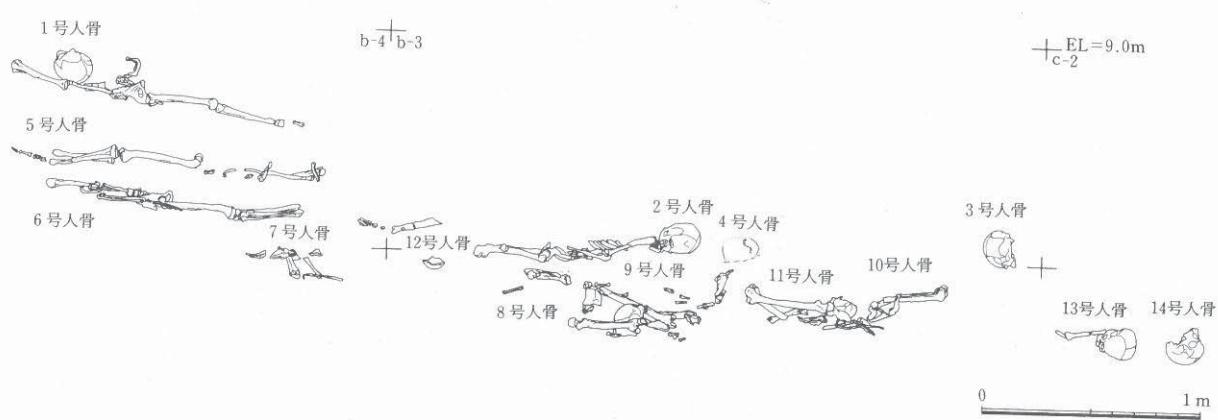
m四方の巨大なグリッドを設定し、第6地点ルVI中地区I-6・7（具志川島遺跡群東地点、後の岩立遺跡）と第11地点へIII中地区C・D-4・5（具志川島岩立遺跡西地点）の発掘調査が実施された。この調査によって第6地点ルVI中地区（岩立遺跡）I-6グリッドのVI層より人骨が検出された。第2次調査（1977年）では調査区を第6地点ルVI中地区（岩立遺跡）H-6からH-4グリッドまで拡張し、同じくVI層から多量の人骨が豊富な貝製品と共に検出された。この調査で焼けた人骨が一定のまとまりを持って検出されている。第3次調査（1978年）ではいよいよ遺跡名が付けられた。第6地点ルVI中地区北側の海岸にある「岩立」と呼ばれるキノコ状の石灰岩塊から「岩立地区」としたという。H-6からH-4グリッドまで調査が行われ、二次調査と同様多量の人骨が焼けた人骨と共に検出された。人骨群は解剖学的に正位置を保つものがほとんどなく、ある程度整った集骨の状態である。この調査ではいくつかの重要な点が確認され指摘されている。「1号人骨」という丁寧に再葬された人骨が確認されたこと、県内初の貝輪着装人骨が検出されたこと、焼けた人骨と共に副葬品も焼けていること等は重要な成果であったと思われる。なお、「貝輪着装人骨」は遺構切取が行われ、現在は伊是名村のふるさと民俗資料館に展示されている。最終年度の4次調査（1980年）では、1号人骨よりもさらに下から「2号人骨」が他の人骨群と共に検出された。「2号人骨」は1号人骨やその他の人骨群と異なり、解剖学的に正位置に近い状況で確認されている。この調査で人骨層はH-6グリッドという一部の場所において上層（1号人骨検出レベル）と下層（2号人骨検出レベル）に分層でき、墓地の形成時期を大きく区分できることがわかった。また、上層と下層では人骨や副葬品等の状況が大きく異なることも指摘されている。

以上が、第1期における人骨層（VI層）の調査状況である。

3-3 第2期調査

第1期調査から10年の時を経た1989年、再び具志川島遺跡群の発掘調査が開始された。この調査では沖縄県教育委員会だけでなく、沖縄国際大学・鹿児島大学が全面的に協力し、学生を作業員として発掘調査が行われた。調査は1989年～1992年まで4次にわたって実施された。岩立遺跡（鹿大班）の他、岩立遺跡西区（沖国班）、具志川島遺跡群西地点・南地点（沖国班）、親畠貝塚（鹿大班）の発掘調査が実施された。

岩立遺跡の発掘調査は鹿児島大学班が行った。第1期に実施された調査区とその周辺を含んでA・Y・Z（第1期調査区）のグリッドが設定された。第1期調査区の北西に位置するAグリッド1区では掘



第4図 岩立遺跡西区人骨検出状況見通し

（伊是名村教育委員会 1993 第7図より転載）

削前から人骨が露出していたという。発掘調査の結果、92-1～3号と名付けられた人骨の他、多数の散乱骨が検出された。特に、92-2号人骨は貝輪を着装しており、第1期第3次（1979年）で検出された貝輪着装人骨を彷彿とさせる。しかし、時期がおさえられる遺物が出土しなかったため両者の時期的関係については言及できないとされる。Aグリッド2～5区のV・VI層は仲泊式土器や面縄前庭式土器が出土し、後者は下層に集中する傾向があるという。また、V層で人骨群が検出されており注目されるが、少量で詳細な状況等は把握できなかったようである。

第2期の調査で最も注目されることとは「岩立遺跡西区」の発掘調査を初めて行い、解剖学的に正位置を保つ人骨が数体確認されたことである。人骨については4次にわたる発掘調査の内、1989年分と1990年分が報告されており、2年間で第3・4層から約14体分の人骨が確認された。この内、1・2・5・6号は解剖学的に正位置を保つ一次葬の人骨で、10・11・13・14号は集骨状態で確認され、二次葬と考えられている。人骨群は平面的に検出されるだけではなく、層位的な厚みをもって確認されている。上部では一次葬が、下部にいくにしたがって散乱状態（集骨）が著しくなるという（沖縄国際大学考古学研究室1993a）。検出状況で特に注目できることは、一次葬の1・5・6号人骨がそれぞれ間層を挟んでほぼ同じ場所に安置されていることである。このことは当該遺跡の葬制を考える上で重要であり、何らかの理由により一次葬で完結する場合（単葬）と二次葬（再葬）まで行進する場合が同時期にあったのか、二次葬から一次葬への変化であったのか検討が必要である。

この他、第2期の調査では具志川島遺跡群西地点（第1期調査第1～2次調査でも実施）からも岩陰部の清掃中に幼児骨が2体検出された（沖縄国際大学考古学研究室1993b）とされるが、詳細は不明である。西地点は第1期調査と第2期調査の成果によれば、沖縄貝塚時代後期の範疇に収まると考えられているが、良好な資料が出土しなかったため残念ながら幼児骨との関係は不明である。

以上が、第2期における人骨層の調査状況である。

3-4 調査成果（人骨層）のまとめ

第1期から第2期における人骨層の調査成果をまとめる。まとめた人骨は岩立遺跡（VI層）・岩立遺跡西区（第3・4層）・具志川島遺跡群西地点（層不明）で確認されている。

岩立遺跡出土人骨は解剖学的に正位置を保たないが、ある程度整った状態で集骨されたものが主体的に確認される。しかし、貝輪が着装された状態で確認された人骨（腕のみ）や「1号人骨」と呼ばれる丁寧に再葬されたと考えられる人骨、さらにその下部から解剖学的にほぼ正位置を保つと考えられる「2号人骨」が確認されており、本遺跡の葬法が一様ではないことがわかる。人骨の状態についても、焼けてない状態のもの、焼けた状態のものが一定量確認されており、習慣的に「火」を利用して葬送儀礼を実施していた可能性も指摘されている。一部のグリッド（H-6）では墓地の形成時期を区分できることがわかり、上部と下部では人骨や副葬品等の状況が大きく異なることが指摘されている。

岩立遺跡西区では解剖学的に正位置を保つ人骨が多数確認された。しかし、すべて解剖学的に正位置を保つわけではなく、上部が主体となっており、下部にいくにしたがって集骨状態で確認された。人骨の状態については、焼けたものについて言及されていないことから、目立つほど確認されていないと思われる。

4. 岩立遺跡人骨層（VI層）の状況

今回再整理した岩立遺跡（第1期具志川遺跡群発掘調査）で検出された人骨層について概観する。第1期の岩立遺跡においては19枚の層が確認されているが、本稿で検討する人骨が多量に出土した層

はVI層である。VI層は上、中、下の3層に細分されている。上層は赤褐色混礫砂層で礫を多く含み遺物をほとんど含まない。中層は黄褐色混礫砂層で人骨などの遺物を含む。下層は暗褐色混土砂層で大量の人骨や貝製品を含む。VI層下の厚さは20cmを超える。

人骨はH-5グリッド南側からH-6グリッドにかけて多く確認されている。人骨の多くは個体としてのまとまりについて言及することが困難な集骨状況で検出されるが、四肢骨等が同一方位に並べられた状態で確認されており、ある程度の秩序をもっていたことがわかる。また、岩陰の外を中心にビーチロックが確認されていることから、墓域として区画する等の遺構が存在していたことが指摘されている。焼けてない状態の人骨と焼けた状態の人骨が確認されており、焼けた人骨は西側壁に沿って出土する傾向があるとされる。焼けた人骨の周辺には場所により石灰岩や周りの貝が火を受けている部分もある。

その他、丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」や貝輪着装人骨など特徴的な葬法が確認されている。「1号人骨」の周辺のビーチロックで囲まれた範囲内では「1号人骨」の頭位の方向とほぼ同じ北、北西-南、南東をとる四肢骨が焼けてない状態の人骨、焼けた状態の人骨を問わず多く出土していることも注目する点である。また、「1号人骨」のさらに下から解剖学的に正位置に近い状態で「2号人骨」が確認されており、副葬品を持たない点等で「1号人骨」の時期とは葬法を異にするとされる。

以上のように、本遺跡からはVI層・下層の中でも層位的な上下関係や平面的な分布でさまざまな葬法が確認できる。

VI層は下層のVII層から口縁肥厚部に細沈線文を有する土器（嘉徳Ⅱ式土器）が出土し、上層のV層から口縁形態が天久A式土器に属するものを含む肥厚口縁土器が出土する。このことからVI層の時期は沖縄貝塚時代前期後半（暫定編年前IV期）から沖縄貝塚時代中期（暫定編年前V期）の間として捉えられている。

5. 人骨調査

再整理した人骨群の様相について述べる。今回は集団の推定個体数と焼けた人骨との割合や遺構としてのまとまり等を把握することを目的として、人骨の観察や出土状況図への再還元を行った。今回は岩立遺跡出土人骨のなかでも、第1期に調査された資料のみであり、第2期に実施された資料は含まれていない。

5-1 人骨の状態

岩立遺跡で確認された人骨は焼けた状態のものと焼けていない状態のものとがある。また焼けた状態のものは、骨が著しく変形・縮小し、細かいひび割れができるで小片化している一群と、ほとんど変形はしておらず、大きく割れている一群に大きく分類される。色調も前者は灰白色を呈するが、後者は黒色・黒褐色を呈する。時代を問わず葬法を考える上では、この骨の状態が重要な要素ともなる。岩立遺跡出土人骨で問題となるのは、被葬者が死後間もなく、まだ皮膚や筋肉等の軟部組織が残った状態で焼かれたのか、またはこれらの組織が分解消失し、白骨化した状態で焼かれたのかであり、本稿の根幹となっている。

このように焼けた人骨の状態については、池田次郎氏（池田 1981）や馬場悠男氏ら（馬場他 1986）の論功があるため、参考として引用する。

池田次郎氏は焼けた人骨の状態について「軟部組織に包まれている長骨が焼けた場合、それは外面の深い干割れ、横方向の輪状の亀裂、長軸方向の裂開、さらにはいちじるしい捩れなどの変化で特徴づけられるが、白骨を焼いた時の主な変化は、長軸方向の裂開と、表面の浅い干割れだけにとどまり、

形が歪むことはない (Buikstra 1973)。また、長骨表面における緻密質の溶解は、軟部組織に包まれて いる骨が焼けた場合にのみ起る現象だとされている。」とまとめている。さらに、焼けた人骨の色調について、「Baby (1954) は、焼骨を完全焼骨と不完全焼骨とに分け、前者は銀ねず色ないし青味灰色 の色彩と、骨の表面に生ずる深い亀裂や、骨の捩れを特徴とするが、後者の場合には、骨の表面が黒く焦げるだけで顕著な変形はみられない」と述べている。Herrmann (1977) は、この完全焼骨と不完全 焼骨の臨界温度を 700 ~ 800°C とし、(略)。」とまとめている (池田 1981)。

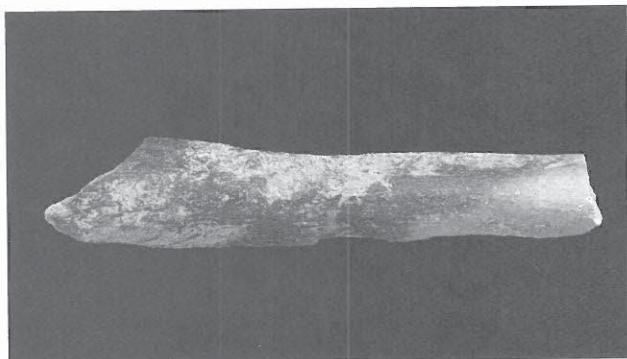
以上のことを考えると岩立遺跡出土の焼けた人骨には、被葬者の死後間もなく、皮膚や筋肉等の軟 部組織が残った状態で火を受けた一群と、遺体が腐食し白骨化した状態の骨が再び火を受けた一群と が存在すると考えられる。このような人骨の状態に関しては明確な単語がないため、本稿においては 以下のように用語を定義しておく。

【岩立遺跡出土人骨の状態】

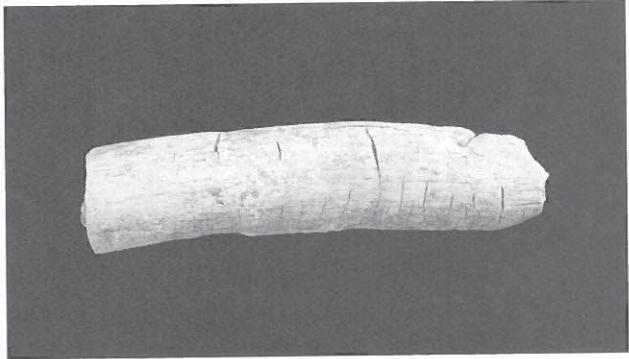
乾燥骨・・・ 遺体が腐食し白骨化した状態の人骨。

焼骨・・・ 遺体が腐食し、白骨化した人骨そのものが焼かれたと考えられるもの。ひび割れ がでて大きく割れている。骨の表面が黒色や黒褐色を呈することから、池田氏の 言う不完全焼骨であり、燃焼温度は低かったと考えられる。乾燥骨より硬質化して いる。本遺跡では全体的に火熱を受けているものや、部分的に火熱を受けているも のが見られる。

火葬骨・・・ 皮膚や筋肉などの軟部組織が残った状態で焼かれたと考えられるもの。軟部組織 が残った状態で火熱を受けたため、骨が著しく変形・縮小している。また、横方向 の細かいひび割れが多数見られ、細片と化しているものが多い。骨が灰白色を呈す ることから、池田氏の言う完全焼骨であり、燃焼温度は高かったと考えられる。骨 が縮小・変形しているため、大きさや細かい形状等の情報は失われる。男女の判断 が困難である。



図版1 燃骨の例



図版2 火葬骨の例

5-2 調査方法

人骨調査の方法として、まず、当センターに収蔵保管されている第1期具志川島遺跡群発掘調査（岩立遺跡）で出土した人骨の観察を行った。人骨は遺跡名・調査年度・グリッド・層序・ドットナンバー がユニパックに丁寧に記載された状態で保管されている。一覧表を作成し、ユニパックひとつひとつ

の人骨を観察しつつ、人骨の部位、残存状況、骨の状態（乾燥骨、焼骨、火葬骨）を記録する。同時に、頭骨・下顎骨・四肢骨等を中心に残存部分を図化し推定個体数を割り出す根拠とした。一覧表と図化作業の終了後、その基礎データを基に人間の体にひとつしかない部分の数を計上して推定個体数を求めた（第1表）。

次に、分類した人骨の状態を図面に還元する作業を行った。これは、人骨のドットナンバーをもとに原図を当たり、さらに報告書で図化された位置に還元していくもので、これによって、人骨の状態別（乾燥骨・焼骨・火葬骨）の分布状況を調べた。

人骨鑑定の際に用いた年齢区分は Knussman (1988) を参考に、未成人を乳児（出生～1歳）、幼児（1歳～約6歳）、小児（約6歳～約14歳）、若年（約14歳～約20歳）とし、成人を成年（約20歳～約40歳）、熟年（約40歳～約60歳）、老年（約60歳以上）としてまとめた。

5-3 集団の様相

第1期具志川島遺跡群発掘調査の岩立遺跡における人骨層（VI層）の推定個体数を求めた結果は第1表のとおりである。推定62体が確認されたが、焼骨や火葬骨には細片と化して同定できないものが多数あったため、実際はさらに多いものと考えられる。性別と年齢で見ると、成人が61%（内、男性27%、女性19%、性別不明15%）、未成人が39%、となっており（第6図）、本遺跡の墓地が老若男女分け隔てない共同墓地であったことがわかる。未成人の割合が高いのも先史時代の特徴であろう。

ここで注目したいことは、焼けた人骨が37%の割合で確認されたことである（第5図）。さらに詳細にみると、死後間もなく軟部組織が残った状態で焼かれたと考えられる火葬骨が13%、白骨化した状態で焼かれたと考えられる焼骨が24%確認された（第5図）。乾燥骨・焼骨・火葬骨のそれぞれにおける性別や年齢の割合には大きな差異が認められない（第7～9図）。このことから、火で焼かれた被葬者と焼かれなかった被葬者間には、性差や年齢の区別がなかったことがわかり、葬法の違いには別の理由があったことが考えられる。

焼けた人骨の割合が他の遺跡と比較して高いのか低いのかについては、他の遺跡をより詳細に整理してみないと判断ができないため今後の調査に委ねるが、このように数字で整理できたことに一定の成果があったものと考える。

5-4 人骨の状態別分布状況

人骨層（VI層）については、第1期の第3次（伊是名村教育委員会 1979）・第4次（伊是名村教育委員会 1981）に詳細図が掲載されており、これを一部加筆しつつ利用した。具体的には、第3次発掘調査報告において第1・2次の調査成果を1つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1979 第6図）と第3次の成果を3つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1979 第7～9図）を利用し、さらに第4次の成果を1つの図面にまとめたもの（伊是名村教育委員会 1981 第35図）を利用した。それ故、レベルが高い順番に図化されているため、これらの図面を便宜的に第1検出面から第5検出面と呼ぶ。第10図～第14図は第1検出面から第5検出面について、人骨の状態別に色分けしたものである。

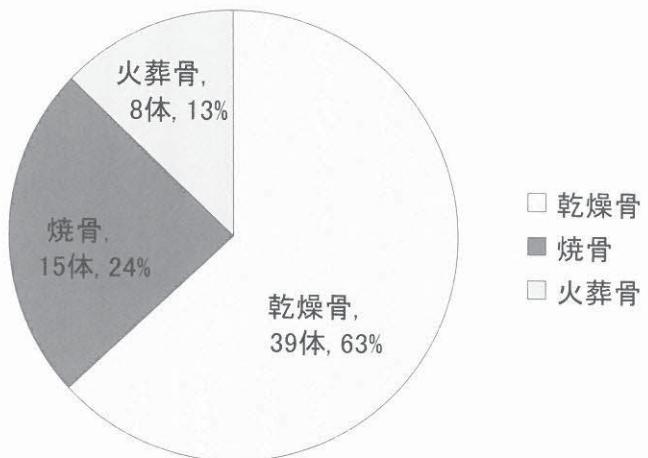
乾燥骨・焼骨・火葬骨の状態別に見た結果、大きく分けて5つのユニットを見出すことができる。また、これらは平面的に乾燥骨・焼骨・火葬骨としてまとまりを持ち、レベルの違いによっても変わっていくことがわかった。

第1検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット2は火葬骨群、ユニット3・4は焼骨群が主体的に確認された。遺跡の状況からすれば、墓地が機能しなくなる直前の状況と考えられる。

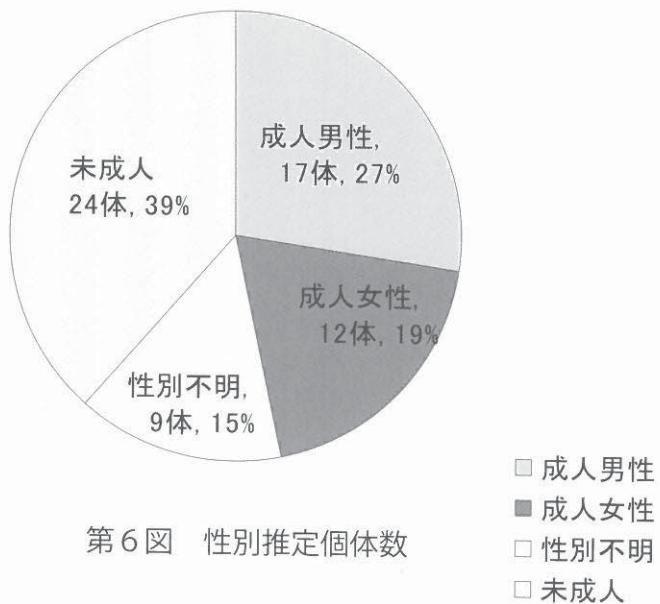
第2検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット2は火葬骨群、ユニット3は焼骨群となっており、

第1表 推定個体数一覧

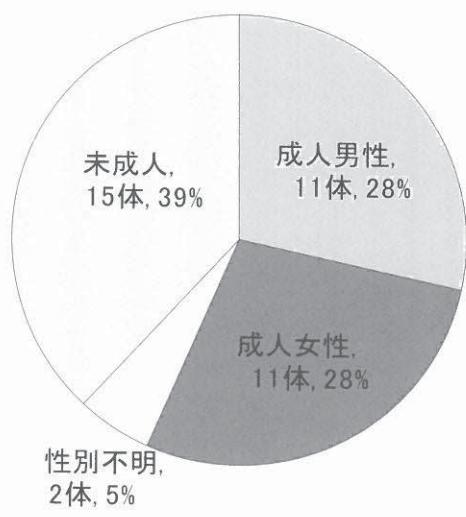
部位	乾燥骨												焼骨													
	成 人						未 成 人						成 人						未 成 人							
	男性	女性	性別不明	計	若年	小兒	幼兒	乳兒	計	男性	女性	性別不明	計	若年	小兒	幼兒	乳兒	計	男性	女性	性別不明	計	若年	小兒	幼兒	乳兒
側頭骨	r	8	2	1	11	2	2	4	4	1	1	6	1					1	2	4	6					0
	1	8	2	1	11	3	1	4	3	1	4	8	1					1		4	4					0
前頭骨	r	8		2	10		3		3	1	1	4	6					0		4	4					0
	1	8		1	9	1		1	2	3	5							0		5	5	1				1
下顎骨	r	8	1	10	19	6	4	10	2	1	5	8	1	2	4	7			3	3	3					0
	1	10	2	11	23	7	2	9		6	6	1	3		4			3	3	3	1					1
上腕骨	r	11	5	8	24	1	1	2	4	2		2	1		1			1		2	2					0
	1	8	4	6	18	2	2	4	3	1	4	2		2				0		1	1					0
尺 骨	r	9	3	4	16	1	1	2	1	4	5							0		1	1					0
	1	6	4	10	1		1	3	1	4	1		1		1			1		1	1					0
桡 骨	r	3	2	3	8	1	1	1	3	2		2	1		1			1		0						0
	1	5	2	3	10	1	1	2	1		1	1	1	1	3			0								0
大腿骨	r	7	9	2	18	2	5	6	13		0		1		1	1	3	4								0
	1	10	11	21	2	3	4	9	1	1	3	5	1	1	2			0								0
脛 骨	r	11	10	3	24	1	2	5	8	1	1	1	3		1			1		0						0
	1	7	8	2	17	1	3	3	7		3	3	1		1			1	1	1	1					0
推定個体数		11	11	2	24	2	7	6	15	4	1	3	8	1	2	4	7	2	4	6	1	1	1	2		
					39					15								8								
総 計																										62



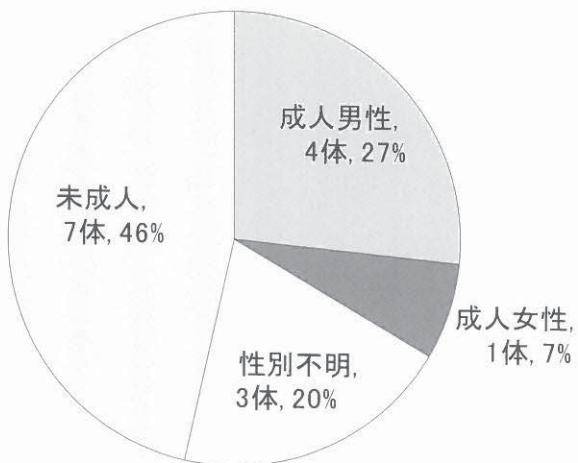
第5図 人骨状態別推定個体数



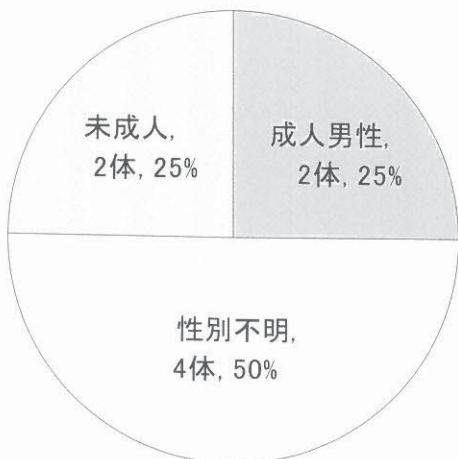
第6図 性別推定個体数



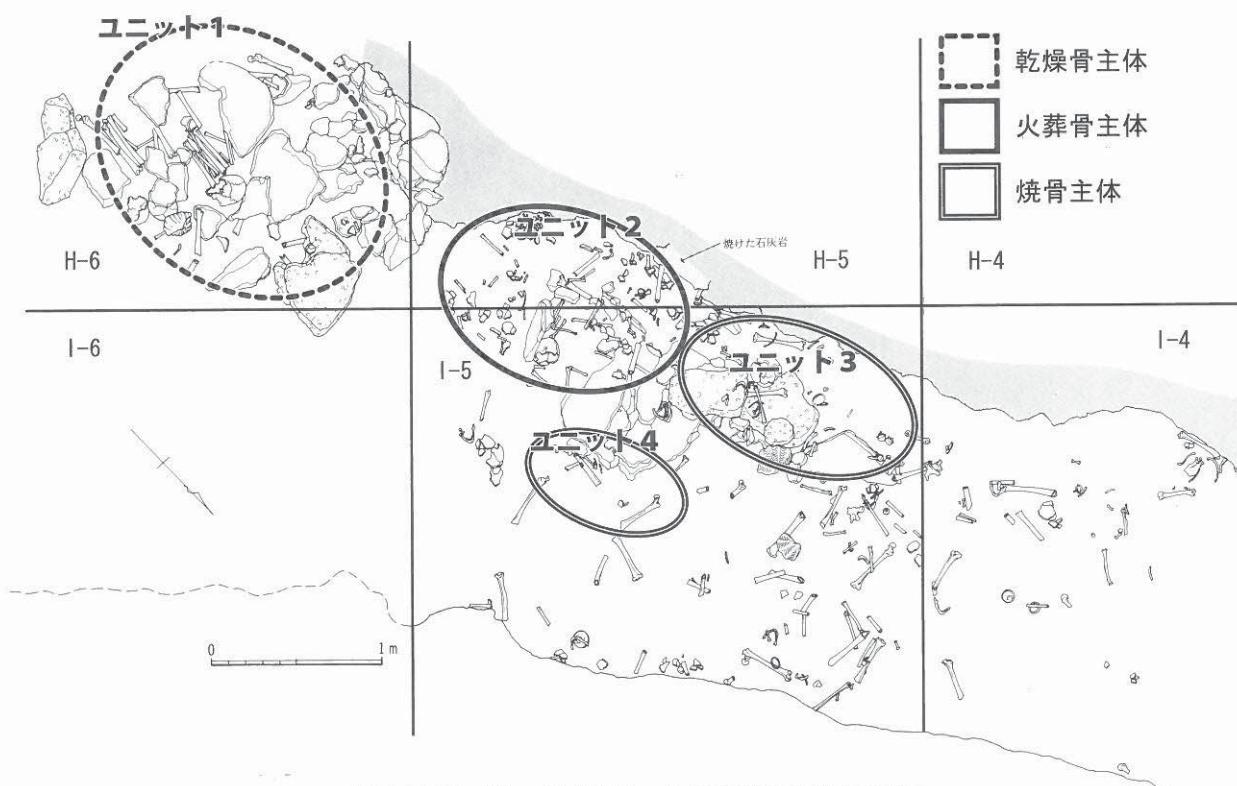
第7図 乾燥骨 性別個体数



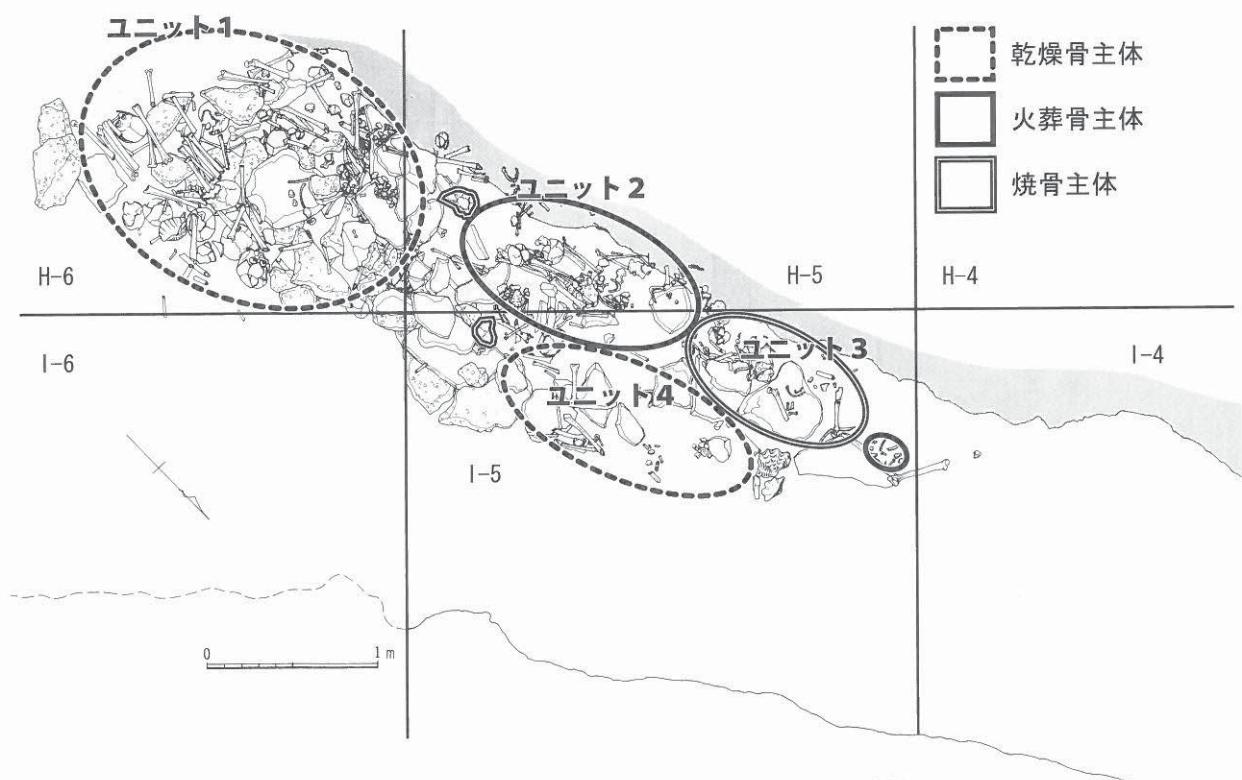
第8図 焼骨 性別個体数



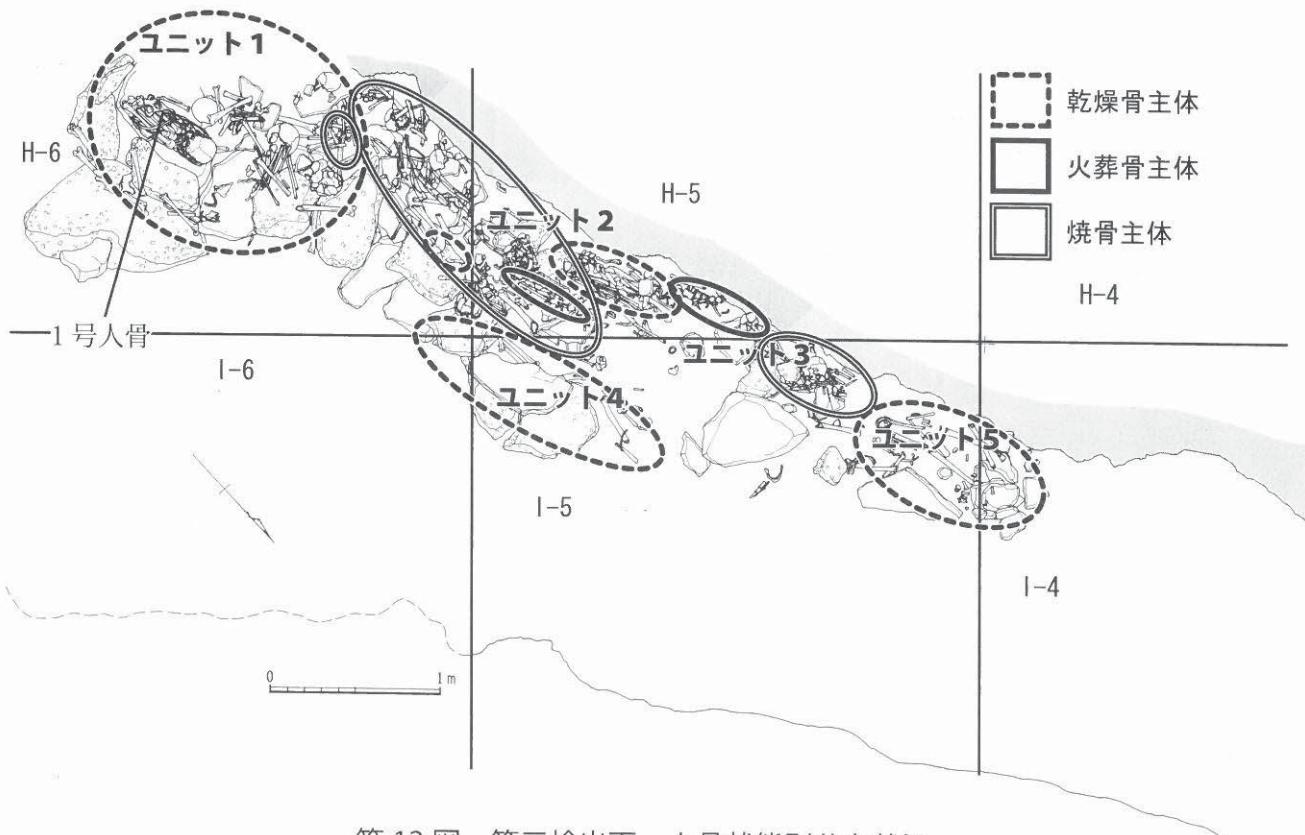
第9図 火葬骨 性別個体数



第10図 第一検出面 人骨状態別分布状況
(伊是名村教育委員会 1979 第6図より転載、一部加筆)

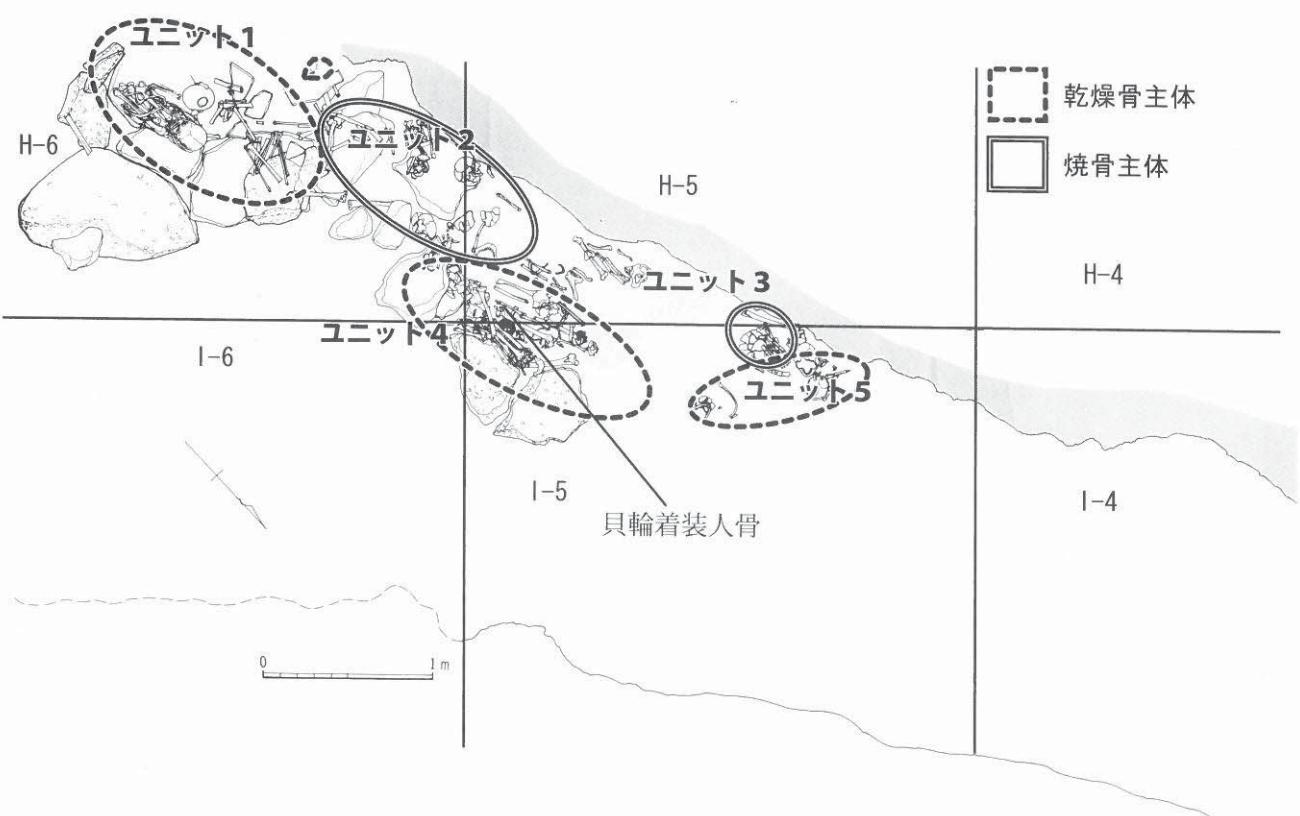


第11図 第二検出面 人骨状態別分布状況
(伊是名村教育委員会 1979 第7図より転載、一部加筆)



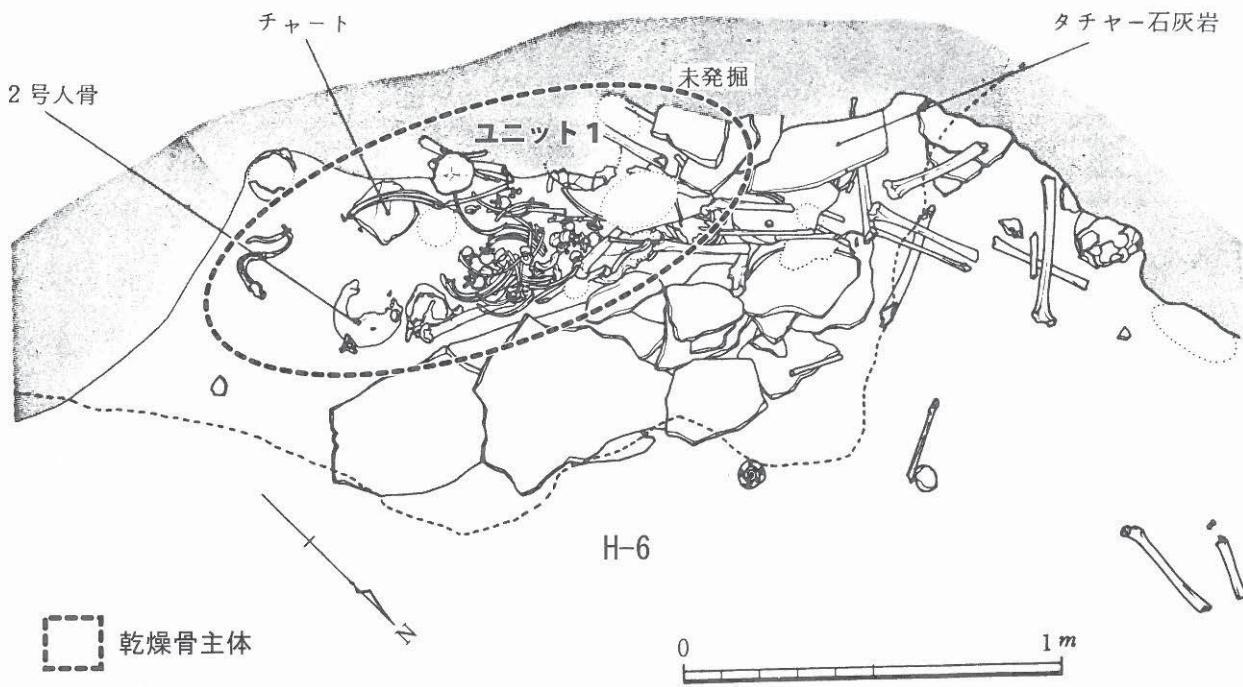
第12図 第三検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第8図より転載、一部加筆)

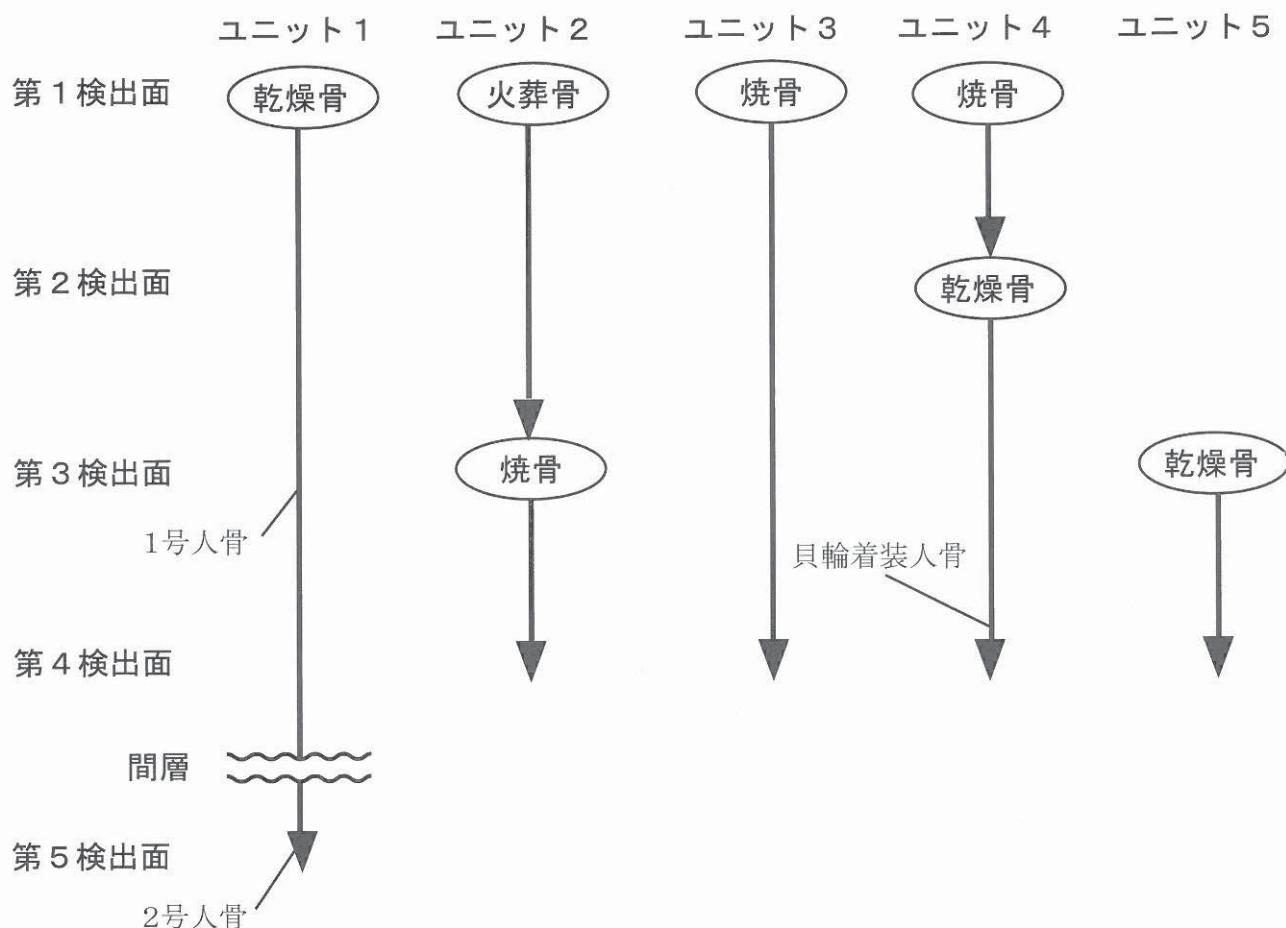


第13図 第四検出面 人骨状態別分布状況

(伊是名村教育委員会 1979 第9図より転載、一部加筆)



第14図 第五検出面 人骨状態別分布状況
(伊是名村教育委員会 1981 図35より転載、一部加筆)



第15図 人骨状態別出土状況の模式

第1検出面と同様の状況であるが、ユニット4は焼骨群から乾燥骨群に変化している。これが1つめの変化である。

第3検出面 ユニット1は乾燥骨群、ユニット3は焼骨群、ユニット4は乾燥骨群でこれは第2検出面と同様の状況であるが、ユニット2が火葬骨群から焼骨群へと変化している。これが2つめの変化である。さらに、ユニット3が2つに分割されユニット5が新しく形成され、乾燥骨群となっている。これが3つめの変更である。また、ユニット2とユニット3の間に乾燥骨と火葬骨の小ユニットが形成されている。ユニット1の乾燥骨群には丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」が検出された。

第4検出面 第3検出面と同様、ユニット1が乾燥骨群、ユニット2・3が焼骨群、ユニット4・5が乾燥骨群となっており、変化はない。沖縄県で初めて確認されたという貝輪着装人骨はこの面のユニット4で検出されている。この貝輪着装人骨は1体分確認された訳ではなく、着装部の腕のみが解剖学的に正位置を保った状態で検出された。

第5検出面 ユニット1に相当し、乾燥骨群となっている。解剖学的に正位置をほぼ保っており、単葬と考えられる「2号人骨」が検出された。ただし、同レベルから他の個体と考えられる集骨状態の人骨も検出されている。また、再整理によってH-5グリッドから一定量の火葬骨群が検出されていることがわかった。

次に、ユニット別にその推移と特徴を見てみる。

ユニット1 岩陰がほぼ南北を軸にして形成されていると考えると、岩陰の南端であるユニット1は墓地が形成されてからその機能を終えるまで一貫して乾燥骨を安置する場所として意識されていたと考えられる。最下部では解剖学的な正位置をほぼ保つことから単葬と考えられる「2号人骨」が確認されている（第5検出面）。また、上部では丁寧に再葬されたと考えられる「1号人骨」（第3検出面）や解剖学的に正位置を保たないが、ある程度のまとまりをもっていることから、再葬されたと考えられる人骨群（第1検出面から第4検出面）が確認されている。このことから、葬法に変化やバリエーションがあったことがわかる。

第1検出面から第5検出面まで一貫していることは、解剖学的に正位置を保たないが、ある程度整った状態で再葬されたと考えられる人骨群が主体的に存在することである。

ユニット2 ユニット1のすぐ北側に位置する。上部では火葬骨群が形成されている（第1・2検出面）が、下部に向かうにつれて焼骨群（第3・4検出面）に変化しており、位置も南側にやや移動する。

ユニット3 ユニット2のすぐ北側に位置する。墓地が形成されてからその機能を終えるまで、一貫して焼骨群が形成されている。第3検出面において、その北側に新しくユニット5が形成される。

ユニット4 ユニット2・3の東側に位置する。最上部では焼骨群が形成されている（第1検出面）が、第2検出面からは乾燥骨群に変化しており、位置も南側にやや移動する（第2～4検出面）。第4検出面では貝輪着装人骨が確認された。

ユニット5 ユニット3の北側に位置し、調査における人骨群の北端となっている。第3検出面から形成されており、乾燥骨群となっている。

以上のことから、ユニット1・5とユニット3にはそれぞれ、乾燥骨群と焼骨群を安置する一貫した場所の意識があったことが伺え、ユニット2・4は何らかの理由により火葬骨群を安置する場所となっていたり、焼骨群や乾燥骨群を安置する場所となっていたりと変化している。図を一見すると火葬骨群が墓地形成では後半から出現する新しい葬法のように見受けられるが、第5検出面でも一定量

の火葬骨群が確認されているため、墓地形成の初期段階からなんらかの理由により火葬の方法を取っていたと考えられる。

6.まとめ

岩立遺跡が墓地となっていたと考えられるVI層の状況を再整理した。岩立遺跡VI層は岩陰を利用した墓地であり、ペーチロックの配置等により区画を作っていたことが指摘されている。遺跡は採砂工事によって破壊されているが、墓地として機能していた遺構そのもの（少なくとも被葬者の最終的な安置場所）はそれほどの破壊を受けていないと考えられる。

本遺跡から焼けた人骨が多数出土したことは周知であったが、これらの資料が皮膚や筋肉と言った軟部組織が残った状態（遺体）で焼かれたと考えられる一群と、遺体が腐敗し白骨化した状態で焼かれたと考えられる一群に分類できることは、今後人骨資料を再整理する上で重要な成果であった。

このような人骨を乾燥骨、焼骨、火葬骨に分類して推定個体数と年齢を求めた結果 62 体の被葬者が想定され、老若男女分け隔てない共同墓地であることがわかった。乾燥骨が全体の 63%（39 体）を占めるものの、焼骨 24%（15 体）、火葬骨 13%（8 体）と言った異なる葬法で安置された被葬者の数量を推定できたことも、本遺跡を評価する上で今後重要となる。

また、人骨を乾燥骨、焼骨、火葬骨に分類した結果、検出面ではいくつかのユニットを持つことがわかり、それぞれの葬法によって異なる場所に安置する意識があったことが想定できた。これには、墓地の形成期から終焉まで一貫して決められていた場所もあれば、焼骨から火葬骨へと変化していく場所もある。

人骨の検出状況については、解剖学的に正位置を保たず、ある程度整えて集骨された状態が主体を占める。これらの人骨は再葬された一群として捉えたい。さらに人骨の状態別分類によって、様々な葬法があることがわかった。

最も多い葬法は乾燥骨の一群である。一次葬後ユニット 1 やユニット 4 にまとめられ、再葬されたと考えられ、全体の 63% を占める。この中には、丁寧に再葬された「1 号人骨」が含まれる。ユニット 1 は遺跡の形成期から終焉まで一貫して乾燥骨の安置場所であり、ユニット 4 は第 4 検出面から第 2 検出面までがそれにあたる。

次に、一次葬後、遺体が腐食し白骨化した状態の人骨を再び火で焼いて再葬したと考えられる一群があり、全体の約 24% を占める。焼いた場所は特定できないが、人骨を徹底的に焼くのではなく、焼け方にかなりのムラがある。例えば、1 本の四肢骨でも強く焼けた場所と殆ど焼けていない場所が顕著に見いだせる。このことは、遺体を焼いて粉々に破壊する意識というよりも「焼く」行為そのものに葬送の意味があったと思われる。遺体を安置して白骨化した後、さらに火で焼くという行為は当然時間と手間がかかる葬法と考えられる。ユニット 2・3 が最終的な安置場所となっている。ユニット 3 では墓地の形成期から終焉まで一貫してこの行為の安置場所となっており、ユニット 2 は第 3・4 検出面がそれにあたる。ユニット 2 はその後、火葬骨の安置場所（第 1 検出面）となる。

最後に、皮膚や筋肉といった軟部組織が付着した状態で焼かれたと考えられる一群があり、全体の 13% を占める。これは、死後まもない遺体が腐敗して白骨化する前に焼かれたと考えられ、火葬に類する葬法と言える。ユニット 2 の上部（第 1・2 検出面）及び第 5 検出面でまとまって確認されており、最終的な安置場所となっている。軟部組織が付着した状態の遺体そのものを「焼く」には、高い温度を持続させる技術が必要と考えられ、わずかながらこの葬法が認められたことは縄文時代の火の利用

技術を考える上でも注目すべきことである。

本人骨資料のように骨が著しく変形・縮小し、細かい亀裂が多数入り、灰白色を呈するまで焼くためには 700 ~ 800°C の火力が必要とされる（池田 1981）。この焼く行為の後にはそれなりの遺構が成立すると考えられるが、残念ながら確認されていない。具志川島岩立遺跡群のどこか、恐らく採砂工事によって破壊された部分に残されていた可能性も考えられる。

日本本土でも仏教思想が浸透する以前の時代から、火葬に類する葬法があったことが知られている。遺骸を葬送する過程において、皮膚や筋肉と言った軟部組織が残った状態の遺体や白骨化した人骨を火で焼くもので「焼人骨」として検出されている。特に、長野県を始めとした（事例が多い）中部日本においては、縄文から弥生時代まで時代と葬法の変化にもかかわらず連綿と実例がある。これらは再葬における遺骸処理法として行われ、「焼人骨葬」と呼ばれて注目されている（石川 1988）。

また、火を利用しなくとも日本本土の縄文・弥生時代における再葬の事例は多く、古くは縄文早期中葉から確認される。このような事例には、1 ~ 数体の人骨を集めた少人数集骨葬、多くの人骨を集めた多人数集骨葬、特殊な集積状態である盤状集骨葬等があり、その数は 80 遺跡にも及ぶとされる（設楽 1993）。

岩立遺跡でも、焼けた人骨が一定量確認されている。また、焼けてない人骨を含め、ほとんどの人骨は解剖学的に正位置を保たず集骨状態で確認されている。このことから、人骨群の大半は再葬された一群と考えられる。

巨視的に見るならば日本本土の事例と共に通する要素を導き出せるが、本稿は共通性を強調したいわけではない。このような縄文・弥生時代における地域的、時間的な葬墓制の多様性に着目すれば、南西諸島の岩立遺跡というひとつの遺跡においても、葬法は画一的なものではなく、バラエティー豊富なものであった可能性が考えられるのである。

7. 今後の課題

岩立遺跡について、現段階でさらに推定しておきたい事項について触れる。一次葬の場所と、葬法の種類や変化、一連の人骨の安置方法、についてである。

7-1 一次葬の場所

本遺跡からわずかではあるが、解剖学的に正位置を保つと考えられる人骨が検出されている。第 4 検出面のユニット 4 で確認された「貝輪着装人骨」や第 5 検出面ユニット 1 で確認された「2 号人骨」がそれに該当する。このことは、一次葬がこの岩陰で行われていたことを示唆していると思われ、報告者の検討（中村・木下 1979）どおりである。だとすれば、葬送儀礼に関わる一次葬から再葬までの一連の行為はこの岩陰を中心としてその周辺で行われていたと推定できそうである。少なくとも乾燥骨の状態のまま安置されている一群に関しては、一次葬から再葬までの行為が岩陰であったことが想定される。新しい遺体を追葬する際に、すでに白骨化した遺体を整理したのかもしれない。

ただし、「2 号人骨」が検出された第 5 検出面は第 1 ~ 4 検出面とはビーチロックの使用や副葬品の使用等で対照的な状況であると報告されているため、「2 号人骨」については一次葬で完結し再葬への意識がなかった可能性もある。

7-2 葬法の種類と変化

次に、葬法の種類と変化について、岩立遺跡西区においては人骨層の下部が集骨状態で、上部が一次葬状態で検出されており、時期的な葬法の推移があったことが指摘されている（沖縄国際大学考古学研究室 1993 a）。岩立遺跡ではこのような推移が逆となっており、H-6 グリッドの下部（第 5 検

出面)においては単葬の「2号人骨」が検出され、上部(第1～4検出面)においては人骨群が集骨状態で検出されている。また、副葬品等その他の検出状況も異なるとされる。

焼けた人骨が注目されているのは岩立遺跡であり、岩立遺跡西区では報告されていない。

このように、岩立遺跡と岩立遺跡西区では異なった豊富な葬法が確認されるが、両者の関係については現時点では検討を進めることができない。本遺跡に見られる葬法の相異が時間的変化の中で起こっているのか、同時期における豊富なバリエーションとして整理できるのかについて、今後の課題としておきたい。そのために、両者の時期とその関係について、人骨の年代測定や系統関係の把握等の研究を進めることで集団の性格をより明確にし、さらに、人骨の検出状況や副葬品等の比較を行って検討を重ねていきたい。

7-3 墓の性格

最後に、遺体の安置方法から墓の性格について考えてみる。はたして、死後まもない遺体や再葬されたと考えられる人骨は埋葬(土中に埋めること)されていたのだろうか。岩立遺跡の発掘調査では明確な堀りかたを持つ土壙は確認されていない。これは、砂丘という立地のため確認しづらかったとも考えられるが、全て確認できなかったとは考えがたい。それならば、遺体や人骨は埋葬せずに岩陰付近に露出させたと考えることも可能である。例えば「貝輪着装人骨」は解剖学的に正位置を保つものが腕のみ確認されただけのため、他の部位は崩れて散乱してしまった可能性がある。また、比較的まとまっていた「2号人骨」も下顎骨が外れている等、やや崩れた状態である。他の集骨された人骨についても、「1号人骨」を除き崩れた状態である。このことは、遺体や人骨を砂中に埋葬もしくは土盛りせずに露出させていたことの結果ではないだろうか。遺体を常に露出した環境におき、新しく死者が出た場合はすでに白骨化した遺体を整理・再葬して空間を確保して岩陰に追葬していく。近世・近代の岩陰墓に見られる葬法と似たものを感じる。

これについては、同様の岩陰遺跡をさらに検討してみなければならないため、今は推量に留め今後の課題としておく。しかし、現在の沖縄人と先史時代人との系統関係や文化が異なるとも、南西諸島という日本本土とは立地や気候が異なる風土そのものによって、現在沖縄で一般的に知られている風葬の初源的なものが、具志川島という小さな島で確認された岩立遺跡の葬法によって見ることができるのでないだろうか。

先史時代の南西諸島において火葬に類する葬法が「習慣的」にあったのかについて、なお疑問が残り、今後さらに注意して焼けた人骨の再整理を進めて行きたい。

第1期岩立遺跡発掘調査出土人骨の再整理を行った。焼けた人骨の存在に着目し、推定個体数を求めたことで既存の報告書の内容をさらに深めて支援することができたと思う。具志川島遺跡群は南西諸島における先史時代の様相を深く理解するための遺跡としては第一級の遺跡と考えられる。この遺跡を評価するためにはさらに検討を重ねる必要がある。最終的には現在進行中の発掘調査成果とこれまでの成果をまとめることで、岩立遺跡・岩立遺跡西区の充分な評価をしていきたい。

【謝 辞】

本稿で再整理が可能となったのも、安里嗣淳氏を中心とした諸先輩達の精密な発掘調査の記録があったからである。人骨は1点1点丁寧な記録と共に取り上げてあり、再変換が可能であった。また、木下尚子氏・中村愿氏の埋葬習俗にかんする報告は充分な検討が行われており、遺跡を理解するための情報が綿密に記されていた。再整理によって新しい事実を付加することができたが、葬墓制に関する

検討になんら変更の余地がなかった。調査課長の岸本義彦氏には過去の岩立遺跡西区の調査に関して多くの情報をいただいた。この発掘調査に携わった多くの方々の努力に感謝致します。

この他、本稿の執筆にあたって茂原信生（京都大学）、篠田謙一（国立科学博物館人類研究部）、米田穰（東京大学大学院新領域創成科学研究所）、山田康弘（島根大学法文学部考古学研究室）、西銘章（嘉手納高校教諭）の諸先生方に多くの御教授を賜った。末筆ではありますが、記して感謝致します。

※ 再整理に利用した人骨は沖縄県立埋蔵文化財センターで保管している。

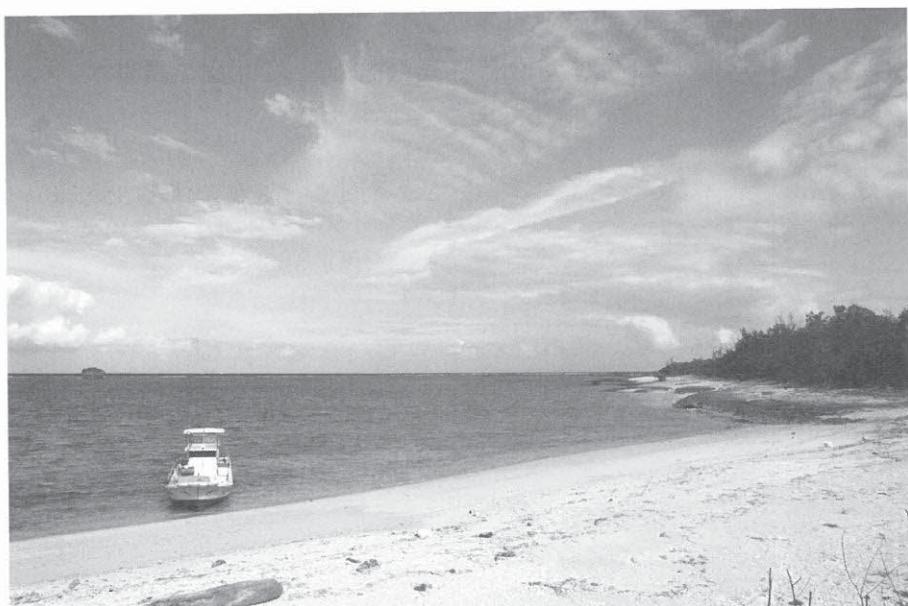
(かたぎり ちあき：調査課 専門員)
(こばしがわ たけし：調査課 嘴託員)
(しまぶくろ りえこ：宜野座村教育委員会)
(どい なおみ：琉球大学医学部)

【引用・参考文献】

- 石川日出志 1988 「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第74号 駿台史学会
池田次郎 1981 「4. 出土火葬骨について」『太安萬侖墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊 奈良県 檀原考古学研究所編
伊是名村教育委員会 1977 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第1集
伊是名村教育委員会 1978 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第2集
伊是名村教育委員会 1979 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第3集
伊是名村教育委員会 1981 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第6集
伊是名村教育委員会 1993 『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第9集
沖縄県地域史協議会 1898 『シンポジウム 南東の墓—沖縄の葬制・墓制—』沖縄出版
沖縄国際大学考古学研究室 1993 a 「第4章第1節岩立遺跡西区」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財 調査報告書第9集 伊是名村教育委員会
沖縄国際大学考古学研究室 1993 b 「第4章第2節岩立遺跡群西地点」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財 調査報告書第9集 伊是名村教育委員会
岸本義彦・片桐千亜紀 2006 「伊是名村具志川島岩立遺跡西区発掘調査の成果概要」『南島考古だより』第79号 沖縄考古学会
木下尚子・中村憲 1979 「Ⅲ埋葬習俗の検討」『具志川島遺跡群』伊是名村文化財調査報告書第3集 伊是名村教育委員会
Knussman R1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1,Stuttgart,Gustav Fischer Verlag.
設楽博己 1993 「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第49集
新里貴之 2004 「南西諸島における先史時代ぼせいの集成」『島嶼地域の諸相』東南アジア考古学会
高宮廣衛 1966 「貝塚時代の伊是名」『伊是名村誌』伊是名村
多和田真淳 1960 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺」『1960年版文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会
馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 「第一編 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨」『靈山根 古屋遺跡の研究』福島県靈山町教育委員会
Buikstra,J.E1973 Technique and interpretation in the study of a complex cremation site. In "The Perrins Ledge Crematory" by J.E. Buikstra and L. Goldstein. pp. Illinois State Museum.
Baby,R.S1954 Hopewell Cremation Practices. Papers in Archaeology, No.1. The Ohio Historical Society.
Buikstra1973 より引用
Herrmann,B1977 On histological investigations of cremated human remains. Journal of Human Evolution,



図版3 具志川島遠景
島北岸の海洋より (2006年撮影)



図版4 具志川島北岸
(2006年撮影)



図版5 現在の岩立遺跡
樹木に鬱蒼と覆われている。
(2006年撮影)



図版6 岩立遺跡近景 第1期具志川島遺跡群発掘調査 第3次調査前（1978年撮影）
(沖縄県立埋蔵文化財センター蔵)



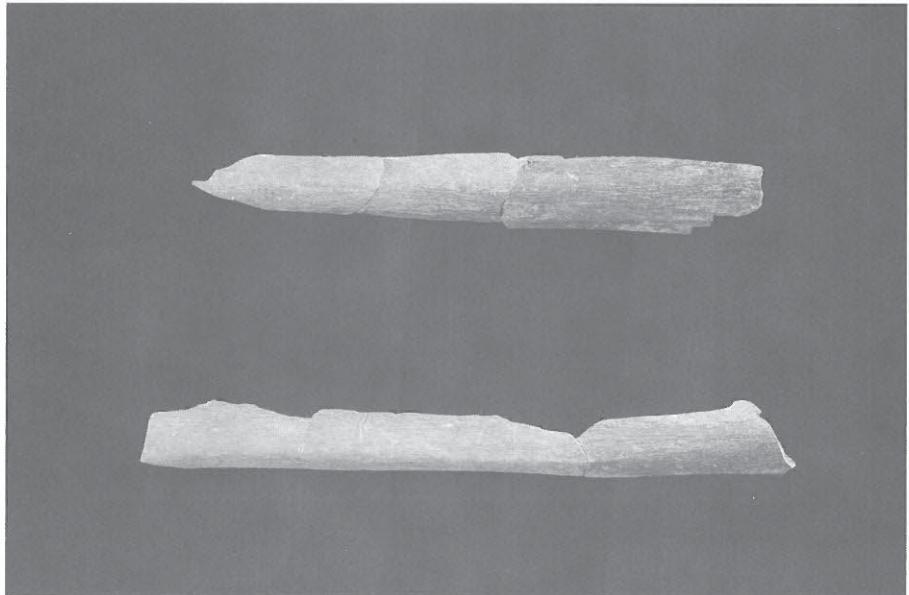
図版7 岩立遺跡人骨検出状況
第1期具志川島遺跡群発掘調査
第3次調査中（1978年）
(沖縄県立埋蔵文化財センター蔵)



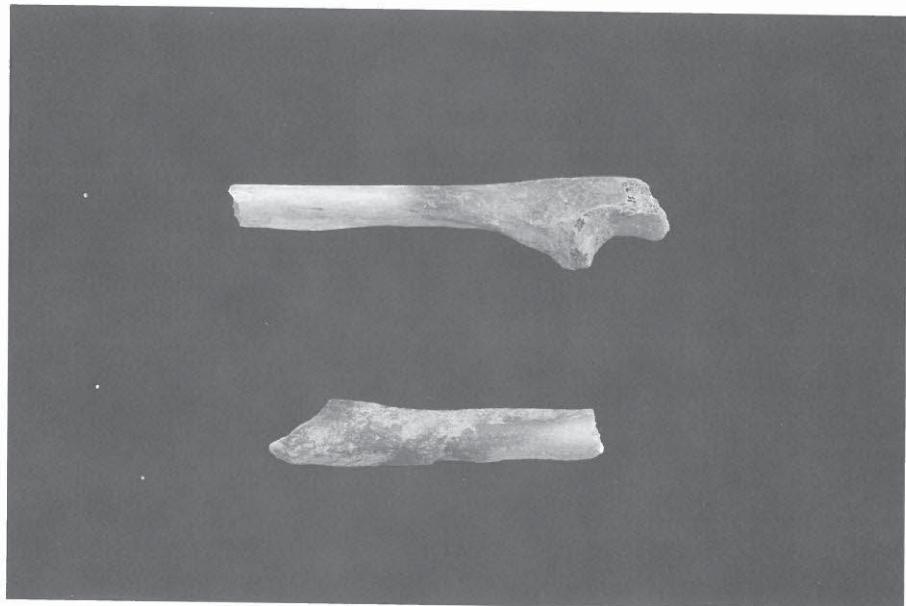
図版8 燃骨1
下顎骨



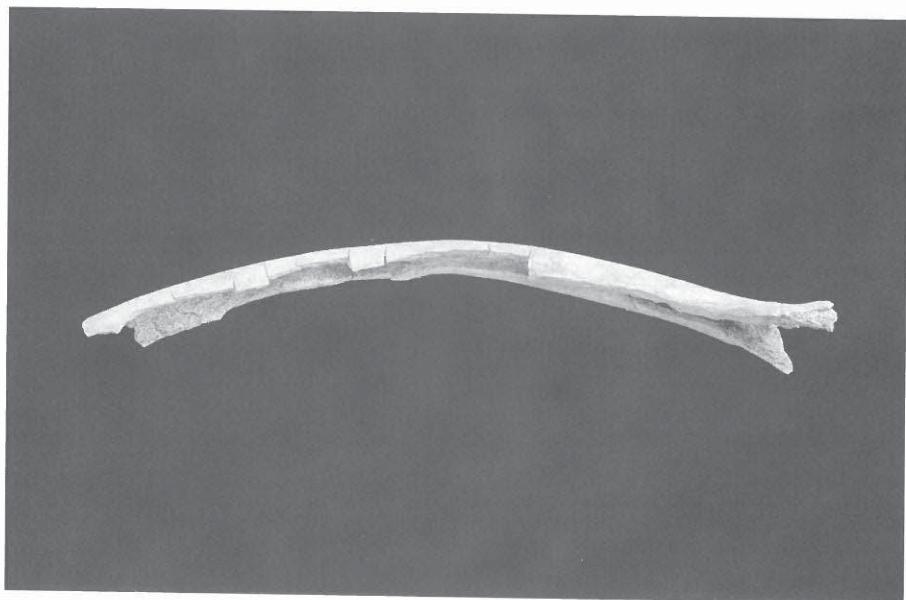
図版9 燃骨2
下顎骨・尺骨・上腕骨（未成人）



図版10 燃骨3
脛骨



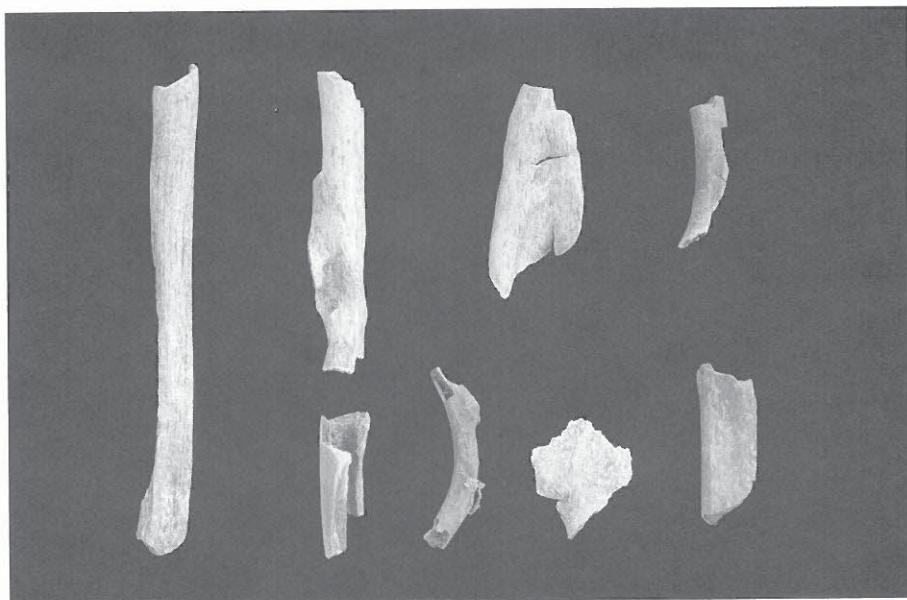
図版 11 燃骨 4
尺骨・脛骨



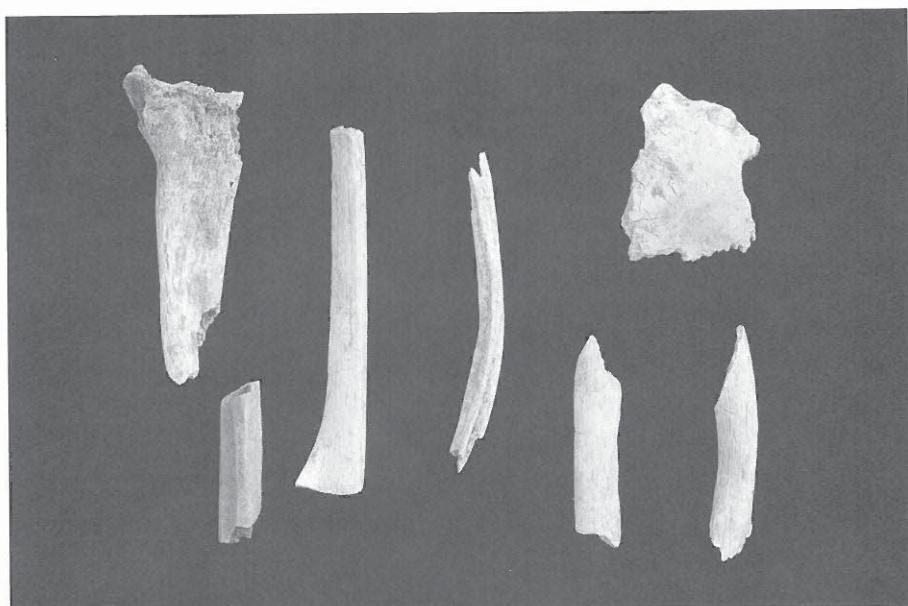
図版 12 火葬骨 1
大腿骨



図版 13 火葬骨 2
大腿骨・脛骨・腓骨・距骨・寛骨・
肋骨 等



図版 14 火葬骨 3
頭骨・大腿骨・脛骨 等



図版 15 火葬骨 4
頭骨・脛骨・腓骨 等



図版 16 火葬骨 5
頭骨・下顎骨・肋骨・椎骨・寛骨・
大腿骨 等

南島爪形文土器文化研究史 —型式比較による南島爪形文土器の位置付けについて（補遺）—

History of the Study on Southern-island Nail-marked Pottery Culture
- Typological Comparison of Southern-island Nail-marked Pottery (Supplement) -

伊藤 圭
Ito Kei

ABSTRACT : The author demonstrated in a former paper that the Nail-marked pottery of the Southwest Archipelago and Kyushu belong to the different groups in terms of typology. Since the dates and chronological position of the Southwest-archipelago group are not clear, it was necessary to show that they had no relation to the Nail-marked pots of Incipient Jomon culture through a typological study. However, the author realized that a portion of the Nail-marked pottery from Fukui cave in Nagasaki prefecture resembles to Yabuchi type pottery, and that the conclusion of the former paper should be reconsidered. Moreover, the general description employed in the former paper was insufficient to organize various problems about the pottery. This paper reconsiders the genealogy of Southern-island Nail-marked pottery and organize other problems as well. Its origins cannot be located in Kyushu, Korean peninsula or Southeast Asia, therefore, it must have developed locally.

はじめに

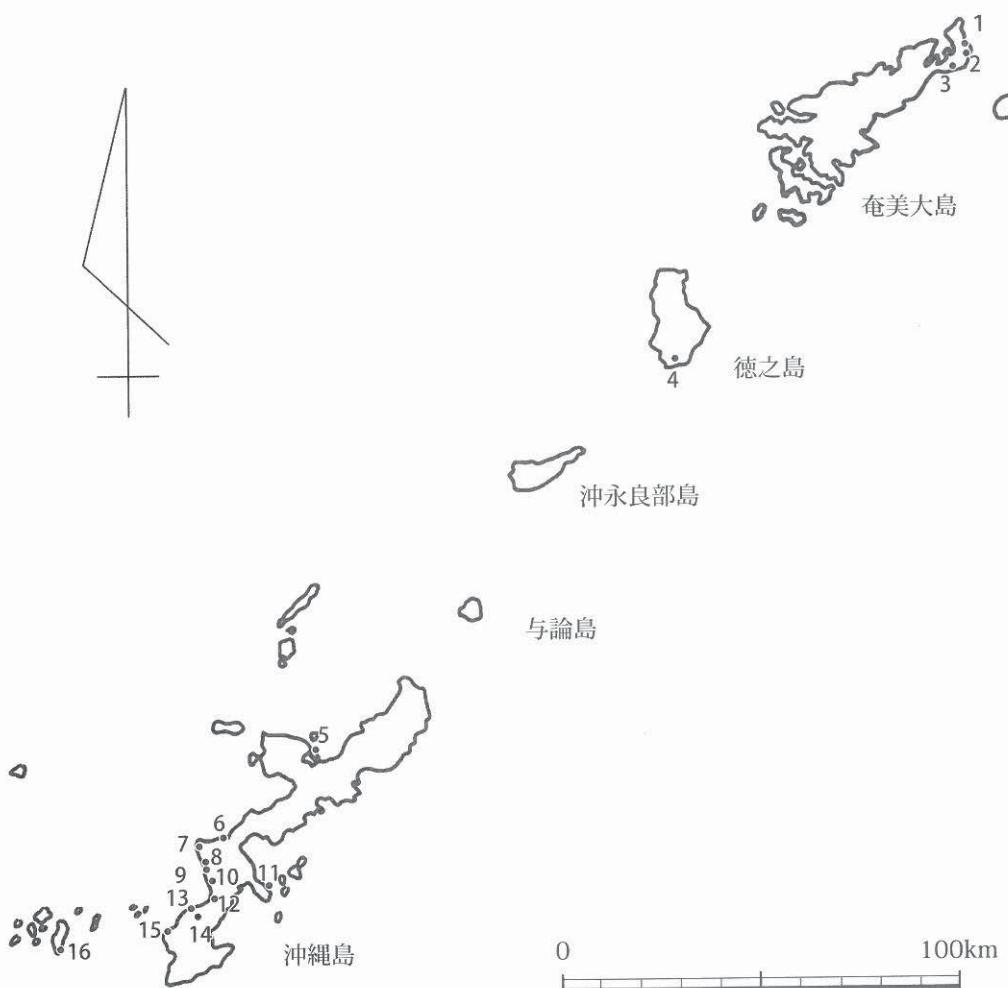
筆者は前回、南島爪形文土器^{*1}の系統問題について小稿をまとめ、これが九州の爪形文土器とは型式学的にも異なる土器群であることを提示した（伊藤 2006）。南島爪形文土器は、年代や編年的な位置付けが不安定なため、縄文時代草創期における爪形文土器と無関係であることを型式学からも示す必要があると考えたからである。ところが、長崎県福井洞穴遺跡出土の爪形文土器を実見したところ、ヤブチ式土器に酷似した資料を確認したため、前回考察した結論を一部改めざるを得なくなつた。加えて、前回の小稿は、南島爪形文土器における問題について概要を述べるに留めたため、多くの問題を整理することができなかつた。そこで本稿では、「型式比較による南島爪形文土器の位置付けについて」の追補を行い、南島爪形文土器の系譜問題を再考するとともに、その他に取り沙汰されている諸問題について整理して、出自についての私見をまとめたい。

1. 南島爪形文土器報告史

1959年、嵩元政秀・外間清徳・平敷正一・宮城幸徳によって、うるま市（旧与那城村）藪地島ジャネーガマが遺跡であることが確認され、^{やぶち}藪地洞穴遺跡と命名された（多和田 1960）。そして、翌年には八重山諸島の調査を終えた国分直一と、嵩元によって同遺跡の試掘調査が行われ、新型式の土器が発見されている（Kokubu・Kaneko 1962）。さらに 1963 年、奄美市（旧笠利町）土浜イヤンヤ洞穴遺跡^{*2}においてもこれと同様と考えられる土器が出土した（永井・三島 1964）。そのため、この土器が「両島の先史文化の交流を示す」重要な証左であることが確認され、「ヤブチ式」と型式設定されたのであ

第1表 南島爪形文土器出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	立地	包含層上面標高	文献
1	喜子川遺跡	奄美市笠利町字宇宿	マージ台地上に形成された砂丘	約 16.0m	田村・中山他 1989
2	宇宿高又遺跡	奄美市笠利町字宇宿	舌状台地先端部の砂丘	約 3.5m	中村 1978
3	土浜イヤンヤ洞穴遺跡	奄美市笠利町字土浜	海岸段丘	?	永井・三島 1964
4	面縄第一貝塚	大島郡伊仙町面縄	狹小な谷状地形内	約 1.5m	牛ノ浜・堂込 1983
5	おふじほる 大堂原貝塚	名護市字済井出	海岸砂丘地	約 0.0m	名護市教委 2001
6	なかどまり 仲泊貝塚	国頭郡恩納村字仲泊	海岸砂丘地	(表採)	新田 1977
7	おおくぼる 大久保原遺跡	中頭郡読谷村字渡慶字	臨海砂丘地後部	(未報告)	仲宗根・吉堅 1989
8	とくちあがりほる 渡具知東原遺跡	中頭郡読谷村字渡具知東原	石灰岩丘陵に囲まれた凹地	約 2.0m	高宮・知念 1977
9	のぐに 野国貝塚群B地点	中頭郡嘉手納町字兼久	海岸砂丘地	約 2.0m	岸本・島袋 1984
10	いれいぼる 伊礼原遺跡	中頭郡北谷町字桑江	沖積低地	約 1.5m	中村・東門他編 2006
11	やぶち 藪地洞穴遺跡	うるま市字屋慶名	石灰岩洞穴	約 9.0m	国分・三島 1965
12	あらぐすくじらばる 新城下原第二遺跡	宜野湾市字安仁屋	海岸砂丘地	約 0.0m	片桐 2006
13	ぐすくま 城間古墓群 A地区第9号墓	浦添市字城間	石灰岩小丘陵の岩陰	約 1.0m ?	下地 1990
14	チヂフチャ一洞穴遺跡	浦添市字牧港	石灰岩丘陵ドリーネ	約 50.5m	松川 1988
15	みーぬしんばる 箕隅原C遺跡	那覇市字鏡水	海岸砂丘地	(未報告)	新聞記事(図版2-3)
16	ふなこしばる 船越原遺跡	島尻郡渡嘉敷村字阿波連	海岸砂丘地	(表採)	宮城 1979



第1図 南島爪形文土器出土遺跡

る（国分・三島 1965）。しかし、年代は判然とせず、「編年上の詳細なる位置については、後日にゆづる」としながらも、「縄文時代の後期に比定されるもの」と考えられた^{*3}（国分・三島 1965）。

藪地洞穴遺跡より得られた土器片は 100 点余りにのぼるが、いずれも小片である（国分・三島 1965）。そのため、全形を復元することはできないが、胴部の張りが少ない平底の甕形、あるいは深鉢形を呈すると推定された（国分・三島 1965）。底部は得られていないが、縄文時代後期に相当する資料と考えられたため、伊波式土器や荻堂式土器などの器形を当てはめて考察したものと思われる。

口縁部片は 5 個体分が得られており、僅かに外反あるいは外傾する。指頭痕は「凹文」と表現されており、報告者は文様と捉えている。当遺跡出土資料の「凹文」は、内面にも顕著に施されるものがあることが特徴的であり、「意識的な並列」と理解される（国分・三島 1965）。一方、土浜イヤンヤ洞穴遺跡では、「凹文帯土器」と呼称されたヤブチ式土器は、沈線文土器や条痕文土器などと共に出土している（永井・三島 1964）。ヤブチ式土器は、第 1 層と第 2 層で出土しているが、両層準より出土した資料に型式上の違いは認められない^{*4}。「凹文」の施し方には数種類があり、さらに沈線と併施されるものなど、工具を使用するものも認められるという。口縁部片は 2 点報告されているが、中山清美によってこれらが胴部片であることが確認された^{*5}（中山 1992）。また、同遺跡では松本信光によって新たな資料が表採され、9 点の南島爪形文土器が紹介されている（松本 2000）。

国分・三島は、報告当時からヤブチ式土器が南島各地に分布することを推測しており、「今後他にも発見の可能性はあると考える」と述べている（国分・三島 1965）。そして、1975 年から 3 次に亘って行われた読谷村渡具知東原遺跡の調査において、下層から 3 例目となるヤブチ式土器が検出されたのである。また、新型式の資料も検出され、「東原式」と型式設定された^{*6}。この土器は、ヤブチ式土器に後続する型式であることが、層序的に確認されている（高宮・知念 1977）。両者はいずれも小片のため、器形は判然としない。しかし、爪形文が施された東原式土器の底部片や、ヤブチ式土器の底部付近と思われる破片が得られているため、いずれの型式も尖底または尖底的な丸底を呈すことが判明した。さらに、この上層からは曾畠式土器の包含層が認められたことで、「（沖縄諸島における）土器文化の祖元を考える上できわめて重要」と考えられたのである（知念 1977）。

渡具知東原遺跡の調査を境として、それまで 10 年以上の間発見されなかった南島爪形文土器が、その出土例を増加させることになる。1977 年、奄美市（旧笠利町）宇宿高又遺跡の調査において、7 点のヤブチ式土器が検出された。これらの資料は、Ⅲ 層～Ⅳ 層下面にかけて曾畠系土器と共に伴して出土している（中村 1978）。そのため、報告者は「（ヤブチ式土器と）曾畠系土器との時間的距離を推定することは困難であった」と述べている（安部 1978）。また同年には、恩納村仲泊において表採されたヤブチ式土器が、新田重清によって報告されている（新田 1977）。さらに、この土器は渡嘉敷島船越原遺跡でも表採されており、宮城朝光によって報告された（宮城 1979）。同遺跡では、ヤブチ式土器の他に、曾畠式土器や室川下層式土器なども採集されている。船越原遺跡は包含層が露わになっており、現在でも遺物が散布している状態である。そのため、遺跡の保護はもちろん、現状の記録と新たな表採遺物の報告が待たれる。

これまで報告された南島爪形文土器の総数は、300 点に及ぶものではなかったが、1981 年から行われた嘉手納町野国貝塚群 B 地点における調査によって、5300 点余りもの資料が出土した（岸本・島袋 1984）。これにより、当土器群には多様な種類が存在することが確認されたのである。その中で、「指頭痕が縦長に連続する」特徴を有した資料が一定量検出されたため、これが「野国タイプ」と呼称された。このタイプの土器は、層序関係などから南島爪形文土器の古式に位置付けられたが（岸本 1984）、現在に至っても報告例は少ないと型式設定には至っていない。また、これまでの出土例と異

第2表 南島爪形文土器報告史年表

調査年	遺跡	主な報告内容	文献
1960年	藪地洞穴遺跡	下層から「凹文」の施された土器出土。	Kokubu・Kaneko 1962
1963年	土浜イヤンヤ洞穴遺跡	藪地洞穴遺跡下層出土のものと同様の土器が出土。	永井・三島 1964
1965年	藪地洞穴遺跡 土浜イヤンヤ洞穴遺跡	「凹文」の施された土器は、「両島の先史文化の交流を示す」重要な証左とされ、「ヤブチ式」と型式設定される。	国分・三島 1965
1975年～ 1976年	渡具知東原遺跡	下層からヤブチ式土器出土。 また、新型式の資料も出土したため、「東原式」と設定される。	高宮・知念 1977
1977年	宇宿高又遺跡	7点のヤブチ式土器が曾畠式土器と共に出土。	中村 1978
1977年	仲泊貝塚付近	ヤブチ式土器が表採されたことが報告される。	新田 1977
1979年	船越原遺跡	ヤブチ式土器が表採されたことが報告される。	宮城 1979
1981年～ 1982年	野国貝塚群B地点	5314点もの資料が出土。器形の図上復元が試みられる。 「指頭痕が縦長に連続する」特徴を有した資料が「野国タイプ」と呼称される。	岸本・島袋 1984
1982年	面繩第一貝塚	「指頭圧痕の爪形文土器」が2点出土。	牛ノ浜・堂込 1983
1982年～ 1983年	中甫洞穴遺跡	指頭痕と爪痕が付された土器が、ヤブチ式土器として報告される。 第2次調査では工具による刺突が施された爪形文土器が出土。	河口・本田・瀬戸口 1983、 河口・本田・瀬戸口 1984
1987年～ 1989年	大久保原遺跡	赤土層より南島爪形文土器出土。 上層からは、室川下層式土器・条痕文土器が出土。	仲宗根・古堅 1989、 伊藤 2007
1987年	チヂフチャーダ洞穴遺跡	ヤブチ式土器が1点出土。	松川 1988
1987年	城間古墓群第9号墓	ヤブチ式土器が85点出土。	下地 1990
1987年～ 1990年	喜子川遺跡	南島爪形文土器が出土した層準より下位からアカホヤ火山灰層が検出される。 南島爪形文土器片を伴う土壤（1号土壤）が検出される。	田村・中山・金井 1989、 西田 1989、 田村・池田 1997
1995年～ 1997年	伊礼原遺跡	H9年度の試掘調査において、第XVII層からヤブチ式土器出土。 第XIV層からは、曾畠式土器や轟D式土器が出土。	東門 2000、 中村・東門ほか編 2006
1998年～ 2004年	大堂原貝塚	H11年度の調査において、南島爪形文土器が曾畠式土器・室川下層式土器などと共に出土。	岸本 2000、 名護市教育委員会 2001
1999年～ 2004年	新城下原第二遺跡	H12年度の試掘調査において南島爪形文土器の包含層が確認される。 H15年度、南島爪形文土器包含層の調査が行われ、野国貝塚群B地点に次ぐ量の資料が検出される。	片桐 2006、崎原 2006

第3表 南島における古手の土器と九州爪形文土器の年代

	遺跡名	出土地点	土器	試料	測定年代 (BP)	備考
沖縄	渡具知東原遺跡	G-33	南島爪形文土器	炭化物	6450 ± 140	
		J-26	南島爪形文土器	貝殻	6560 ± 140	
		J-26	南島爪形文土器	炭化物	6670 ± 140	
野国貝塚群B地点		IV b層	南島爪形文土器・沈線文土器	木炭	5950 ± 95	
		V b層	南島爪形文土器	木炭	6250 ± 150	
		VII層	第4群土器（無文の土器）	貝殻	7130 ± 80	
新嘉	新城下原第二遺跡	E グリッド IX b層	南島爪形文土器・無文の土器	獸骨	6080 ± 50	A M S法。
	港川フィッシュヤー遺跡	崖上区	波状文土器	貝殻	8640 ± 90	A M S法。 検出状況に難あり。
奄美	宇宿高又遺跡	北区IV層	曾畠式土器・南島爪形文土器	貝殻	4450 ± 90	南島爪形は主にIV層下面で検出。
	喜子川遺跡	B- 2	南島爪形文土器	木炭	5340 ± 100	
九州	福井洞穴遺跡	II層	爪形文土器・細隆起線文土器		12400 ± 350	
	河陽F遺跡	12 c層	爪形文土器	炭化物	12100 ± 50	A M S法。
		13層	爪形文土器	炭化物	12340 ± 50	A M S法。
	無田原遺跡	V層	爪形文土器	—	—	III層はA h層、IV層は早期包含層。
	霧島遺跡	III層	爪形文土器・無文の土器	—	—	II層はA h層。

なり、大形破片も多く得られている。そのため、ヤブチ式・東原式・野国タイプにおける器形の図上復元が試みられた（岸本・島袋 1984）。復元された図は、1個体を回転復元させたものではなく、同じ分類に属する数個体の各部位を図上で繋ぎ合わせたものである。そのため、島袋洋は、「あくまで本類土器の器形をイメージ化させるためのもので、本類土器の一般的な器形を示したものではない」と断っている（岸本・島袋 1984）。しかし、これまで南島爪形文土器の器形は判然としなかったため、この復元図は当土器群の理解に大いに貢献している。これによると、ヤブチ式と野国タイプには、器形の上で大きな違いは認められない。一方、東原式とヤブチ式・野国タイプでは、頸部の長さや胴部における最大径の位置が異なることがわかる。

野国貝塚群B地点第1次調査の翌年、沖永良部島中甫洞穴遺跡で、過去に表採されていた土器の1点が、「沖縄県のヤブチ遺跡・渡具知東原遺跡や福岡県の門田遺跡から出土したものと同類」の資料であると考えられた（河口・本田・瀬戸口 1983a・b）。そこで、沖永良部島における縄文後期以前の文化の確認などを目的として調査が始まり、2点の爪形文系（？）土器が第4層最下部より出土した^{*7}。これらの土器は表採資料と同様の資料である。なお、第4層は、上部・中部・下部に区分されており、中部からは轟式土器が出土している（河口・本田・瀬戸口 1983 a・b）。また、翌年行われた第2次調査では、第4層相当の層準から、前年度得られた資料とは様相の異なる、ヘラ状工具を刺突して施文された爪形文土器が出土した（河口・本田・瀬戸口 1984）。

これまでの調査では、南島爪形文土器は、曾畠式土器以下の層準より得られており、同土器文化期よりも時代が遡ると考えられるが、放射性炭素測定年代の結果から、古くとも縄文時代前期初頭と考えることが妥当と思われる。しかし、九州における曾畠式土器より下位の層準から得られる爪形文土器との関係が取沙汰され、県内外の多くの研究者は、南島爪形文土器が縄文時代早期～草創期にまで遡る可能性を示唆または指摘した。

1982年、奄美市（旧笠利町）において、畑地総合開発事業の際、喜子川遺跡が発見された。同遺跡は、包含層が露出しており、この土層断面上層（砂層）からは、南島爪形文土器が検出されている。そして、成尾英仁の分析によって、その下層の黄褐色土層がアカホヤ火山灰層であることが明らかとなったのである（中山・田村・金井 1989）。その後、中山の精力的な活動が実を結び、1987年から4次に亘る発掘調査が行われた。そして、南島爪形文土器出土層準より下位で検出された火山灰層が再度分析され、改めてこの層がアカホヤ火山灰層であることが確認されたのである（西田 1989）。この一連の調査によって、南島爪形文土器の実年代は縄文時代早期並行期までは遡らないとする結論に概ね落ちている^{*8}。しかし、喜子川遺跡の堆積状況にも疑問点が指摘されており（岸本 1991）、南島爪形文土器



図版1 現在の遺跡周辺（左 - 蔵地洞穴遺跡、右 - 土浜イヤンヤ洞穴遺跡）

が「縄文時代前期並行」と確定されているわけではない。また、南島爪形文土器と曾畠式土器の文化期には石器組成の違いが認められるとされるため⁹、両者を編年上、同時期とすると文化内容を正確に把握することができない。そのため、高宮廣衛はヤブチ式土器を早期末に比定して、実年代の上では曾畠式土器の直前まで続くとしたのである（高宮 1991）。

2. 型式について

i) 分類

南島爪形文土器は、渡具知東原遺跡・野国貝塚群B地点・喜子川遺跡・新城下原第二遺跡の調査報告において、分類が試みられている。その概要は第4表の通りである。第4表から、沖縄諸島における南島爪形文土器は、沈線を工具で施すか爪で施すかなどの細かい観察を除けば、各報告書の分類は概ね対応することがわかる。第4表を基にして南島爪形文土器の分類案をまとめたものが第5表である¹⁰。野国タイプを除くと、ヤブチ式は2類に、東原式は3類に大きく分けられる。野国タイプに多様性がみられないのは、類例資料に乏しいことが理由に挙げられるが、野国タイプから東原式に移行するに従って文様（調整痕）が多様化するようにも見受けられる。

ここで注意すべきことは、沖縄諸島と喜子川遺跡の南島爪形文土器が対応できることである¹¹。土浜イヤンヤ洞穴遺跡や宇宿高又遺跡出土の資料も喜子川遺跡の資料に近く、奄美諸島独自の様相を呈している。そのため、中山清美が「これらの土器を、沖縄の東原・ヤブチ式土器と直接結び付けることは出来ないように思える」と述べるように（田村・中山・金井 1989）、奄美諸島の南島爪形文土器には、典型的なヤブチ式土器や東原式土器は殆どみられない。

ii) 成形方法

ヤブチ式土器の押圧痕 永井・国分・三島は、ヤブチ式土器の押圧痕を「凹文」と表現している（永井・三島 1964、国分・三島 1965）。国分は、後の論考で「押圧文¹²」と呼称しており（国分 1966）、いずれにしてもヤブチ式土器に見られる器面の凹部を文様として捉えている。そして、この文様の施文原体については不明としているが、「押圧文」を「指跡ほどの大きさ」と述べており、これが指頭痕の可能性があることを示唆している（国分 1966）。一方、渡具知東原遺跡における調査報告では、この押圧痕は「指頭押圧文」と呼称され、ヤブチ式土器が指頭によって施文されていることが指摘されたのである（高宮・知念 1977）。以後、ヤブチ式土器は、指頭によって文様が表出された土器と考えられることが多いと思われる。「爪形文系」土器とされるのも、このような概念があると考えられる。

ヤブチ式土器に施された指頭痕が調整痕（成形痕）と考えられたのは、中甫洞穴遺跡の報告が初見ではないだろうか（河口・本田・瀬戸口 1983a・b）。報告者は、ヤブチ式土器と思われた資料の内外面に、相対応する押圧痕が配されることから、これが輪積による成形の際に施されたものと考えた。なお、同資料には二次的に爪が刺突されることを指摘し、これを爪形文土器の範疇で考えている。また、岸本義彦は、野国貝塚群B地点で得られた資料の中から野国タイプを抽出し、成形の際の指頭痕が器面全体に配されることを特徴として挙げた。岸本は、ヤブチ式土器段階になると文様的な要素が強まり、東原式土器のような爪形文を施すに至ると考えている（岸本 1984）。

押圧痕の性格 当然のことながら、ヤブチ式土器の押圧痕を調整痕（成形痕）と考えるか、文様と考えるかによって、成形方法の考え方も異なる。丑野毅は、野国貝塚群B地点出土のヤブチ式土器と東原式土器について、レプリカ法を利用することにより、主にその押圧痕・文様の施し方を考察している（丑野 1997）。特に、ヤブチ式土器については、その押圧痕を指頭以外の原体によって施された

第4表 各調査報告による南島爪形文土器分類比較

遺跡	分類				分類基準		対応関係	文献
渡具知東原遺跡	ヤブチ式 東原式	第I式	—	①	指頭圧痕	指頭痕のみが施されるもの。	⑩に相当	高宮・知念 1977
			第1類	②	爪形文+指頭圧痕	爪形文と指頭痕が施されるもの。	⑨に相当	
			第2類	③	爪形文	爪形文のみを施すもの。	⑦に相当	
		第II式	第3類	④	爪形文+指頭押引文	②の指頭痕が指頭による押し引きに替わるもの。	⑧?	
			第4類	⑤	爪形文+沈線文	爪形文と沈線文が施されるもの。	—	
			第5類	⑥	爪形文+無文帶	爪形文に無文空白部が加わるもの。	⑦?*10	
沖縄諸島	野国貝塚群B地点	I類	—	⑦	爪形文	爪形文のみに終始するもの。	③・⑥に相当	岸本・島袋 1984、 岸本 1991
			東原式	a	⑧	爪形文+沈線文	⑦の爪形文に、爪を押し引いた沈線が加わるもの。 ^{*13}	
		II類	b	⑨	爪形文+指頭圧痕	爪形文と指頭痕が施されるもの。	②に相当	
			ヤブチ式	a	⑩	指頭圧痕	指頭を器面に押し当てるのみに留めるため、楕円状となるもの。	
			b	⑪	指頭押引文	指頭による押し引きを行うため、長楕円状となるもの。	⑮に相当	
	野国タイプ	IV類	—	⑫	指頭押引文	粘土紐を引き締めた際に生じた凹線が、縱位や斜位に連続するもの。	⑯に類似	
	ヤブチ式	I類	a	⑬	指頭圧痕	楕円状の指頭痕が施されるもの。	⑩に相当	崎原 2006
	ヤブチ式(野国タイプを含む)	II類	b	⑭	指頭圧痕+爪痕	指頭痕に爪痕が伴うもの。	⑩に相当	
			a - 1	⑮	指頭押引文	指頭を押し引き、縱位に連結しないもの。	⑪に相当	
			a - 2	⑯	押引指頭痕の連結文	指頭を押し引き、縱位に連結するもの。	⑫に相当	
		b	⑰	爪による押引文	爪を押し当てるようにして押し引くもの。	⑧?		
奄美諸島	喜子川遺跡	I類	—	⑲	爪形文+垂直の指頭押引文	1列に施された爪形文の上下に指頭による押し引きがほぼ垂直に施されるもの。	—	田村・中山・ 金井 1989、 田村・池田 1997
	ヤブチ式?	II類	—	⑳	斜行する指頭押引文	指頭を斜位に施すもの。	⑩に類似?	
	?	III類	—	㉑	爪形文	半截竹管状工具による刺突文。	—	

可能性を指摘している。それまで南島爪形文土器の研究は、年代的な位置付けや九州との対比に重点が置かれ、成形方法は詳細な考察が行われていなかった。特に渡具知東原遺跡の調査報告以後、一般的にヤブチ式土器の押圧痕は指頭痕であると考えられていたため、科学的なアプローチによるこの試みは、南島爪形文土器研究に新たな問題を提起したのである。

丑野は、この論考の中でヤブチ式土器の押圧にイモガイが用いられた可能性を考えている。つまり、ヤブチ式土器の押圧痕は文様であるとの見解を示しているのである。そして、ヤブチ式土器の押圧痕が指頭痕でないとする根拠に、ヤブチ式土器の押圧痕の付近に指紋が見られないこと、「同じ土器に付けられた同じような文様の一部に違いが見られること」を挙げている。さらに、ヤブチ式土器と東原式土器の文様・押圧痕はいずれも水平方向に整然と施されることから、「土器を据えたまま人が移動して施紋したのでは、これほど整然とした並びが作られないと思われる」として、工具による施文を強調している。加えて、「土器を臥せられた状態に置いて時計回りに回転させて施紋具を左から右に順次移動しながら連続的に施紋していったと推定できる」と考えたのである（丑野 1997）。

丑野は施文実験も行い、ゴム粘土を指頭で押圧した写真とイモガイで押圧した写真を掲載している。確かにイモガイによる押圧痕もヤブチ式土器に施される押圧痕に似ており興味深い。しかし、この観察には疑問点も多い。土器の器面から指紋が検出されないことが、ヤブチ式土器の押圧痕が指頭によって施されたものではないとする根拠になり得るのだろうか。そもそもイモガイによる押圧によるもの

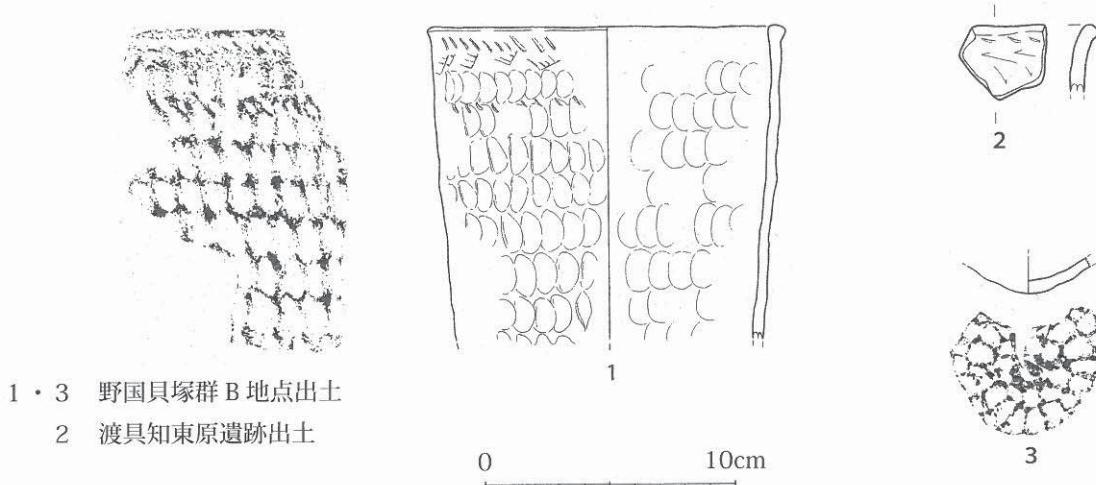
第5表 各報告書分類案の整理

分類	分類基準
野国タイプ	長楕円形指頭痕の連続
ヤブチ式土器	指頭圧痕
	指頭押引文（連続せず）
東原式土器	爪形文
	爪形文+指頭痕
	爪形文+沈線文

であったとしても、施文の前に器面を調整するはずである。その際の指紋はなぜ残らないのだろうか。高温で焼かれる陶器に比べて野焼きの土器は概して器面が磨耗し易い。ユビオサエの残る土器資料には、指紋がどの程度残存するのだろうか。また、指頭で器面を押圧する場合、指の入れ方や力加減で押圧痕の形状も若干変わるため、同一資料であっても必ずしも同じ形状の押圧痕が施されることは難しいのではないだろうか。さらに、土器を伏せた状態で押圧痕が施されたとする見解にも疑問が残る。ヤブチ式土器は、内面を丁寧にナデるものが多いため、中にはナデが徹底されず、外面と相対応する指頭痕が確認できるものが多く認められる。このことが、ヤブチ式土器の押圧痕が指頭によって施されたと考えられる根拠の一つとなっているのである。ところが、土器を伏せた状態では内外面に相対応する押圧痕を施すことはできない。ヤブチ式土器に限らず、土器は底部を接地して成形すると考えられる。そして、土器を回して施文すると考えられるため、水平方向に一貫して整った押圧痕を施すことは可能である。丑野も、ある資料における押圧痕の分析結果について、「指紋らしい形がまったくみえないことから、指頭による施紋であるかどうか断定できない」としながらも、「(押圧痕の)側面形や断面形を見ても、まさに指が使われているのではないかと思われる」と所見を述べている。ただし、ヤブチ式土器に配されるD字状の押圧痕は、指頭を押圧しただけでは施すことができない（伊藤 印刷中）。このことから、ヤブチ式土器の押圧痕は、独特な方法によって施されていると推察できる。

ヤブチ式土器における指頭痕の施し方については、比嘉賀盛に詳しい。比嘉は、ヤブチ式土器の押圧痕を指頭痕と考えており、これが粘土紐の接合の際に施された調整痕（成形痕）であると考えている（伊藤 印刷中）。そして、南島爪形文土器の成形実験を繰り返し、この土器群が独特かつ合理的な方法で成形されていると指摘しているのである。比嘉による南島爪形文土器の成形実験は、同土器群を指先だけで成形することができる事を示している^{*14}。また、その成形過程で、ヤブチ式土器独特の押圧痕に酷似する押圧痕を施しており、その指摘に説得力を与えている。ただし、比嘉は、この成形方法は1つの仮説であって、他の成形方法もあり得るのではないかと考えている。

口縁部直下の爪形文について、比嘉は口縁の形を整える際に必然的に施された可能性を考えている。比嘉による成形実験でも、口縁を僅かに外反させる際に、自然と爪形文が付されており、その可能性は否定できない。ただし、当土器の中には、口縁部がナデや、ヘラ状工具によって調整されるものもあることが留意される^{*15}（第2図1・2）。また、比嘉は、粘土紐を2段程とぐろ状にまわして当土器を成形している。そのため、この指頭痕は概ね2段の単位で螺旋状を呈す。粘土紐の積み上げ方につ



第2図 南島爪形文土器 (S=1/3、転載資料は文末に記載)

いては、押圧痕が1周廻る大形破片がないため、明確に検証することはできないが、唯一押圧痕が僅かに1周廻ることが認められる野国貝塚群B地点出土の底部片からは、輪積によって成形された様子が窺える^{*16}（第2図3）。

筆者は南島爪形文土器における押圧痕が調整痕（成形痕）であると考えた場合、比嘉の成形方法は、当土器の成形方法に最も近いのではないかと考えている。ただ、ヤブチ式土器の指頭痕が文様である可能性も完全に否定することはできない。指頭痕が整然と施されている上、その形状が規格的に概ね統一されているからである。また、ヤブチ式土器の口縁部には、ハケメが確認できる資料もあるため（第2図1）、指先だけで器面が調整されたとは言い切れない。しかし、比嘉が成形実験によって示したように、ヤブチ式土器の押圧痕を指頭痕と考えて、この指頭痕が土器の成形過程において必然的に施されたとする考えは、より合理的であり、文様的な要素が強まりながら東原式土器へ移行する自然な流れを想定することができる。これは、九州以北の爪形文土器群と明確に区別し得る特徴であり、型式学的に南島爪形文土器がこの土器群と別系統であるとする根拠になり得ると考えられるのである（伊藤2006）。また、その指頭痕が、粘土紐の接合部に集中することや底部から器面全体に及ぶことも、これが調整痕（成形痕）であるとする根拠と考えられるのではないだろうか。いずれにしても推測の域を出るものではないが、当土器群の系譜を考える上でも重要な問題であると思われる。

3. 共伴遺物

i) 人工遺物

南島爪形文土器に共伴する人工遺物の報告は、第7表に示す通りである^{*17}。報告された遺跡の数は少ないが、南島爪形文土器が様々な遺物と共に伴っていることがわかる。中でも、木製品の報告は貝塚時代において現在でも報告例が少なく注目される資料である。多様な共伴遺物が得られているものの、出土点数は少ないため、研究の対象になるものは石斧が主である。

石斧 南島爪形文土器に伴う石斧は、藪地洞穴遺跡の調査報告から出土例をみることができる（国分・三島1965）。ただし、詳細な観察が行われたのは、渡具知東原遺跡の調査報告からである。渡具知東原遺跡では、出土層位から「曾畑層の石器」、「爪形文系土器に伴う石器」に項を分けて報告されている（高宮・知念1977）。この中で高宮廣衛は、曾畑式土器に伴う石斧は概ね磨製のものが多い一方で、南島爪形文土器に伴うものには磨製石斧がみられない傾向を示している^{*9}。しかし、南島爪形文土器に伴う石斧は僅か3点が得られた程度であるため、出土資料の報告に留めており、それ以上の考察は行われていない。南島爪形文土器に伴う石斧は、野国貝塚群B地点の報告によって初めて明確に抽出されたのである（岸本・島袋1984）。岸本義彦は、野国貝塚群B地点の出土資料を第6表のように分類し、層位別の出土状況からI・II群が南島爪形文土器に伴う石斧であることを示した。また、製作工程についても言及し、表裏面に自然面を残すものが少ないので、細部調整は行われず、刃部のみが研磨されることをその特徴に挙げている。さらに、石斧や石斧様刃器の大半が緑色千枚岩であることに着目し、石材の分析から「細粒砂岩・チャート以外の原石の産地（供給地）は遺跡の南西海上に浮かぶ慶良間諸島である可能性が高い」とことを指摘した。そして、同時期の遺物が採集されている船越原遺跡との関連を想定している（岸本・島袋1984）。

ところで、野国貝塚群B地点の調査によって、南島爪形文土器には局部磨製石斧が伴うことが確認されたが、これは、当時取沙汰されていた九州の爪形文土器に共伴する石器とは大きく異なるものである。九州では、縄文時代草創期における爪形文土器には、先土器時代から継承される細石器が伴うのである。これについて、高宮廣衛は「時期差も考えなくてはならない」とした上で、「北と南とでは

自然環境への順応の仕方に相違があったのではなかろうかとみられる」と考えた（高宮 1987）。ところが、その後、喜子川遺跡の調査によって、南島爪形文土器の包含層がアカホヤ火山灰層より上層に堆積することが確かめられると、九州と南島における共伴石器の相違が時期差であることが濃厚となつたのである。そして、安里進は、このような両地域の相違について触れ、「(南島爪形文土器文化期では)石器文化においてはすでに強い地域色がでている」ことを挙げて、九州縄文文化と異なる様相を指摘している（安里 1991）。

このように、南島爪形文土器は、共伴する石器からも九州における爪形文土器と区別されることになった。こうした中、新田重清は、沖縄県内における縄文時代の主要な遺跡から出土した石器を体系的にまとめ、渡具知東原遺跡と野国貝塚群B地点出土資料を基に、南島爪形文土器に共伴する石斧の系譜を考察している（新田 2000）。新田は、東原式土器に共伴する全面打製の石斧を「東原タイプ型石斧」（「渡具知東原タイプ」）、ヤブチ式土器に共伴する局部磨製石斧を「野国タイプ型石斧」とそれぞれ仮称した。そして、「爪形文系土器に伴っていた東原式タイプや野国タイプの石斧は早期の一時期のみで登場し、前期ではみられない」ことを挙げ、「前期においては調理用具と考えられる磨石類・打製の石鏃・スクレイパー・剥片石器などが登場し、組成に変化がみられる」ことから、南島爪形文土器の文化期と曾畠式土器のそれとでは、石器の系譜が異なることを指摘している。また、「東原タイプ型石斧」と「野国タイプ型石斧」とでは、製作技法や形態などが異なることから、これらについても「別の系譜の石器」と考えている。一方、水ノ江和同は、南島爪形文土器に伴う石斧について、全面が研磨されていないことを除けば、九州における縄文時代前期の磨製石斧と同様の特徴を有することを指摘した（水ノ江 2005）。水ノ江は、南島爪形文土器に共伴する石斧の研磨が全面に施されない理由に、研磨し易い石材が産出されないことを挙げている。さらに、同石斧は敲打の手法があまりされていないことが、九州のものと様相が異なるように感じるとして、両者に大きな差異はみられないことを強調した。そして、「爪形文土器と曾畠式土器に共伴する石斧は類似しており、両者の生活内容に大きな時間差を見出すことは難しく、またその存在が九州本土での出現と展開に連動していると考えられるだけに、むしろ両者が年代的に近い関係であったことが想定される」と述べている（水ノ江 2005）。この指摘は、南島爪形文土器を編年上、縄文時代早期あるいは貝塚時代早期に位置付ける根拠に疑問を呈すものである。

敲打器 敲打器も石斧同様、藪地洞穴遺跡の調査から南島爪形文土器に共伴する石器として報告されている（国分・三島 1965）。野国貝塚群B地点では、その形態からA～Dの4類に分けられた（岸本・島袋 1984）。その中で、「平面形が長楕円をなし、比較的扁平な礫を用いたもの」（B類）と、「小形の扁平円礫を用いたもの」（C類）が南島爪形文土器に伴う敲打器として抽出された。

貝製鏃 藪地洞穴遺跡の調査報告では、ヤブチ式土器と共に出土した遺物の中で、「貝製の鏃はもっとも注目すべきもの」として、A～Cの3種に分類された（国分・三島 1965）。報告者によると、A式に分類された「長目の三角形」のものは、「沖縄以外において比較的広く見出せるもの」であり、有茎のC式には「金属器の影響を思わせるものがある」という。そして、「長葉状の形式」として抽出されたB式は、華

第6表 石斧分類（岸本・島袋 1984）

製法・形態	I群	局部磨製	刃渡り 7 cm以上
	II群		刃渡り 6 cm以下
	III群	I・II以外	
	IV群	未製品	
平面觀	A類		撥形
	B類		短冊形
	C類		不明
刃部	a		両刃
	b		片刃
	c		不明

第7表 南島爪形文土器に共伴する人工遺物の様相

名稱	遺跡	層位	土器	石器		その他の 人工遺物	遺物	備考	文責／報告年
				組成	石斧				
敷地洞ヶ遺跡	VII	ヤブチ式	〔100余〕	石斧〔1〕、敲打器〔1〕、鍥状石器？ 〔1〕	III B (粗造の方角の adze : rectangular adze)	貝製鍬	敲打器は上下両面に凹 み。	Kokubu・Kaneko 1962 国分・三島 1965	
				石斧〔11〕、スクレイバー〔2〕、石皿〔12〕、 敲打器〔2〕、石皿〔2〕、磨石〔5〕、 凹石〔4〕など	打製〔2〕、 打製部機製〔2〕、 半磨製〔1〕、磨製〔6〕	—	曾煙式に伴うとされる 石斧19点(表採・I ～IV層)内11点(表 採4点)は磨製石斧。 骨製品は、「イノシシ の尺骨を利用したもの で、その1端を磨耗に よって尖らせ錐状に仕 上げてあるが、先端部 が欠損する」。		
	III	曾煙式など		磨石〔1〕	—	—	—		
				石斧〔1〕、スクレイバー〔1〕、 石核〔1〕	III (全面打製)B/②	—	—		
	V [O-37]	東原式	〔3〕	石斧〔1〕	III (全面打製)B/②	—	—		
				石斧〔1〕	I Aa/②	—	—		
	VII 20～30 cm [G-30]	東原式	〔9〕	石斧〔1〕	—	—	骨製品〔1〕		
				ヤブチ式〔6〕	—	—	骨製品〔1〕		
	V [J-26]	ヤブチ式	〔6〕	室〔13.3〕、条〔2.3〕、 沈〔0.3〕、東〔33.3〕、 ヤ〔43.2〕、野〔0.7〕	石斧〔29.4〕、石斧様刃器 〔11.8〕、 敲打器〔5.9〕、 球状石器〔5.9〕、 チャート製品〔29.4〕	I Ba/①〔1〕、 III /③〔1〕、 IV /①〔3〕	—		
				沈〔0.4〕、東〔16.9〕、 ヤ〔74.5〕、野〔6.2〕	石斧〔25.0〕、石斧様刃器〔16.7〕、 敲打器〔12.5〕、 球状石器〔8.3〕、 砾石〔33.3〕	I Aa/④、I Ba/①、 I Bb/③、II Aa/①、 II Bc/⑤〔それぞれ1〕	—		
渡具知東原遺跡	IV b	東原式	〔3〕	東〔15.1〕、ヤ〔41.9〕、 野〔39.8〕	石斧〔52.9〕、石斧様刃器〔23.5〕、 敲打器〔17.6〕	I Aa/⑤、I Ac/①、 I Ca/①、I Ba/①・⑥、 〔それぞれ1〕、 II Ba/①〔2〕	貝製鍬〔1〕		
				東〔4.6〕、ヤ〔69.0〕、 野〔23.4〕	石斧〔50.0〕〔1〕、敲打器〔50.0〕〔1〕	II Ba/①〔1〕	木製品？〔1〕		
	V c	—	〔1〕	石斧〔100.0〕〔1〕	II Aa/⑦〔1〕	木製品〔2〕	木製品〔2〕		
				南島爪形文土器〔70.2〕、 無文の土器〔29.8〕	石斧〔20.0〕〔1〕、手持砥石〔40.0〕〔2〕、 置砥石〔40.0〕〔2〕	貝製鍬〔2〕 貝製品〔1〕	貝製品〔2〕 貝製品〔1〕	南島爪形文土器は、 125点出土(IX層119 点、層位不明6点)。石 器はIX層から12点出 土。骨製品は、ヤス状 刺突具・骨針と想定さ れるものがそれぞれIX 層より出土。土製品は、 いずれも穿孔を有する が不定形。	
	IX a	南島爪形文土器	〔2〕	南島爪形文土器〔88.5〕、 無文の土器〔11.5〕	石斧〔33.3〕〔1〕、置砥石〔66.7〕〔2〕	II A/⑨	貝製匙状製品〔1〕、 土製品〔2〕	南島爪形文土器は、 125点出土(IX層119 点、層位不明6点)。石 器はIX層から12点出 土。骨製品は、ヤス状 刺突具・骨針と想定さ れるものがそれぞれIX 層より出土。土製品は、 いずれも穿孔を有する が不定形。	
				無文の土器〔100.0〕〔3〕	置砥石〔100.0〕〔1〕	—	骨製品〔1〕、 土製品〔1〕		
	IX b	南島爪形文土器	〔12〕	南島爪形文土器〔11〕、 無文の土器〔12〕	石斧〔1〕、敲打器〔2〕	I Aa/②	—		
				枝番不明	礫〔1〕	礫は、「原礫の形を止めているが、表面中央に敲打した痕と思われる他 用痕が認められる」。	田村・池田 1997		
	喜子川遺跡	III [C-1]	南島爪形文土器	南島爪形文土器	礫〔1〕				

() 内は層位・遺物毎出土割合(%)、〔 〕内は数量、〔 〕内はグリッド名を表す。略語・番号は次の通り。室：室川下層式土器、条：条痕文土器、沈：沈線文土器、東：東原式土器、ヤ：ヤブチ式土器、野：野原タイプ、①緑色千枚岩、②緑色片岩、③変質片岩、④輝緑岩、⑤泥質片岩、⑥黒色千枚岩、⑦珪質片岩、⑧粘板岩、⑨砂岩

南や台湾南部の一部の遺跡から出土していること、同様のものは北九州や朝鮮半島でも出土しており、南九州から奄美大島では発見されていないことを説いて、その出自を華南に求めている（国分・三島 1965）。これらの貝製鏃について、報告者は C 式を新しく考えているようである。また、以上の記述から、その形状の違いを系譜の相違と考えているものと思われる。

野国貝塚群 B 地点においても、藪地洞穴遺跡出土のものと同様と思われる貝製鏃が南島爪形文土器に伴って出土している。また、同様の資料は攪乱層（I b 層）からも出土しているため、計 2 点が得られている（岸本・島袋 1984）。南島爪形文土器に共伴して出土した貝製鏃は刃部を欠損しており、全形を窺うことはできないが、攪乱層から出土した資料の形状から、藪地洞穴遺跡出土資料の A 式か C 式に属するものと思われる。

さらに、新城下原第二遺跡においても同様の資料が 2 点確認されている（久貝 2006a）。1 点は一部が欠損するものの、「木の葉型」になると推定されており、B 式の範疇に収まると思われる資料である。他の 1 点は刃部を欠くが、有茎の資料であり、C 式に属するものである。

以上のことから、藪地洞穴遺跡においてヤブチ式土器と共に伴した A～C 式は、年代が大きく開くものではなく、いずれも南島爪形文土器の文化期に用いられた可能性も考えられると思われる。また、南島爪形文土器には石鏃が伴わないことから、イノシシの狩猟方法には主に罠猟が指摘されているが（盛本 1984）、貝製鏃がその代替品として用いられたとも考えられる。

ii) 自然遺物

南島爪形文土器に共伴する自然遺物は、第 9 表に示す通りである。詳細な報告は、野国貝塚群 B 地点の調査からであるが、現在までの報告例は 3 遺跡のみである。

貝類 野国貝塚群 B 地点では、主に第 9 表に示すような貝類が得られている。報告書の引用から、これらの貝類の生息場所をまとめたものが第 8 表である。出土した貝類は、潮干帯に生息するものが主体であり、鹹水産が全体の 78% を占めるという（盛本 1984）。潮間帯の岩礁に生息するものが最も多く、出土貝類全体の 28.6% 得られているが、第 8 表に示した主な出土貝類は、潮間帯下の岩礁に生息するものが多い。

野国貝塚群 B 地点では、各時期を通してマガキガイやサラサバティが主体を占めるが、南島爪形文土器が主体を占めて出土している IV 層では、シレナシジミが多く得られている。このことから、盛本勲は「マガキガイを優先種とし、これに岩礁性の巻貝やマングローブ泥底のシレナシジミが組み合わざる」点を指摘した（盛本 1984）。さらに盛本は、このような貝類の検出状況が、珊瑚礁を前面に控えた沖縄県本島西海岸および周辺島嶼部の貝塚における検出状況と概ね類似する一方で、珊瑚礁を前面に控えていないか湾口・湾奥に立地する沖縄本島東海岸一帯の貝塚における検出状況とは異なる傾向を指摘している。これは、南島爪形文土器を出土する遺跡が、藪地洞穴遺跡を除いて沖縄本島西海岸に集中することにも起因するのだろうか。また、盛本は各層で主体を占めるマキガイの分布状況を層位別に図示している。これによると、下層におけるマキガイの分布状況は、上層のそれに比べてより海側に分布しているようである。

新城下原第二遺跡においても詳細な集計が行われ、層位毎に検出された貝類の個体数が推定されている（島袋 2006）。島袋春美は、南島爪

第 8 表 野国貝塚検出の主な貝類生息地

種目	生息地
マガキガイ	腹足綱 潮干帯～水深 20 m・砂礫底
サラサバティ	腹足綱 潮間帯付近珊瑚礁
オニツノガイ	腹足綱 潮間帯下岩礁
チョウセンザザエ	腹足綱 潮間帯下岩礁
ムラサキウズガイ	腹足綱 潮間帯下岩礁
ヤコウガイ	腹足綱 浅海・岩礁
キバウミニナ	腹足綱 マングローブ泥底
シレナシジミ	斧足綱 マングローブ泥底

第9表 南島爪形文土器に共伴する自然遺物の様相

遺跡	層位	土器	自然遺物	文責／報告年
渡貝知東原遺跡	VII	東原式〔2〕	海獣?の骨	高宮・知念 1977
	?	?	犬の下顎骨、イノシシの骨	
	?	南島爪形文土器	貝類（マガキガイ、サラサバティ、ヤコウガイ、サザエ、カキ、シャコ、テツレイシ、ヤクシマダカラ、アマオブネガイ、ニシキウズ、ギンタカハマ、オキナワヤマタニシ、ニシキアマオブネ、コウモンダカラ）	
野国貝塚群B地点	III	室(13.3)、条(2.3)、沈(0.3)、東(33.3)、ヤ(43.2)、野(0.7)	貝類（主：マガキガイ(75.6)、サラサバティ(6.4)、チョウセンサザエ(2.9)）、魚類（ブダイ科左前上顎骨〔1〕、不明尾椎骨〔3〕・腹椎骨〔1〕）	小田 1984、盛本 1984
	IV	沈(0.3)、東(14.4)、ヤ(67.0)、野(5.8)	貝類（主：マガキガイ(77.8)、サラサバティ(7.1)、オニノツノガイ(2.2)、ヤコウガイ(1.7)、シレナシジミ(1.1)）、魚類（サメ類椎骨〔3〕、ベラ科下咽頭骨〔1〕、タイ科チダイ右歯骨〔2〕、不明尾椎骨〔3〕・腹椎骨〔5〕）	
	V	東(12.3)、ヤ(49.0)、野(35.5)	貝類（主：マガキガイ(61.7)、サラサバティ(11.5)、ムラサキウズガイ(6.0)、キバウミニナ(2.7)、オニノツノガイ(2.5)、ヤコウガイ(1.9)、シレナシジミ(1.8)）、魚類（サメ類椎骨〔2〕・尾椎骨〔1〕・腹椎骨〔2〕、不明腹椎骨〔1〕）	
新城下原第二遺跡	a	南島爪形文土器(70.2)、無文の土器(29.8)	貝類〔5837個体〕（主：ヘラサギガイ(33.9)、クマノコガイ(22.2)、シレナシジミ(6.1)、ニセマガキ(5.8)、アマオブネガイ(4.5)、カンギク(4.3)、ニシキウズガイ(3.6)、…チョウセンサザエ(0.7)・蓋(0.9)、ヤコウガイ(0.3)）	金子・久貝 2006、島袋 2006、高宮 2006、㈱パリノ・サーヴェイ 2006
	b	南島爪形文土器(88.5)、無文の土器(11.5)	貝類〔5602個体〕（主：ヘラサギガイ(25.5)、クマノコガイ(20.8)、ニセマガキ(7.6)、シレナシジミ(7.4)、アマオブネガイ(4.6)、カンギク(4.2)、ニシキウズガイ(2.9)、イボウミニナ(2.5)、…チョウセンサザエ(0.5)・蓋(2.0)、ヤコウガイ蓋(0.1)）	
	c	無文の土器(100.0) 〔3〕	貝類〔7456個体〕（主：スダレハマグリ(11.9)、ヘラサギガイ(10.4)、イボウミニナ(3.2)、クマノコガイ(2.9)、リュウキュウザル(2.6)、ホウシュノタマ(2.5)、…チョウセンサザエ(0.8)・蓋(1.3)）	
	不明	南島爪形文土器〔11〕、無文の土器〔12〕	貝類〔7456個体〕（主：スダレハマグリ(11.9)、ヘラサギガイ(10.4)、イボウミニナ(3.2)、クマノコガイ(2.9)、リュウキュウザル(2.6)、ホウシュノタマ(2.5)、…チョウセンサザエ(0.8)・蓋(1.3)）	

() 内は層位・遺物種類（貝類・イノシシ）毎出土割合(%)、〔 〕内は数量を表す。

略語は次の通り。室：室川下層式土器、条：条痕文土器、沈：沈線文土器、東：東原式土器、ヤ：ヤブチ式土器、野：野国タイプチヂフチャーレ洞穴遺跡でもヤブチ式土器出土層準から多くの自然遺物が得られているが、同層準は貝塚時代後期の土器が主体を占めるため省略した。

野国貝塚群B地点出土のイノシシ骨は、下顎骨・肩甲骨・椎骨のみを記載した。() 内に示した値は、層位毎の下顎骨・肩甲骨・椎骨の総数（III層 222 点、IV層 1273 点、V層 164 点）における割合である。また、同遺跡出土樹木片の数量は、木製品の数量を除いた値である。

新城下原第二遺跡出土のイノシシ骨は、主なもののみを記載した。() 内に示した値は、IX層から得られたイノシシ骨の総計(2555点)において各部位が占める割合である。

また、同遺跡における貝類の()内には、層位別個体数における各種目の完形+殻頂部片（左右があるものは多い方の合計）が占める割合を表記した。種実の数量は高宮広土の分析を基にし、()内には、IX層から得られた植物遺体全体(978片/粒)において主な種実が占める割合を記載した。

形文土器包含層（IX層）では「河口に近い貝が増える一方で岩礁性のチョウセンサザエやヤコウガイが出でている」ことを挙げ、「前者が割れ方に規則性が見られ、後者は被熱の可能性が考えられる」ことから、野国貝塚群B地点における出土例を考慮に入れて、これらを「貝塚時代前I期の食料事情

を知る上の貴重な貝」と位置付けた。なお、野国貝塚群B地点と同様にシレナシジミが一定量得られているが、島袋は自然堆積の可能性を考えている。

魚類 野国貝塚群B地点では、Ⅲ層～V層までに、魚類の骨が計25点得られている。このうち、Ⅲ層から得られたブダイ科上顎骨とV層から得られた種目不明の腹椎骨は火を受けており、「火で焼いて食した可能性」が指摘されている（盛本 1984）。盛本は、「（野国貝塚群B地点における）貝塚の立地条件からみて動物性蛋白質の量の多くは海に求めたであろう」と推測するが、後述するようにイノシシ遺体が膨大な量に上るため、検出された魚類遺体の出土量は「漁法の確立を積極的に支持するものではない」と断っている。また、漁具として用いられた可能性のある遺物が1点も得られていないことからも、「漁法としての確立を示す印象は弱い」と述べている。新城下原第二遺跡では、魚類はさらに僅かしか得られていない（金子・久貝 2006）。

イノシシ 野国貝塚群B地点では、イノシシの骨が多量に出土している。各層位における出土状況は第9表の通りである。特にIV層では、イノシシの骨は他層序の検出状況と比べて広範囲に分布し、堆積も厚いという（盛本 1984）。これを20～30cm掘り下げると、イノシシの骨が集中して出土する箇所が確認されたことから、「あたかも骨塚の感を呈する」とも表現された^{*18}（岸本 1982）。盛本はこれらイノシシの出土状況を整理することによって、幼若・成獣や雌雄における捕獲数の割合や、捕獲時の量的・時期的な変遷についてまとめている（盛本 1984）。出土したイノシシの最小個体数は660体以上であり、幼若獣はその約2割を占めるという。これは捕獲し易い幼獣が狩猟の対象になったと考えられる（川島・村岡 1984）。また、川島由次・村岡誠は下顎骨における各部位を計測し、雄と雌とで性差があることを指摘している（川島・村岡 1984）。また、歯の大きさから当時のイノシシの体格を考察し、沖縄県内に生息する現生のイノシシよりも小形であることや、下顎骨の形状から当時のイノシシの咀嚼力が現生のイノシシに比べて劣っていたことを推定した。さらに、第一臼歯出現率は現生の沖縄島産のイノシシと異なり、奄美大島産の現生のイノシシに近似するという。報告者は、家畜化の可能性については今後の課題としているが、幼獣の飼育については否定的な見解を示している（川島・村岡 1984）。

骨の検出状況から当時の食性についても言及されている。野国貝塚群B地点で出土したイノシシの頭蓋には、30×40mm程度の穿孔が認められるという。穿孔の行い方や四肢骨の破損状況から、報告者は「野国貝塚人は初步的な骨髓食とたくみな大脑食（脳髄食）をした人たちではなかろうか」と想定した（川島・村岡 1984）。また、新城下原第二遺跡の南島爪形文土器包含層から得られたイノシシの四肢骨には傷跡が認められており、「解体痕などの可能性」が指摘されている（金子・久貝 2006）。久貝弥嗣は、この傷痕の分析を行った結果、「刃部を前後に往復させる切断痕」（Cut Mark）と「手斧、鉈のような道具による加撃痕」（Chop Mark）の2種を確認し、前者が大半を占めることを指摘した（久貝 2006b）。さらに、Cut Markを解体具の使用状況によって2通りに細分し、解体部の状況を考察している。そして、動物の解体には「ナイフ状の専用の石器もしくは貝器などが必要である」ことを述べて、実験事例によって解体具を推定することを今後の課題とした。

新城下原第二遺跡においてもイノシシの骨が多量に出土しており、野国貝塚群B地点の様相に類似する（金子・久貝 2006）。イノシシの獵獲は予測し難く、また危険を伴うため非効率的である。最も効率が良いと考えられる硬骨魚網を中心とした生業活動が窺えない理由に、先述したように盛本は漁法の未発達を示唆しているが、高宮広土はこれに加えて「その頃の珊瑚礁という環境が不安定であった可能性」を指摘している（高宮 2000）。高宮は、こうした環境的な制約から、南島爪形文土器文化期の人々は島に適応できなかったと推察した。

植物 野国貝塚群B地点V b～V c層は湿潤な粘土層であるため、植物遺体（樹木片）が若干得られている。前述したように、中には加工痕の残る資料も2点認められる（岸本・島袋 1984）。樹木片・木製品は計9点7樹種が得られている（小田 1984）。7樹種のうち4樹種は同定不能であったが、3樹種はクワ属・ウルシ属・イヌビワ属に属し、7樹種は全て広葉樹材であるという。クワ属やイヌビワ属は果実を食すことが可能であるため、県内の縄文時代相当期の遺跡からの検出例は少なくない。

新城下原第二遺跡の南島爪形文土器包含層から、多くの種実が回収された。しかし、この中には堅果類は含まれていなかったため、同遺跡が「生活と直接かかわりあいのなかった地点であった」可能性が挙げられている（高宮 2006）。また、遺物の出土状況を踏まえて遺跡周辺が「陸水域あるいは陸域のような環境となっていた」と考えられ、種実分析・花粉分析の結果から「当時の遺跡周辺が林縁に近かった」ことが指摘された（株）パリノ・サーヴェイ 2006）。

軽石 野国貝塚群B地点における南島爪形文土器包含層からは軽石が多量に検出されている。報告によると、「軽石は、琉球列島完新世堆積物である沖積層、砂丘砂層中にはいくつかの層準にわたって分布していることが明らかとなっており、完新世の諸地層の対比・編年を行う際の有力な鍵層の可能性がある」という（古川・加藤 1984）。そのため、IV層から検出された軽石の化学分析が行われ、軽石のタイプ分けが検討された。

4. 系譜について

i) 研究史

前述したように、渡具知東原遺跡におけるヤブチ・東原両型式の土器の発見によって、南島における土器の起源は縄文時代早期～草創期まで遡ることが期待され、その出自は九州に求められた。それは、この2つの型式の土器が、曾畠式土器が出土した層準より下層から主に出土していること、その型式学的特徴が福岡県門田遺跡や長崎県福井洞穴遺跡から出土した土器に類似することを根拠としている。しかし、喜子川遺跡の調査によって、実年代は縄文時代前期を遡るものではないことが確認されたため、その出自を改めて議論する必要が出てきている。そこでここでは、これまで報告された南島爪形文土器の位置付けがどのように理解されているのかを整理したい。

「爪形文系」土器の出土と位置付け ヤブチ式土器は渡具知東原遺跡の調査において、初めて「爪形文土器」の範疇で考えられた。「爪形文」とは、本来は工具あるいは真正爪による刺突文を指すため、国分直一はヤブチ式土器の指頭痕を文様として捉えた上で、「抑圧文^{*12}」と表現して、嘉徳I式土器などに施される爪形文と明確に区別している（国分 1966）。三島格の指摘によって、渡具知東原遺跡の調査報告では、ヤブチ式土器を「指頭押圧文土器」と表現し、「爪形文」の表現は東原式土器にのみ用いられたという（三島 1978）。そして、両型式の土器は「下層の土器」として報告された。しかしその一方で、報告者は、九州における出土例からヤブチ式土器が爪形文土器の範疇に含まれると考えており、両型式の土器を括して「爪形文系」と表現している。そして、「門田遺跡や上場遺跡との関連性は十分考えられる」とした（高宮・知念 1977）。そのため、渡具知東原遺跡におけるヤブチ式土器の出土によって、「多くの爪形文土器が発見されたことにより本遺跡の上限は縄文時代前期をはるかにさかのぼることとなった」と理解された（知念 1977）。つまり、ヤブチ式土器は、九州における縄文時代草創期の土器との関係が考慮され、「（その年代の上限は）縄文時代早期に比定し得る」と考えられたのである（高宮・知念 1977）。なお、放射性炭素測定年代は6670～6450BPの値が得られているが（第3表）、南島の「爪形文系」土器の出土層準が生活層ではないと理解されるため、この年代は「爪形文土器文化の時代とはなり得ない」と考えられた（高宮・知念 1977）。

「爪形文系」土器と九州の爪形文土器 南島の「爪形文系」土器を九州の爪形文土器と結び付けた当時の考察は、型式学的な特徴と層序関係の考慮から妥当であると思われる。そして、この考えは多くの研究者によって支持されており、南島の「爪形文系」土器は縄文時代草創期の爪形文土器群と同等に扱われた。土肥孝は、「(「爪形文系」土器を) 早・前期のある時期に比定しようとするならば、まず門田が草創期の爪形文土器ではないことを証明しなければならない」と述べている^{*19}（土肥 1982）。その上で、門田遺跡出土資料の爪形文が、山形県で出土している爪形文土器のそれと施文手法上共通すると主張し、「渡具知東原の爪形文土器を草創期でないとすることは、本州地域の爪形文土器も草創期でないとすることにつながる」とした。さらに、「渡具知東原の爪形文土器を草創期でないとするためには、さらに上層出土の曾畠式も沖縄地方型式であることを証明しなければならない」とも述べ、南島の「爪形文系」土器が曾畠式土器と同様に、九州からもたらされたものであることを加えた（土肥 1982）。また、河口貞徳は、爪形文土器あるいは「爪形文系」土器が九州以南に多く分布する状況などから、爪形文土器文化の起源を九州に求めている（河口・本田・瀬戸口 1983 a・b）。しかしその一方で、白石浩之によって、隆起線文土器に併施される始原的なハの字状爪形文が、九州から近畿地方においては殆ど認められないことが指摘されているため（白石 1984）、一概に爪形文土器の起源を九州に求めるることはできないのである。

土肥や河口は、南島の「爪形文系」土器群を九州の爪形文土器群と同等に捉えており、両者は祖型を等しくする同一系統の土器群と考えている。白石も、ヤブチ式土器が門田遺跡出土の爪形文土器と対比できるとしているが、九州における爪形文土器群は2系統あると指摘した。つまり、ヤブチ式土器・門田遺跡出土資料と、鹿児島県上場遺跡・長崎県泉福寺洞穴遺跡・福井洞穴遺跡出土資料などは出自の異なる別の土器群と考えたのである（白石 1984）。これは、指頭痕を基調とするか、爪形文を基調とするかの相違に着目したものと思われる。一般に、前者を「北部九州的な爪形文」、後者を「南部九州的な爪形文」と呼んでいるが、これが地域差であるとは言い切れない^{*20}。

喜子川遺跡調査の波紋 これまで南島の「爪形文系」土器群は、九州における縄文時代草創期の爪形文土器群に包括されて考えられた。しかし、前述したように、喜子川遺跡の調査によって、この土器群の実年代は縄文時代早期並行期以前に遡るものでないことが明らかとなったのである（田村・中山・金井 1989、西田 1989）。これにより、型式学的には縄文時代草創期の土器群に類似する一方で、6000年もの年代差が生じてしまった。そのため、南島の「爪形文系」土器群を「爪形文土器に類似した土器群」と捉えることで、縄文時代草創期の土器群とは系統の異なるものと考えて（麻生・白石 2000）、型式学的な特徴の類似を「他人の空似」とする説と（小林 1987）、従来通りその出自を九州に求める説に大きく分かれている。新東晃一は、前者の立場から、南島の「爪形文系」土器を「南島爪形文土器」と呼称して、九州以北における縄文時代草創期の爪形文土器と区別することを提起した（新東 1997）。後者は、南島爪形文土器文化の生活層が海中にあると考えられることから、現在までに得られている放射性炭素測定年代の分析値を疑問視するもので、南島爪形文土器の年代はさらに古くなることを想定している。

九州の爪形文土器と同系統説 高宮廣衛は、南島爪形文土器の編年的位置付けについて、放射性炭素測定年代や、喜子川遺跡における出土状況を考慮した上で、前述した理由から「早期的性格が濃厚」と考えた（高宮 1991）。そして、その出自について「沖縄内部で発現したとは考えにくい」とした上で、「先島地方からの北上あるいは中国大陸からの東シナ海を横断してのルートは考えられない」と述べて、その起源は九州に求める以外にないことを指摘した（高宮 1991）。しかし、その一方で、野国貝塚群B地点において、南島爪形文土器出土層準より下層から新種の土器（第3表）が検出されたことから、

南島爪形文土器がこの土器より古くなり得ないと考え、「この土器の発見によって爪形文土器の起源に関する私の前述の想定は苦しいものになる」とも述べている（高宮 1991）。

岸本義彦は、喜子川遺跡の堆積状況に疑問を呈している。岸本は、南島爪形文土器の包含層が二次堆積によるものである点、アカホヤ火山灰層がブロック状に点在する点を挙げて、「爪形文土器が時間的にアカホヤ火山灰より新しいという証左に乏しい」と述べている（岸本 1991）。これに対し、田村晃一は、南島爪形文土器の包含層とアカホヤ火山灰層の間に堆積する白色砂層は攪乱を受けていないことを挙げて、「このことは、この台地では白色砂層の堆積中も、その後もそれを攪乱するような営力が加えられたことはなく、層位が逆転するなどということが起こったことはないということを示している」と指摘した（田村・池田 1997）。

九州の爪形文土器と別系統説 田村は、喜子川遺跡の調査から、南島爪形文土器は九州の爪形文土器と別系統であると考えている。そして、門田遺跡の資料が明確に細石刃と伴って出土したわけではないことを挙げ、土肥が示した論理に対して「門田遺跡の爪形文土器が草創期ではないことを土器以外の事柄から証明することは不可能であり、また草創期の土器であることを土器以外の事柄から証明することも不可能」であることを指摘した。その上で、南島爪形文土器について、九州以北の爪形文土器と「土器文様の比較研究の上で再検討する必要がある」と述べている（田村・池田 1997）。また、岸本も南島爪形文土器と九州以北の爪形文土器の比較を行い、「（多くの研究者が）土器そのものについての型式学的な比較検討をほとんど行ってない」ことに苦言を呈している（岸本 1991）。そこで、筆者は南島爪形文土器を九州以北における縄文時代草創期の爪形文土器と型式学的に比較・検討を行い^{*21}、その相違点の抽出を試みた（伊藤 2006）。その結果、次のような違いが認められた。

①九州以北の爪形文土器には、文様を縦方向・斜方向・不規則に配すものが散見されるのに対して、東原式土器は常に横方向の施文に限られる。

→東原式土器における爪形文の傾きが、必ず列ごとに変わる傾向は、土器成形時の指頭痕を特徴とするヤブチ式土器を祖型とすることに因るものではないか。

②指頭痕を基調とする土器と爪形文を基調とする土器の分布が、九州を境にして分かれること。

→本州では、指頭痕のみが施される資料は殆ど存在しないので、ヤブチ式土器が本州の爪形文土器の影響を受けているとは考えられない。

→本州の爪形文土器の中には、東原式土器と似るものがあるが、ヤブチ式土器が本州の爪形文土器の影響を受けているとは考えられないため、東原式土器も本州の爪形文土器の影響を受けているとは考えられない。

筆者は以上のような根拠によって、南島爪形文土器は型式学的に本州の爪形文土器と別系統と考えた。九州の爪形文土器についても、いわゆる南部九州的な爪形文土器とは明らかに系統が異なると考えられる。また、北部九州的な爪形文土器においても、指頭痕の形状の違いからその施し方が異なる可能性を指摘し、門田遺跡出土資料を除いて系統が異なると考えた^{*22}（伊藤 2006）。しかし、冒頭で述べたように、福井洞穴遺跡出土資料を実見した結果、ヤブチ式土器に酷似する資料が 1 点認められたため、前回示した結論を再考したい。

福井洞穴遺跡出土資料 ヤブチ式土器に酷似するものは、東北大学考古学研究室所蔵資料の 1 点である^{*23}。同資料は、5.0 × 3.5 cm ほどの体部片で、外器面にヤブチ式土器に特徴的な D 字状の指頭痕が整然と施されるものである。指頭痕列は 4 段確認でき、器面向かって右→左に一定の間隔で施されている。恐らくヤブチ式土器と似た方法で指頭痕が施されたものと思われる。ただし、ヤブチ式土器に酷似するものはこの 1 点のみである。福井洞穴遺跡出土の爪形文土器は、指頭による押圧痕を基調と

するものが多いが、これ以外の資料は熊本県河陽 F 遺跡出土資料のように、ヤブチ式土器のような独特な指頭痕を有していない。また、真正爪によると思われる刺突文をまばらに施すものも多く、南島爪形文土器には見られない傾向を呈する。さらに口唇部に刻目を施すものも多い。つまり、福井洞穴遺跡出土の爪形文土器は、この 1 点を除けば縄文時代草創期における爪形文土器の様相に当てはまるのである。そのため、これらの資料は南島爪形文土器と異なる型式の土器群であると考えられる。しかし、その一方で福井洞穴遺跡出土のこれらの爪形文土器の特徴は、門田遺跡出土の爪形文土器にみられる特徴でもある。

門田遺跡の資料はヤブチ式土器と酷似するが、口唇に刻目を施す点などで型式学的に同一とは言えないとの指摘がある（田村・池田 1997、水ノ江 2005）。筆者は前回、門田遺跡出土の爪形文土器がヤブチ式土器に酷似することや、明確に細石刃を伴って出土しているわけではないことを理由に、この土器を縄文時代草創期のものではなくて、南島爪形文土器と同系統のものと結論付けた（伊藤 2006）。しかし、福井洞穴遺跡の資料を実見すると、これらが門田遺跡の資料と別系統のものとは言い難い。では、この両者が南島爪形文土器の祖型に当たるだろうか。

本州では東原式土器に近似する土器が散見されるのに対して、九州では東原式土器に近似する土器は出土していない。これは一見、九州に南島爪形文土器の起源を求めることができそうな様相である。しかし、九州ではヤブチ式土器に近似する土器があることは言え、その出土例は門田遺跡と福井洞穴遺跡の 2 遺跡から 3 例の出土に止まっており、南島の出土例に遠く及ばない。このことから南島爪形文土器の起源を九州の縄文時代草創期の爪形文土器に求めるることはできないと考えられる。そのため、前回出した結論の非を改め、門田遺跡の資料を南島爪形文土器と別系統の土器と理解し、福井洞穴遺跡出土の爪形文土器と同様に縄文時代草創期の爪形文土器群に属するものと考える。

ii) 縄文時代草創期における爪形文土器研究史

前節において、南島爪形文土器が門田遺跡出土の爪形文土器と別系統の土器群であると考えた。しかし、門田遺跡出土資料や福井洞穴遺跡出土資料のような、ヤブチ式土器に類似した土器については、型式学的な特徴で区別することは難しい。そこで、ここでは南島爪形文土器との関係がしばしば取沙汰される縄文時代草創期における爪形文土器の研究史を整理することによって、両土器群の根本的な相違点を探りたい。

爪形文土器は、長野県諏訪湖湖底曾根遺跡で採集された土器の中から 1910 年に坪井正五郎によって初めて報告された^{*24}。坪井は、採集した土器の主体を占める薄手の刺突文土器を、「弧線傾斜並列」文様のものと「短線傾斜並列」文様のものに大別しているが、これらは刺突文の形状が曲線（弧線）であるか直線（短線）であるかの別を除いて、大きく異なるものではないことから、これらを「爪形」と総称したのである（坪井 1910a）。そして、「薄手爪形模様の土器の澤山有る事」が曾根遺跡の特徴であると指摘し、その独自性を訴えている（坪井 1910b）。しかし、こうした爪形文が施される資料は類例が報告されず、曾根遺跡への関心は個々の採集遺物よりもむしろその立地に注がれることになる。坪井・鳥居龍蔵が主張する水上居住説と、地質学的な観点から主張された湖底水没説などをめぐる、いわゆる「曾根論争」である。このような中で、八幡一郎は「遺跡成因に就いての興味と共に、遺跡自体の示す文化相に就いて非常に注意している」と述べ、曾根遺跡採集遺物を再検討し、同遺跡における遺物の年代的な位置付けについて初めて考察したのである（八幡 1936）。八幡は、曾根遺跡で表採される土器には、僅かに橢円押型文土器が混在することを指摘し、これと爪形文土器とは、器壁が薄いことや胎土に含まれる混入物が緻密であることなどが共通すると説いている。そして、八幡が以

前考察した縄文時代前期における爪形文土器の分類案に当てはめて（八幡 1935）、曾根遺跡のものは最も古いタイプに属すると考えた（八幡 1936）。

その後の研究により、曾根遺跡の立地については水没説が支持されることになるが（藤森 1960）、この頃になると爪形文土器は日本各地の数遺跡で出土しており、最古の土器群に位置付けられる可能性が考えられ始めていた。その契機となったのが 1957 年に行われた岐阜県^{はなこ}梶の湖遺跡の調査である。この調査によって、爪形文が施された土器片が、表裏縄文土器などが出土した層準よりも下層から主体的に検出されたのである。そのため、報告者は「(爪形文土器は) 中部地方早期縄文文化のうちでも最も古く、恐らく無土器文化終末に近い編年的位置にあるものと推定される」と考察している（原・紅村 1958）。また、1959 年には、群馬県西鹿田中島遺跡の調査において、それまで最古の土器群と考えられていた縄文時代早期の撚糸文土器群（井草式土器・夏島系土器）より下層から、爪形文土器が検出されたことが報告された（相澤 1959）。そして、これと時期を等しくして、新潟県小瀬ヶ沢洞穴遺跡でも、撚糸文土器群より古式の土器が数型式検出されている（中村 1960）。さらに 1960 年には、福井洞穴遺跡において、爪形文土器が押型文土器包含層の下層上位から主体的に検出され、同層準下位とその下層からは、主に隆起線文土器が検出された（鎌木・芹沢 1965）。これによって、当該期における九州の編年は、隆起線文→爪形文→押型文に確定したのである。その後、泉福寺洞穴遺跡の調査によって、豆粒文→隆起線文→爪形文→押圧文→条痕文の層位的な出土が認められている（麻生 1973）。

東日本における爪形文土器は、撚糸文土器より古式に位置付けられていたが、その後の調査で押圧縄文土器との関係が取り沙汰されることになる。従来、爪形文土器は独立した土器群として認識させていたが、小林達雄・栗原文蔵は、埼玉県西谷遺跡において採集された土器を考察し、爪形文土器と同じ押圧施文である押圧縄文・回転縄文と同一段階の時期と捉え、その古式に位置付けた^{*25}（栗原・小林 1961）。この考察は、その後の調査で確証を得ている。1961 年、山形県一ノ沢岩陰遺跡の調査では、押圧縄文土器が主体的に包含された層中（微隆起線文土器出土層準より上層）から、爪形文土器が出土したのである。また、押圧縄文土器の中には爪形文状に施文された資料が含まれるという（加藤・佐々木 1962）。鈴木保彦は、爪形文を「いわば押圧施文の祖源的なかたちとして認識することができ」と述べているが（鈴木 1969）、これは一ノ沢岩陰遺跡出土資料をその根拠の 1 つとしているのではないだろうか。さらに、山形県日向洞穴遺跡では、押圧縄文土器に爪形文が併施される資料が確認されている（加藤・佐々木 1962）。そして、加藤稔は、山形県尼子岩陰遺跡や日向洞穴遺跡・一ノ沢岩陰遺跡の調査成果から、隆起線文→爪形文→押圧縄文の編年案を示した^{*26}（加藤 1961）。山形県火箱岩洞穴遺跡などでもこの編年と同様の様相を示している（柏倉・加藤 1963・1967）。一方、一ノ沢岩陰遺跡では、初めて隆起線文系土器に隆起線文以外の文様が施された土器が報告されている。微隆起線文土器にいわゆる“ハ”の字状爪形文が併施された資料が出土したのである（加藤・佐々木 1962）。日向洞穴遺跡でも同様の資料が検出されていることから（加藤 1967）、小林達雄は、微隆起線文→微隆起線文+“ハ”の字状爪形文→爪形文の編年を構築し、「爪形文の最盛期には爪形文以外の文様を含まない」と考えた（小林 1962）。

山内清男は、小瀬ヶ沢洞穴遺跡の調査結果などから、曾根遺跡などで報告された爪形文土器を縄文時代早期の中でも早い段階に位置付けていたが（山内 1960）、一ノ沢岩陰遺跡などの調査を受けて該期を 2 分し、その前半を縄文時代「草創期」と呼称した（山内・佐藤 1962）。縄文時代草創期の土器編年の大枠は、主に 60 年代の調査によって確立されている。そして、爪形文土器は、福井洞穴遺跡や一ノ沢岩陰遺跡の調査などによって、隆起線文土器群からの変遷が層位的に確かめられたが、これは

型式学的に自然な変遷とは言い難い。そのため、「微隆起線文土器と爪形文土器の型式移行ないし変化の過程を明らかにすること」が当面の問題の1つとされたのである（加藤・佐々木 1962）。この問題に対して佐藤達夫は、小瀬ヶ沢洞穴遺跡の資料から、窓文→櫛目文（範文）→爪形文→隆起線文の変遷を提案している（佐藤 1971）。佐藤は、福井洞穴遺跡の層位学的考察に疑問を呈し、型式学的な見地からより自然な編年を構築したのである。この考えは、しばしば層序無視との批判を受けているが（小林 1974、鈴木 1977 など）、佐藤の編年案を境に、型式学的な見地からより細かい分類案や編年案が試論されることになるのである（佐々木 1975、白石 1976、鈴木 1977、栗島 1985、村上 2003、南 2004 など）。また、これと並行して施文技術についての論述も成されている。佐々木洋治は、爪形文土器の器形や施文技法について論述し、これを4種に分類した（佐々木 1975）。そして、従来通り爪形文の施文方法を工具または真正爪による刺突と述べている。また、西川博孝は、施文原体や施文方法について、より詳細な検証を行っている（西川 2004）。一方、片岡肇は、西日本に分布する神宮寺式土器の中に縄文時代草創期の爪形文に近似した文様があることを挙げて、「爪形文そのものなかに、すでに円棒の押圧ないし半回転という手法によって施文されたものがあった」との考えを示した（片岡 1972）。

佐藤の論考は、爪形文土器の系統問題についても考察の一助となったのではないだろうか。佐藤は、小瀬ヶ沢洞穴遺跡出土の窓文土器と櫛目文土器の出自を沿海州南端部から咸鏡北道を含む特定の地域に求めている。これについて鈴木は、山内清男の論考を引用して「変化する要因が無限に近い土器によって、遠くはなれた大陸との関係を把握しようすることは不可能に近いと思われる」とその想定を疑問視しており、縄文土器の起源を九州に求めている（鈴木 1977）。また、河口は、成形による指頭痕を有する爪形文土器あるいは「爪形文系」土器が九州以南に多い一方で、爪形文が押圧縄文と併施される土器が東日本を中心に分布する傾向を指摘し、「爪形文土器文化は九州地方に発生し本州へ伝播し、東日本において終局を迎えたものと考える」とした（河口・本田・瀬戸口 1983 a・b）。しかし、九州から東北地方へは陸路を伝うため、ストレートに文化が伝播することに対して疑問の意見も挙げられている（川崎・金子・鴨志田 1982）。また、前述したように、ハの字状爪形文が併施される隆起線文土器が、九州から近畿地方においては殆ど認められないのに対して、東海地方以東では顕著にみられることが指摘されている。そして、この傾向が押圧縄文の分布状況と対応するという（白石 1984）。加えて土肥は、爪形文土器と相前後する土器型式の分布によって、近畿以西では隆起線文土器→爪形文土器、近畿以東では隆起線文→押圧縄文の2変遷が近畿を境として異なる点を指摘している（土肥 1982）。このうち、近畿以東における爪形文土器は、隆線文→押圧縄文のある時期にオーバーラップするように伝播するとしており、白石の指摘と一致する。

このように爪形文土器に対する議論は積極的に行われており、細かい編年が試案されている。しかし、出土資料は極めて少なく、大形の破片も少ないので、その全形は推定復元がされるのみである^{*27}。そのため、器形については断片的な考察に限られている。

iii) 小考

縄文土器の九州起源説は、1980年代前半頃まで多くの研究者によって唱えられた。しかし、その後の調査によって、隆線文系土器群よりも古くなる可能性が考えられる資料が関東地方以東の遺跡から報告されている^{*28}（鈴木 1982、相田・小池 1986）。そのため、縄文土器が九州で発生し、東へ拡がったとは考え難い（小林 1987）。爪形文土器の系譜について、その起源を一概に九州に求めることができないことも前節で述べた通りである。

前述したように、ヤブチ式近似土器は本州ではみられない。その一方で、本州では東原式近似土器が認められる。対称的に、九州では東原式近似土器がみられないが、ヤブチ式近似土器は散見できる。このことから、ヤブチ式土器が九州で発生し、東原式土器の段階で本州に拡がったと考えた場合、九州において東原式土器がみられないことに疑問が生じる。また、先に述べたように、九州におけるヤブチ式近似土器は出土例が僅少であることに加えて、本州における東原式土器近似資料もまた僅少である。このように、南島爪形文土器の起源を九州に求めた場合、齟齬が生じるのである。

以上のこととは、芹沢長介が主張するように、土器の起源を一地域に求めることができないことを示しているのではないだろうか²⁹（芹沢 1960、1967）。爪形文（系）土器は、日本列島にいくつかの系統があり、南島爪形文土器は本土に及ばない系統の土器群だったとは考えられないだろうか。

5. 総括

現在、南島爪形文土器は沖縄諸島・奄美諸島で 16 遺跡からの出土ないし表採が報告されている³⁰（第 1 表・第 1 図）。これらは放射性炭素測定年代の値や（第 3 表）、喜子川遺跡の調査成果から縄文時代早期以前に遡るものではなく、縄文時代前期の土器群であると考えられる。また、南島爪形文土器が成形痕あるいは調整痕を基調とする点において、縄文時代草創期の爪形文土器と区別することができるため、型式学的にもこの土器群とは系統の異なるものであると考えられる。ただし、門田遺跡や福井洞穴遺跡出土資料にみられるような、ヤブチ式近似資料が南島爪形文土器と型式学的に異なる土器であるとは断言できない。これらは、押圧痕の特徴などから、ヤブチ式土器と大きく変わらない方法で成形された可能性が考えられるからである。しかし、九州におけるヤブチ式近似土器が、口唇部の施文において南島爪形文土器の特徴と異なることや、その出土例が極めて少ないと、本土における東原式近似土器の分布状況、そして、九州・本州と沖縄・奄美との爪形文（系）土器の系統問題や研究を考慮すると、南島爪形文土器の出自を九州に求めるることは難しい。門田遺跡出土資料は從来報告されているように、縄文時代草創期と考えることが妥当であり、福井洞穴遺跡出土爪形文土器と系統を等しくすると思われる。そのため、現在のところ日本列島における南島爪形文土器の分布の北限は奄美大島であると考えられるのである。それでは、南島爪形文土器の出自はどこに求めるべきか。

南島爪形文土器の出自について、九州説に次いで從来多く考えられているのが朝鮮半島説である。朝鮮半島南部の東三洞貝塚では、曾畠式土器が出土した層準よりも下層から、指頭による押圧によって文様を表出したと考えられる土器が出土している（坂田 1978）。これは、一般に「指頭文土器」と呼称される。指頭文土器は、年代的にも出土状況においても南島爪形文土器に近似しており興味深い資料である。しかし、このような資料は朝鮮半島において数遺跡で確認されているに過ぎず³¹、南島における出土例に比べて少ないと、南島爪形文土器の出自を朝鮮半島に求めるのは時期尚早と考えられる（伊藤 2006）。また、新岩里遺跡出土の指頭文土器は、図面を見る限り南島爪形文土器に近似するとは言い難い。押圧痕の形状などについては、実見していないため、南島爪形文土器との相違を判断することはできないが、器形は明らかに異なるのである。新岩里遺跡で出土した指頭文土器の口縁部は、直状かやや内傾を呈し、丸味を帯びて底部（下方）へ移行する³²（国立中央博物館 1989）。完形資料は報告されていないが、比較的大形破片の実測図から判断すると、サラダボウル状の器形を呈すように思われる。

南島爪形文土器の起源を九州や朝鮮半島に求めることができない場合、南方に求める以外にない。しかし、筆者は、中国華南地方においても南島における出土量を凌ぐ指頭文土器あるいは南島爪形文近似土器が出土したとの報告を知らない。一方で、ベトナムやタイでは南島爪形文土器に類似する土

器が多数出土しているとのことだが^{*33}、東南アジアに南島爪形文土器の起源を求める場合、台湾や先島諸島において南島爪形文土器（特にヤブチ式土器）が出土しないことを説明しなければならない^{*34}。つまり、現在のところ、南島爪形文土器の出自は北にも南にも求めることができないのである。

土器起源についての研究史を紐解くと、かつては縄文土器の出自を大陸に求めることが合理的と考えられていた。山内清男が「矢柄研磨器は縄紋式の最も古い時期から出現した。日本の矢柄研磨器は大陸側では前2500年を最古として若干の幅を考えた年代の中に発見される。（中略）縄紋式の上限はこれに伴う矢柄研磨器を通じて、前2500年が止りということになる。」と考えたように（山内1969）、日本列島のような小さな島で土器文化が発生したとは考えられず、大陸からの影響があったと考えられたのである。ところが、放射性炭素測定年代の値によって、縄文土器が世界最古級の土器であることが示されると、縄文土器の起源を国内に求める考えも生まれるに至った。また、日本と全く係わり合いがないと思われる海外の初現的な土器の出土例から、土器が多元的に発生したとする考え方も示された（芹沢1960、1967）。土器は必ずしも他文化の流入に影響されたことで発生するとは限らないのである。このような考えに基づくと、現状では南島爪形文土器の出自は、南島自体を考えることがより合理的であると思われる。今後は、この土器群が南島で独自に発生した可能性を考慮すべきではないだろうか。

おわりに

高宮廣衛が指摘するように、一般的に南島爪形文土器は「沖縄内部で発現したとは考えにくい」と思われているのではないだろうか。筆者も先入観から同様に考えていたが、南島で自生したことでも1つの可能性として考えられるのではないかと思う。その場合、沖縄諸島と奄美諸島における出土資料の型式学的な相違点・共通点の比較が重要になると考えられる。そのため、両者のより詳細な検討が改めて求められると思われる。また、南島爪形文土器と年代的に前後する型式の土器（特に南島爪形文土器出土層準よりも下層の土器）との間に自然な変遷が窺えるかどうかも重要である。これらについては、稿を改めて考察したいと考えている。加えて、土器の出自を考察する場合、型式比較だけでは限界がある。現在までに南島爪形文土器における自然科学分析の成果は報告されていないため、分析例の増加を待ちたい。

本稿では、管見の限り南島爪形文土器についての問題点や争点を整理したつもりだが、論じ足りない点や欠落した点も多々あると思われる。特に遺跡の立地については十分に触れることができなかつた。至らない点について、研究諸学兄のご批判ご叱声を頂ければ幸いである。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、多くの方々からご教示やご助成を賜りました。末尾になりますが、記してお礼とさせて頂きます。ありがとうございました。

須藤 隆・阿子島香・菅野智則（東北大学大学院文学研究科考古学研究室）、柳田俊雄（東北大学総合学術博物館）、山崎純男（福岡市教育委員会）、島津義昭（熊本県立美術館）、兒玉眞一・馬田弘穂・小田和利・加藤和歳（九州歴史資料館）、宮地聰一郎（九州国立博物館）、中山清美・松本信光（奄美市歴史民俗資料館）、先田光演・伊地知裕仁（和泊町歴史民俗資料館）安里嗣淳（元沖縄県立埋蔵文化財センター所長）、盛本 勲（沖縄県庁文化課）、岸本義彦・片桐千亜紀（沖縄県立埋蔵文化財センター）、仲宗根求（読谷村立歴史民俗資料館）、比嘉賀盛（沖縄市文化財調査審議会）、比嘉清和（沖縄市立郷土博物館）、岸本 林（名護市文化財保存委員会）、久貝弥嗣（豊見城市教育委員会） 順不同、敬称略

【転載資料】

第2図1 実測図：伊藤 2006

拓 本：『野国 - 野国貝塚群B地点発掘調査報告 -』沖縄県教育委員会

第2図2 : 伊藤 2007

第2図3 : 『野国 - 野国貝塚群B地点発掘調査報告 -』沖縄県教育委員会

図版2-1 : 1981年2月20日『沖縄タイムス』沖縄タイムス社（新聞記事）

図版2-2 : 2003年11月5日『沖縄タイムス』沖縄タイムス社（新聞記事）

図版2-3 : 2005年10月27日『沖縄タイムス』沖縄タイムス社（新聞記事）

【註釈】

※1 「南島爪形文土器」は指頭痕を基調とするヤブチ式土器を含めた、いわゆる爪形文系土器の総称である。後述するように、ヤブチ式土器は厳密には爪形文土器の定義に当てはまるものではない。そのため、ヤブチ式土器に「南島爪形文土器」の名称を与えることは矛盾するように思える。しかし、ヤブチ式土器に類似する押圧痕が配された福岡県門田遺跡出土資料は、既に爪形文土器として広く認識されている。そのため、筆者も高宮廣衛と同様に、「沖縄の爪形文土器が本土のものと異なる点があるにせよ、大枠では爪形文土器の範疇におさまる」と考えたい（高宮 1991）。「南島爪形文土器」の名称は、ヤブチ式土器の本質を表していないが、以上のような理由から、本稿では便宜上、この名称を用いた。

※2 当時の報告では「ヤーヤ」と表記されているが、本稿では中山清美に倣って「イヤンヤ」（中山 1992）の名称を用いる。

※3 ヤブチ式土器が縄文時代後期に位置付けられた根拠には、同資料が土浜イヤンヤ遺跡では「宇宿上層式と下層式との中間に位置する土器ではあるまいかと推定」された資料と共に伴して出土したこと（永井・三島 1964）、藪地洞穴遺跡では縄文時代後期相当と考えられた上層の遺物包含層（国分 1968）より、大きく2層（厚さ約35～55cm）の間層を挟んだ下層から出土しているものの（国分・三島 1965）、当時の琉球列島では縄文時代後期より古い土器が認められなかったことなどが考えられる。型式設定者の1人である三島は、後に「当時最古の宇宿下層（縄文後期）よりも古いとは、想像もしなかった」と述べている（三島 1978）。

※4 第1層は、表層を除いた層序で、「淡茶褐色の軟質の粘土混じりの層」との所見が記されている。また、第2層は、「岩盤直上の淡黒褐色の粘土層で、第1層に比べて硬い」という。報告者は、「層序の識別は困難」であったと述べており（永井・三島 1964）、この2つの層序は明確に分けることはできなかったと思われる。さらに、ヤブチ式土器が宇宿上層式系（？）の土器と共に伴していることなどから、この2枚の遺物包含層はプライマリーな層ではなかったと考えられる。

※5 土浜イヤンヤ洞穴遺跡のヤブチ式土器は、三島格によって1992年に奄美市歴史民俗資料館（旧笠利町歴史民俗資料館）へ寄贈され、中山清美によって再度報告された（中山 1992）。これにより、山形口縁と報告された資料（永井・三島 1964、国分・三島 1965）が胴部片であることが確認されている。

※6 実際には「渡具知東原式」と型式設定されているが（高宮・知念 1977）、一般に「渡具知」を省略して呼称されるので、本稿でも「東原式」の名称を用いる。

- ※ 7 中甫洞穴遺跡の資料は、概ね南島爪形文土器の範疇で捉えられることが多いが、同資料を実見した岸本義彦は、「文様や胎土等の特徴は野国貝塚、渡具知東原遺跡のものとは異なっている」と述べている（岸本 1983）。筆者も同資料を実見し、岸本と同様の印象を持った。河陽 F 遺跡出土資料に類似すると思われる。ただし、河口貞徳が指摘するように、爪痕は指頭痕とは別に二次的に施されるが、これらは粘土紐の接合部に沿って付されるため、調整痕と考えられる。調整痕を配す点で、南島爪形文土器に類似するが、河口は、後に中甫洞穴遺跡の爪形文土器を縄文時代草創期相当に位置付け、南島爪形文土器と区別したため（河口 1998）、本稿では同資料を南島爪形文土器から除いた。なお、同資料の詳細な所見は稿を改めて報告する。
- ※ 8 アカホヤ火山灰層は、新東晃一によって南九州の縄文文化における鍵層になることが指摘されている（新東 1978）。南九州では、アカホヤ火山灰層より上層から出土する土器型式に、轟式土器・曾畠式土器などが挙げられ、下層から出土する土器型式（群）には、塞ノ神式土器・平桟式土器・押型文土器・貝殻文円筒土器などが挙げられるため、縄文時代の早期と前期を2分していると言える。新東は、アカホヤ火山灰の絶対年代について、およそ 6000 年 BP ~ 6500 年 BP と推定している（新東 1980）。
- ※ 9 渡具知東原遺跡では、曾畠式土器は主に磨製石斧を伴うが、南島爪形文土器は同石斧を共伴しない（高宮・知念 1977）。同遺跡において、曾畠式土器に伴う石斧の 57.9% が磨製であり、南島爪形文土器に伴う石斧 3 点のうち、2 点は打製、1 点は局部磨製である（第 7 表）。
- ※ 10 渡具知東原遺跡出土の東原式土器は、「爪形文 + 無文帶」が分類されているが、中には「無文帶」に D 字状の指頭痕が確認できるものもある（伊藤 2007）。指頭痕が不明瞭なために「無文帶」として観察された可能性があるので、本稿では取り上げなかった。
- ※ 11 報告書の記述をまとめた第 4 表を参考にした場合である。奄美諸島の資料を実見した考察は、稿を改めて報告する。
- ※ 12 「押圧文」の誤植か。
- ※ 13 私見では、野国貝塚 B 地点における II の類は、逆 D 字状爪形文に弓状の爪形文が併施されると思われる。
- ※ 14 比嘉賀盛が製作したヤブチ式土器のレプリカは、沖縄県立埋蔵文化財センターなどに展示されている。
- ※ 15 筆者の観察による。
- ※ 16 『野国』第 72 図 4 の資料。この資料は小片であり、2 段目以降の押圧痕は破損していて明瞭ではない。
- ※ 17 「石斧」の項に表記した記号は、野国貝塚群 B 地点の調査報告における分類（第 6 表）によるもの（岸本・島袋 1984）、他の遺跡から出土した資料に関しても、分かる範囲でこの分類に当てはめた。また、土浜イヤンヤ洞穴遺跡・宇宿高又遺跡・面縄第一貝塚・城間古墓群 A 地区 9 号墓でも、南島爪形文土器と石器などが共伴しているが省略した。
- ※ 18 イノシシの骨が集中する箇所は 2 箇所確認されており、第 1 ブロック・第 2 ブロックと呼ばれる。これらはその検出状況から、「遺構などの人工的なものとしての可能性を支持する根拠は弱い」と判断されており、第 1 ブロックにおけるイノシシ骨は緩傾斜をなす斜面地に、第 2 ブロックでは砂丘地の凹地にそれぞれ廃棄されて堆積したものと理解されている（盛本 1984）。
- ※ 19 土肥は、「少なくとも現時点では」と断った上で、南島爪形文土器を縄文時代草創期並行に位置付けている（土肥 1982）。
- ※ 20 これらの表現は曖昧であるため、具体的にそれぞれがどの遺跡から出土した資料を指すかは、研究者によって若干異なるようである。

第10表 本土爪形文との比較を目的とした分類試案

爪形文の分類		II 類土器における細分記号
I (調整)	F ₁	縦長の指頭痕が残るもの。
	F ₂	指頭痕のみ、または指頭痕に一次的に爪痕が残されたもの。
	a	横方向へ連続施文されたもの。
	b	縦方向へ連続施文されたもの。
	c	斜方向へ連続施文されたもの。
	d	不規則に施文されたもの。
II (文様)		補足記号
		A・B AとBの複合施文。
		A／B AまたはBの施文。

- ※ 21 「型式比較による南島爪形文土器の位置付けについて」では、南島爪形文土器を本土の爪形文土器と比較するため、表1に分類概念を示したが、I類の範囲が間違って示されていることを校正で見落としていた。正しくは本稿第10表の通りである（破線部）。
- ※ 22 詳細な考察は、稿を改めたい。
- ※ 23 横浜市歴史博物館・~~財~~横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編集による『縄文時代草創期資料集』p69掲載、図版番号94-28の資料がそれにあたる。ただし、この写真は天地が逆であると思われる。
- ※ 24 坪井正五郎によって、曾根遺跡で採集された薄手の土器が紹介されたのは1909年である。当時は施された文様を「爪形」とは表現せず、「短い斜めの並行線」と述べている（坪井1909）。
- ※ 25 山内清男の教示であるという（山内1969）。
- ※ 26 ただし、爪形文土器と押圧縄文土器は、同一層準から出土する例が多い。
- ※ 27 縄文時代草創期における爪形文土器には全形が窺える資料がなく、復元された資料はいずれかの部位を欠くものである。門田遺跡出土の爪形文土器も同様であり、口縁部片と胴部片を繋ぐ頸部片は確認されていない。そのため、サラダボウル状に復元されたことに対する疑問の意見が多い。爪形文土器の復元には、門田遺跡出土資料が参考にされることが多いため、復元された資料の多くはサラダボウル状を呈する。しかし、前述の理由から、これらがサラダボウル状を呈するものか、それ以外の器形を呈するものか明確ではない。
- ※ 28 鈴木保彦は、茨城県後野遺跡や青森県大平山元I遺跡出土の無文土器について、共伴する石器組成から隆起線文系土器の直前に位置する可能性を指摘している（鈴木1982）。特に、後野遺跡の無文土器はローム層最上面の黄褐色パミス層から出土しているという。また、神奈川県上野遺跡第一地点では、隆起線文土器出土層準より下層から、24点の無文土器が出土している（相田・小池1986）。
- ※ 29 戸沢は、放射性炭素測定年代の値から縄文土器が日本で発生したと考えたとしても、「世界の土器がすべて日本から外へ伝播していったと考えるのは、まちがいであろう。なぜなら、土器の発明は、世界各地において、別々におこなわれる可能性があるからである」と述べている（芹沢1960）。
- ※ 30 奄美市（旧笠利町）万屋下山田遺跡でも南島爪形文土器片数点が表採されているが、その後（1984年）行われた発掘調査では出土していない（中山1991）。
- ※ 31 山崎純男氏・島津義昭氏から、朝鮮半島では発掘調査の数自体が少ないとのご教示を得た。
- ※ 32 『新岩里Ⅱ』に掲載された指頭文土器の実測図を見た筆者の私見である。報告書は韓文であるため、報告者の所見を読むことはできなかった。

※33 2005年1月22日に名護市で行われた講演「沖縄の石器について」の中で、小田静夫氏は、南島爪形文土器の系統問題についても触れ、ベトナムやタイで南島爪形文土器に類似する土器が出土している旨を述べている。

※34 片桐千亜紀氏の指針による。

【引用・参考文献】

- 相澤忠洋 1959 「赤城山麓に於ける縄文早期文化と西鹿田遺跡発掘調査の意義」『古代文化』第3巻第12号 (財)古代學協會
- 相田 薫・小池 聰 1986 「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』(大和市文化財調査報告書第21集) 大和市教育委員会
- 安里 進 1991 「沖縄歴史研究の現状と課題」『歴史評論』校倉書房
- 麻生 優 1973 「泉福寺洞穴の第四次調査」『月刊考古学ジャーナル』No.88 (株)ニュー・サイエンス社
- 麻生 優・白石浩之 2000 「縄文時代草創期」『縄文土器の知識』(基礎の考古学 - 改訂新版 -) I - 草創・早・前期 - 東京美術
- 安部克子 1978 「まとめ」『高又遺跡』(研究室活動報告3) 熊本大学法文学部考古学研究室
- 伊藤 圭 印刷中「指頭押圧されたヤブチ式土器」『与那城町海の文化資料館 紀要』創刊号 与那城町海の文化資料館
- 伊藤 圭 2006 「型式比較による南島爪形文土器の位置付けについて」『沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 伊藤 圭 2007 「沖縄県における南島爪形文土器以前の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』(第17回九州縄文研究会福岡大会) 九州縄文研究会
- 丑野 毅 1997 「野国貝塚出土の爪形紋土器」『史料編集室紀要』第22号 沖縄県教育委員会
- 牛ノ浜修・堂込秀人 1983 「第1貝塚」『面縄第1・第2貝塚 - 昭和57年度発掘調査概報 - 』(伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)) 伊仙町教育委員会
- 岡本東三 1982 「縄文時代I (早期・前期)」『日本の美術2』No.189 至文堂
- 小田一幸 1984 「野国貝塚群B地点から出土した木材片の樹種について」『野国-野国貝塚群B地点発掘調査報告-』(沖縄県文化財調査報告書第57集) 沖縄県教育委員会
- 柏倉亮吉・加藤 稔 1963 「山形県高畠町火箱岩洞穴の概要」『洞穴遺跡調査会会報』7 洞穴遺跡調査会
- 柏倉亮吉・加藤 稔 1967 「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』(株)平凡社
- 片岡 肇 1972 「神宮寺式土器の再検討 - 特にその施文原体を中心として - 」『月刊考古学ジャーナル』No.72 (株)ニュー・サイエンス社
- 片桐千亜紀 2006 「調査に至る経緯」『新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 加藤 稔 1961 「東北裏日本における早期縄文土器の編年」『山形史学研究』第3号 山教史学会
- 加藤 稔・佐々木洋治 1962 「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』第31・32輯 国学院大学考古学会
- 加藤 稔 1967 「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」『山形県の考古と歴史』第二版 (柏倉亮吉教授還暦記念論文集) 山教史学会
- 金子浩昌・久貝弥嗣 2006 「動物遺体」『新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 鎌木義昌・芹沢長介 1965 「長崎県福井岩陰 - 第一次発掘調査の概要 - 」『考古学集刊』第三巻第一号 東京考古学会
- 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1983a 「沖永良部島中甫洞穴発掘概報」『月刊考古学ジャーナル』No.214 (株)ニュー・サイエンス社
- 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望 1983b 「中甫洞穴」『鹿児島考古』第17号 鹿児島県考古学会

- 河口貞徳・本田道輝・瀬戸口口望 1984 「中甫洞穴」『鹿児島考古』第 18 号 鹿児島県考古学会
- 河口貞徳 1998 「奄美」『日本考古学』第 6 号 - 特集日本考古学の 50 年 - 日本考古学会
- 川崎純徳・金子進・鴨志田篤二 1982 「原縄文系土器群の編年について」『発生期時の研究 - 勝田市原の寺遺跡調査報告 - 』勝田文化研究会
- 川島由次・村岡 誠 1984 「野国貝塚群 B 地点出土の獣骨について」『野国 - 野国貝塚群 B 地点発掘調査報告 - 』(沖縄県文化財調査報告書第 57 集) 沖縄県教育委員会
- 岸本利枝 2000 「名護市屋我地大堂原貝塚出土の土器」『南島考古だより』第 64 号 沖縄県考古学会
- 岸本義彦 1982 「野国貝塚群 B 地点発掘調査」『南島考古だより』第 25 号 沖縄県考古学会
- 岸本義彦 1983 「爪形文土器を求めて - 沖永良部・奄美大島 - 」『南島考古だより』第 29 号 沖縄県考古学会
- 岸本義彦・島袋 洋 1984 「人工遺物」『野国 - 野国貝塚群 B 地点発掘調査報告 - 』(沖縄県文化財調査報告書第 57 集) 沖縄県教育委員会
- 岸本義彦 1984 「収束」『野国 - 野国貝塚群 B 地点発掘調査報告 - 』(沖縄県文化財調査報告書第 57 集) 沖縄県教育委員会
- 岸本義彦 1991 「南島の土器起源をめぐって - 爪形文土器についての一考察 - 」『奄美考古』第 2 号 奄美考古学研究会
- 久貝弥嗣 2006a 「貝製品」「骨製品」「新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 」(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 久貝弥嗣 2006b 「新城下原第二遺跡 II 地区下層出土の動物遺体にみられる傷痕」『沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 栗原文藏・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年の位置」『考古学雑誌』第 47 卷第 2 号 日本考古学会
- 栗島義明 1985 「草創期土器型式変遷における一考察 - 隆起線文から爪形文へ - 」『信濃』第 37 卷第 4 号 信濃史学会
- 国分直一・三島格 1965 「ヤブチ式土器 - 琉球と奄美大島における文化交流の一証跡」『水産大学校研究報告人文科学編』第 10 号 水産大学校
- 国分直一 1966 「南島の先史土器 - 移入土器と島嶼土器について - 」『考古学研究』第 13 卷第 2 号 考古学研究会
- 国分直一 1968 「南島先史時代の技術と文化」『史学研究』第 61 号 東京教育大学文学部
- 国立中央博物館 1989 『新里岩 II』(第 21 冊)
- 小林達雄 1962 「無土器文化から縄文文化の確立まで」『上代文化』第 33 輯 国学院大学考古学会
- 小林達雄 1974 「縄文土器の起源」『月刊考古学ジャーナル』No.100 (株)ニュー・サイエンス社
- 小林達雄 1987 「日本列島における土器の登場 - はじめにイメージありき - 」『國學院大學考古學資料館紀要』 - 樋口清之博士喜寿記念 - 第 3 輯 國學院大學考古學資料館
- 坂田邦洋 1978 『韓国隆起文土器の研究』昭和堂印刷
- 崎原恒寿 2006 「貝塚時代早期土器」「石器・石製品」「土製品」「新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 」(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 佐々木洋治 1975 「山形県における縄文草創期文化の研究 II」『山形県立博物館研究報告』第 3 号 山形県立博物館
- 佐藤達夫 1971 「縄紋式土器研究の課題 - 特に草創期前半の編年について - 」『日本歴史』第 277 号 日本歴史学会
- 島袋春美 2006 「貝類遺体」『新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 下地安弘 1990 「第 9 号墓 土器」『城間古墓群 - 牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書 - 』(浦添市文化財調査報告書) 浦添市教育委員会
- 白石浩之 1984 「縄文時代草創期の爪形文土器の研究とその課題」『大和市史研究』10 大和市役所管理部文書課
- 白石浩之 1976 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について (下)」『月刊考古学ジャーナル』No.127 (株)ニュー・サイエンス社
- 新東晃一 1978 「南九州の火山灰と土器形式」『季刊 どるめん』19 号 JICC 出版局

- 新東晃一 1980 「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『古文化論攷』 - 鏡山猛先生古稀記念 - 鏡山猛先生古希記念論文集刊行会
- 新東晃一 1997 「提唱 爪形文の古さと系譜」『南島の人と文化の起源 - どこまでわかったか、課題は何か - 』公開学習会実行委員会
- 鈴木保彦 1969 「縄文草創期の土器群とその編年」『史叢』第12・13合併号 日本大学史学会
- 鈴木保彦 1977 「縄文土器出現の様相」『季刊 どるめん』第15号 萩書房
- 鈴木保彦 1982 「草創期の土器型式」『縄文文化の研究』第3巻 - 縄文土器 I - (株)雄山閣出版
- 芹沢長介 1960 「縄文土器の起源」『石器時代の日本』築地書館
- 芹沢長介 1967 「旧石器時代の週末と土器の発生」『信濃』第19巻第4号 信濃史学会
- 高宮廣衛・知念 勇 1977 「人工遺物」『渡具知東原 - 第1～2次発掘調査報告 - 』(読谷村文化財調査報告第3集) 読谷村教育委員会
- 高宮廣衛 1987 「うるまの島じま」『地方文化の日本史(1) - 光は西から - 』文一総合
- 高宮廣衛 1991 「南島考古雑録(1)」『南島考古』第11号 沖縄考古学会
- 高宮広土 2000 「ヒトの適応過程からみた沖縄の先史時代と編年」『琉球・東アジアの人と文化』 - 高宮廣衛先生古稀記念論集 - (上巻) 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 高宮広土 2006 「植物遺体」『新城下原第二遺跡 - キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 - 』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集) 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 田村晃一・中山清美・金井安子 1989 「喜子川遺跡 - 第1次・第2次発掘調査報告 - 」『青山考古』第7号 青山考古学
- 田村晃一・池田治 1997 「喜子川遺跡 - 第3次・第4次発掘調査報告 - 」『青山史学』第15号 (気賀健生教授退任記念号) 青山学院大学文学部史学研究室
- 多和田真淳 1960 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺(一)」『文化財要覧』1960年版 琉球政府文化財保護委員会
- 知念 勇 1977 「調査経過」『渡具知東原 - 第1～2次発掘調査報告 - 』(読谷村文化財調査報告第3集) 読谷村教育委員会
- 坪井正五郎 1909 「諏訪湖底石器時代遺跡の調査(中)」『東京人類學會雑誌』第24巻第280号 東京人類學會
- 坪井正五郎 1910a 「諏訪湖底遺物考追記(二)」『東京人類學會雑誌』第25巻第288号 東京人類學會
- 坪井正五郎 1910b 「諏訪湖底遺物考追記(三)」『東京人類學會雑誌』第25巻第289号 東京人類學會
- 土肥 孝 1982 「縄文文化起源論」『縄文土器の研究』第3巻 - 縄文土器 I - (株)雄山閣出版
- 戸沢充則 1983 「曾根遺跡」『長野県史』考古資料編全1巻(3) 主要遺跡(南信) (社)長野県史刊行会
- 中村孝三郎 1960 「新潟県蒲原郡上川村神谷小瀬ケ沢洞窟遺跡(第一次) 調査略報」『上代文化』第30輯(大場磐雄博士還暦記念号) 国学院大學考古学会
- 中村 愿 1978 「土器」「高又遺跡」(研究室活動報告3) 熊本大学法文学部考古学研究室
- 中村 愿・東門研治・島袋春美・尾木 綾・細川 愛・中村 毅編 2006 『伊礼原遺跡 - 図録集 - 』(北谷町文化財調査報告書第25集) 北谷町教育委員会
- 永井昌文・三島格 1964 「奄美大島土浜ヤーヤ洞窟遺跡調査概報」『考古学雑誌』第50巻第2号 日本考古学会
- 仲宗根求・古堅勝美 1989 「読谷村大久保原遺跡発掘調査概要」(沖縄考古学会定例研究会発表要旨) レジュメ
- 中山清美 1992 「イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴遺跡出土の爪形文土器」『奄美考古』第3号 奄美考古学研究会
- 名護市教育委員会 2001 「大堂原貝塚発掘調査概報」(沖縄考古学会報告資料) レジュメ
- 西川博孝 2004 「竹管文・爪形文の施文具」『月刊 考古学ジャーナル』No.523 (株)ニュー・サイエンス社
- 西田史朗 1989 「喜子川遺跡のアカホヤ火山灰」『青山考古』第7号 青山考古学
- 新田重清 1977 「原始古代の沖縄(1)」『沖縄県立博物館紀要』第3号 沖縄県立博物館
- 新田重清 2000 「沖縄縄文時代主要遺跡から出土する石器の様相について」『琉球・東アジアの人と文化』 - 高宮廣衛先生古稀記念論集 - (上巻) 高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 原 寛・紅村弘 1958 「岐阜県花ノ湖遺跡略報」『石器時代』第5号 石器時代文化研究会
- (株)パリノ・サーヴェイ 2006 「新城下原第二遺跡(Ⅱ地区下層)の自然化学分析」『新城下原第二遺跡 - キャンプ

瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告 -』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集)
沖縄県立埋蔵文化財センター

藤森栄一 1960「諫訪湖底曾根の調査」『信濃』第12巻第7号 信濃史学会

古川博恭・加藤祐三 1984「野国貝塚群B地点C3-IVb層中の軽石の化学分析」『野国-野国貝塚群B地点発掘調査報告-』(沖縄県文化財調査報告書第57集) 沖縄県教育委員会

松川 章 1988「B-グリッド土器」『チヂフチャーダン穴遺跡-範囲確認調査報告書-』(浦添市文化財調査報告書第12集) 浦添市教育委員会

松本信光 2000「土浜イヤンヤ(ヤーヤ)洞穴採集の土器」『南九州縄文通信』No.14 南九州縄文研究会

三島 格 1978「解明すすむ南島古代文化 渡具知東原遺跡定説覆す土器発見」『えとのす』第10号 (株)新日本教育図書

水ノ江和同 2005「南島の縄文石斧」『南島考古』第24号 沖縄考古学会

南 久和 2004「編年の方法の提示と草創期爪形文の編年」『古代』第115号 早稲田大学考古学会

宮城朝光 1979「渡嘉敷島船越原遺跡の土器-曾畠式土器、ヤブチ式土器、爪形文土器の土器資料-」『花綵』創刊号 沖縄国際大学考古学研究会OB会

村上 昇 2003「日本列島東部域における縄文時代草創期土器編年瞥見-特に爪形文土器から室谷下層式にかけて-」『立命館史学』第24号 立命館史学会

盛本 熱 1984「動物遺体」『野国-野国貝塚群B地点発掘調査報告-』(沖縄県文化財調査報告書第57集) 沖縄県教育委員会

八幡一郎 1935「爪形紋ある土器」『ひだびと』第3年第10号 飛騨考古土俗学会

八幡一郎 1936「信州諫訪湖底「曾根」の石器時代遺跡」『ミネルヴァ』2・3

山内清男 1960「縄紋土器文化のはじまる頃」『上代文化』第30輯(大場磐雄博士還暦記念号) 国学院大學考古学会

山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』14-2 読売新聞社

山内清男 1969「縄紋草創期の諸問題」『Museum』224号-日本考古展特集- 東京国立博物館

横浜市歴史博物館・(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編 1996『縄文時代草創期資料集』

Naoichi Kokubu・Erika Kaneko 1962「Ryukyu Survey 1960」『Asian Perspectives -The Bulletin of The Far-Eastern Prehistory Association-』Vol. VI 1-2 Hong Kong University

沖縄における貿易陶磁研究

— 14～16世紀を中心に —

Trade Ceramics Study in Okinawa
- Focusing on the 14th to 16th Century -

瀬戸哲也・仁王浩司・玉城 靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志
Seto Tetsuya, Niou Kouji, Tamashiro Yasushi, Miyagi Hiroki, Azama Mitsuru, Matsubara Satoshi

ABSTRACT : A number of trade ceramics have been found from Gusuku and settlement sites of 14-16th century in Okinawa. Analysis of these ceramics is indispensable for explaining the sites, however, an analysis method has not been established in Okinawa. As a first step, the authors have studied the classification and chronology of Chinese ceramics that prevails among the artifacts in hope of establishing a common understanding. In particular, based on the previous studies, celadon, which are found in great numbers, were selected for the classification together with white porcelain, blue and white porcelain and pottery. As a conclusion, the periodical chronology is discussed on the basis of the classification and assemblage of each site in Okinawa. This paper is an interim report for the study.

1. はじめに

沖縄は、明朝への朝貢をきっかけとして日本・朝鮮・東南アジア間の中継貿易を行う。やがて14～16世紀にはその貿易を背景に琉球国として隆盛期を迎えた。この隆盛を示すものが、大量かつ優品ぞろいの中国産をはじめとした貿易陶磁である。これらの陶磁器は、首里城跡・今帰仁城跡などの地域の拠点とされるグスクや周辺の集落跡から多く出土している。

中国産陶磁については先学の膨大な研究成果があるが、沖縄においては一定の理解を得られた分析方法が未だ得られていないように思える。その理由としては、①グスクを代表とする沖縄の遺跡は長期間継続するものが多いこと、②井戸・一括廃棄の資料が少ないと、③在地土器は煮沸形態しかなく変化が乏しく有効な編年資料となりえず、かつ14世紀以降その生産が見られなくなること、④多種多様な陶磁器が出土するため分類・編年の的が絞りにくいくことが考えられる。

これらの問題を地道に解決していくことが、沖縄出土陶磁を歴史研究の資料として活用する第一歩であると考える。そこで、県内で遺跡調査を行う筆者らは、2005年4月から県内の有志で集まり様々な協力のもとで、「沖縄陶磁研究会」として2006年12月現在まで延べ21回に及ぶ勉強会を重ねてきた。この勉強会では、沖縄で最も多く出土する14～16世紀の陶磁器、そのなかでも青磁を中心に、その分類と編年観に関する知識を深める勉強を重ねてきた。今回は、その中間報告としたい。

本稿の構成は、沖縄で14～16世紀に普遍的に出土し、遺跡の年代・消長を考えるのに重要な中国産陶磁の中で、青磁・白磁・青花・陶器（褐釉）の分類・年代観について論じることにしたい。後述

するが、青磁についてはその細部では必ずしも一致していない点もあるが、体系的な分類を試みている。白磁・青花は、先学の研究に沿って近年の成果を参考にして、沖縄の特徴を把握することを試みた。陶器については、褐釉の大型壺を中心とした分類を示す。総括として、沖縄における出土組成の時期的変遷について概略したい。

2. 青磁

先述したように、沖縄では多種ある陶磁器の中でも青磁は圧倒的に他の器を凌駕し、例えば 15・16 世紀を中心とする今帰仁城跡周辺遺跡では全体の 72% とされる（宮城 2005）。その大半は碗皿で構成されている。当該期の青磁の大部分はいわゆる龍泉窯系とされるものだが、沖縄では中国側の研究で「土龍泉」と言われる福建諸窯で焼かれたとされる粗製品が多く出土する（森村 2005）。だが、これらも広義の龍泉窯系であることは疑いがなく、本分類もその意味で設定している。

さて、青磁分類は 12 世紀～13 世紀については、大宰府（旧…横田・森田 1978、新…太宰府市 2000）、博多（森本 1984）での分類案が汎用されている。本州地域（本州・九州・四国も含めて）では、14～16 世紀の青磁そのものが少ないので、各地の良好な資料をピックアップした形で分類・編年を行った上田分類（上田 1982）が一般的に用いられる。このように、青磁分類・編年が通史的に貫徹されていない理由としては、前者は古代～中世前半の拠点遺跡を、後者は戦国城郭を中心とする中世後半を研究する上で構築され、研究してきたことが挙げられる。さらに、本州地域においては両者をつなぐ 14～15 世紀について良好な出土資料が得られなかつたことも最大の理由であろう。これに対して、沖縄ではこの 14～15 世紀の陶磁器が多く出土することは、古く戦前から注目してきた。分類・編年としては、両者の研究を引用し沖縄側の地域的特色を提示した、金武による呼称・分類が広く利用されている（金武 1988・1989・1990 等）。

今回、筆者らは、金武が指摘する沖縄の状況を踏まえながら、分類記号としては大宰府新分類のものを引き継いだ形で提示しようと考えている。その理由として、より統一性の高い分類を使用するためでもあるが、次のように青磁分類研究を理解するからである。大宰府分類は旧・新共に器形、特に高台形状を主体としており、文様は中分類として理解されており、口縁・底部破片でも大分類では区別できる。ただし、今回の対象となる 14 世紀以降に相当する大宰府新分類の龍泉窯系 IV 類については、分類者自身も指摘するように「高台が多様化しており資料の少なさもあり未完成（太宰府市 2000）」とされている。一方、上田分類はこの IV 類以降を説明するために、蓮弁文や雷文などの文様の退化着目した分類を行った。さらに、高台の施釉方法が外底露胎から蛇の目釉剥ぎ、釉が外面のみに掛けられるといった変化に注目している点は非常に重要である。しかし、大分類については文様を主体としているため、口縁・底部は別々に分けることになってしまう。金武分類も文様を主体としているので、同様な問題点を抱えている。そのような中で、博多分類龍泉窯系 I～III 類については、新大宰府分類とほぼ同様で、さらに 14 世紀前後のものを IV 類、それ以降を V 類として、結論として本稿はこれに近い。ただ、当時の資料の少なさもあり、詳細な説明がなく、不十分なものと言える。こういった研究史を踏まえ、なおかつ若干の生産地の様相を考慮すると、高台の形態・施釉方法が最も時間的、地域的特徴が反映されるものであると考えられる。

そこで、龍泉窯系青磁において、高台形状をメインとする大宰府新分類の大分類を引き継ぎ、IV 類はその再構成と中間タイプの IV' 類を設定、V～VII 類を新規に設定することとした。ただ、この IV～VII 類は、I～III 類よりも高台・器形・施釉が多様化していること、また精製・粗製の差が顕著となり中間的なものが多いので、将来的には別要素（例えば○○窯系△類のような呼称）による分類が必要

になってこよう。また、中分類の0～3は、外体面の文様に基準を求め、〈0〉を無文、〈1〉を蓮弁文、〈2〉を口縁帯の文様（弦文・雷文）、〈3〉をその他の文様としている。小分類については、現時点では検討不足のため今回はバリエーションを示すのに留めた。

器形の名称は、沖縄での通称に従い、椀は碗と記載、浅形椀・杯・皿に関しては皿として統一している。碗については、量的には少ない小碗と束口碗をさらに設けた。一方、皿は、V類では様々な形態があり、これを一括りの「皿」という器種で理解することは難しいので、口折皿・直口皿・腰折皿・稜花皿・菊花皿・碁笥底皿などの器種名称をひとまず踏襲して説明する。なお、碗・皿以外にも盤・杯・香炉・瓶・酒会壺・置物類など多くの器種が知られているが、十分な検討を経ておらず、これについては今後の課題とした。

《III類》大宰府新分類のIII類に相当するが、中分類については上記の基準に準拠するため、異なる点がある。素地・釉調とも精良で、高台は全面施釉後、高台端部周辺の釉を掻き取る点に特徴がある。沖縄では出土数はそれほど多くない。

碗III類 器形は深めで全体的に内湾するもので、見込みは凹むものが多い。沖縄では現在、口縁が直口するもののみだが、大宰府などでは端反となる資料も認められるようである。

III - 0 (1) 体部外面が無文のもの。(1)は口縁部を刻み輪花口縁とするものである。

III - 1 (2～4) 体部外面に蓮弁文を施すもの。

皿III類 現在のところ、口折皿のみ確認されるが、生産地では内湾するタイプもあるようである。

III - 0 (5～7) 外体面無文で口折れとなる資料で、端部を上方につまみ上げるもの(5・6)と、つまみ上げないもの(7)がある。

III - 1 (8) 外面に鎬蓮弁文を施すもの。(8)は見込みに貼付双魚文を施す。

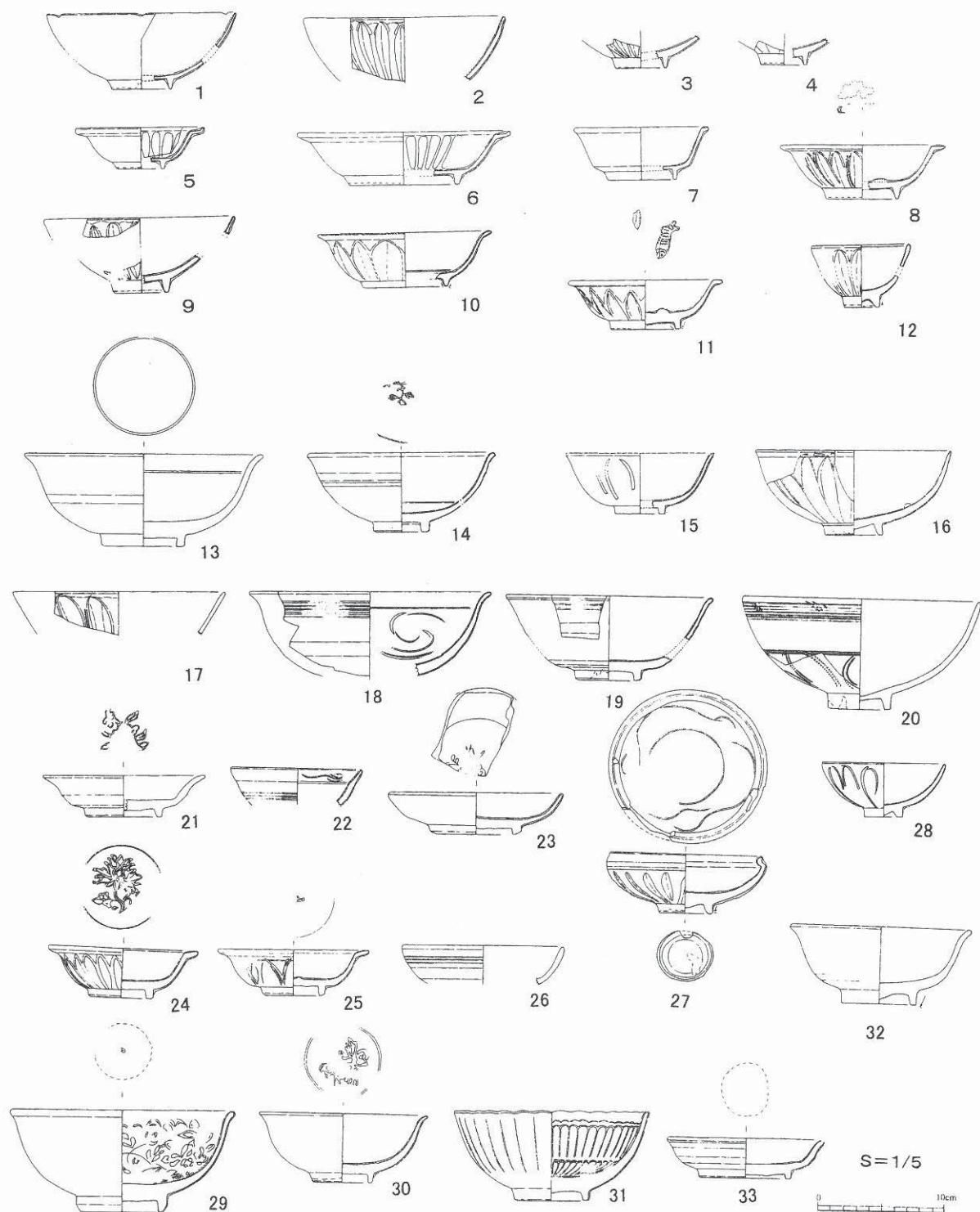
碗・皿・小碗III'類 (9～11) これらの典型的なIII類の外に、山本信夫らがやや粗雑な一群をIII'類として、これらが新安沈船資料に多く見られることを指摘している（山本・横田・森本 1989）。その特徴は高台畳付の平坦面が広く、釉調は水色などIII類より鈍い印象を受け、素地が灰色を呈する。沖縄で出土するIII類に該当する資料は、全体的に粗雑な印象を受ける。具体的な資料としては、碗では(9)がIII' - 1にあたり、釉調が鈍い。皿では(10)がゆるく外反し、(11)が貼付双魚文の口折皿となる。(12)は小碗で同様に畠付が広く発色も悪い。

《IV類》 大宰府分類を発展的に受け継ぐ形でIV類を設定した。その特徴は、原則的に外底には釉が掛けられず露胎となるものである。高台の形は前代のII類の角形もしくはIII類の逆三角形のものが退化したもので、両者の影響が強く見られる。釉調も水色・淡緑色・黄味がかった緑色と様々であるが、III類よりは比較的薄いものが多い。素地はやや軟質で灰色である。

碗IV類 器形は、高台から直線的に伸びるII類、全体的に内湾するIII類のどちらかの影響が見られるが、全体的に胴部は緩やかで張りがある。前者II類の影響が強いものに、口縁が緩やかに外反するものがある。文様は退化した鎬蓮弁文や、劃花文が退化したと考えられるヘラ描きの草花文などがあり、見込みは花文が多い。新しい文様としては、外面上端に複数の圈線に数ヶ所に斜線が施されるいわゆる弦文が登場する。これは雷文の前身と考えられている（上田 1982）。

IV - 0 (13・14) 無文のもので、器形はII類の影響が強く、口縁は外反するものが多い。金武がB窯系とした釉が薄いタイプも含まれ、後述する白磁C2群に類する器形や印花文をもつ。IV類の中でも粗雑な印象を受け、粗製品もしくは、時期的に新相とも考えられる。

IV - 1 (15～17) 蓮弁文を施すもので、鎬が殆どないものや輪郭が複線になるものがある。III類の影響を強く受け、内湾する器形で腰部に緩やかで張りがある。また、内底が平坦に近いものが多く



碗III-O(1) 碗III-1(2~4) 碗III-O(5~7) 碗III-1(8) 碗III'-1(9) 碗III'-1(10·11)
 小碗III'(12) 碗IV-O(13·14) 碗IV-1(15~17) 碗IV-2(18~20) 碗IV-O(21~23) 碗IV-1(24·25)
 碗IV-2(26) 束口碗IV(27) 小碗IV(28) 碗IV'-O(29~32) 碗IV'-O(33)

第1図 沖縄出土青磁分類1

く、凹みのあるものも希に見られる。IV類の中でも古手と思われる。

IV - 2 (18 ~ 20) 本類で登場するいわゆる弦文が施されるものである。完形の資料が少ないが、弦文だけを呈するものはII類の影響が強く、口縁が外反するものが多い。内面には劃花文が退化したのか、ヘラ描きの草花文などが見られる。(20)は、弦文の下半に蓮弁をもつもので、内湾する器形で内底も凹むなどIII類の影響が強いものである。

IIIIV類 口折皿が多く、III類よりもその折れは緩やかである。ただ、後述するように、外面無文のIV - 0類にはV類で見られるような腰折皿などの前身となるものも見られる。

IV - 0 (21 ~ 23) (21)は腰折皿に近いが、大きめの印花文を施す点がIV類の要素である。(22)は、胴部中位でやや折れる深めの器形で、内面口縁にヘラ描きの唐草風の文様が描かれる。(23)は印花が施され見込みが平坦で広い造りとなる内湾直口の皿である。

IV - 1 (24・25) 蓮弁文を外面に描く口折皿。(24)は鎬の略化傾向が認められ、籠彫りは明瞭で蓮弁の造りは立体感がある。(25)は蓮弁の輪郭が複線で、見込の印花は双魚文である。

IV - 2 (26) 全形は窺えないが、弦文を施すものがあるので設定した。ゆるく内湾する器形と思われる。

東口碗IV類 (27) 体部上位で内側に屈曲し口縁がすぼまる形をなす。口径に比して底径が小さく、III類系譜の特徴を持つ資料である。

小碗IV類 (28) 大宰府小椀IV類と同様の資料と思われる。

なお、外底無釉の一群で、釉が薄く素地は軟質、IV類の特徴に近いが、器形的にはIV類とV類の中間的なものがあり、暫定的にIV'類とした。V類の粗製品という見方もある。

碗IV'類 (29 ~ 32) (29)は金武が佐敷タイプもしくは玉縁口縁碗とするもので(金武 1990)、内面胴部に型押し文様を描く。見込みは釉剥ぎする。これには内面無文のものも多い。(30)は器形的にIV類に近く薄い造りだが、釉調は濃緑色でV類に近い印象もある。(31)は口縁を刻み波状とする資料で、体部外面に線彫による蓮弁文、内面には型押し二段構成の蓮弁を施す。外底無釉であるが全体の器形がV類に近似する。

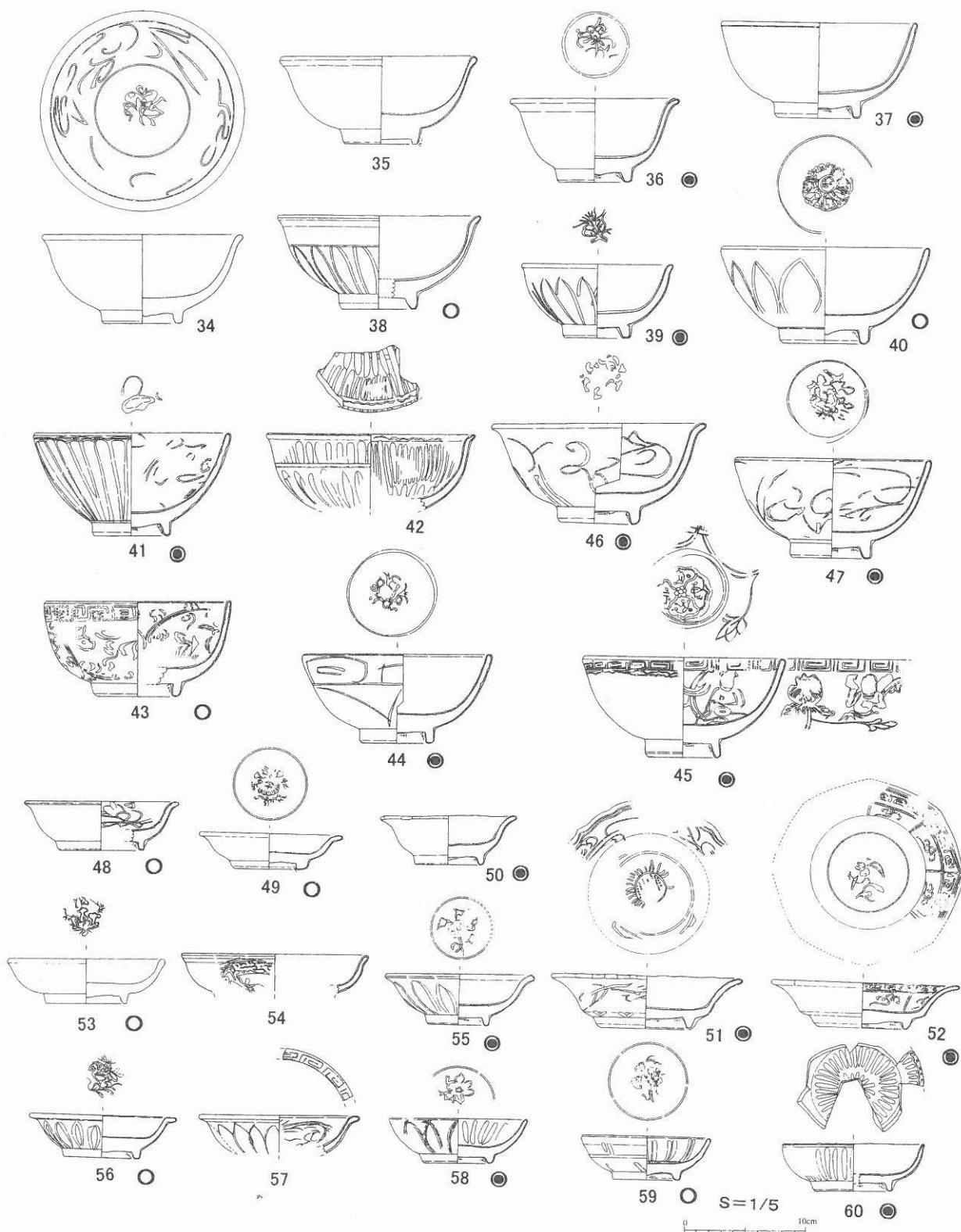
IIIIV'類 (33) 碗の(29)と同様に玉縁状口縁のもので、内底見込みを釉剥ぎする。

《V類》 沖縄で最も多く出土するものがV類である。龍泉窯系青磁の中でも器形や文様のバリエーションに富む。高台は、角形で細く高く大型化し畳付に向かって末広がりとなるハの字形傾向が強まる。また、底部はIV類よりも重厚となる。釉は濃緑色で非常に厚いものが多く、素地は白色で硬質である。施釉方法は高台内側まで施釉した後、高台内の釉剥ぎするものが隆盛する。その方法は、外底全体を釉剥ぎするか、その中央のみ残す蛇の目釉剥ぎとするかの2例が多い。

碗V類 碗IV類に比べると、口径に比して腰高な器形となる。文様は2類(雷文)が新しく登場し、胴部内面に型押しの文様を施すものも見られる。

V - 0 (34 ~ 37) 体部外面が無文のもの。口縁が外反(34 ~ 36)・直口(37)のタイプがあり、広い見込みに印花文を施すものが多いが、印花はIV類よりも小振りである。前者外反が量的に多くIV - 0類の系統を引くもので、後者直口は本類になって登場するものと考える。(34)・(35)は外底無釉で釉剥ぎは顕著ではないが、釉は濃緑色で厚く、器壁も厚手の造りである。

V - 1 (38 ~ 42) 体部外面に蓮弁文を施すもの。(38)はIV - 2類の影響を受けたのか、口縁部外面に圈線を有し、その下にヘラ描きによる蓮弁文を施すものである。(39)は比較的幅の広い蓮弁文を描く資料で、見込みに印花文を施すものや胴部に草花文を施すものが多い。(40)は口縁が直口するもので、文様粗雑化傾向が強い。(41)は、いわゆる剣先蓮弁文碗と呼ばれており、片切り



碗V-O(34~37) 碗V-1(38~42) 碗V-2(43~45)

碗V-3(46~47) 皿V-O·3(48~54) 皿V-1(55~60)

第2図 沖縄出土青磁分類2

彫りで弁先の尖った幅の狭い蓮弁を描き内面には草花文や花文を施すもので、VI - 1類の前身と考えられる。また口縁を刻み波状とする一群があり（42）、内外面胴部には2段構成で型押しによる蓮弁文を表現した資料も見られる。

V - 2（43～45） 口縁帯に雷文をもつもので口縁は直口となる。ヘラ彫りと型押しのものがある。前者の高台は方形となるものが多い。（43）は、IV類の系統と思われる外面にはラマ式蓮弁文、内面には草花文などの文様が丁寧に描かれる。一方で、（44）はこれらの文様が粗雑化したと思われる。型押しのものは、高台断面が三角形となり細長くハの字状となる。内面の文様は、いわゆる人形手とされる全体に展開する文様となる（45）。

V - 3（46・47） その他の文様をもつもの。最も一般的なのはラマ式蓮弁文（金城2000）で、V - 2類の蓮弁がないタイプかと思われる。口縁は直口するものと外反するものがあり、IV - 2類とV - 2類をつなぐ資料の可能性もある。

III V類 本類では、これまでの口折皿・直口皿に加え、腰折皿（稜花皿・八角皿含む）の形態が現れる。IV類と比べると、全体的に浅くなる傾向を示す。また、文様から見ると外面無文〈0〉と他の文様〈3〉があるが、口折皿、直口皿、腰折皿でまとめた。また、雷文は口折皿の口縁内面に見られるものがあるが、体外面には見られないので〈2〉は設定していない。

V - 0・3（48～54） 本類には口折皿以外の器形が見られる。腰折皿には、（46～52）がある。稜花皿は器形的には腰折皿に近く、緩やかな稜花となるものから（50）、大振りの資料も見られる（51）。八角皿は口縁内面にヘラ描きの雷文が施される（52）。直口皿は、後述するV - 1類に近い内面に蓮弁状の凹みがあるものもあるが少なく、見込みに印花を有する（53）。また、龍文などを施すものもみられるが器形は外面無文と変わらない（54）。

V - 1（55～60） 外面に蓮弁をもつもので、口折皿と直口皿がある。口折皿は、IV類に比べ折れが弱くなるもの（55）や、浅いもの（56）が多くなる。（57）は口唇に雷文を施すものもあるが器形は変わらない。直口皿は、蓮弁が明確なもの（58）から、線状になるもの（59）も見られる。（60）は蓮弁の凹みが2段で見込みにもみられ、碗（42）と酷似する。

《VI類》 底径は小型化、底部の厚みが増し、高台の割りが深いもの。施釉方法は、V類と同様蛇の目釉剥ぎか、高台内側の途中までしか掛からないもの、そして外底露胎のものがある。外底露胎のものは、IV・IV'類に比べて抉りがさらに雑で、外底中央の突出が目立つ。釉調は濃緑色で厚いものは少なくなる。色調は淡い青色・緑色・褐色などが多い。また、文様は蓮弁文・雷文・型押し文・印花文などが見られるが、V類に比べて退化傾向が顕著である。また、本類は器形的にはほぼ同形でも、素地・釉が精良なものと、粗雑なものとの差が大きくなっている。

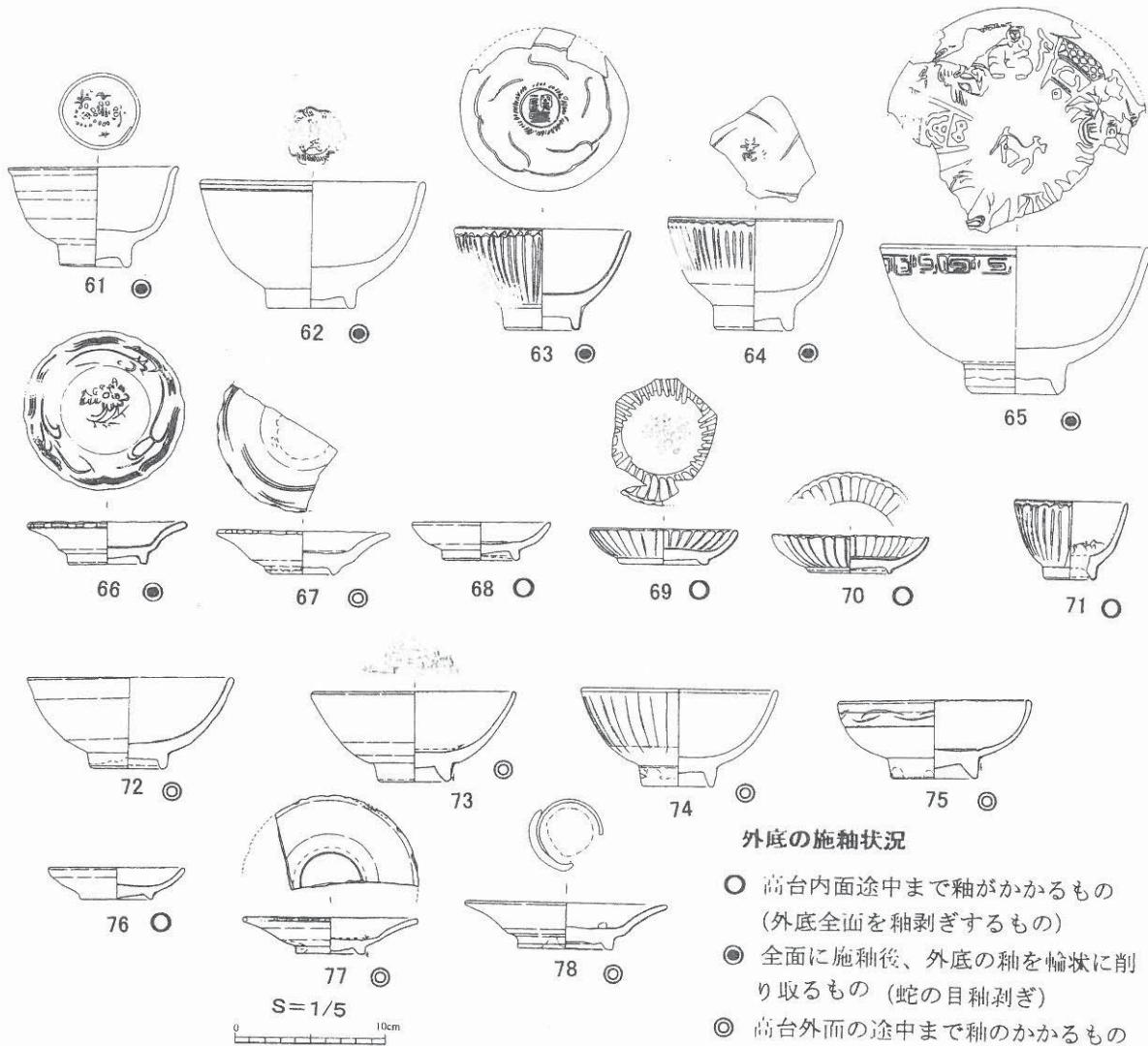
碗VI類 全体の器形は腰が張らず腰部から直上する器形となる。このため、外反するものは少なくなる。V類に比べると、器高に比して口径は小さい。

V - 0（61・62） 外面が無文のもの。口縁形態は外反と直口があり、後者が多い。印花文がV類に比べて粗雑となる。

V - 1（63・64） 体部外面に線刻蓮弁文を施すもの。弁尻が腰部下半まで及ぶものと（63）、腰部下半まで及ばない簡略化されたものがある（64）。

V - 2（65） 雷文は型押しのいわゆる人形手となり、ヘラ描きの文様は雑である。また、釉・素地も粗雑化傾向を示すものである。

皿VI類 V類に比して口径は大きく底径が小さくなり、器高がさらに低くなる。直口皿と稜花皿が主流を占める。



外底の施釉状況

- 高台内面途中まで釉がかかるもの
(外底全面を釉剥ぎするもの)
- ◎ 全面に施釉後、外底の釉を輪状に削り取るもの (蛇の目釉剥ぎ)
- ◎ 高台外面の途中まで釉のかかるもの

※上田 1982 の記号を参考。

碗VI-0(61・62) 碗VI-1(63・64) 碗VI-2(65) 皿VI-0(66~68) 皿VI-1(69・70) 小碗VI(71)

碗VII-0(72・73) 碗VII-1(74) 碗VII-2(75) 皿VII-0(76~78)

第3図 沖縄出土青磁分類3

VI-0 (66 ~ 68) 体部外面が無文のもの。見込みの印花文が碗と同様に粗雑である。器形は稜花皿 (66・67) と直口皿がある (68)。稜花皿は、内底見込みを釉剥ぎする資料が登場し、低平化傾向が強くなる。このタイプは、釉・素地が粗雑となる。

VI-1 (69・70) 体部外面に蓮弁を描くもので弁先が接しないものが多い。直口皿は、いわゆる菊花皿となるものが多くなる。(69) は刻み目がないV-1類が前身のものである。(70) は底部が薄くなった資料である。直口口縁資料は、蓮弁が細線となり著しく退化する。口折皿はほとんどなくなるものと思われ、わずかに線状の表現が見られるタイプが見られる。

小碗VI類 碗VI-1類の小形のサイズである。体部外面に線刻蓮弁文を施すもので弁尻が腰部下半まで及ぶ。底部は蛇の目釉剥ぎとなる (71)。

《VII類》 高台はVI類と比べると広くなり、小振りのもので高台断面が三角形化するものもみられるようになる。釉調は緑色のものがほとんど無くなり、貫入が目立つガラス質の水色や黄色に近く、中には乳白色となり白磁と報告される資料もある。また、磁器質になって青花のような光沢をもつのも見

られる。施釉は全体に掛けられるものは無くなり、高台外面途中で留まるものや、胴部中位までしか掛けられないものも出てくる。V類に典型的にイメージされる龍泉窯系青磁の発色は、この段階にはほとんど見られない。文様は蓮弁文の弁先が無くなり、雷文は波状文へと退化が著しくなる。見込みの印花文も殆ど無くなるか小型化、不鮮明となる。

碗VII類 底部はVI類に比して小型化し、腰が張らず直線的に開き、器高はVI類に比して低くなる。

VII - 0 (72・73) 体部外面が無文のもの。見込みの文様は捻子花と印花がみられるが、簡略化し無文もしくは露胎となる。

VII - 1 (74) 体部外面に線刻蓮弁を施す。弁先の省略された蓮弁が腰部下半まで及ばず簡略化され、見込みは無文もしくは露胎となる。

VII - 2 (75) 口縁帯外面に波状文・波濤文を施す。これは前代までの雷文が退化したものと考えられる。

III-VII類 腰折れ皿の器高はさらに低くなり、無文となる。外底の造りはより雑となる。

VII - 0 (76～78) 体部外面が無文のもの。(76) は直口皿である。口唇を刻み稜花にするものと、見込みが露胎となる腰折れタイプの皿が多くなる(77・78)。

3. 白磁

14～16世紀の白磁分類については、森田勉の研究（森田 1982）が一般的に用いられる。沖縄においては、金武正紀が本土ではあまり出土しない「ビロースクタイプ碗」、「今帰仁タイプ碗（薄手直口碗）」の設定を行っており、沖縄の独自性を示す重要な指摘である（金武 1988・1990）。近年、田中克子はこの沖縄で出土する白磁を含めて、福建省における生産地を意識した分類がなされた（田中 2003）。新垣力は沖縄においてこれらの研究を踏まえて、14～16世紀の白磁の大部分を網羅して福建・広東産と景德鎮窯系に分けて整理した（新垣ほか 2005）。

さて、最も利用される森田分類はA～E群の5群に分けられ、各群は時期・生産地を共に意識した分類となっている。各群については大きな修正の必要はないので、本稿でも森田分類に沿って沖縄の様相を説明していきたい。ただ、次の4点について補足及び追加分類を提唱したい。

①C群は、金武の研究を元に田中・新垣の近年の研究を参考に、C 1～C 3の3つに細分する。

②D群に胎土・釉は似るが、器形は大振りでやや独創的なものをD'群とする。

③E群には、明確にその前身と考えられるタイプが出土しており、これをE 0群とする。

④F・G群は森田分類見られない一群であり、生産地・時期が想定できるため追加分類とした。

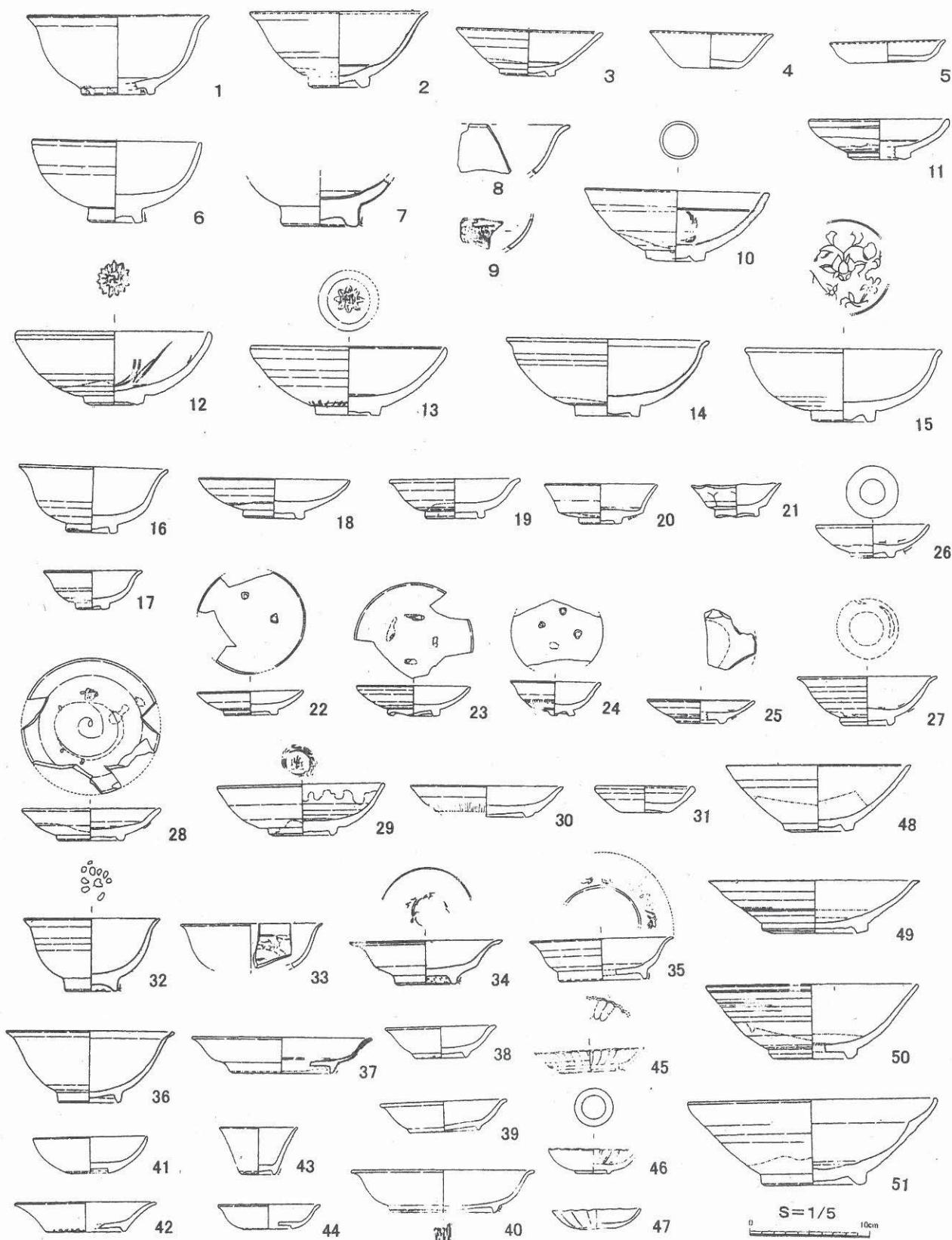
A群(1～5) いわゆる「口禿」のものである。碗と皿があるが、沖縄では皿が圧倒的に多く出土する。田中は、2が福建省寧德地区で生産されたものとしている（田中 2002）。

B・B'群(6～9) B群がいわゆる「枢府磁」とされ、B'群は高台端部が面取りされ、釉もきれいに搔き取られていないやや粗雑なものとされる。出土量は非常に少なく、沖縄では粗雑なB'群が大半と思われる。ただ、7は陽刻による纖細な鳳凰文であり、非常に精良である。

C群(10～15) 高台抉りが浅く厚手の内湾する一群で、碗が大半だが皿も少數ある。金武分類のビロースクタイプI・II、無文外反碗を、本稿ではC 1～3の3つに設定した。

C 1 (10) 内底が平坦で見込みに圈線状の凹みがあるので同安窯系の影響とされている。金武分類ビロースク Iに該当する。その特徴からC 2より古相と考えられている。

C 2 (11～13) 内底が丸みのあるもので花弁状の印花を施す。生産地は、後者については田中により閩江中流域が考えられ、高台抉りが浅く天目の形状に似る(11・12)が南平茶洋窯、高台は短



A群(1~5) B-B'群(6~9) C群(C1~10 C2~11~13 C3~14~15) D群(16~27) D'群(28~31)

E群(32~35) E群(36~47) F群(48~49) G群(50~51)

第4図 沖縄出土白磁分類

いが直立する 13 は閩清窯とされる（田中 2002）。白磁 A 類、後述する F 類、青磁 III・IV 類と共に伴することが多く、13 世紀末～14 世紀前半と考えられる。金武分類ビロースク II に該当する。

C 3 (14・15) 素地・釉が C 1・2 と共に通する外反碗だが、見込みの印花は繊細な草花文が多いこと、高台抉りが浅く退化している。森田分類 C 群は本タイプが主体と考えられており、沖縄でも青磁 IV・V 類と共に伴するので、14 世紀後半～15 世紀前半と思われる。

D 群 (16～27) 厚みのある底部を持ち、高台は低く小振りのもの。釉は黄味がかり、胴部下半が露胎になり、胎土は比較的軟質である。田中によると、その多くは福建省邵武四都窯を中心とした閩江上流域で生産されたものとされる。器形は、杯とも呼ばれる腰折皿、内湾皿が大半だが、沖縄では外反碗（16）も見られる。高台に抉りがもつものないものがある。さらに、内底見込みを蛇の目釉剥ぎするものがある（26・27）。全体的な出土傾向としては、青磁 V 類と共に伴することが多い。ただ、高台が直立し口径が大きい内湾皿（18）、胴部がより直線的に立ち上がる腰折皿（20）は白磁 C 3 群と共に伴するため古相と思われる。（22・23・25）は湧田古窯跡などの青磁 VI 類や青花と共に伴するので、新相と考えられる。

D' 群 (28～31) D 群に胎土・釉が近似するが、大振りのものが多く施釉範囲が狭い粗雑な一群を D' 群とした。数タイプがあるので、同系統かについては今後の検討が必要である。（28）は内底が露胎か釉剥ぎされる胴部中位で外反する皿で、新垣分類の福建 F 類である。日本海沿岸域でも一定出土し（水澤 2004）、15 世紀中葉・後半ごろと考えられる。（29）は浅めの内湾碗で、新垣福建 E 類碗 II である。田中が指摘した内底露胎碗の一つで、博多遺跡群・首里城跡等で出土し（田中・森本 2004）、15 世紀後半から 16 世紀中葉ごろか。（30）は高台抉りが浅い胴部が開く皿で、新垣福建 E 類皿 II である。16 世紀後半の大分県大友府内跡などの資料は内面も露胎しているが、器形は近い（吉田 2006）。（31）は金武が燈明皿としている平底の小皿である。今帰仁城跡・湧田古窯跡で出土するため、15 世紀後半～16 世紀中葉とされる。

E 0 群 (32～35) B・B' 群の系統がより強く残す一群で、新垣分類景德鎮窯系 B 類に相当する。外底が無釉で、畳付には砂が付着する。器形は碗（32・33）、皿は大きく腰折するもの（34）、E 群の端反皿に近い外反するもの（35）がある。33 のように胴部・見込みに陽刻による文様もある。腰折皿は博多遺跡群で出土し、14 世紀末～15 世紀初頭とされている（田中・高島 2004）。

E 群 (36～47) 全体に失透釉を掛けた後に、畳付のみ釉剥ぎするもので、同時期の青花と共に通する器形をもつものも多い。器形は、碗が蓮子碗に近いもの（36）、皿は端反皿（37～40）、碁笥底皿・杯（41～44）、菊花皿（45・46）がある。その産地は景德鎮窯と考えられる。

F 群 (48・49) 広い高台から胴部が直線的に開く直口浅めの碗で、金武が薄手直口碗もしくは今帰仁タイプと称するものである（金武 1988・1991）。釉は失透性の青みがかかったもので、胴部内外面の下半から露胎になるもの（48）と、胴部内面見込みが蛇の目釉剥ぎされるもの（50）がある。田中によると、福州沿岸域の浦口窯が生産地とされる。時期的には、今帰仁城跡等で白磁 A 類、青磁 III 類との共伴が見られ、白磁 C 1・2 群よりやや古いものと考えられる。

G 群 (50・51) 高台内の削りは平坦で、畠付は面取しやや丸みを帯びる。胴部から直上する器形で、深め大振りの器形で直口口縁の碗・受け口状の口縁の鉢が見られる。失透性の青みがかかった釉は F 群や C 群との共通性も高いが、素地は精良で硬質となる。胴部内外面の下半は露胎になるもの（48）と、胴部内面見込みが蛇の目釉剥ぎされるもの（50）がある。福建省博物院などの調査により、福建省沿岸部中央の甫田庄辺窯と考えられるものである。



碗 B1群(1~3) C群(4~7) C'群(8) D群(9~10) E群(11~12) G'群(13~14) B2群(15~18)

I 群(19) 粗製<漳州窯系>(20~24)

皿 B1群(25~26) C群(27~28) B2群(29) E群(30~31) 粗製<漳州窯系>(32~33)

第5図 沖縄出土青花分類

4. 青花

青花の分類は、小野正敏のものが広く使用されている（小野 1982）。粗製品を考慮し 16 世紀以降を充実させた分類としては、上田秀夫（上田 1991）や森毅（森 1995）の研究がある。沖縄では当該期の青花が多く出土する今帰仁城跡志慶真門郭・主郭の分類（今帰仁村 1983・1991）、それに基づく金武正紀の研究（金武 2005）がある。概ね本土のものと共通するが、沖縄独特のタイプも見られる。しかし、今回は系統だった分類を構築できなかったので、小野分類及びそれを追加・補正した森分類により説明したい。また、今回触れていない分類については、沖縄では該当するものが少ないものである。なお、古いものから説明していくので、同じ大分類でも順番が前後する。

碗 沖縄では 15 世紀前半～16 世紀中葉の遺跡で出土する B 1 群・C 群・D 群が多く、これらには本土よりもバリエーションがある。一方、16 世紀後半頃とされる E 群が少ない。また、小野が 16 世紀末～17 世紀初頭の指標とした畳付に砂が付着する F 群はほとんど見られない。

B 1 群（1～3） 大振りの外反碗。文様は口縁内面に雷文や四方襍文、胴部外面に雲堂手文、唐草文、梅文、見込みには花文などを施す。（1）は外底が露胎になり、白磁 E 0 群に器形が類する。首里城跡京の内・湧田古窯跡で多く出土し、15 世紀前半～16 世紀前半の幅をもつ。

C 群（4～7） いわゆる蓮子碗。（4）は典型的な蓮子碗である C 群より底部が厚く、内底の凹みは不明瞭である。文様は唐草文・雷文など、B 1 群と共通するものが多いので古相と思われる。（5・6）は典型的な蓮子碗。器形は深めと浅めがあり、文様は口縁に波涛文、胴部に蕉葉文・梵字文・豹皮文・唐草文などがある。（7）は外反するタイプであり、沖縄では一定量見られる。

C' 群（8） 底部が凹むタイプだが、口縁が強く折れ、高台が開き、人物文などの独自な文様を施す。沖縄では一定量出土するが、本土では湯築城跡などで少数見られる（柴田 1998）。時期的には、碗 B 2・E 群が多く出土する今帰仁城跡主郭で出土しているため、C 群よりもやや新しく 16 世紀中葉・後半ごろか。

D 群（9・10） 内底は平坦で広い高台をもち、胴部は直線的に伸び、腰は鋭角的に折れる。文様は、口縁の波涛文、胴部のアラベスク風、見込みの十字文が多い。

E 群（11・12） 饅頭心のもので、本土に比べると量は少ない。文様は山水文、団雲文などだが、字款も含め B 2 群に類似するものもある。本土では 16 世紀中葉～後半とされている。

G' 群（13・14） 森が G 群とする広い内底面を持つ碗に器形が類する。だが、雷文・蕉葉文などの B 1 群や C 群に近い文様が多く独自であるため、G' 群とした。天界寺跡・首里城跡で一定量出土している。G 群は大阪城跡では 16 世紀後半・末とされているが、沖縄では不明である。

B 2 群（15～18） 口縁が受口状になる外反碗で、金武は饅頭口縁碗とし、森分類 B 2 群である。ただ、沖縄で出土するものは受口が明瞭でないものが多い。文様は、鳳凰文・松竹梅文・四方襍文などがある。字款には年製が多い。沖縄では出土量は少ないが、今帰仁城跡主郭で多く出土している。時期的には 16 世紀後半～17 世紀初頭と考えられる。

I 群（19） 型押し形成されたいわゆる芙蓉手タイプのもの。沖縄では非常に少ない。

粗製品（20～24） 陶胎で釉も透明感がなく鈍いタイプのもので、森村健一（森村 1995）、沖縄での集成を行った新垣力（新垣 2003）が指摘するように、いわゆる漳州窯系のものと思われる。

(20) は C 群、(21) は D 群、(22) は内底の盛り上がり、内面口縁帯に四方襍文が崩れたような文様を描く E 群の粗製品と思われる。(23・24) は外底を無釉とする一群で、森が J 群としたものに類する。

皿 沖縄では碗と同様に B 1 群・C 群が多く、16 世紀後半以降の B 2 群・E 群は少ない。

B 1 群（25・26） 高台をもつ端反皿である。口径から小振りの 9 cm (25)、大振りの 12 cm (26) がある。

文様は胴部が唐草文、内面見込みに十字花文・玉取獅子文・アラベスク文を描く。

C群 (27・28) 畦笥底皿。器形は内湾が多いが、外反もある。文様は、胴部外面に波涛文・芭蕉文、見込みに花鳥文やねじ花文を描く。外反するものは、B1群のような密な唐草文が多い。

B2群 (29) 口縁がより外側に伸びる端反皿で、口縁内面に四方櫛文を描き、器壁も薄い。沖縄ではあまり出土していないが、天界寺跡・今帰仁城跡で見られる。文様はE群に多い口縁内面に四方櫛文が見られるので、近い時期であろう。

E群 (30・31) 内湾する器形で丸みがある高台をもつ皿である。文様は人物文・四方櫛文が多く、字款を有するものもあるが、外面無文も多い。碗E群と同様の時期が考えられる。

F群 図示しなかったが、いわゆる「鍔皿」で沖縄でも少数だが出土する。

粗製品 (32・33) 碗と同様の粗製品。(32)はC群で多く見られる。(33)はE群の粗製品と思われるタイプで、本土ではあまり見られないが、沖縄では首里城跡で出土している。

5. 中国産陶器（褐釉）

沖縄出土の中国産陶器（本稿では褐釉陶器）を概観すると、博多・大宰府分類（森本 1984、太宰府市 2000）に類例を求める 14 世紀前半以前では、出土遺跡・資料数ともに少ない。しかし、時期が下り、博多・大宰府をはじめ本土地域で資料数が減少する 14 世紀後半においては、四耳壺・無耳壺の大形貯蔵具を主に遺跡数・出土量ともに急激に増加する。擂鉢や鉢、捏鉢、水注、急須などの調理具・食膳具も時期を通じてあるが、若干量が付随してみられる程度である。

沖縄出土の中国産陶器で圧倒的に主勢を占める大形壺だが、全形を窺える資料の数は限られており、口縁部断面観など器形的な特徴が顯れやすい部位について分類・報告されるケースが従前まで主流であった。今回は、器形全形が概ね窺える資料を対象に大形壺の分類を試みた。

まず、14世紀前半より以前の資料について博多・大宰府分類を参考しながら紹介したい。

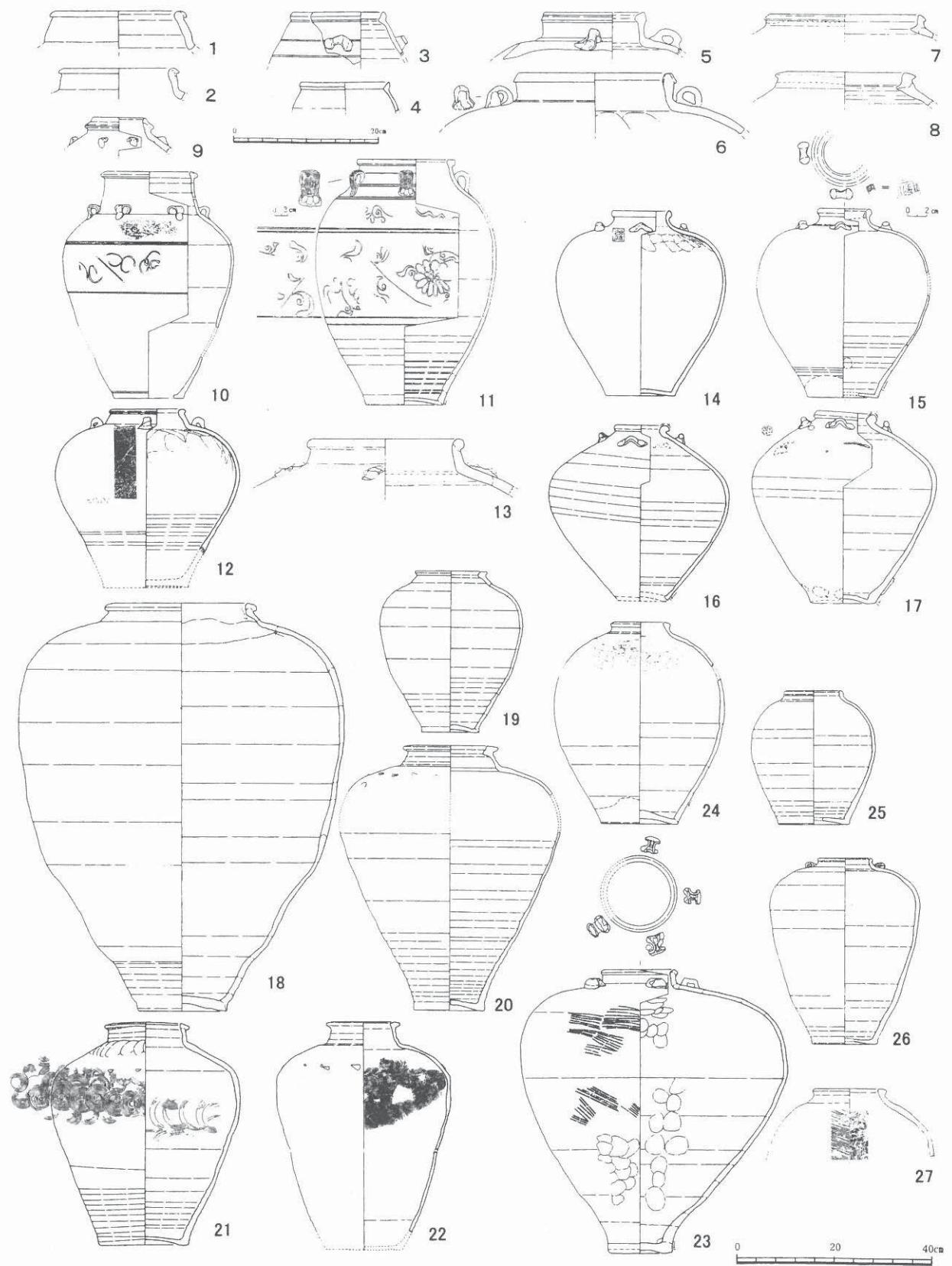
《古手の時期（14世紀前半以前）の中国産陶器》

(1・2)は、口縁端が玉縁状に折れ曲がり、頸部の中程が脹らむ特徴から大宰府分類の耳壺IV類相当と思われる。素地は灰色を呈しており白色粒を含む。(3・4)は、広口・長胴の四耳壺で法量はさほど大きくない。外傾した口縁端部は断面方形を呈し、頸部でく字状に折れる。大宰府分類耳壺VI類に相当。(5・6)は、直立した頸部から折り曲げた肥厚口縁につづき、肩がやや張る長胴気味の器体に縦耳を持つ。大宰府耳壺XII類、博多分類準A群の茶釉四耳大壺に似る。(1~6)ともに、13世紀中葉～14世紀前半代の良好な資料である大宰府条坊跡SK004出土品(山本 1990)にも類例を認める。(7・8)は、博多分類でその他群を構成するに至らない大形容器（福岡市教委 2000）と紹介される、頸部の内側に受口状の突起を持つ広口壺である。素地・釉の特徴が大宰府分類の鉢I類、また博多遺跡群出土の洪塘窯産とされる捏鉢とも近く、福建省閩江下流域産とみられる（田中 2001）。博多遺跡群であまりみられず沖縄でも数点程度しかないことから、時期は 14 世紀後半まで下るかもしれない。(9)は、口縁部断面観が特徴的な長胴四耳壺で、宜興窯産とみられる（森 2001）。

《14世紀後半以降の中国産陶器》

器形全体のプロポーションや胴最大径の位置、口縁部や頸部など部位における器形的特徴、耳の有無・形状などから下記の 1 ~ 6 類に分類を試みた。分類に際して、杉山洋の分類（杉山 1987）も参考にし、縦耳の多耳壺を 1 ~ 2 類、横耳四耳壺を 3 ~ 4 類、無耳壺を 5 ~ 6 類にまとめた。

また、今回の分類以外に「類」設定が可能かと思われる資料もあるが、検討途上にあるため「その他類を構成しない資料」として扱った。将来これらもあわせて、生産地や系譜関係を意識した、より



13世紀～14世紀前半頃 (1～9) S=1/8

1類(10・11) 2類(12・13) 3類(14・15) 4類(16・17) 5類(18～20) 6類(21・22) その他(23～27)

S=1/12(13・27はS=1/8)

第6図 沖縄出土の中国産陶器 (褐釉)

上位の分類概念（例えば博多分類における「群」設定のような）を用意する必要がある。

1類（10・11） 胴径に対して比較的広口で、肩にかけて略フ字状を呈する緩やかなナデ肩器形の多耳壺。逆L字状肥厚口縁、比較的長く立ち上がる頸部、幅広の縦耳を6個付す点で共通する。頸部の立ち上がりや耳の貼付位置・形状などに差異も認めるが、頸部～胴部中位に1～数条単位の界線や線刻による草花文、型起しによる龍文を施し、耳の外面に縦位凹線や獸面文を施すなど、装飾豊かな点も特徴的である。石英粒や黒色・褐色粒を含み、黄色～オリーブ色味を帯びた釉色のものが多い。復元資料は限られるが、首里城跡京の内など青磁V類との良好な共伴例がある。なお、大宰府耳壺IV-2類も縦耳の六耳壺で耳に凹線を施すなど、いくつか類似した特徴があり、示唆的である。

2類（12・13） 縦耳の大形四耳壺。直立気味に立ち上がる頸部に玉縁状の口縁がつき、肩～胴部上位に最大径が位置する。素地は粗粒で灰色を基調とし、砂礫や白色粒を多く含む点などで、（7・8）とも似ている。あるいは14世紀代におさまるのかも知れない。

3類（14・15） 横耳の大形四耳壺。器形は2類に似た肩部～胴部上位に胴最大径が位置するプロポーションだが、頸部から緩やかに立ち上がり曲線的に開口する。耳間に2～4字のスタンプが施される例が多い点も特徴的である。

4類（16・17） 上記3類と同様の横耳四耳壺だが、器形プロポーションおよび胴最大径の位置、口縁部断面観から3類とは区別した。胴部の中位付近に最大径位置が下がるナデ肩・算盤珠状を呈した器体に、無頸に近く太い玉縁状の口縁がつく。

3類・4類について ともに呂宋壺、南蛮などと呼ばれる四耳壺で、杉山分類の有耳壺I類（横耳）A型式に相当。全国で出土しているが遺跡出土例では15世紀後半～16世紀前半が多く（杉山1987）、その流入理由には茶陶の普及が指摘されている。3類の時期幅は明確ではないが、竹富町新里村西遺跡や首里城跡二階殿地区・京の内地区で出土しており、一方、4類は久米島カンジン原古墓群、与那国島嘉田地区古墓など近世古墓における出土例、本土では湯浅城跡などに類例があるようである。両者には時期差があるように思われ、4類は時期的には新しいように思われる。新安沈船資料や大宰府条坊跡SK004出土資料（大宰府分類耳壺IV-1類）に耳間にスタンプがある大形四耳壺などは、本稿3類との類縁性や系譜関係の蓋然性について留意される。

5類（18～20） 断面方形状の口縁部で特徴づけられる無耳壺。口縁部方向に窄まりながら立ち上がる短めの頸部に大きく脹らむ肩、底径が小さく不安定な器形プロポーションで概ね共通する。蓋受を意識したような口縁内端における突起の有無、略コ・ク字状を呈した口縁部断面観や頸部の立ち上がりなどバリエーションも認められ、さらに細分も可能と思われる。法量サイズにも幅がみられる。素地は、黄灰・橙色系の明るい色調に粉味を帯びた軟らかい印象を受けるものが多く、釉も茶褐色～暗褐色が殆どである。沖縄では普遍的に出土するグループである。

6類（21・22） 比較的安定した底部から直線的に開き、胴部上位で強く内傾して肩を形成、直立した頸部に断面三角形・逆L字状の口縁部がつく。無耳。肩～胴部上位に同心円状の叩痕が残る例も多い。素地は軟質で、橙色味を帯びた明るい色調が多く、釉調も上記5類と概ね共通する。

5類・6類について 管見では本土における類例は殆どなく、沖縄地域で特徴的にあるグループ。両者は器形や各部位の特徴から類別が可能だが、プロポーションや素地・釉に類似性も認める。5類は首里城跡二階殿地区や京の内地区など青磁V類主体の時期に多いが、後続のVI類主体遺跡では量的にかなり少ないとから、15世紀代に概ねおさまる。一方、6類は資料数が限定されるが、近世古墓からの出土が多く、また青磁V類主体の遺跡では類例が殆どない状況から、5類より後出する様相が窺える。ただ、両者が系譜関係で連なるものか、さらに検討を要する。

その他類を構成するに至らない大形壺 器形の特徴から、1～6類と区別されると思われるが、資料数が少ないと、または今回検討がまだ不十分で後考を期す必要があるものをまとめた。

(23) は、短頸の縦耳四耳壺で、大きく脹らむ肩部に対して底径は矮小で不安定な器形。口縁部形態などは異なるがプロポーションは5類に近く、時期的にも概ね並行するとみられる。(24・25) は、短頸・ナデ肩の器形に微弱な肥厚口縁がつく無耳壺。(26) は、縦耳を付す短頸の二耳壺。(25) と素地・釉調がほぼ同様であり同産地の蓋然性もある。5類や青磁V類とともに出土している。(27) は、きわめて短頸で算盤珠状を呈した器形の無耳壺。焼成堅緻で外面には叩痕が残る例が多い。湧田古窯跡など青磁VI類主体の遺跡・地区で散見的であるが認められる。

6. まとめ

14～16世紀の沖縄出土の貿易陶磁は、これまで紹介してきたように種類、量とも豊富である。紹介した陶磁器は、時期的変遷を把握するために重要な資料である中国産の青磁・白磁・青花・陶器に限っているが、この他にもタイ・ベトナム・朝鮮半島・日本本州からの陶磁器も出土する。本稿では深く触れないが、行政公刊の発掘報告書などでは、グスクが築かれる以前の11～13世紀も含めて、16世紀までを広義に「グスク時代」と表現することが多い。その始期は奄美諸島一沖縄諸島一先島地域（宮古・八重山諸島）といった南西諸島の三つの地域において、金武が3点セットとする長崎産滑石製石鍋・徳之島産カムィヤキ須恵器・中国産陶磁器といったモノが共通して出土する時期に求められると考えられる（金武 1989）。

そこで、このいわゆるグスク時代である11～16世紀において、県内の集落跡・グスクの出土陶磁器と在地土器やカムィヤキも含めた器種組成について、I～VI期に区分して本論を総括したい。年代観の根拠については、I～III期は現在、宮城らが試みている在地土器の研究を軸に、大宰府・博多における陶磁器の年代観に概ね準拠している。IV期は新安沈船資料より後出であり、V期はその下限を首里城跡京の内跡資料により抑えることができる。このうちIV・V期については、『歴代宝案』『明実録』などに記される明と交易が始まり琉球が隆盛した時代であり、県内で最も多くの陶磁器が出土している。続くVI期についても依然陶磁器の出土量は多いものと推測される。特に地域的には先島の集落遺跡の隆盛はこの時期に求められる可能性があり注意していきたい。しかしVII期になると前代よりも陶磁器そのものの出土量が少なくなる傾向が見られる。このため、分類においても、日本本州の小野分類などの年代観に準拠して並行関係を求めている。

I期 (11世紀後半～12世紀前半) 太宰府分類白磁碗IV、V、VI、VI-4、VII、VII-2、カムィヤキA群（新里 2006）、方形把手の付くグスク土器（石鍋模倣土器）を指標とする。いわゆる大宰府編年のC期で白磁単純期の資料である。良好な資料としては、北谷町砂辺サーク原遺跡、後兼久原遺跡（1996年度調査区）第V層では上記のセットがほぼ単独的に出土する良好な例である。奄美大島ではフワガネク（外兼久）遺跡群、先島の波照間島の大泊浜貝塚なども同様の組成が見られる。先史時代の琉球列島は島々で独自性の強い個性的な文化を育んでいたが、この時代になってはじめて同じ文化圏を形成するのである。また、この時期を遡る遺跡として喜界島の城久遺跡群があり、越州窯青磁・九州産土師器が出土する10世紀～12世紀頃の大集落跡で、文献で描かれる大宰府の南島経営を思わせる。今後、さらに注目されよう。

II期 (12世紀半ば～13世紀半ば) 龍泉窯系青磁碗I類、同安窯系青磁、カムィヤキA群及び石鍋模倣土器の把手が退化した土器を指標とする。しかしながら、I期と連続する遺跡が多く陶磁器組成による明確な区別を見出すことは難しく、在地土器研究と良好な出土例を追求していきたい。標式とし

ては、いわゆる沈船関連資料と考えられる倉木崎海底遺跡（宇検村教育委員会 1999）及び久米島ナカノ浜海底（手塚ほか 2005）で大宰府分類龍泉窯系青磁碗 I - 4 を主とし、同小碗 I - 2・3、同安窯系青磁碗 I - 1 が出土する。12世紀後半～13世紀初頭の遺物を多出する好例で、集落跡でも類似する事例の出土を期待したい。

Ⅲ期（13世紀後半～14世紀半ば） 龍泉窯系青磁碗Ⅱ・Ⅲ類、白磁A・C1・C2・F群、カムイヤキB群、沖縄島では把手を付さない薄手の在地土器を指標とする。本期の良好な資料として、シナグスクや今帰仁城跡主郭IX層からVII層がある。前者の白磁はAとF群で、後者はこれにC1・C2群が加わる。他にも類似する遺跡として拝山遺跡、ビロースク遺跡がある。陶器はこの段階前後から増加し始め、大宰府・博多で見られるもの（第6図1～6）を少量認める。当該期は、石積みグスクの形成初期にあたり、前段のI・II期とは大きく時代を画するものと考えられる。

IV期（14世紀半ばから15世紀初め） 青磁IV・V類、白磁C3・D群、陶器3類を指標とする。本期は、在地土器・カムイヤキは急速に減少し中国陶磁器が多出する。沖縄島に限ればグスク十器の生産はお

第1表 沖縄におけるグスク・集落遺跡の出土陶磁器等の傾向と画期

*在土地器は「第1様式」「第2様式」「第3様式」の型式変化を想定している。大雜把に「方形把手」→「瘤突起」→「把手無し」の型式変化と、「鍋+甕」→「鍋+甕+壺」→「鍋+甕+壺+碗」の様式変化を想定する。詳細は機会を改めて、ここでいう1・2・3は各遺跡の主体様式を示す。

※マイナイティスは朝日、堀真、益貴、又、様よりA群とB群に分類する分類案を採用した。伊仙町教委2005、新里2005。

○古墳略語については、土体となる貝殻、
遺跡、遺構の名（^ウ）を、奄美諸島、（先）
宮古・八重山諸島を含む先島諸島、記載の無いものは沖縄諸島の遺跡である。

※文献は発掘報告書の発行シリーズ番号を「県・埋文・市町村」の次に標記した。なお末尾の数字は発行年である。

（二）在本办法施行前，已经取得《道路运输经营许可证》的客运经营者，应当在本办法施行之日起6个月内，按照本办法的规定重新申请办理《道路运输经营许可证》。

およそ途絶えたものと考えられる。標式としては、青磁IV類、白磁C 2・C 3群が多く見られる拝山遺跡、浦添城跡Jh試掘グリッド第3層、今帰仁城跡VI層～II層下部などの資料は、古相段階と考えられる。一方、青磁V類が多い越来城、佐敷グスク、久米島オーハ島海底遺跡、首里城跡二階殿地区S B 4下層などは新相段階と考えられる。この段階になって白磁D群も一定量出土するものと思われる。さらに、青磁の大型壺・瓶等の優品、茶壺等の稀少器種も出土し始める。天目の多くはこの時期に求められると考えられるが、次代にも多く残るものと思われる。今帰仁城跡VI層出土の高麗青磁の八角杯は、朝鮮半島の陶磁器の初例で、越来グスクはベトナム陶磁（青磁）の初例と考えられる事例である。

V期（15世紀前半・半ば） 青磁V類、白磁D群、青花碗B 1群、陶器は5類を指標とする。1453年か1459年の火災資料とされる首里城跡京の内跡SKO 1、同二階殿地区落ち込みを参考とする。上記2例は首里城という王宮で使用された特殊な陶磁器のセットであるが、この他にも久米島具志川城跡や、勝連城跡、青花の出現期と考えられ、元青花は前段階に搬入されていると思われるが、出土状況としては今のところ本期に共伴する例が多い。付言すると中国陶磁は青磁、白磁、青花に限らず諸種の陶磁器が見られることも特徴である。瑠璃釉磁器、紅釉磁器、翡翠釉白磁鉄絵陶器などがあり、いずれも壺や瓶などの希少品となる。その他、東南アジア産と本土産陶器の出土も当該期に顕著となる。タイ産の陶器は壺等で、中国産とほぼ同程度認められる。ベトナム産は青花を中心に少量出土する。本州産はこのV期と想定される資料が微量だが認められ、備前・大和産に近い瓦質土器が搬入されたと考えられる。本期になると、特に青磁・元青花の優品が多く出土する点が注目される。これは当該期の琉球が中国・日本・東南アジアと盛んに中継貿易を行ったことを示している。

VI期（15世紀後半～16世紀前半） 青磁VI類、白磁E群、青花碗C・D群、皿B 1群小型・C群、陶器6類が指標となる段階である。本期の資料も数多く出土するが、次のVII期のものと共に伴するところが大半で、良好な出土状況には恵まれていない。また、青花で見ると、碗C・D群が最も多く、宮古・八重山でも広く出土している事実は、このVI期の傍証と考え、琉球国全域で盛行していた証拠と見たい。古相段階として、山梨県新巻本村出土資料の組成に近い首里城跡御内原地区SDO 1がある。最も豊富な良好資料は、青花B 1群などの古相のものを含む湧田古窯跡行政棟I地区3・4層があり、沖縄産瓦質土器が共伴し沖縄の窯業開始期になる可能性がある。IV期と同様に、備前・北部九州産瓦質土器、タイ産は褐釉に加え鉄絵、ベトナム産では色絵・白磁が見られる。また、いわゆる交趾三彩は当該期に多出する傾向にあると目される。

VII期（16世紀半ば～後半） 青磁VII類、景德鎮産青磁、青花碗皿B 2・E群、白磁E群、陶器4類を指標とする。また、粗製青花C・D群と共に伴う例が目立つ。本期の指標である本州で多く出土する青花E群は宮古・八重山でも見られるが、VI期よりも圧倒的に少ない。その中では、今帰仁城跡主郭I層や志慶真門郭は、本期の資料も定量出土している。これらの遺跡では、独特的な青花C'群が出土することから、青花C'群の年代的位置づけは本期に比定される可能性が高いことを指摘しておく。今帰仁ムラ跡や天底後原遺跡などが代表的だが、数多くの遺跡はVI～VII期に継続して営まれたものと言えよう。大坂城跡・堺環濠都市遺跡等で見られるベトナム産無釉長胴壺や、算盤珠形のタイ産陶器壺はほとんど出土しないことから、文献でシャム（タイ）との交易がなくなった1570年の状況を類推させる。

VII期以降（16世紀末～17世紀前半ごろ） 文献史によれば薩摩侵略の1609年を古琉球と近世琉球の大きな画期とする。この前後の良好な資料は明確ではない。ただ、当該期の遺跡である大坂城跡豊臣後期で出土する青花碗B 2群・I・J群、皿F群、唐津の出土が本期の存在を示すものと思われる。青花碗B 2・I群、皿F群は今帰仁城跡や天界寺跡で一定量出土する。唐津は湧田古窯跡行政棟I地

区1・2層や仲間村跡B地点などで出土しているが、量的には少ない。また、湧田古窯跡行政棟Ⅱ地区8・9層は、粗製青花のJ群が多数を占め、瓦質土器に類する擂鉢を有する初期の沖縄産無釉陶器が出土する。本例は、沖縄産無釉陶器が17世紀前半頃には既に生産されていた可能性があることを、考えることのできる資料である。

以上、沖縄における出土陶磁器の様相を、首里城跡や今帰仁城跡などの資料を基礎として素描した。実際には、現在確認されている南西諸島の島々の特徴を今後より良好な出土状況を抽出し具体的にするとともに、遺構等の様相も加えて、精緻な検討を重ねていく必要がある。これについては今後の課題である。沖縄における陶磁器については、その豊富な出土量から多くの研究が行われてきた。既に周知された事実の点も多いが、陶磁器の分析作業を進める中で基礎となる分類概念を整理し、今後も研究を継続的に行っていきたいと考えている。

なお執筆分担は、1・3・4.瀬戸 2.玉城・仁王 5.安座間・松原 6.宮城が執筆した。しかし、青磁については冒頭に触れたように10数回の議論を重ねたもので、大枠については執筆メンバーの総意と考えてもらってよい。また、この議論には、安和吉則、新垣力、城間肇、城間宣子、片桐千亜紀にも参加してもらい、多大なる意見・協力が元となっている。末筆となりますが、次の方々からご教示、資料提供を頂き本論をまとめることができました。記して感謝申し上げます。上原靜、上里隆史、亀井明徳、金武正紀、具志堅亮、新里亮人、田中克子、中村愿、比嘉清和、水澤幸一、森本朝子、山本正昭（五十音順敬称略）。

本稿は、柴垣勇夫編「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」資料集（第3分冊）に掲載するものに、若干の訂正・補足を加えて転載したものです。

(せと てつや：沖縄県教育庁文化課専門員)
(におう こうじ：浦添市教育委員会文化課主事)
(たましろ やすし：今帰仁村教育委員会社会教育課主事)
(みやぎ ひろき：今帰仁村教育委員会社会教育課主事)
(あざま みつる：金武町教育委員会社会教育課主事)
(まつばら さとし：北谷町教育委員会社会教育課主事)

第1～6図 掲載遺跡一覧

今帰仁城跡志慶真門郭（青磁-1・6・7・13・21・25・53・66 白磁-4・5・15・31・46・51 青花-20）
同主郭（青磁-2～5・8・9・15・16・18～20・22・24・26・28・33・34・70 白磁-2・3・12・14・16～19・21・23・29・39・44・48～50 青花-5～9・11・12・15～18・21・30・31 褐釉-20・25・26） 今帰仁城跡周辺遺跡<今帰仁ムラ跡>（青磁-12・71） 屋良グスク（青磁-14 白磁-13・26）
首里城跡二階殿地区（青磁-10・27・35・42・48・50・54・57・60 白磁-7～9・32・34・37 褐釉-7・8・13） 首里城跡京の内地区（青磁-11・36・37・40・41・43～47・49・51・52・55・56・58・59 白磁-6・27・28 青花-1・2・4 褐釉-9・10・11・15・18・19・23・24） 首里城跡鎖之間地区（青磁-73・75） 首里城跡下之御庭地区（白磁-35・43 青花-19・22・33） 島ノ上原遺跡（青磁-17） 真志喜森川原遺跡（青磁-23） 越来城跡（青磁-30・32 白磁-20） 慶田崎遺跡（青磁-31） 湧田古窯跡（青磁-61～65・67～69・72・74・76・78 白磁-22・23・25・30・38・41・47 青花-3・14・23・24・29・32 褐釉-27）
天底後原遺跡（青磁-77） 銘苅原遺跡（白磁-1・11） ピロ・スク遺跡（白磁-10） 天界寺跡（白磁-33・40 青花-10・13・25～28）
尻並遺跡（白磁-36） 安仁屋トゥンヤマ遺跡（白磁-42） 円覚寺跡（白磁-45） 新里元島遺跡（褐釉-1・3）

奄美・倉木崎海底遺跡（褐釉 - 2・5）後兼久原遺跡（褐釉 - 4）稲福遺跡（褐釉 - 6）新里村西遺跡（褐釉 - 12・14）久米島カンジン原古墓群（褐釉 - 16）久米島ヤッチのガマ（褐釉 - 21）与那国島嘉田地区古墓群（褐釉 - 17）ヒヤジョー毛遺跡（褐釉 - 22）

出土陶磁器掲載文献

- 島弘ほか 1987『伊良波東遺跡』豊見城村文化財調査報告書第2集
高梨修ほか 2003『小湊フワガネク遺跡群』名瀬市文化財叢書四
山城安生ほか 2003『後兼久原遺跡』北谷町調査報告書第21集
金武正紀ほか 1986『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県文化財調査報告書第74集
金武正紀ほか 1997『銘苅原遺跡』那覇市文化財調査報告書第35集
鶴元寿充 2001『伊佐前原第一遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第4集
田村晃一ほか 1999『倉木崎海底遺跡』宇検村文化財調査報告書第2集
宮城弘樹ほか 2004『シイナグスク』今帰仁村文化財調査報告書第17集
當眞嗣一ほか 1985『浦添城跡発掘調査報告書』浦添市文化財調査報告書第9集
當眞嗣一ほか 1980『佐敷グスク』佐敷村教育委員会
金武正紀ほか 1983『ビロースク遺跡』石垣市文化財調査報告書第6号
宮城利旭ほか 1988『越來城』沖縄市文化財調査報告書第11集
宮城弘樹ほか 2004「南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎調査」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
金城 透ほか 2005『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第29集
渡久地真ほか 2002『中城城跡』中城村の文化財第4集
金城亀信ほか 1998『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県文化財調査報告書第132集
金武正紀ほか 1983『今帰仁城跡発掘調査報告書 I』今帰仁村文化財調査報告書第9集
金武正紀ほか 1991『今帰仁城跡発掘調査報告書 II』今帰仁村文化財調査報告書第14集
大城秀子ほか 1999『斎場御嶽』知念村文化財調査報告書第8集
亀井明徳ほか 2005『具志川城跡発掘調査報告書 I』久米島町文化財調査報告書第2集
大濱永亘 1999『八重山の考古学』先島文化研究所
亀井明徳ほか 1982『沖縄出土の中国陶磁（上）』沖縄県立博物館
座間味政光ほか 1987『拝山遺跡』沖縄県文化財調査報告書第83集
金城亀信ほか 1991『上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第98集
島袋 洋ほか 1993『湧田古窯跡（I）』沖縄県文化財調査報告書第111集
島袋 洋ほか 2001『天界寺跡（I）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第2集
島袋 洋ほか 2002『天界寺跡（II）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第8集
山本正昭ほか 2006『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第34集
羽方 誠 2005『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集
上地克哉 2005『津嘉山古島遺跡 仲間村跡A地点 仲間村跡B地点 津嘉山クボ一遺跡』南風原町文化財調査報告書第4集
金城亀信ほか 1991『糸数城跡』玉城村文化財調査報告書第1集

参考・引用文献

- 新垣 力ほか 2005「沖縄における14世紀～16世紀の中国産白磁の再整理」『沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋

蔵文化財センター

- 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No. 2
1991 「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類」『関西近世考古学研究』 I
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No. 2
- 金武正紀 1988 「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No. 8
1989 「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号
1990 「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320 ニュー・サイエンス社
2005 「舶載陶磁器からみる琉球の海外交易」『やちむん会誌』第14号
- 金城亀信 2000 「青磁ラマ式蓮弁文碗について」『貿易陶磁研究』No.20
- 太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』太宰府市の文化財第49集
- 柴田圭子ほか 1998 『湯築城跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 第9集
- 新里亮人 2005 「今帰仁城跡出土のカムィヤキ」『今帰仁城跡周辺遺跡II』今帰仁村文化財調査報告書第20集
- 杉山 洋 1987 「褐釉系陶器の受容と展開—四耳壺を中心として—」『東アジアの考古と歴史（下巻）』岡崎敬先生退官記念事業会
- 田中克子 2001 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その一）博多出土の薄胎施釉陶器（茶入）」『博多研究会誌』第9号
2002 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その二）福建省閩江流域、及び以北における窯跡出土陶磁器」『博多研究会誌』第10号
2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号
- 田中克子・森本朝子 2004 「沖縄出土の貿易陶磁の問題点」『グスク文化を考える』新人物往来社
- 田中克子・高島裕之 2004 「景德鎮・明代瑤里窯跡出土の陶磁器」『亞州古陶瓷研究』 I
- 水澤幸一 2004 「15世紀前半から中葉の貿易陶磁様相」『貿易陶磁研究』No.24
- 宮城弘樹ほか 2005 「出土遺物の組成」『今帰仁城跡周辺遺跡II』今帰仁村文化財調査報告書第20集 今帰仁村教育委員会
- 森 毅 1995 「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通一大坂の資料を中心に—」『ヒストリア』第149号
- 森 達也 2001 「褐釉長胴四耳壺の生産地と年代について」『鷹島海底遺跡V』鷹島町文化財調査報告書第4集
- 森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No. 2
- 森村健一 1995 「福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年—いわゆる「福建・廣東産青花」「ソフトウ」「呉須手・赤絵」の窯跡陶片と日本の遺跡出土品の比較—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』 3
2005 「14・15世紀の龍泉窯系青磁碗」『産業・社会・人間』羽衣国際大学
- 横田健次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』 4
- 森本朝子 1984 「博多出土貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV 博多』福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集別冊
- 山本信夫 1990 「大宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究』No. 10
- 山本信夫・横田賢次郎・森本朝子 1989 「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器—森田勉氏の研究成果によせて—」『貿易陶磁研究』No. 9
- 吉田 寛 2006 「豊後府内における天正十四年（1586）一括資料について—中世大友府内町跡第3次調査S X 210の評価と検討」『貿易陶磁研究』No.26

首里城跡御内原西地区発掘調査出土瓦の胎土分析とその検証

Temper Analysis and Verification of Artifacts Excavated in Ouchibaru Site,
West Sector, Shuri Castle Site

山本正昭、上田圭一、矢作健二、石岡智武
Yamamoto Masaaki, Ueda Keiichi, Yahagi Kenji, Ishioka Tomotake

ABSTRACT : In 2006, the excavation of the west sector of Ouchibaru site in Shuri Castle yielded various artifacts such as roof-tiles from Korea, Yamato (the Japanese main islands) and China, as well as clay tiles (sen), tile-ware pottery, local ceramics and other ceramics. Temper analysis was carried out for some of these artifacts in order to determine the area of production, with a special focus on the Korean and Japanese roof-tiles. The method of analysis is the optical observation of thin sections. The density and grain assemblage of sands, mineral fragments and micro-fossils were the main subject of observation. From comparing the specimens, the mineral assemblages of Korean, Japanese and Chinese roof-tiles were found to be similar. Compared to the roof-tiles and Okinawa ceramics, the Gusuku pottery showed much variation in mineral assemblage, suggesting that the pottery material tends to reflect its local production and that the clay source of roof-tiles and Okinawa ceramics was possibly limited to a certain district. There are only a few examples of temper analysis for the roof-tiles, pottery and Okinawa ceramics. These results should contribute to the study of production sourcing in the future.

はじめに

平成 17 年度に沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの受託事業で首里城跡の御内原西地区、かつて後之御庭、世添御殿、寄満、中門、門番詰所といった施設があった場所の発掘調査を実施した（図 1、2）。既に報告書でその詳細については触れたので本稿では詳述しないが、調査の際に後之御庭の下層から大量の高麗系、大和系瓦の小破片資料が出土した。共伴資料から 14 世紀後半から 15 世紀前半に相当し（沖縄県立埋蔵文化財センター 2007）、これら高麗系、大和系瓦の使用年代を考えていく上で重要な問題を提起していた。中世相当期の沖縄本島出土の瓦では未だこのような調査事例は少なく、使用そして制作年代についても未だ確定していないのが現状である。それに伴って琉球列島における建築史や土木技術史の問題まで絡んでくるが、今回は瓦製作技術者の問題に絡ませて当該地区出土の高麗系、大和系瓦を中心に胎土分析を通してその製作地について焦点を当てていくこととする。

1. 問題点の整理

琉球列島における中世相当期の瓦研究については伊波普猷が『おもろそうし』と「癸酉年高麗瓦匠造」銘の瓦片から沖縄本島外から輸入したと解釈したのが始まりである（伊波 1911）。その後も真境名安興、比嘉常景や東恩納寛淳、田辺泰、巖谷不二雄らによって、その製作地に関する問題が取り上げられるようになった。（註 1）。

高麗系瓦に関しては発掘調査による資料で初めて報告し、その解釈を行ったのは鎌倉芳太郎である。鎌倉は浦添ガスク出土の高麗系瓦の製作地について高麗人が琉球へ逃れ、その中に瓦匠がいて製作し

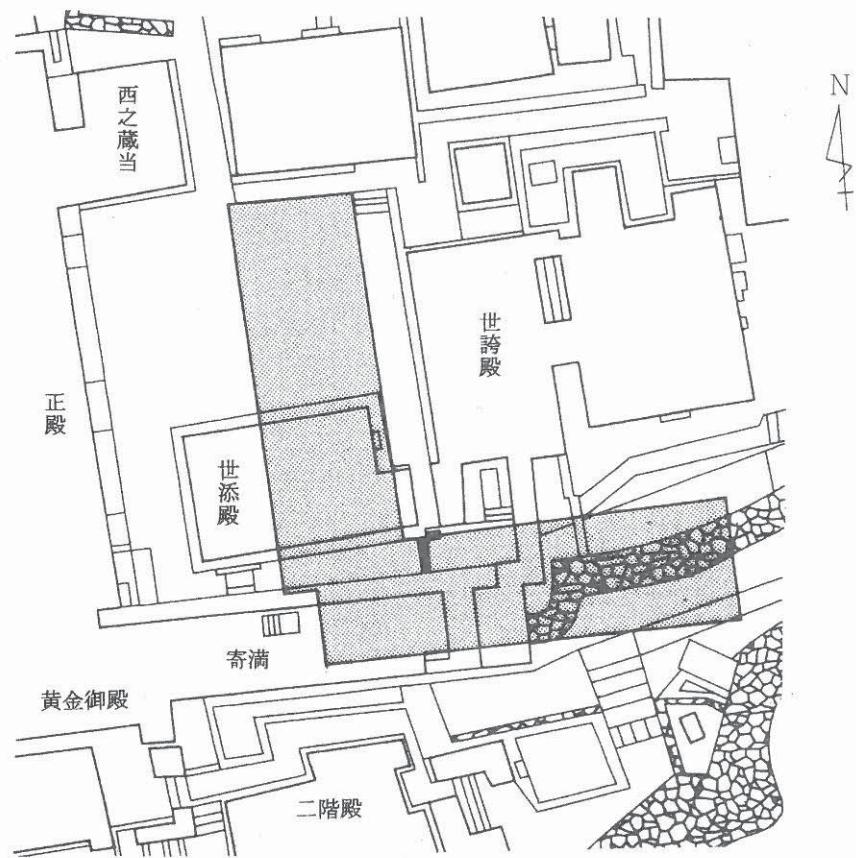


図1 「沖縄県首里旧城図」御内原西地区（那覇市歴史資料館蔵をトレース）

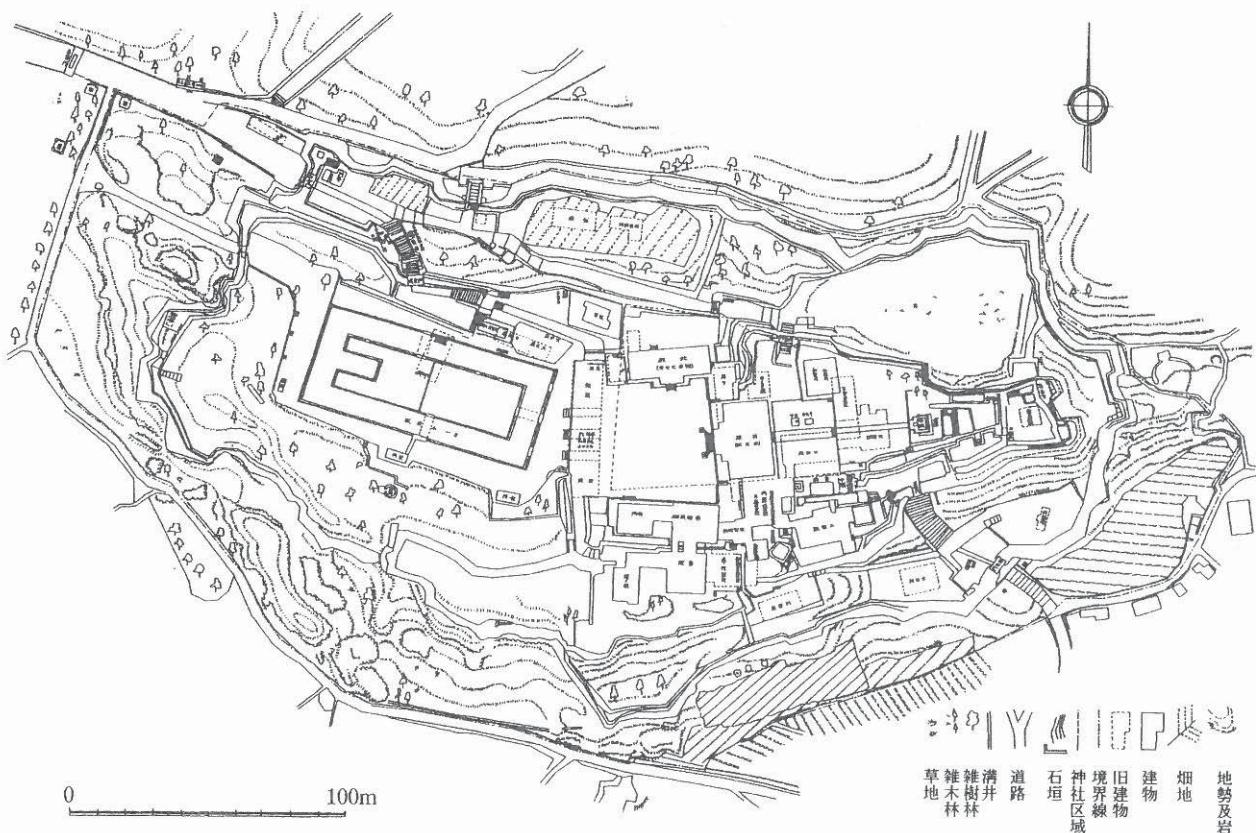


図2 首里城平面図（昭和6年頃、阪谷良之進原図、沖縄県立図書館蔵）

たとし、実際に瓦を観察して「癸酉年高麗瓦匠造」銘の表現が大まかであることから琉球式の雰囲気が漂うと評価している（鎌倉 1976）。その後、大川清が高麗で製作した瓦を琉球へ輸出する際にその製作者を明確にさせるため、と琉球で製作した瓦であるが技術者の出自は高麗であることを明確にさせるためと2つの想定をおこない、後者の可能性が高いとしている（大川 1978）。その後は『高麗史』の記載から高麗人の亡命渡来があり得る事を踏まえて大川の説を支持した三島格（三島 1980）、造瓦技術の系統について考察した関口広次（関口 1976）や浦添グスクの古瓦を検証し、大川の説を支持した小渡清孝（小渡 1986）、当時の時代背景から瓦が琉球内において焼成されたと解釈した西谷正（西谷 1981）らによって製作地の比定に止まらず、瓦技術の導入とその背景、加えて技術系譜の問題へと論点は移行していく。その過程において製作地が沖縄本島内であるという解釈が浸透していくようになっていった点は注目される（註1）。また発掘調査の成果においては宇茂佐古島遺跡から出土した高麗系瓦に不良品が含まれていることから、高麗製作であることに疑問を投げかけている（名護市教育委員会 1992）。近年では上原靜が沖縄諸島出土の高麗系瓦の特徴を掲げ、沖縄の独自性を有した形態そして大和系瓦に見られる文様が見られることから、高麗から沖縄へ技術導入はストレートになされその後、現地工人によって技術継承されていったと結論付けている。

一方で大和系瓦に関しては高麗系瓦に比べて製作地について触れた論考は極めて限られる。本格的に大和系瓦について考察した関口は首里城跡、浦添グスクで確認される高麗系瓦が勝連グスクで確認される大和系瓦に造瓦技術へ系譜が繋がることを成形技法から導き出した。このことは高麗系瓦と大和系瓦は別地域から搬入されたものではなく、両瓦造りの技術融合が行われていた事を意味する（関口 1976）。そして暫く大和系瓦に関する考察は見られなかったが、上原靜が叩き具、整形技法、焼成等において高麗系瓦と大和系瓦が類似した点が見られることから極めて近い若しくは同じ地における造瓦技法を替えた製作瓦が存在していたことを想定した（上原 1996）。上原はその後考察を深めて、瓦表面に見られる剥離材に珊瑚砂が観察されることから生産地を南島であることを想定している。更に浦添グスクから珊瑚砂が付着する高麗系瓦が確認されている事実をもって、大和系瓦と高麗系瓦の技術融合があったこと、加えて生産地や搬出地が同所であることを指摘している（上原 1997）。また大和系瓦は造瓦技術と意匠面において日本本土の中世相当期の瓦に見られない独自の変化が窺われることを指摘し、大和系瓦の造瓦技術は大和からの渡来人によるものなのか、日本本土で技術を学んだ南島人によるものか、という想定を行っている（上原 2000a）。何れにせよ沖縄本島内で製作されたものであるとの見解が全面的に押し出されている。

高麗系、大和系瓦の胎土分析では最初に宇茂佐古島遺跡出土の高麗系瓦とその他8遺跡から採取された高麗系瓦の蛍光X線分析を名護市教育委員会が奈良教育大学の三辻利一に委託して実施している。分析結果は、胎土の種類はいくつかありそれが遺跡や年代差によるものではない、また土の産地も複数箇所あることから高麗製作であるか否かの判断はできないとしている。加えて、沖縄産陶器の分析も同時にを行い、高麗系瓦との比較を行ったが別の胎土であることが判明し、高麗系瓦が沖縄本島製作であるか否かの結論も引き出すことができなかった（三辻 1992）。更に1999年には宇茂佐古島遺跡出土の大和系と高麗系を含む県内遺跡9カ所45点為又採集の1点、計46点の蛍光X線分析を名護市教育委員会が（株）パリノ・サーヴェイに委託して行われている。その内容としては大和系瓦と高麗系瓦の鉱物組成に明瞭な違いが見られないとの結果が出され、そして出土地や刻印ごとに土の材質が微妙に異なるという興味深い成果が出されている。最近では浦添ようどれ出土の高麗系・大和系瓦の薄片観察、蛍光X線分析を行い、砂粒の種類構成がほぼ同様であるという結果が得られている。このことから同様の地質学的背景を有する地域内の土により作られた可能性を指摘している。さらに沖縄本島

表 1. 分析試料一覧

試料番号	遺物番号	調査区等	出土地点・層位等	種類	器形	時期	産地
1	1	大城グスク	大城グスク	瓦質土器	鉢	15世紀	本州(大和?)
2	2	二階殿	首里城二階殿	瓦質土器	風炉	15世紀	本州(大和?)
3	3	下之御庭他	首里城広福門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州(北部九州?)
4	4	下之御庭他	首里城木曳門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州(大和?)
5	5	下之御庭他	首里城広福門	瓦質土器	鉢	16世紀	本土系
6	6	下之御庭他	首里城木曳門	瓦質土器	鉢	16世紀	本土系
7	7	下之御庭他	首里城木曳門	土器	皿	17世紀	本州(南九州?)
8	8	下之御庭他	首里城木曳門	土器	皿	17世紀	本州(南九州?)
9	9	下之御庭他	首里城下之御庭	陶質土器	蓋	15~16世紀	沖縄?
10	10	下之御庭他	首里城下之御庭	陶質土器	蓋	15~16世紀	沖縄?
11	11	下之御庭他	首里城下之御庭	陶質土器	蓋?皿	18世紀	沖縄
12	12	下之御庭他	首里城木曳門	瓦質?土器	火炉	18世紀	沖縄
13	13	下之御庭他	首里城下之御庭	瓦質土器	鉢	17世紀	沖縄
14	14	下之御庭他	首里城木曳門	瓦質土器	鉢	17世紀	沖縄
15	15	下之御庭他	首里城木曳門	土器	焰焰	17世紀	本州(南九州?)
16	1H17	御内原西	D-10(暗褐色土)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
17	2H17	御内原西	E-8(畦1層)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
18	3H17	御内原西	E-8(畦1層)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
19	4H17	御内原西	表採	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
20	5H17	御内原西	表採	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
21	6H17	御内原西	A-2(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
22	7H17	御内原西	E-9(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
23	8H17	御内原西	E-9(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
24	9H17	御内原西	E-9(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
25	10H17	御内原西	E-9(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
26	11H17	御内原西	E-9	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
27	12H17	御内原西	カクラン	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
28	13H17	御内原西	カクラン	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
29	14H17	御内原西	C-4(カクラン)	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
30	15H17	御内原西	カクラン	沖縄無釉陶器	—	—	沖縄
31	16H17	御内原西	集石遺構内(暗褐色砂質土)	土器	—	—	—
32	17H17	御内原西	B-4(D)	土器	—	—	—
33	18H17	御内原西	B-5-(D)	土器	—	—	—
34	19H17	御内原西	B-5-D	土器	—	—	—
35	20H17	御内原西	B-5-(D)	土器	—	—	—
36	21H17	御内原西	集石遺構内(暗褐色砂質土)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
37	22H17	御内原西	B-5-(A)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
38	23H17	御内原西	B-5-(A)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
39	24H17	御内原西	B-5-(A)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
40	25H17	御内原西	B-5-(A)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
41	1H17	御内原西	北地区(カクラン)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
42	2H17	御内原西	北地区(カクラン)	高麗系瓦	—	14世紀	—
43	3H17	御内原西	北地区(カクラン)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
44	4H17	御内原西	北地区(カクラン)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—
45	5H17	御内原西	北地区(カクラン)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
46	6H17	御内原西	北地区(カクラン)	大和系近世瓦	—	—	—
47	7H17	御内原西	北地区(カクラン)	高麗系瓦	—	14世紀	—
48	8H17	御内原西	北地区(カクラン)	不明瓦(大和系?)	—	—	—
49	9H17	御内原西	北地区(カクラン)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
50	10H17	御内原西	北地区(カクラン)	不明瓦(大和系?)	—	—	—
51	11H17	御内原西	北地区(カクラン)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—
52	12H17	御内原西	北地区(カクラン)	高麗系瓦	—	14世紀	—
53	1H17	御内原西	北地区(カクラン)	セン	—	—	—
54	2H17	御内原西	北地区(カクラン)	セン	—	—	—
55	3H17	御内原西	北地区(カクラン)	セン	—	—	—

* 試料番号 1 ~ 15 の記載事項は、埋文センターより送付された試料表のもの。

** 試料番号 16 ~ 40までの記載事項は、サンプル袋の記載をそのまま写したもの。

*** 試料番号 41 ~ 52 には記載事項が全くなかったため、便宜的に通し番号を付した。

内の地質との比較検討を行った結果、本部半島北部、羽地付近の本部半島頸部及び名護市以南の太平洋岸、沖縄市から北谷にかけて分布する砂礫層に比定できるとした（浦添市教育委員会 2005）。この報告の中では日本本土や韓半島との比較検討を行っていないため、あくまで可能性の範囲で止めているが、極めて具体的な形で沖縄本島内において製作されたことを示唆させる結果を導き出していると評価できる。

言うまでも無いが高麗系、大和系瓦は窯跡が確認されていないため、その製作地については長らく問題とされており、ほとんどの論考もしくは報告の中でこのことが今後の課題として掲げられている。現時点では窯跡の確認を急務とするが、上記のような胎土分析による製作地の特定も同時に進めいくことにより、生産地と消費地との関係をより厳密に考察することができる。また、未だ高麗系と大和系瓦共に不明な部分が多いため、モノとしての実態を把握していくことも窯跡の確認と同様に急務であると言える。

これらのことから以下に首里城跡御内原西地区出土の高麗系、大和系瓦の胎土を構成している砂や粘土の鉱物組成、岩石片の種類さらには砂粒の粒径組成を分析し、製作の実態について検証していく。またより具体的な製作状況の一面を解明するために沖縄本島産の土器、明朝系瓦、沖縄産陶器、陶質土器そして、大城グスク、首里城跡二階殿、広福門、木曳門、下之御庭地区から出土した資料も同様に分析を行い、比較検討の材料とした。

2. 分析方法

試料は、大城グスクより出土した 15 世紀とされる瓦質土器片 1 点、首里城跡より出土した土器片 29 点と瓦片 22 点および塙片 3 点の合計 55 点である。首里城跡の試料のうち、40 点は平成 17 年度に発掘調査の行われた御内原西地区からの出土品であり、他は二階殿地区からの出土品 1 点、広福門地区からの出土品 2 点、木曳門地区からの出土品 7 点、下之御庭地区からの出土品 4 点である。また、種類別では、15 世紀および 16 世紀とされた瓦質土器 5 点、17 世紀および 18 世紀とされた瓦質土器 3 点、15～16 世紀および 18 世紀とされた陶質土器 3 点、沖縄産無釉陶器とされた土器 10 点、単に土器とされた試料 8 点、明朝系瓦 7 点、高麗系瓦 3 点、大和系古瓦 9 点、大和系近世瓦 1 点、不明瓦 2 点である。各試料は便宜的に試料番号 1～55 を付した（註 2）。

以上、試料の各属性を一覧にして表 1 に示す。

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光 X 線分析が最もよく用いられている方法である。今回の試料のように比較的粗粒の砂粒を含み、低温焼成と考えられる土器の分析では、前者の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。したがって、ここでは薄片観察法による胎土分析を行う。以下に手順を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に 0.03mm の厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

データの呈示は、松田ほか (1999) が示した仕様に従う。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて 0.5mm 間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により 200 個あるいはプレパ

ラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

さらに今回の薄片観察では、砂に関わる情報として、石英粒の円磨度も求めた。対象は、偏光顕微鏡下で判定可能で特に主体をなす粒径の極細粒から中粒までの石英粒であり、円磨度の表示には、Krunbein(1941)による円磨度印象図(図9)を用いた。

3. 分析結果

薄片観察結果を表2、図3～8に示す。各試料に認められる主な鉱物片は、石英と斜長石であり、これらに次いでカリ長石がやや多い。他には、角閃石、白雲母、黒雲母および不透明鉱物がいずれも微量認められ、さらに試料によって緑レン石やジルコンが微量認められた。岩石片では、多くの試料にチャート、多結晶石英、結晶片岩、千枚岩が微量～少量認められ、試料によっては頁岩、砂岩などの堆積岩、軽石や凝灰岩および火山ガラスなどの火碎物、流紋岩・ディサイト、安山岩、花崗岩類、花崗斑岩、ひん岩などの火成岩、变成岩である緑色岩などが微量伴われる。ただし、一部の試料には、火山ガラスを非常に多く含むものや石灰岩が含まれるものもある。さらには、有孔虫、珪藻、植物珪酸体などの微化石類も試料によっては微量ふくまれる。今回の試料では、珪藻化石が比較的多く含まれる試料が認められている。なお、多結晶石英としたものは、おそらく花崗岩類に由来する碎屑片かあるいは堆積岩や变成岩中に形成されている石英脈の破片であると考えられる。

一方、胎土中の砂粒の粒径組成では、試料によってモードとなる粒径が異なり、中粒シルトから細粒砂までの各粒径にわたる。また、ヒストグラムのピークが不明瞭なものや2つのピークを示すものなどが認められる。

石英の円磨度については、ほとんどの試料において、非常に角張っていることを示す0.1または0.2がピークとなるが、中にはこれらよりやや丸みを帯びた0.3がピークとなる試料も認められる。

ここでは、上述した各試料の胎土中の鉱物片、岩石片の種類構成と砂の粒径組成および石英の円磨度のそれについて、試料間に認められる共通性を抽出し、以下のようなグループの設定をすることことができた。

<鉱物・岩石組成>

A類：鉱物片では、石英が最も多く、これに次いで斜長石が多い。また、少量のカリ長石を伴い、微量の白雲母または黒雲母を伴う。試料によっては微量の角閃石や不透明鉱物なども含まれる。岩石片では、チャート、多結晶石英および結晶片岩または千枚岩を少量～微量含むことが特徴であり、試料によっては、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、花崗岩類などが伴われる。今回の試料では、これに分類される試料が最も多く、特に瓦試料のほとんどがA類に分類された。なお、分類の際には、黒雲母、チャート、結晶片岩または千枚岩の变成岩の3者のうち、いずれか2者が含まれていればA類とした。

B類：鉱物片では、石英が多く、斜長石が少量含まれるが、A類に比べて、斜長石の量比が非常に少ない。数字から言えば、今回の各試料における斜長石／石英比を平均すると0.32となる(表3)が、B類はそれよりも低い斜長石／石英比を示す。また、白雲母および黒雲母がほとんど含まれないこともA類との違いである。一方、岩石片では、A類と同様にチャートと多結晶石英および結晶片岩または千枚岩を含むことが特徴となる。今回の試料ではA類に次いで多い。特に沖縄無釉陶器とされた試料の全点がB類に分類された。

C類:鉱物片では、石英と斜長石およびカリ長石の状況はA類と同様であるが、白雲母および黒雲母が含まれず、また岩石片ではチャートと多結晶石英のみであり、結晶片岩や千枚岩が認められなかったことから、A類やB類とは区別してC類とした。今回の試料では、瓦質土器の試料番号5の1点のみである。

D類:砂粒の全体量が非常に少ない。鉱物片では、石英と斜長石およびカリ長石が含まれ、岩石片ではチャートと多結晶石英のみである。今回の試料では、御内原西地区出土の土器の試料番号33と34の2点のみである。

E類:珪藻化石を比較的多く含むことを特徴とする。珪藻化石の種類をみると *Thalassiosira* 属をはじめとする海生種が多く、汽水生種や淡水生種はわずかであった。これに分類される試料は、陶質土器とされた試料番号9と10の2点のみである。なお、これらの試料では、鉱物片は石英、カリ長石、斜長石、白雲母、黒雲母、不透明鉱物などが含まれ、岩石片は、多結晶石英のほかは、流紋岩・デイサイト、ひん岩などの火成岩が試料番号10に極めて微量認められた。

F類:D類と同様に砂粒の全体量が少ない。鉱物片は石英、カリ長石、斜長石および緑レン石が認められ、岩石片では、石灰岩のみが微量認められたことが本類の特徴となる。今回の試料では、御内原西地区出土の土器の試料番号32の1点のみである。

G類:D類やF類よりもさらに砂粒の全体量が少なく、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片しか認められない。今回の試料では、御内原西地区出土の土器の試料番号31と35の2点のみである。

H類:多量の火山ガラスを含むことを特徴とする。今回の試料では、瓦質土器の試料番号4および首里城木曳門出土の焙烙である試料番号15の2点のみである。ただし、火山ガラス以外の砂粒をみると、両試料間で若干の差異が認められる。すなわち、試料番号4においては、鉱物片では石英が多く、これに次いで斜長石も比較的多く含まれ、微量のカリ長石を伴うほかは、極めて微量の白雲母と不透明鉱物が認められ、岩石片では微量の多結晶石英のほかに極めて微量の凝灰岩および流紋岩・デイサイトが含まれるという組成である。一方、試料番号15では、少量の石英と斜長石のほかに、極めて微量の斜方輝石、単斜輝石、黒雲母、不透明鉱物が含まれ、岩石片では少量の安山岩が含まれるのみである。また、珪藻化石も少量含まれている。珪藻化石には、*Aulacoseira* 属を主体とする湖沼生の種類が多い。

<粒径組成>

1類:中粒シルトをモードとする。

2類:粗粒シルトをモードとする。

3類:極細粒砂をモードとする。

4類:細粒砂をモードとする。

5類:モードは粗粒シルト～極細粒砂にあるが、ピークは明瞭ではない。

6類:モードは細粒砂にあるが、粗粒シルトにもピークがあり、双峰形を呈する。

<石英の円磨度>

i類:円磨度のピークが0.1または0.2であり、これらより円い0.3の割合は、0.1および0.2よりも低い。

ii類:円磨度のピークは0.2であり、これに次いで0.3の割合が高い。

iii類:円磨度のピークは0.3である。

以上の各分類基準により、各試料の胎土を分類した結果を表4に示す。ここで、土器や瓦の種類別に、胎土の傾向を述べる。

1) 瓦質土器

表2. 胎土分類結果

試料番号	遺物番号	調査区等	出土地点・層位等	種類	器形	時期	产地	黒雲母チヤート 片岩・千枚岩			チャート 片岩・千枚岩	チャート 片岩・千枚岩	海生種の珪藻 オルガノン			石灰岩	石墨 最石頭	火山ガラス	沖縄本島以外 (九州?)	琉球列島各島	不明	粒径組成			石英均倍度					
								A	B	C			E	F	G	H	I	J	K	L										
1	1	大城タスク	大城タスク	瓦質土器	鉢	15世紀	本州(大和?)																							
3	3	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州(北九州?)																							
4	4	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州(大和?)																							
5	5	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州系																							
6	6	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	16世紀	本州系																							
13	13	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	17世紀	沖縄																							
14	14	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	鉢	17世紀	沖縄																							
2	2	二階殿	首里城	瓦質土器	瓦質土器	鉢	15世紀	本州(大和?)																						
12	12	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	瓦質土器	火鉢	18世紀	沖縄?																						
9	9	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	蓋	15~16世紀	沖縄?																							
10	10	下之御庭地	首里城北門	瓦質土器	蓋	15~16世紀	沖縄?																							
11	11	下之御庭地	首里城下之御庭	瓦質土器	蓋?	18世紀	沖縄無鉛陶器																							
21	21	H17御内原西	A-2	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
21	21	H17御内原西	C-4	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
22	22	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
23	23	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
24	24	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
25	25	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
26	26	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
27	27	H17御内原西	C-4	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
28	28	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
30	30	H17御内原西	E-9	沖縄無鉛陶器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
7	7	下之御庭地	首里城北門	土器	皿	17世紀	本州(南九州?)																							
8	8	下之御庭地	首里城北門	土器	皿	17世紀	本州(南九州?)																							
15	15	下之御庭地	首里城北門	土器	皿	17世紀	本州(南九州?)																							
31	31	H17御内原西	集石造繩内	土器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
33	33	H17御内原西	B-4(D)	土器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
34	34	H17御内原西	B-5-D	土器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
35	35	H17御内原西	B-5-(D)	土器	—	—	沖縄無鉛陶器																							
42	42	2	H17御内原西	北地区	高麗系瓦	—	14世紀	—																						
47	47	7	H17御内原西	北地区	高麗系瓦	—	14世紀	—																						
52	52	12	H17御内原西	北地区	高麗系瓦	—	14世紀	—																						
17	17	1	H17御内原西	北地区	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
17	17	2	H17御内原西	北地区	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
18	18	3	H17御内原西	E-8	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
37	37	22	H17御内原西	B-5-(A)	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
38	38	4	H17御内原西	表探	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
20	20	5	H17御内原西	蒸探	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
41	41	1	H17御内原西	D-10	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
44	44	4	H17御内原西	E-8	明朝系瓦	—	18~19世紀	—																						
36	36	21	H17御内原西	集石造繩内	大和系古瓦	—	14~15世紀	—																						
45	45	5	H17御内原西	B-5-(A)	大和系古瓦	—	14~15世紀	—																						
49	49	9	H17御内原西	北地区	大和系古瓦	—	14~15世紀	—																						
51	51	11	H17御内原西	北地区	大和系古瓦	—	14~15世紀	—																						
46	46	6	H17御内原西	北地区	大和系古瓦	—	14~15世紀	—																						
48	48	8	H17御内原西	北地区	不明瓦(大和系?)	—	14~15世紀	—																						
50	50	10	H17御内原西	北地区	不明瓦(大和系?)	—	14~15世紀	—																						
53	53	1	H17御内原西	北地区	セン	—	—	—																						
54	54	2	H17御内原西	北地区	セン	—	—	—																						
55	55	3	H17御内原西	北地区	セン	—	—	—																						

*資料は種類別に並べ替えてある。

— 84 —

鉱物・岩石組成では、9点のうち6点までがA類であり、他に前述した試料番号5のC類と試料番号4のH類があり、残る1点の試料番号13はB類である。粒径組成では、大城グスク出土品の試料番号1が6類であるほかは、2、3、4の各類に2または3点ずつ分散する。石英の円磨度は、全点i類である。

2) 陶質土器

鉱物・岩石組成では、前述した試料番号9、10の2点がE類であり、残る1点の試料番号11はB類である。粒径組成においても、前2者は1類であり、後者は3類に分類される。石英の円磨度は全点i類である。

3) 沖縄無釉陶器

鉱物・岩石組成では、全10点ともにB類に分類された。一方、粒径組成では2類から4類までの各類にばらつく。その中では2類がやや多く5点ある。石英の円磨度は全点i類である。

4) 土器

首里城木曳門地区出土の土器3点のうち、皿とされた2点はともに、鉱物・岩石組成はB類、粒径組成は1類であり、これに対して焙烙とされた1点は、H類かつ2類である。石英の円磨度は3点とともにi類である。

御内原西地区出土の土器5点では、鉱物・岩石組成はD類とG類が2点ずつとF類が1点である。いずれの組成も、今回の試料では、御内原西地区出土の土器にしか認められていない。粒径組成は、5点のうち4点までが1類であり、他の1点は2類である。前述したように上記の鉱物・岩石組成は砂の全体量が少ないことが特徴であるが、粒径組成をみてもシルトに集中する組成となっている。さらに、石英の円磨度でも、これら5点にはi類が認められず、4点はii類、1点はiii類であり、他の土器や瓦との相違が明瞭である。

5) 高麗瓦

3点の試料の鉱物・岩石組成はいずれもA類である。これに対して粒径組成は、3、4、6の各類にばらつく。また、石英の円磨度は、試料番号42のみii類であり、他はi類である。

6) 明朝系瓦

7点の試料の鉱物・岩石組成はいずれもA類である。これに対して粒径組成は、1、2、4、5の各類にばらつく。また、石英の円磨度は、試料番号41のみiii類であり、他はi類である。

7) 大和系古瓦

鉱物・岩石組成は、9点のうち8点までがA類であり、試料番号21のみがB類である。これに対して粒径組成は、1～5までの各類にばらつく。また、石英の円磨度もi～iii類が認められ、i類が4点、ii類が3点、iii類が2点とばらつく傾向にある。

8) 大和系近世瓦

試料番号46の1点のみである。鉱物・岩石組成はB類であり、粒径組成は2類、石英の円磨度はi類である。

9) 不明瓦

鉱物・岩石組成では、試料番号48はA類、試料番号50はB類であり、粒径組成では、試料番号48は4類、試料番号50は2類である。石英の円磨度は2点ともにi類である。

10) 塚

3点ともに鉱物・岩石組成はA類、粒径組成は3類である。石英の円磨度では、試料番号54のみがii類であり、他の2点はi類である。

4. 考察

(1) 胎土の鉱物・岩石組成と沖縄本島の地質

胎土の鉱物・岩石組成における A～H 類までの分類については、点数の多いものから A、B としたのであるが、それだけではなく、組成から推定される地質学的な背景も考慮している。そのため、1 点しかない組成でも C 類や F 類という記号になっているのである。結果の項では、文章が煩雑になることを避けるために、あえてその説明を行わなかった。以下に、鉱物・岩石組成の各分類の地質学的背景と沖縄本島の地質との関係について述べる。なお、沖縄本島の地質については、主に木崎編 (1985) および日本の地質「九州地方」編集委員会 (1992) などの記載を参照した。

A 類の特徴は、黒雲母、チャート、变成岩（結晶片岩または千枚岩）の 3 者である。黒雲母の由来としては、A 類とした組成の中に試料によっては花崗岩類または花崗斑岩の岩石片が伴われることから、黒雲母の斑晶を多く含む花崗岩類の岩石であることが推定される。沖縄本島内の花崗岩類としては、中部・北部の西岸沿いに岩脈や岩株、岩床として黒雲母石英斑岩と記載された岩石が点々と分布している。黒雲母石英斑岩は新第三紀中新世に貫入したとされており、その分布する主な場所は、大宜味村の津波、名護市の源河、同市世富慶、恩納村の名嘉真などである。これらの中では、名嘉真の岩体が沖縄本島内最大の岩体として知られている。なお、黒雲母石英斑岩以外にも花崗岩類としては、読谷村に小規模な石英閃緑岩の岩体の分布が知られているが、この石英閃緑岩には黒雲母の斑晶は含まれていない。

したがって、黒雲母の由来を沖縄本島内に求めるとすれば、上記の黒雲母石英斑岩である可能性が高い。

ところで、上述した各地に分布する黒雲母石英斑岩の岩体は、中生代白亜紀から新生代古第三紀にかけて形成された名護層と呼ばれる、主に頁岩と千枚岩および緑色岩からなる地質に貫入している。すなわち、石英斑岩の岩体の周囲には名護層の岩石が分布している。したがって、石英斑岩の分布域周辺における河川沿いの低地に堆積した砂や粘土には、名護層に由来する頁岩や千枚岩などの岩石片も混在している可能性が高い。ここで、黒雲母と並ぶ A 類の特徴の一つである变成岩の由来も沖縄本島内に分布する地質に求めることができ、しかも両者が共存する地質学的背景も、沖縄本島内（すなわち名護層と石英斑岩の分布する北部～中部西岸域）に存在することがわかる。

残る A 類の特徴であるチャートについては、沖縄本島では、古生代末から中生代に及ぶ堆積岩を主とする地質である本部層、今帰仁層、与那嶺層を構成する岩石の一部として分布している。ただし、これらの地質の分布域は、ほぼ本部半島に限られている。したがって、A 類が示す地質学的背景を沖縄本島内に求めるとすれば、名護層分布域と本部半島が接する名護市北西部付近を想定することができる。なお、A 類の組成には試料によっては凝灰岩または流紋岩・デイサイトが微量含まれている。凝灰岩は、石基の状態などから新生代の比較的新しいものであると考えられ、流紋岩・デイサイトはそれに伴う碎屑物である可能性が高い。沖縄本島における、新生代の凝灰岩は、南部に分布する新第三紀中新世～第四紀更新世初期にかけて堆積した泥岩からなる島尻層群中に多数狭在している。しかし北部にも、名護市北西部域には、厚い凝灰岩層を挟む新生代第四紀の礫層である呉我礫層という地質の分布もある。したがって、A 類における流紋岩・デイサイトおよび凝灰岩の産状も、A 類の地質学的背景に整合させることができる。

以上のことから、A 類を A とした理由の一つには、点数が多かったことのほかに、その推定される地質学的背景が沖縄本島内に求められたことにもよる。B 類は、A 類とは斜長石の量比と黒雲母をほとんど含まないことで区別されたが、チャートと变成岩を含むことは A 類と共通する。すなわち、地質

学的背景からいえば、A類における石英斑岩の地質が欠けるだけで、本部半島と名護層の接する地域という背景は同様であると言える。B類は、点数からみてもA類に次いで多かったが、地質学的背景からみても、A類に近似するためBとしたのである。

C類およびD類については、地質を示す特徴としては、チャートの岩石片があげられた。上述したように、チャートの由来を沖縄本島内で求めるならば、本部半島が推定される。したがって、点数は1点ながらも、A類やB類に近い地質学的背景が考えられることから、Cとし、砂粒の少ない組成をDとしている。ただし、チャートも碎屑物の状態では、沖縄本島内各地に分布する砂岩を構成する碎屑物の中にも含まれていることがあるため、チャートのみの場合でも、本部半島に限定することはできない。

E類は、珪藻化石の産状から分類した組成である。珪藻化石は、胎土中の砂よりも粘土に伴うものと考えられる。前述したように珪藻化石の種類には海生種が多かったことから、E類の胎土には、海成の粘土が含まれている可能性がある。なお、一般的によく言われることであるが、海成の粘土層から採取された粘土は、その含有される塩分により焼物には適さないとされている。しかし、土が焼物に適するかどうかという問題は、本分析の目的ではないので、ここでは議論しない。さて、E類の地質学的背景であるが、海成粘土というだけでは、地域性まではわからない。鉱物片や岩石片で特徴となる種類をみると、試料番号9では白雲母と黒雲母であり、試料番号10では流紋岩・デイサイトとひん岩である。これだけでは、互いに共通した地質学的背景とは言えない。しかし、黒雲母については、沖縄本島内では、前述したA類の黒雲母と同様の由来が考えられ、また、ひん岩についても、本部半島や沖縄本島北部西岸域に岩脈として点在している。すなわち、E類においても、その地質学的背景は、沖縄本島北部から中部にかけての西岸域という地域が想定される。

F類において地質学的背景を示唆する碎屑物は、石灰岩である。沖縄本島における石灰岩は、本部半島や北部に分布する中生代の石灰岩と南部に広く分布する第四紀更新世の琉球石灰岩の両者がある。今回の試料中に認められた石灰岩については、顕微鏡下では何れに由来するかを判断することができなかった。ただし、何れにしても沖縄本島内である可能性を示唆するものである。もちろん、石灰岩が広く分布する沖縄本島以外の琉球列島の島という地域性も有している。

G類は、石英と長石類しか認められないことから、その地質学的背景を推定することができない。砂粒の全体量が少ないとから、何らかの地質学的背景が隠されていると考えられる。

H類は、その地質学的背景を沖縄本島内に想定することができないために、分類の最後に配した。その特徴である火山ガラスは、無色透明で緩い曲率をもった平板状のいわゆるバブル型とよばれる形態を呈するものが非常に多く、少量の軽石状に発泡した火山ガラスも認められた。バブル型火山ガラスを多量に含む火山灰は、九州の阿蘇カルデラや姶良カルデラ、鬼界カルデラなどの大規模な火山の大規模な噴火により噴出される。したがって、H類の胎土は、このような火山灰が、焼物の材料として採取できる程度の厚さで積もっている地域に由来すると考えられる。火山灰は、大規模な火山の大規模な噴火によるものであるから、九州だけではなく、日本列島のかなり広範囲にわたって分布していることが確かめられている。しかし、沖縄本島周辺においては、海底堆積物中では確認されているものの、島内においては、現在のところ、このような火山灰の堆積層は確認されていない。したがって、H類は、沖縄本島外で作られたことを示唆する胎土である可能性が非常に高いと言えるのである。今回のH類に分類された試料のうち、試料番号4の瓦質土器は本州（大和？）、試料番号15の17世紀の焙烙は本州（南九州？）という考古学による所見がそれぞれ示されている。H類の胎土は、これらの所見を支持するといえる。

(2) 瓦の産地について

埠も含めた瓦試料の胎土は、鉱物・岩石組成から見れば、25点中22点までがA類に分類された。すなわち、高麗系も明朝系も大和系もすべて同一の地質学的背景を有する材料により作られていることが明らかとなった。前述したように、A類の地質学的背景は、沖縄本島内では名護市北西部付近に想定されることから、この地域で多種類の瓦が生産されていた可能性がある。

なお、未公表資料であるが、今回の試料とほぼ同時期とされる韓半島に所在する遺跡より出土した瓦について、今回と同様の方法による胎土分析結果を得ている。これらの例においては、A～H類に分類されるものは1点もなく、例えば岩石片でいえば、凝灰岩や花崗岩類あるいは流紋岩・デイサイトなどを多く含む胎土などが認められている。すなわち、これらの試料との比較においては、首里城跡出土の瓦と韓半島産の高麗瓦とは全く異なる胎土であるといえる。それぞれが、全く異なる地質学的背景を有する地域で生産されたものであり、共通点ないし類似点は見出すことはできない。したがって、今回の首里城跡出土瓦試料の中に韓半島産の瓦が存在する可能性は非常に低いと考えられる。

ただし、A類から推定される地質学的背景は、沖縄本島内に限定されるものでもない。韓半島や中国大陆および本州にも同様の地質学的背景が存在する可能性は十分にある。李(1979)による朝鮮半島の地質記載では、結晶片岩や千枚岩および堆積岩類などの分布も認められる。今後も、より、確かな検証を進めるためには、沖縄本島、韓半島、中国大陆および本州の様々な地域で出土した高麗瓦、明朝系瓦、大和系瓦について、今回と同様の方法で分析を行い、その結果を比較することが必要である。

ところで、首里城跡出土の高麗系、明朝系、大和系のいずれの瓦においても、鉱物・岩石組成が互いによく類似していることとは対照的に、粒径組成では試料間のばらつきが認められた。また、各系においてどの粒径組成が多いという傾向も認められなかった。砂の粒径組成は、おそらく製品の品質のばらつきを示すものと考えられる。品質のばらつきには、異なる製作者間の違いもあり、同一の製作者における製品の品質のばらつきもあると考えられる。上述した未公表資料の韓半島産の高麗瓦では、一つの遺跡から出土した試料において粒径の均一性が認められ、また、別の遺跡出土試料では、鉱物・岩石の種類構成と粒径組成との間に対応関係が認められた。この違いは、それぞれの製作事情において何らかの違いを反映している可能性がある。いずれにしても、試料数が少ない現時点では、粒径組成のばらつきの意味を判断することは難しいが、今後の瓦の胎土分析において、粒径組成の状況について地質学的背景と並んで検討しなければならない課題の一つであると考えられる。

また、石英の円磨度については、今回の首里城跡出土試料からは、製作に関わる有意な情報を見出しができなかった。ただし、大和系瓦の一部にやや円磨度の高い試料が認められており、何らかの材質の違いを示唆する可能性がある。

5. 今後の課題～まとめにかえて～

以上のように今回の分析によって、瓦の製作地に関わる非常に有意な結果が得られたと言える。しかし、全ての問題が解決されたわけではない。これには沖縄本島の河川砂や露頭試料等の分析により基本データの収集なども必要と考えられ、これらを元に継続的な分析を進めていく必要がある。また首里城跡以外における中世相当期の瓦についてこれから多くの分析データを蓄積していくべきであり、首里城及びその周辺以外における当時の瓦生産の様相について詳細な分析を行っていく必要もある。

これから研究の見通しとしては14、15世紀における沖縄本島における王権の問題とのかかわりの中で検証していくことを提示してまとめにかえたい。

浦添グスク及び浦添ようどれや首里城跡及びその周辺から特に大量にこれらの瓦が出土していることから沖縄本島統一前後における琉球王国の実態を知る重要な手がかりとなってくると言える。その理由として、高麗系瓦、大和系瓦が出土している地域別の割合を概観すると浦添グスク、浦添ようどれや首里城跡及びその周辺では報告されているものだけでも 9,804 点確認されており、沖縄本島内においては 20,381 点であることから全体の半分が出土していることを挙げることができる。また勝連グスクでも 10,800 点確認されていることから僅か 3 地点において実に約 97% が出土していることに表れている。このデータは 2000 年時点（上原 2000b）のものであり、その後に調査された浦添ようどれ並びに首里城跡出土の資料を加えると更にその割合が高くなる（註 3）。これら 3ヶ所のグスクにおいては何れも大規模で浦添グスクを除いて（註 4）礎石・基壇が遺構として確認されている（仲与根、當眞 1986、當眞、上原 1987）。大規模なグスクにおいては礎石・基壇が多く確認されていることに併せて（山本 2000）、瓦の有無は更に大規模なグスクを区分けする材料になってくるものと思われる。このことは有力な在地首長すなわち按司が大量のモノを一地域に集中させていく求心性を示していると考えられ、その他地域との差異を表す上での格好の資料となってくる。

今回の分析結果において、沖縄本島内で瓦製作が行われていたことが科学分析の面でも色濃くあらわれたことから瓦製作に係る職能人の把握若しくは抱え込みが大規模なグスクの経営主体者によって行われていたものと想定できる。更に瓦製作の原材料となる土の確保や首里や浦添、勝連までの搬入ルートの確立が必須となってくる。このように瓦をめぐる体系的な生産体制の確立はこの時期における陶磁器の大量輸入や金属製品の生産、礎石・基壇建物の形成への方向へと繋がっていくものと思われる。また、この一連の体系化は 14 世紀後半から 15 世紀前半にかけて、沖縄本島において国家を形成していく上で重要な要素であったと言える。とくに第一尚氏が沖縄本島を統一できた背景、そして阿麻和利が第一尚氏政権に反抗できた背景をこれらの瓦から読み取れるものと思われる。

一般的に「瓦礫」とは価値の無いものの例えとして用いられるが、琉球史を解明していく上で瓦はぞんざいに扱うことのできない重要資料であることを最後に記して本稿を締めたい。

(やまもと まさあき：調査課 専門員)
(うえだ けいいち：パリノ・サーヴェイ株式会社)
(やはぎ けんじ：同上)
(いしおか ともたけ：同上)

【註釈】

(註 1) 琉球列島の瓦に関する研究史については上原 1998 が詳しい。

(註 2) ここでは便宜上遺物番号と呼称する。

(註 3) 浦添ようどれでは高麗系瓦が 743 点、大和系瓦が 92 点出土している（浦添市教育委員会 2005）。

(註 4) 沖縄戦直前の復元地形図からは浦添グスクの中央部に正殿跡と見られる四角い遺構が確認できることから高麗系瓦葺きの正殿が建っていたものと推測されている（安里 2004）。

【参考・引用文献】

伊波普猷「土塊石片録」『古琉球』沖縄公論社 1911

田辺泰、巖谷不二雄『琉球建築』座右宝刊行会 1937

鎌倉芳太郎『セレベス 沖縄 発掘古陶瓷』(株)国書刊行会 1976

閑口広次「沖縄に於ける造瓦技術の変遷とその間の時情」『考古学雑誌』第 62 卷第 3 号 日本考古学会 1976

- 大川清「琉球古瓦調査抄報」『沖縄文化財調査報告書』那覇出版社 1978
- 李 商萬「コリア半島の地質とテクトニクス」『岩波講座 地球科学 16 世界の地質』岩波書店 1979
- 三島格「琉球の高麗瓦など」『古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 1980
- 西谷正「高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流」『九州文化史研究所紀要』同研究所 1981
- 木崎甲子郎『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社 1985.
- 小渡清孝「浦添城跡出土瓦の時代的考察」『浦添市史』第6巻 浦添市教育委員会 1986
- 仲与根清一、當眞嗣一「二の丸殿舎建物及び南風原門調査」『勝連城跡 環境整備事業報告書』勝連町教育委員会 1986
- 當眞嗣一、上原靜「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会 1987
- 三辻利一「沖縄本島の遺跡出土灰色瓦の蛍光X線分析」『宇茂佐古島遺跡 名護市文化財調査報告』10 名護市教育委員会 1992
- 日本の地質「九州地方」編集委員会『日本の地質9 九州地方』共立出版 1992
- 上原靜「首里城跡の高麗系瓦と大和系瓦」『文化課紀要』第12号 沖縄県教育庁文化課 1996
- 上原靜「大和系瓦とその分布の事情」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第21号 同資料館 1997
- 上原靜「琉球諸島出土の中、近世瓦の研究略史」『地域文化論叢』第1号 沖縄国際大学大学院地域文化研究所 1998
- 上原靜「沖縄諸島出土の古瓦と造瓦技術の伝播」『アジアの中の沖縄』アジア史学会第9回研究大会実行委員会 2000a
- 上原靜「沖縄諸島のグスク時代における瓦の需要」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第24号 同資料館 2000b
- 山本正昭「14,15世紀の礎石・基壇考」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論文集刊行会 2000
- 上原靜「沖縄諸島出土の高麗系瓦について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第26号 同資料館 2002
- 安里進「琉球王国形成の新展望」『中世の系譜』高志書院 2004
- 浦添市教育委員会『浦添ようどれⅡ 瓦溜り遺構編 - 史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査 -』2005
- 沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡一御内原西地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第44集 2007

【追記】

本稿を草するにあたって各方面の方々からご教示を賜った。末文ではありますが記して感謝致します。

上原靜（沖縄国際大学）、岸本義彦、伊集ゆきの、玉城恵美利（沖縄県立埋蔵文化財センター）、瀬戸哲也（沖縄県教育庁文化課）、橋本真樹夫（パリノ・サーヴェイ株式会社）

順不同、敬称略

表 3 薄片觀察結果①

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計												
		鉱物片									岩石片																					
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	綠簾石	白雲母	黑雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	石灰岩	隕石	凝灰岩	流紋岩	多晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	千枚岩	緑色岩	火山ガラス	珪藻	植物片	植物珪酸体
1 砂	細礫																														0	
	極粗粒砂	1																													1	
	粗粒砂																														2	
	中粒砂	10	4	4											1		1														23	
	細粒砂	34	4	6											1		3														58	
	極細粒砂	17	2	8													1		9												32	
	粗粒シルト	26	3	12													1														42	
	中粒シルト	26	2	13																											1	42
	基質																														441	
	孔隙																														10	
2 砂	細礫																														0	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂	5	2																												0	
	中粒砂	21	7	3														3		2		1		1						11		
	細粒砂	33	2	10											2		3					5		1						42		
	極細粒砂	36	3	10										1			1					2		1						56		
	粗粒シルト	16	4	6													1														54	
	中粒シルト	5	1	3																										1	28	
	基質																														9	
	孔隙																														331	
3 砂	細礫																														10	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂	1		1																											0	
	中粒砂	10	1	6													1					3		2						24		
	細粒砂	28	4	10											1		3					2		1						50		
	極細粒砂	37	3	17										1		2	1	1					2							64		
	粗粒シルト	28	1	13													1													42		
	中粒シルト	13		2														1												2	18	
	基質																														678	
	孔隙																														19	
4 砂	細礫																														1	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂																														0	
	中粒砂																														2	
	細粒砂	2																													1	
	極細粒砂	11	1	4											1															22		
	粗粒シルト	16	1	14												1														55		
	中粒シルト	12	1	9													2													3		
	基質																														27	
	孔隙																														457	
5 砂	細礫																														28	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂																														0	
	中粒砂	3	1																												0	
	細粒砂	12	1	2													3														22	
	極細粒砂	31	4	13											1															50		
	粗粒シルト	41	7	24																											73	
	中粒シルト	29	5	16																											50	
	基質																														532	
	孔隙																														21	
6 砂	細礫																														0	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂																														0	
	中粒砂	1		2											1	1		1											6			
	細粒砂	14		5													1													27		
	極細粒砂	31	4	16										1			1												55			
	粗粒シルト	33	8	28													1	1											71			
	中粒シルト	21	3	16																										1		
	基質																														393	
	孔隙																														2	
7 砂	細礫																														0	
	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂																														0	
	中粒砂	1															1														2	
	細粒砂	2		1													1													3		
	極細粒砂	10		3														2												3		
	粗粒シルト	11		2																											13	
	基質																														383	
	孔隙																														16	
	細礫																														0	
8 砂	極粗粒砂																														0	
	粗粒砂																														0	
	中粒砂																														0	
	細粒砂																														0	
	極細粒砂	2																													0	
	粗粒シルト	7																														

表 4 薄片觀察結果②

表5 薄片観察結果③

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計											
		鉱物片									岩石片																				
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	綠簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	真岩	砂岩	石灰岩	軽石	凝灰岩	流紋岩 ニアサイド	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ひん石	結晶片岩	緑色片岩	火山ガラス	有孔虫	珪藻	植物片
17	砂	細礫																													0
		極粗粒砂																													0
		粗粒砂																													0
		中粒砂	2	2				1		1			1								2		2							11	
		細粒砂	13	1	2					1	1		4								5		9							36	
		極細粒砂	23	2	9										1							2	1							38	
		粗粒シルト	32	1	5																									38	
		中粒シルト	27		7																									34	
		基質																												909	
		孔隙																												33	
18	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	9	1	2										1		1				2	1	3	1					21		
		細粒砂	41	3	2					2	3			2	1					3		6	1					64			
		極細粒砂	35	1	5					1	1			1							5		1					50			
		粗粒シルト	36	2	2																								40		
		中粒シルト	22	1	1																								1	25	
		基質																												780	
		孔隙																												56	
19	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	4		1										1						2	1	3	1				7			
		細粒砂	12	1	9					1					1						4		2						32		
		極細粒砂	22	4	18										2		4				5		3						58		
		粗粒シルト	40	4	16										1		1												62		
		中粒シルト	31	2	8																								41		
		基質																												812	
		孔隙																												64	
20	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂													1															1	
		中粒砂													2		1													5	
		細粒砂	12	1	4										1		1	1											29		
		極細粒砂	27	1	8										2		2												48		
		粗粒シルト	43	3	19										1														67		
		中粒シルト	37		13																								50		
		基質																												1118	
		孔隙																												66	
21	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	9		1										3						3									16	
		細粒砂	41		2										3						4	1								51	
		極細粒砂	50		1										4						1									56	
		粗粒シルト	32		2										1															35	
		中粒シルト	11																											11	
		基質																												811	
		孔隙																												104	
22	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	1																											3	
		細粒砂	6																											9	
		極細粒砂	13																											15	
		粗粒シルト	24		3										2														30		
		中粒シルト	16																											16	
		基質																												440	
		孔隙																												29	
23	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂	1																											1	
		粗粒砂	1																											0	
		中粒砂	1		3																									5	
		細粒砂	14		1																									22	
		極細粒砂	14	1	5																									28	

表 6 薄片觀察結果④

表 7 薄片觀察結果⑤

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計													
		鉱物片									岩石片																						
33	砂	石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	綠廉石	白雲母	黑雲母	ジルコン	不透明鉱物	チヤート	頁岩	砂岩	石灰岩	絆石	凝灰岩	流紋岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	千枚岩	火山ガラス	有孔虫	珪藻	植物片	植物珪酸体
33	砂	細礫																											0				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂																											0				
		中粒砂																											0				
		細粒砂	1																										0				
		極細粒砂	1																										3				
		粗粒シルト	3	2																									2				
		中粒シルト	6																										5				
		基質																											1				
		孔隙																											7				
34	砂	細礫																											153				
		極粗粒砂																											11				
		粗粒砂																											0				
		中粒砂																											0				
		細粒砂	1																										0				
		極細粒砂	1																										1				
		粗粒シルト	4	1																									6				
		中粒シルト	5	1	1																								7				
		基質																											7				
		孔隙																											237				
35	砂	細礫																											29				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂																											0				
		中粒砂																											0				
		細粒砂	1																										0				
		極細粒砂	1	4																									1				
		粗粒シルト	4	1																									6				
		中粒シルト	5	1	1																								7				
		基質																											7				
		孔隙																											237				
36	砂	細礫																											14				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂																											0				
		中粒砂	3																										0				
		細粒砂	20	2																									4				
		極細粒砂	27	5																									25				
		粗粒シルト	17	4																									32				
		中粒シルト	7	1																									22				
		基質																											8				
		孔隙																											341				
37	砂	細礫																											11				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂																											0				
		中粒砂	6	2																									0				
		細粒砂	20	1	12																								11				
		極細粒砂	30	1	13																								53				
		粗粒シルト	31	20																									56				
		中粒シルト	15	10																									55				
		基質																											25				
		孔隙																											434				
38	砂	細礫																											11				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂	8	1	5																								2				
		細粒砂	25	2	11																								16				
		極細粒砂	39	3	11																								53				
		粗粒シルト	23	2	13																								63				
		中粒シルト	15	7	13																								44				
		基質																											22				
		孔隙																											387				
		細礫																											13				
39	砂	細粒砂	19	4	10	1																							0				
		極細粒砂	23	4	10	1																							26				
		粗粒シルト	42	7	13	1																							49				
		中粒シルト	27	7	18	2																							1				
		基質																											55				
		孔隙																											756				
		細礫																											26				
		極粗粒砂																											0				
		粗粒砂	5	1	6																								1				
		細粒砂	48	2	7																								14				
40	砂	極細粒砂	30	3	7	1	1																						76				
		粗粒シルト	26	2	7																								53				
		中粒シルト	14	1	4																								35				
		基質																											1				
		孔隙																											21				
		細礫																											763				
		極粗粒砂																											14				
		粗粒砂			</																												

表 8 薄片観察結果⑥

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成																		合計											
		鉱物片									岩石片																				
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	矽化角閃石	綠簾石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	石灰岩	軽石	凝灰岩	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	ひん岩	結晶片岩	緑色片岩	千枚岩	緑色岩	有孔虫	火山ガラス	植物片
41	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	4								1																		5		
		細粒砂	19	1							1	1	4							2									28		
		極細粒砂	26	2	6						2		4							2									43		
		粗粒シルト	36	1	12						1																		53		
		中粒シルト	38	3	17						1																		59		
		基質																											890		
		孔隙																											33		
42	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	7		6															1	3								18		
		細粒砂	25	1	10						1	1								3	3	2	5						51		
		極細粒砂	35	2	17															5									66		
		粗粒シルト	23	2	11																								38		
		中粒シルト	14	2	10																								1		
		基質																											833		
		孔隙																											84		
43	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	13	1	4														2	1									26		
		細粒砂	18	1	5													1	3										32		
		極細粒砂	19		8						1	2						2	2									37			
		粗粒シルト	28	2	9													5										40			
		中粒シルト	28	2	7													3										1149			
		基質																											62		
		孔隙																											0		
44	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												1	
		中粒砂	7	1	3													1	1	1									21		
		細粒砂	34		5												1	1	2	3									57		
		極細粒砂	26		6												2	1	1										47		
		粗粒シルト	32	2	13												1												48		
		中粒シルト	17		9																								26		
		基質																											663		
		孔隙																											0		
45	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												0	
		粗粒砂																												0	
		中粒砂	8		11													3											24		
		細粒砂	15	1	3												1	2											27		
		極細粒砂	24	1	6												2	5											39		
		粗粒シルト	26	1	11												6	1											44		
		中粒シルト	29	2	12												1												741		
		基質																											35		
		孔隙																											0		
46	砂	細礫																												0	
		極粗粒砂																												4	
		粗粒砂																												29	
		中粒砂																3											44		
		細粒砂	14	1	5													5											68		
		極細粒砂	27	2	6												1	3											1		
		粗粒シルト	53		11												1	3										55			
		中粒シルト	45		9												1											905			
		基質																											78		
		孔隙																											0		
47	砂	細礫																												21	
		極粗粒砂																												65	
		粗粒砂	37	2	5												1	2											56		
		中粒砂	6		10												1		2										1		
		細粒砂	37	1	10												1		2										38		
		極細粒砂	34	3	11												1		2										20		
		粗粒シルト	26	2	5												1		2					</							

表 9 薄片觀察結果⑦

表 10. 石英と斜長石の比

試料番号	石英	斜長石	斜長石／石英
1	113	43	0.38
2	116	32	0.28
3	117	49	0.42
5	116	55	0.47
6	100	67	0.67
7	26	6	0.23
8	19	1	0.05
9	33	22	0.67
10	68	28	0.41
11	24	5	0.21
12	129	13	0.10
13	172	14	0.08
14	124	34	0.27
16	81	27	0.33
17	97	25	0.26
18	143	12	0.08
19	109	52	0.48
20	119	47	0.39
21	143	6	0.04
22	60	3	0.05
23	65	12	0.18
24	72	3	0.04
25	62	19	0.31
26	94	0	0.00
27	129	1	0.01
28	83	3	0.04
29	94	16	0.17
30	138	12	0.09
31	18	12	0.67
32	16	5	0.31
33	10	2	0.20
34	10	7	0.70
35	10	9	0.90
36	74	11	0.15
37	102	57	0.56
38	110	49	0.45
39	111	47	0.42
40	123	32	0.26
41	123	35	0.28
42	104	54	0.52
43	106	33	0.31
44	116	36	0.31
45	102	43	0.42
46	139	31	0.22
47	117	35	0.30
48	103	25	0.24
49	101	72	0.71
50	153	24	0.16
51	111	52	0.47
52	101	60	0.59
53	123	25	0.20
54	154	34	0.22
55	89	58	0.65
平均			0.32

石英：石英の全粒数

斜長石：斜長石の全粒数

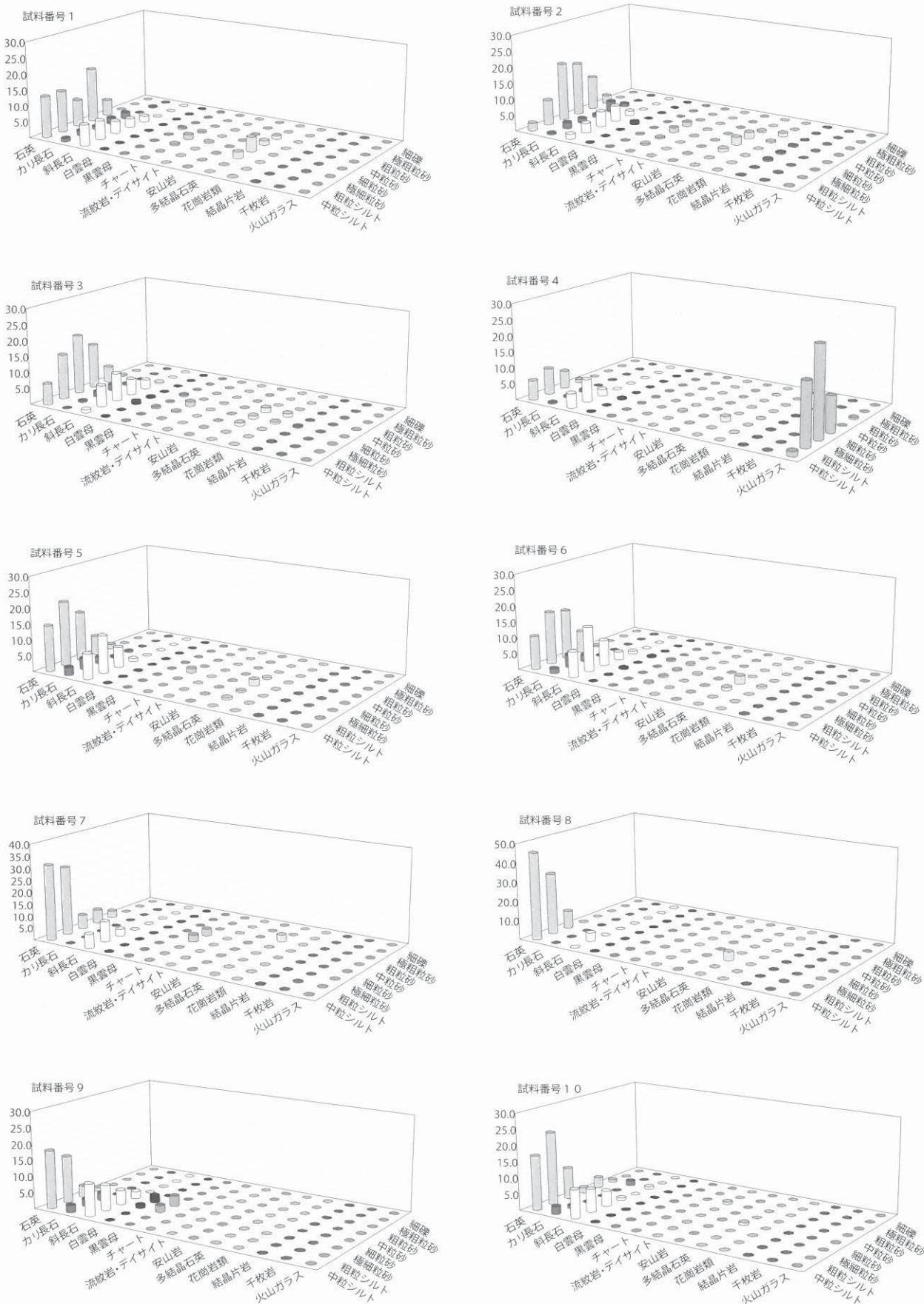


図3 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（1）

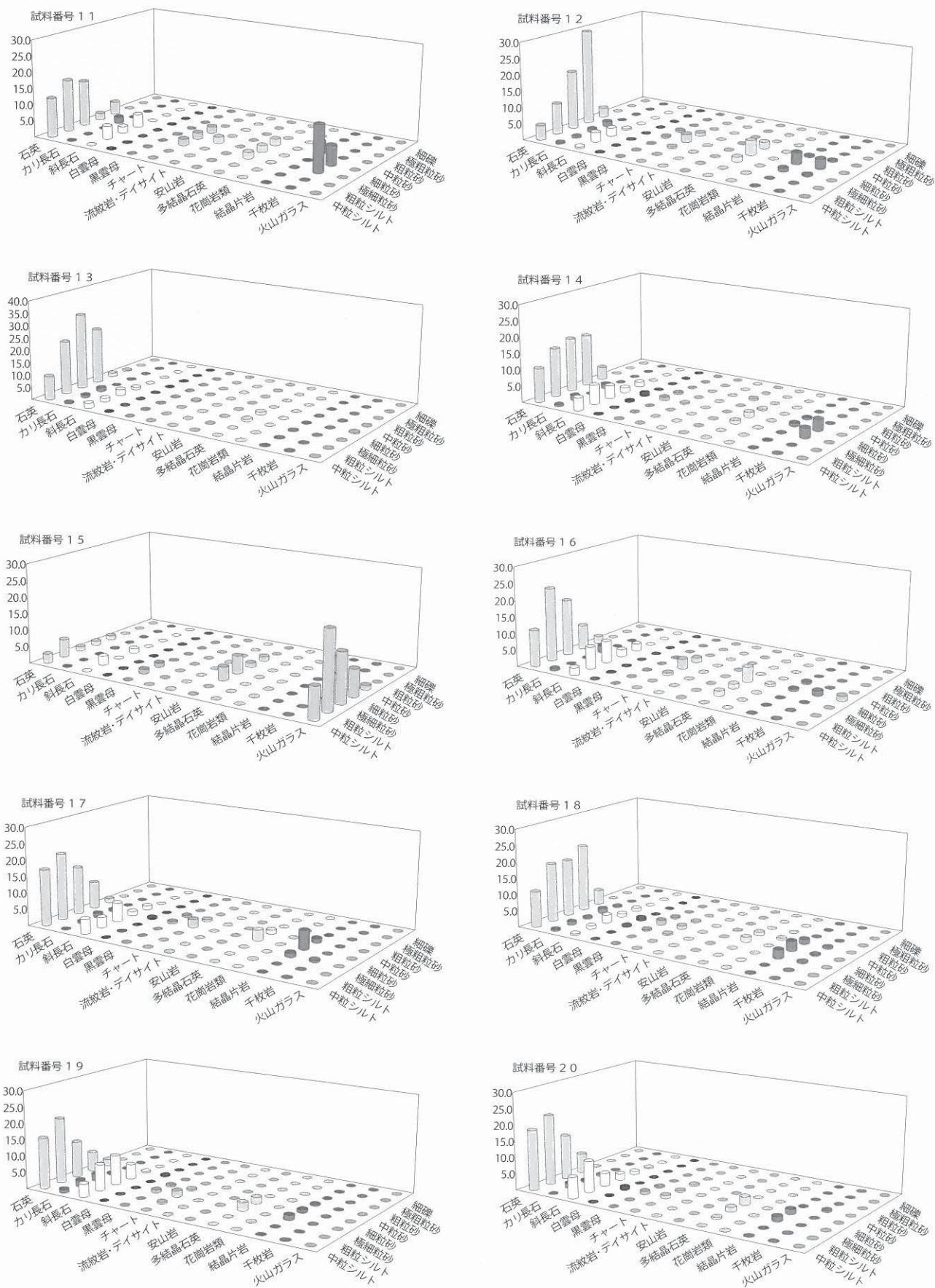


図4 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（2）

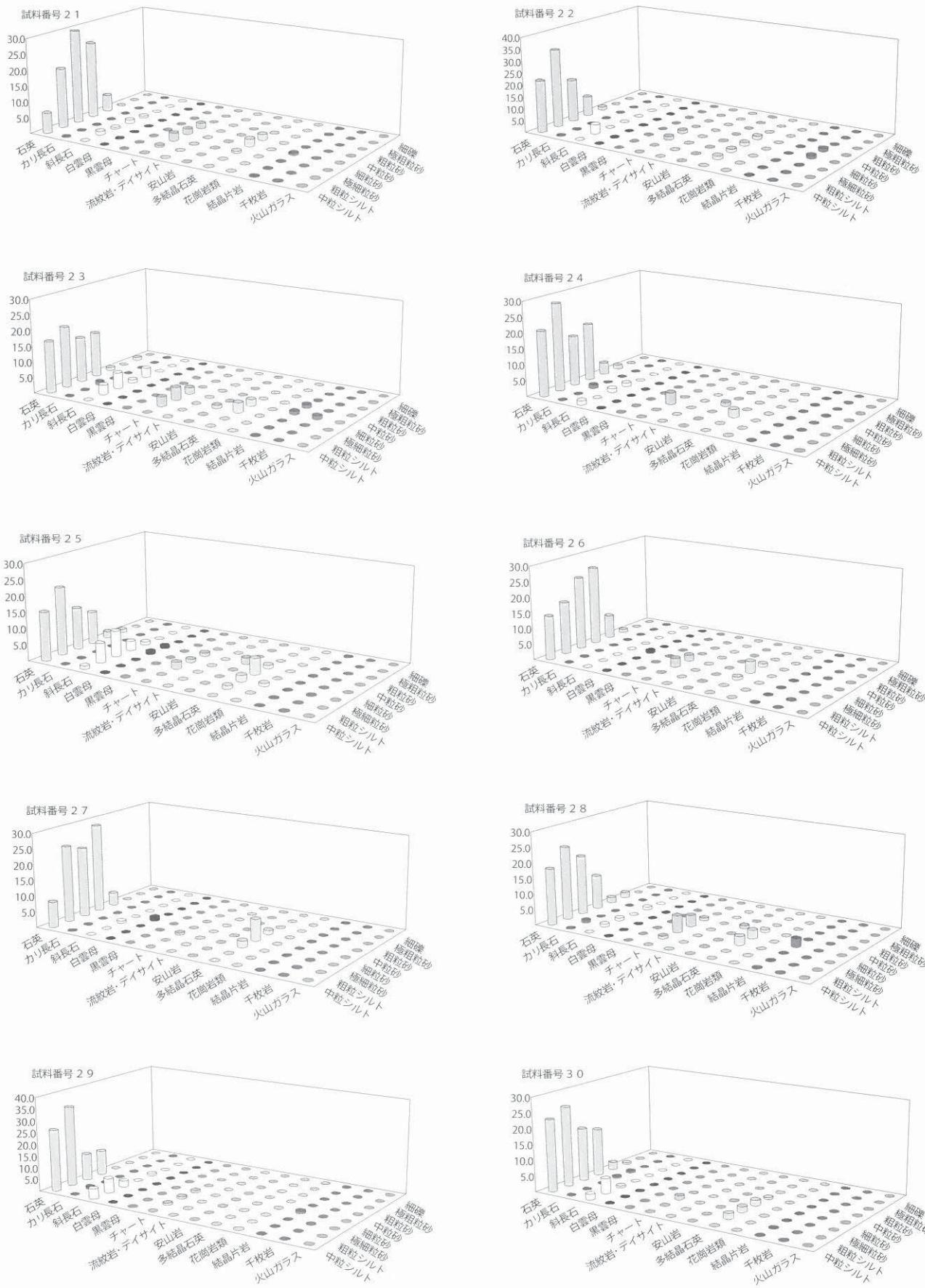


図5 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（3）

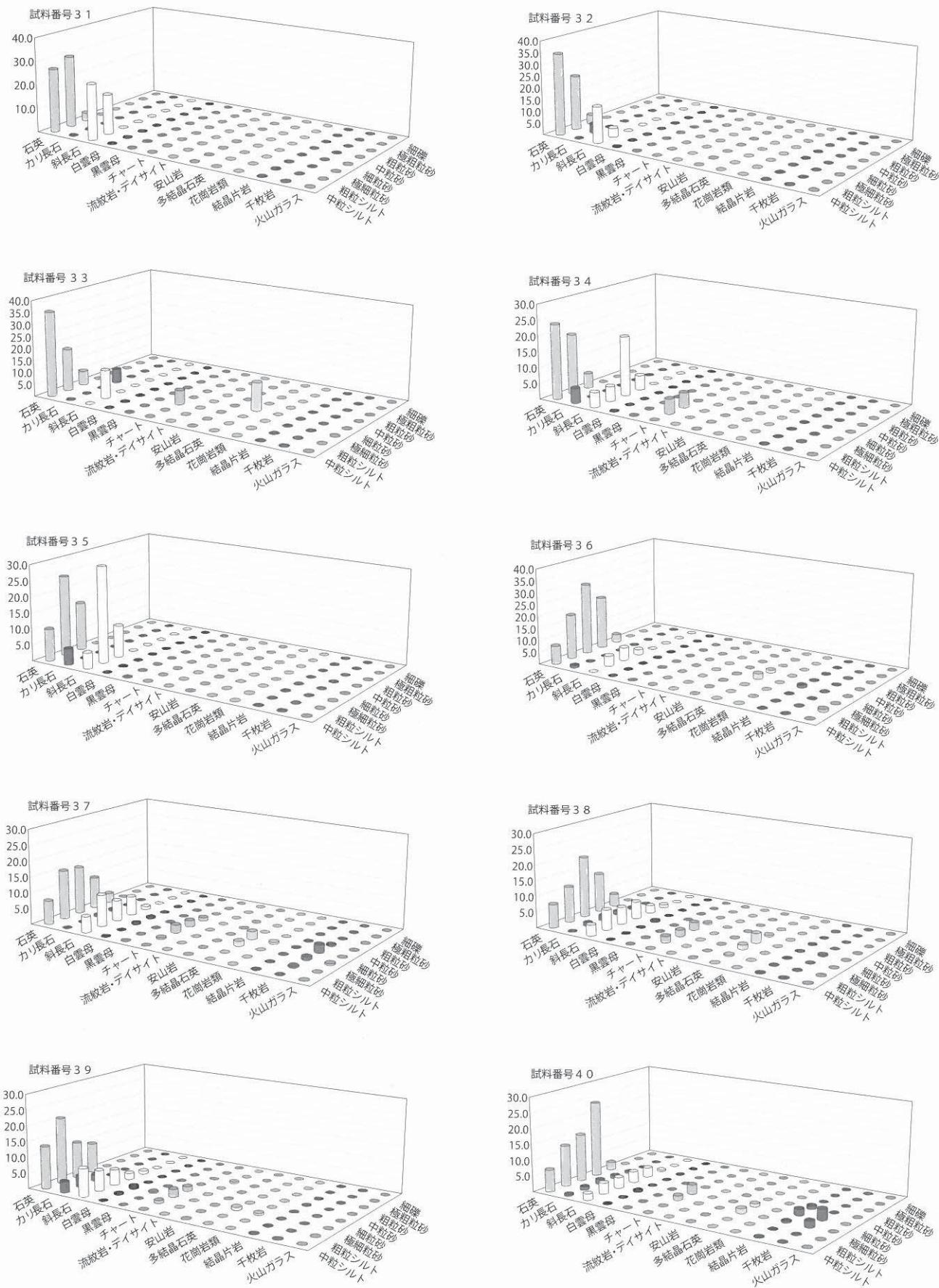


図6 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（4）

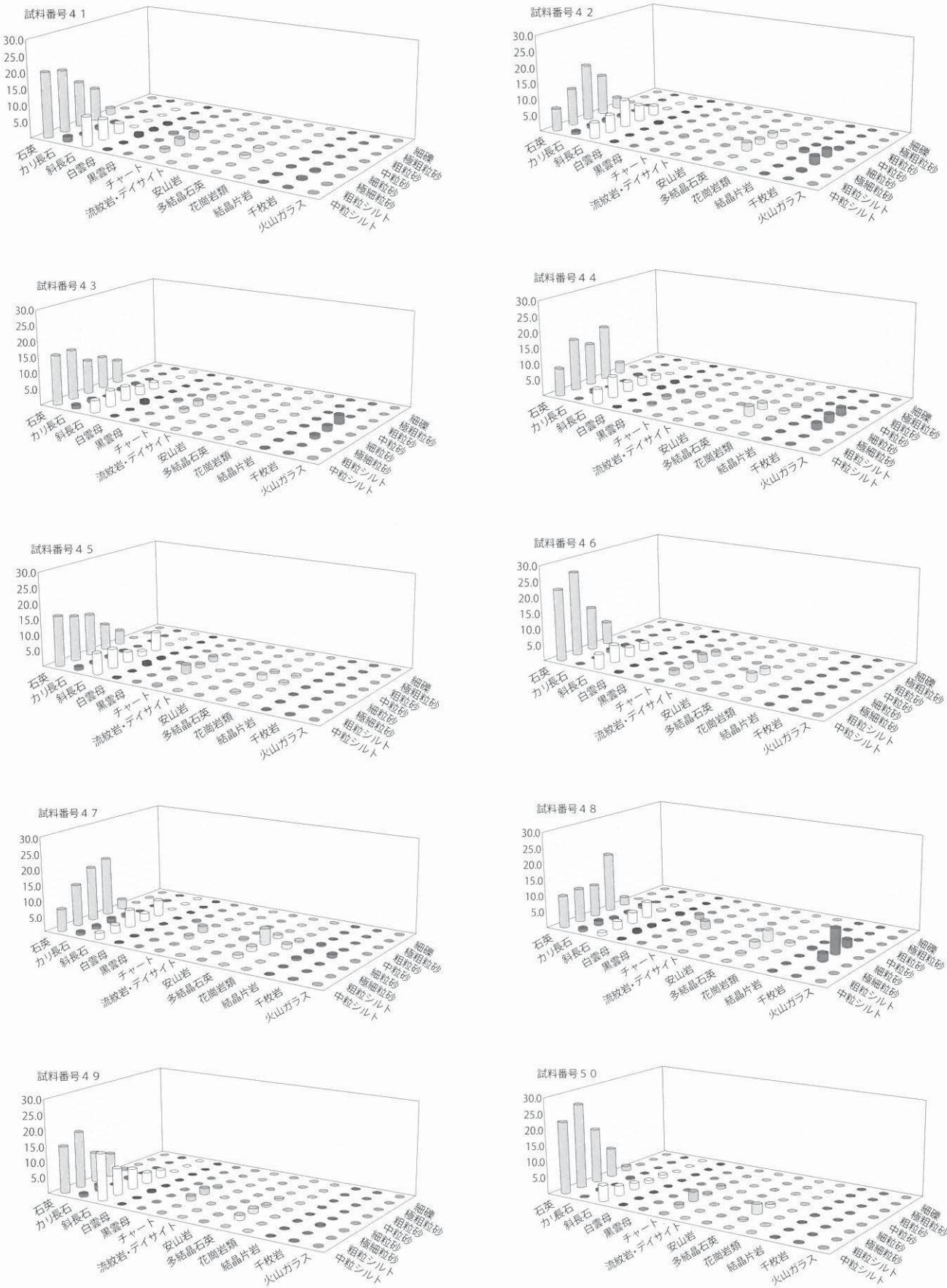


図 7 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 (5)

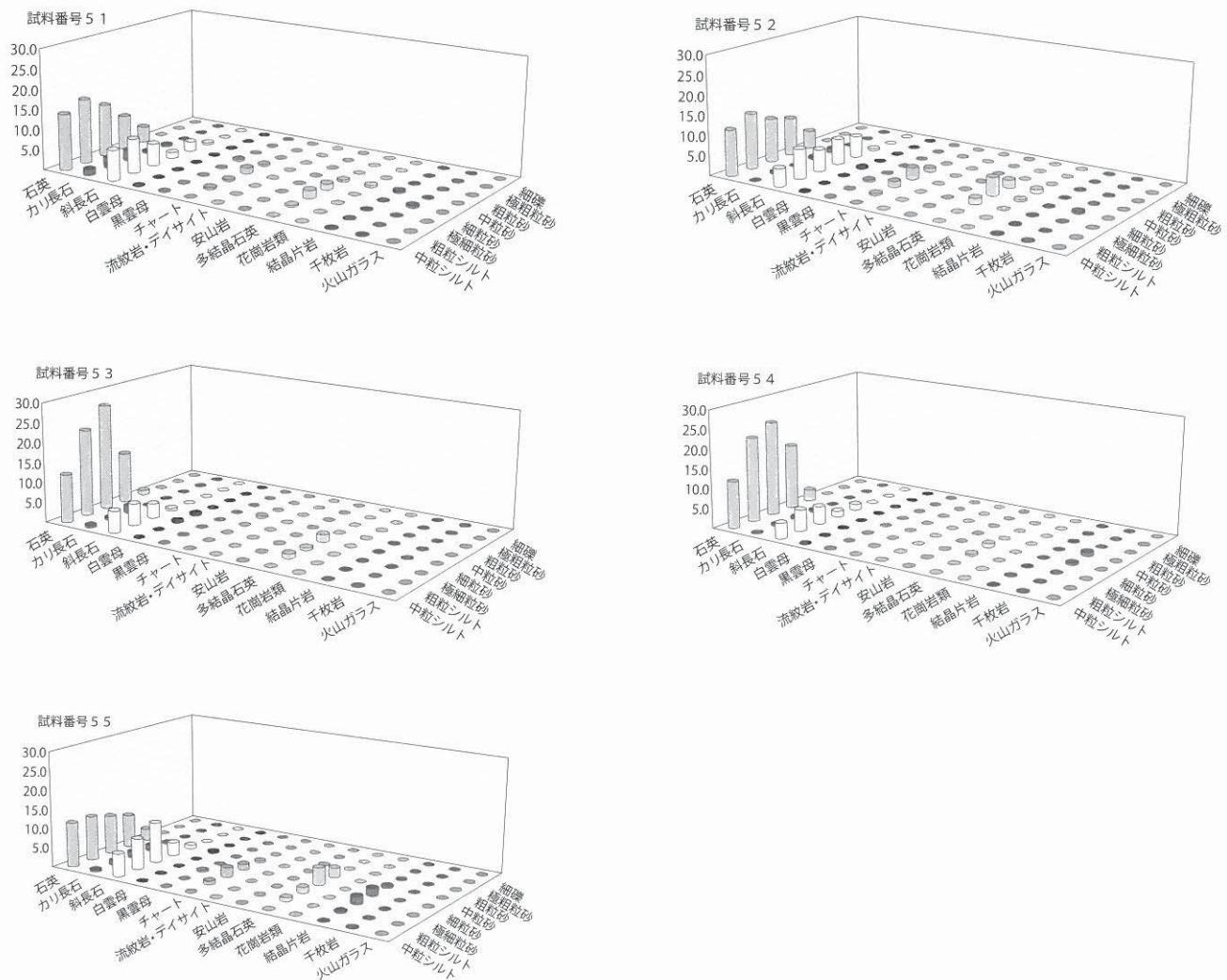


図8 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（6）

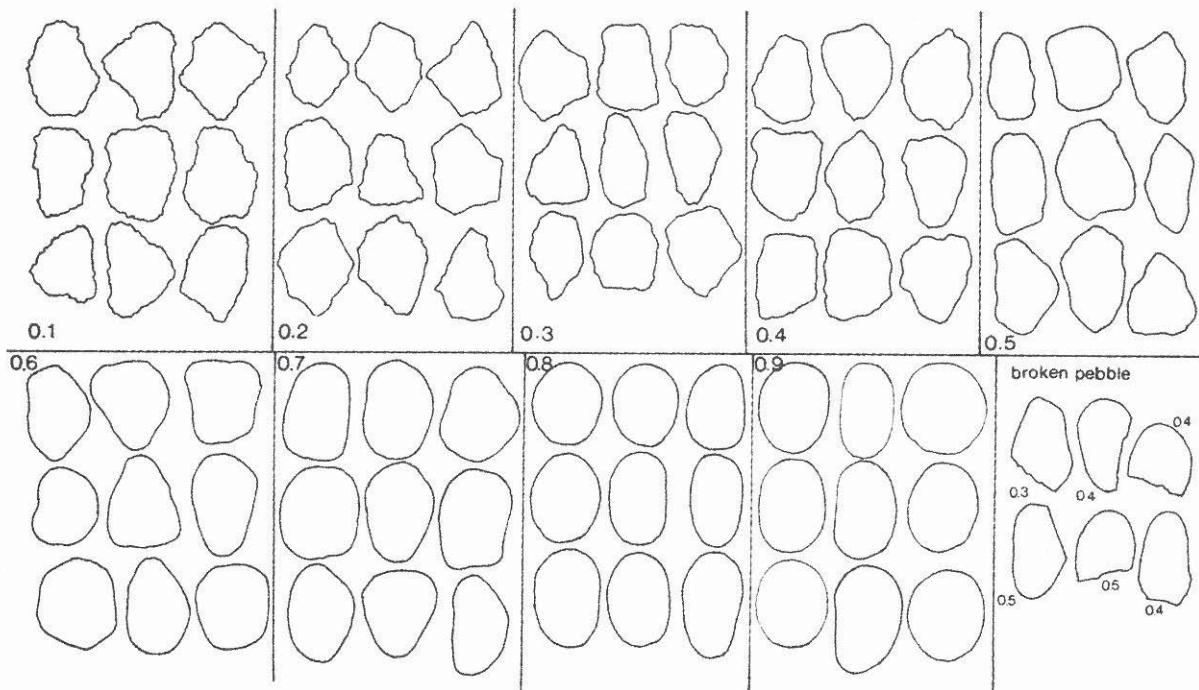


図9 Krumbein(1941) の円磨度印象図

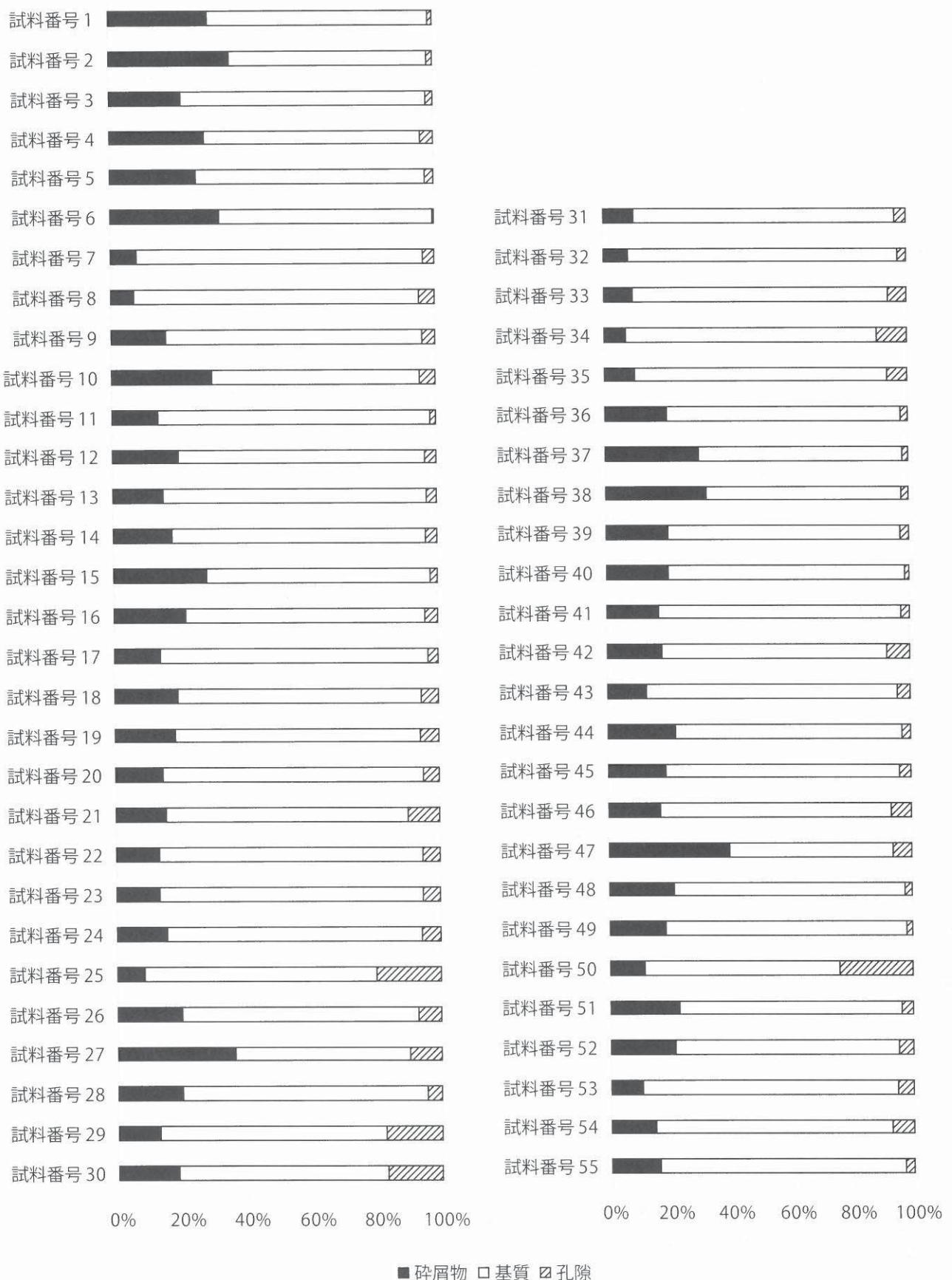


図 10 孔隙・砂粒・基質の割合

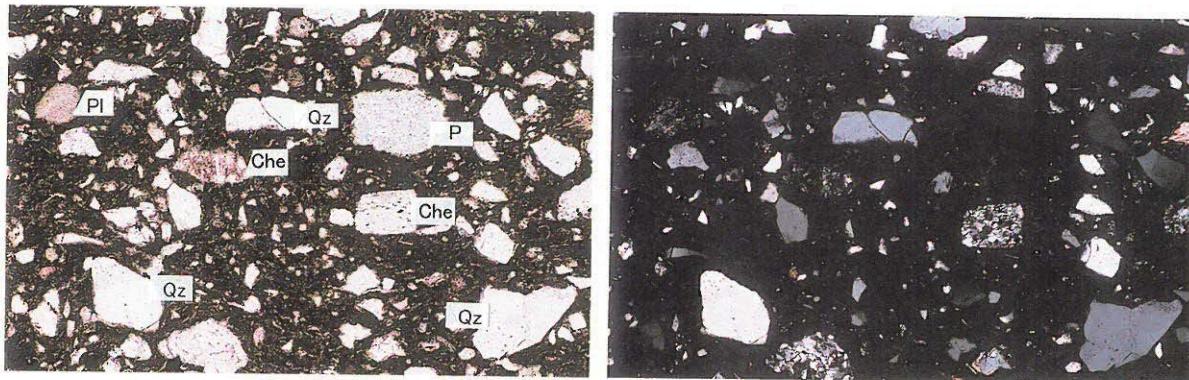


図 11 胎土中の砂の粒径組成①

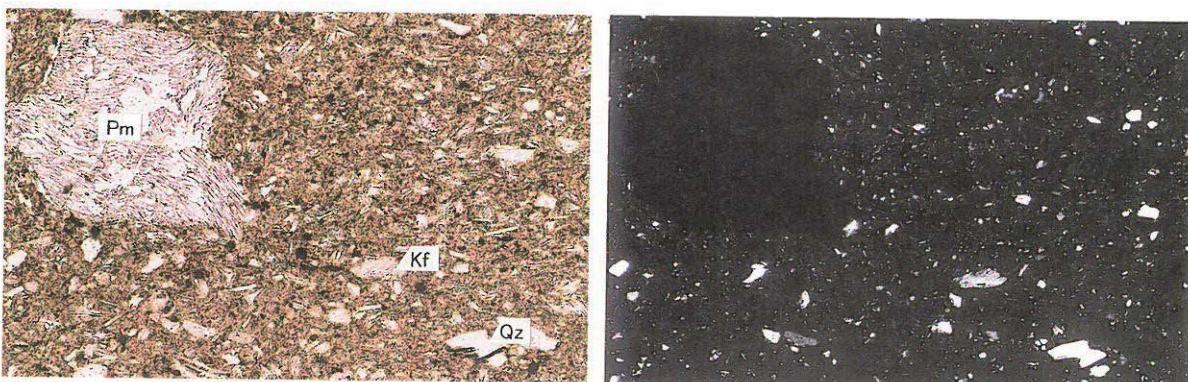


図 12 胎土中の砂の粒径組成(2)

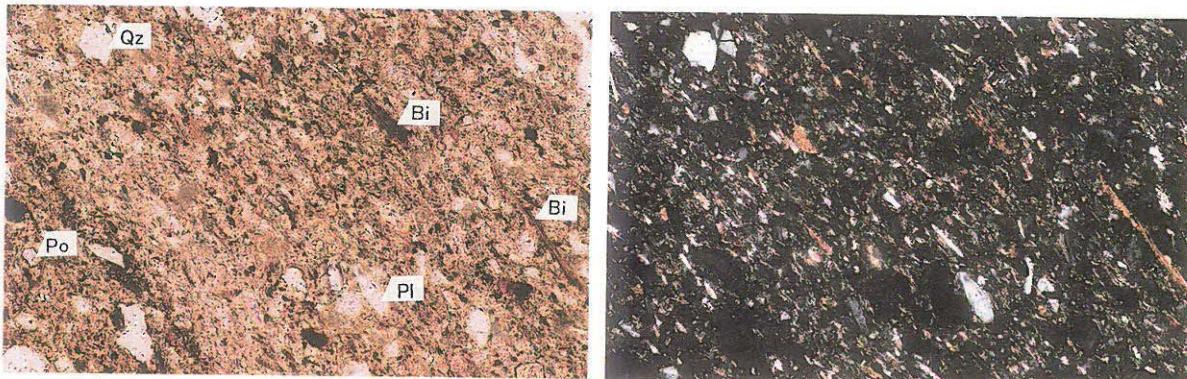
図版1 薄片 (1)



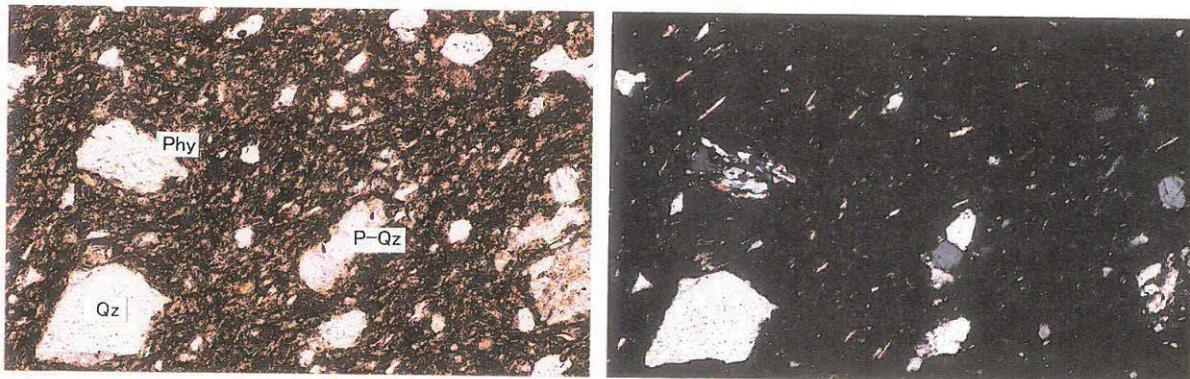
1. 資料番号2 (二階殿 首里城二階殿 瓦質土器)



2. 資料番号4 (下之御庭他 首里城木曳門 瓦質土器)



3. 資料番号9 (下之御庭他 首里城下之御庭 陶質土器)



4. 資料番号11 (下之御庭他 首里城下之御庭 陶質土器)

Qz : 石英 PI : 斜長石 Kf : カリ長石 Bi : 黒雲母

Che : チャート P - Qz : 多結晶石英 Phy : 千枚岩

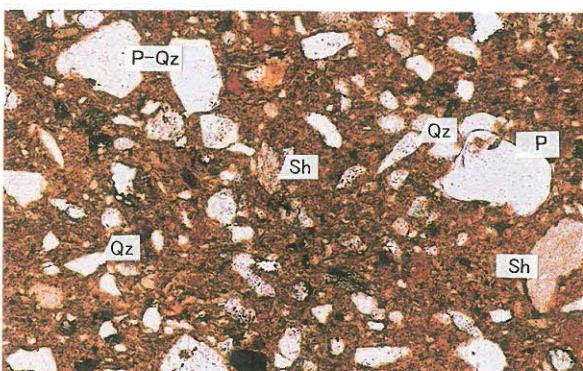
Pm : 軽石 Po : 植物珪酸体 P : 孔隙

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

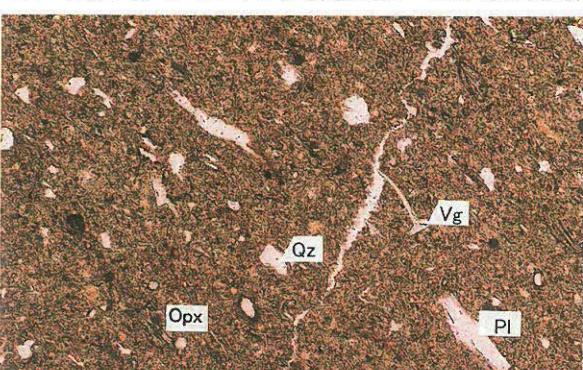
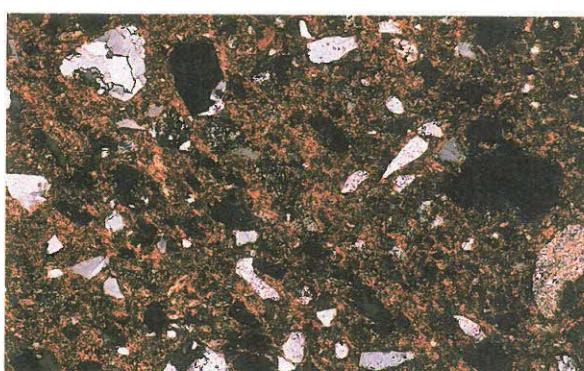
0.5mm 0.2mm

1, 2 3, 4

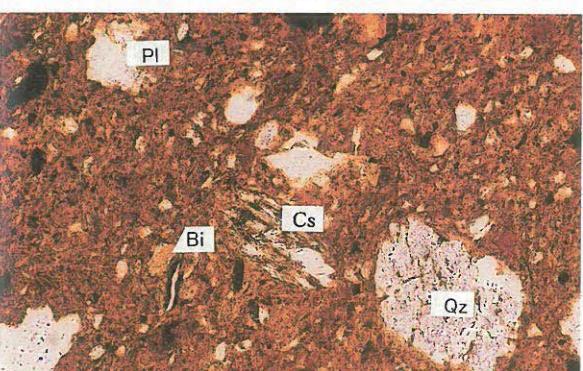
図版2 薄片(2)



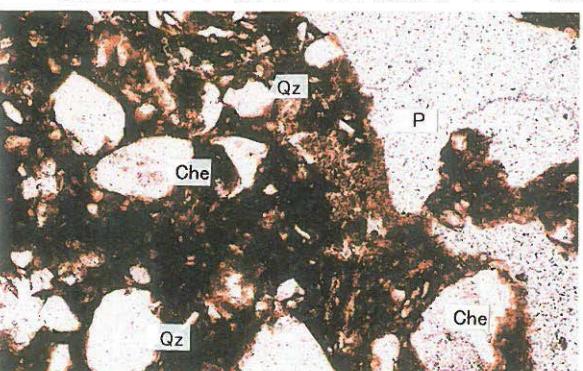
5. 資料番号 12 (下之御庭他 首里城木曳門 瓦質?土器)



6. 資料番号 15 (下之御庭他 首里城木曳門 土器)



7. 資料番号 18 (H17 御内原西 E-8 明朝系瓦)



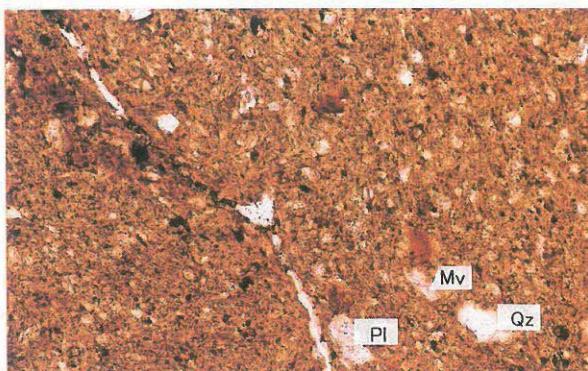
8. 資料番号 28 (H17 御内原西 カクラン 沖無)

Qz : 石英 Pl : 斜長石 Bi : 黒雲母 Opx : 斜方輝石
 Sh : 貞岩 Che : チャート Cs : 結晶片岩 P - Qz : 多結晶石英
 Vg : 火山ガラス P : 孔隙
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

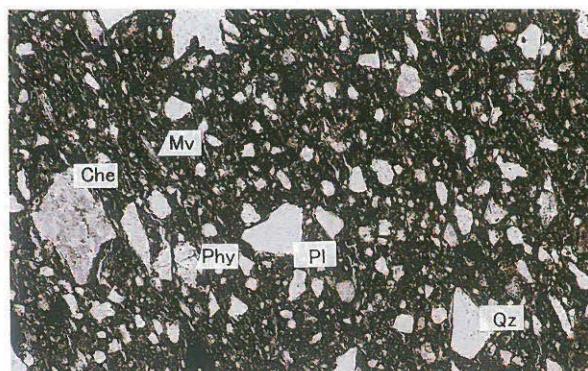
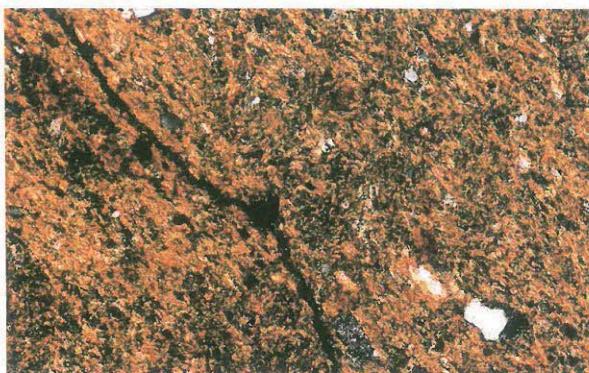
0.5mm 0.2mm

5, 6 7, 8

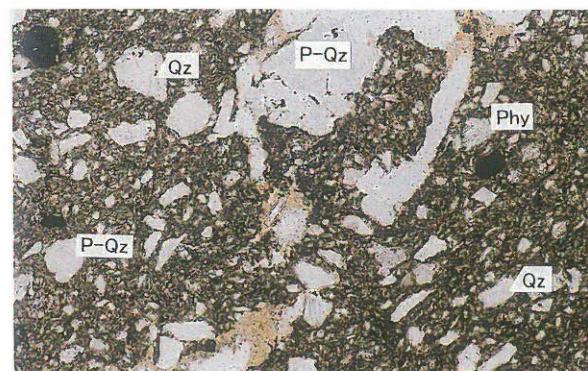
図版3 薄片 (3)



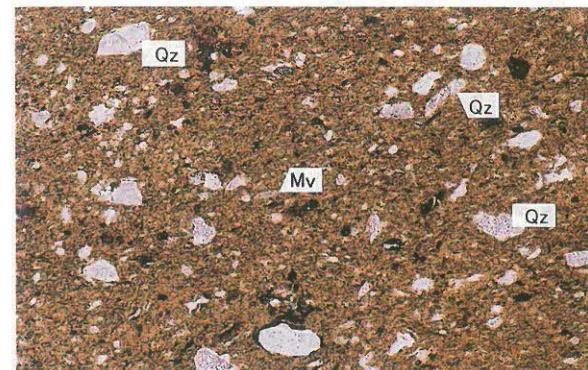
9. 資料番号 32 (H17 御内原西 B-4 (D) 土器)



10. 資料番号 37 (H17 御内原西 B-5- (A)



11. 資料番号 47 (H17 御内原西 北地区)



12. 資料番号 53 (H17 御内原西 北地区)



Qz : 石英 Pl : 斜長石 Mv : 白雲母 Phy : 千枚岩

Che : チャート P - Qz : 多結晶石英

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.2mm 0.5mm

掛保久防空壕

～下水道工事に係る緊急発掘調査報告～

Kakeboku Bomb Shelter

-A Report of a Salvage Excavation Prior to Sewer Construction-

西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター

Nishihara-cho Board of Education / Okinawa Prefectural Archeological Center

ABSTRACT : Kakeboku bomb shelter is a horizontal tunnel on the hillside, dug during WWII. The size of the tunnel is small so that it may have been designed for a single family. Some dining goods such as bowl, plate and iron pot were unearthed as well as one set of skeletal remains in the shelter. This shelter, located in Aza-Kakeboku of Nishihara-cho, Okinawa prefecture, was discovered in November 14, 2005, in the course of the sewer construction. The excavation was carried out for the purpose of data recovery. This is a report of the excavation results.

目次と文章担当

1. はじめに	（山田浩久）	112
2. 調査に至る経緯	（島袋智之）	112
1) 調査に至る経緯		
2) 調査体制		
3) 調査経過		
3. 位置と環境	（島袋智之・山田浩久）	113
1) 地理的環境		
2) 歴史的環境		
4. 西原町の沖縄戦と戦争遺跡	（伊波直樹）	116
1) 西原町の沖縄戦		
2) 西原町の戦争遺跡		
5. 遺構	（伊波直樹）	122
1) 立地と調査経過		
2) 形態的特徴		
3) 遺構内の様相		
6. 遺物	（山田浩久）	129
1) 染付		
2) 沖縄産無釉陶器		
3) 沖縄産施釉陶器		
4) 本土産近現代磁器		
5) 鉄製品		
6) 研		
7) 瓦		
8) ガラス製品		
9) セルロイド製品		
7. 人骨	（山田浩久）	132
8. 聞き取り調査	（伊波直樹）	135
1) 戦前の掛保久		
2) 今回調査した壕について		
9. まとめ	（伊波直樹）	139

1. はじめに

本報告は掛保久防空壕の発掘調査成果をまとめたものである。平成17年度に西原町教育委員会が主体となり、沖縄県教育庁文化課・沖縄県立埋蔵文化財センターが協力をして実施した。発掘調査は平成17年11月15日～11月18日までの4日間行ない、資料整理は沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて平成17・18年度に実施した。また、当該の壕に伴う聞き取り調査は西原町掛保久公民館にて平成18年度に実施した。

現地調査で得られた遺物・実測図・写真・画像デジタルデータ等の各種調査記録は沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管しているが、本報告の刊行後は西原町教育委員会にて保管する予定である。

2. 調査に至る経緯

1) 調査に至る経緯

平成17年11月14日、掛保久の里道において下水道工事中に、西原町役場区画整理課の職員によって空洞が発見され、生涯学習課文化財係へ連絡が入った。

現場を確認すると中に遺物があり、工事担当職員と話をして遺物、遺構の確認することになった。11月15日、現場へ行き空洞の中に入る。すると、14日に確認した状況から明らかに遺物が動かされており、発見時のままでの調査は困難になったので、下地の確認のため土を取り除く作業をしていると、骨のようなものが出土した。県文化課に連絡して現場を確認してもらい、調査への協力の依頼をしたところ、県の指導の下、調査をすることになった。

2) 調査体制

発掘調査は沖縄県文化課及び沖縄県立埋蔵文化財センターの協力を得て西原町教育委員会が主体となり、平成17年11月15日（火）～11月18日（金）まで実施した。調査体制は以下のとおりである。

事業主体	西原町教育委員会	教育長	垣花 武信
事業事務	西原町教育委員会生涯学習課	課長	中山 博光
	"	文化財係長	玉那霸 力
	"	文化財係主事	島袋 智之
調査指導	沖縄県教育庁文化課	課長	千木良 芳範
	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課長	岸本 義彦
調査員	西原町教育委員会生涯学習課	文化財係主事	島袋 智之
	沖縄県教育庁文化課	専門員	中山 晋
	"	"	新垣 力
	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課嘱託員	伊波 直樹
	"	"	山田 浩久
聞き取り調査協力者		掛保久在住	玉城 善長
		掛保久自治会長	玉那霸 整
発掘調査協力者		掛保久在住	新川 幸信
資料整理協力者	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課	金城友香・光嶋香・仲村毅・中山まり・矢舟章浩

3) 調査経過

発掘調査は平成 17 年 11 月 15 日（火）より開始し、11 月 18 日（金）までの 4 日間で調査を行なった。掛保久の里道において、下水道工事のためバックホウにより地面を掘削中大きな空洞が確認されたそうである。空洞から中を覗くと、本土産近現代磁器が積むように置かれており、他に沖縄産無釉陶器等が散在していることから、防空壕の上部から開けたことがわかった。壕内は 2 人がやっと入れる位のスペースしかなく、内部が暗くて作業は困難であったが、近くに住む新川幸信氏の協力で、照明と土置き場を確保していただき、調査を開始した。

壕内は、成人男性が中腰でしか入れないほど狭いため、スコップがほとんど使用できず、地道に手鍬などで掘削し、バケツ等に土砂を入れ運びだした。壕本来の入口部分もある程度までは土砂を取り除くことができたが、天井からの崩落の恐れがあったため、確認するまでには至らなかった。

壕本来の入口にあたる部分以外の土砂を取り除くと、遺物と共に床部が現れ、床には縦長の板が敷かれているのが確認できた。この状況を図面と写真に記録した。記録した後にこれらの遺物・床板を取り上げたが、さらに床板の下から一条の溝が確認できた。この検出状況も同様に記録を行ない、調査を終了した。

発掘調査終了後、現場で記録した写真・図・遺物を沖縄県立埋蔵文化財センターに搬入し、資料整理を開始した。すでに平成 17 年度の資料整理計画が決まっており、年度内に報告することは難しかったため、平成 18 年度も引き続き資料整理と当該の壕に伴う聞き取り調査を実施し、年度末に執筆・編集を行なった。

3. 位置と環境

1) 地理的環境

西原町は、沖縄本島中部南端の東海岸側に位置し、その北端が北緯 26 度 15 分 12 秒、南端が北緯 26 度 12 分 24 秒、東端が東経 127 度 47 分 30 秒、西端が東経 127 度 44 分 6 秒である。東西約 5.8 キロ、南北約 5.1 キロで、面積が約 15.57 km²。北は中城村・宜野湾市と、西は浦添市・那覇市と、南は南風原町・与那原町と接し、東は中城湾に面する。

地形的には、低地部と丘陵部に大別される。低地部は、中央部で若干丘陵部に食い込んでいるが、大体町の東半分を占め、小波津川をはじめ数本の川が東へ流れているが、大きな河川はない。また、各川とも勾配は極めて小さく、したがって流れもゆったりしている。

掛保久・小那覇集落の東には旧日本軍の飛行場があった。さらにその東側の海岸には、昭和 40 年代に公有水面の埋め立てによってできた土地がおよそ 666,027 m²（南西石油株式会社敷地部分）あり、さらにその南側隣接海岸部分には平成 8 年 4 月以降着工（マリンタウンプロジェクト=MTP）された約 124 ha（西原町部分は約 60 ha）におよぶ広大な埋め立て地がある。

丘陵部は、ほぼ町の西半分を占め、シルト質泥岩や砂岩を主とする新第三紀島尻層群が広く分布し、その岩質から盆状谷（丘陵地を刻んだ谷幅の広い浅い谷）の発達がみられ、その谷底には基盤岩の風化土壤（方言名・ジャーガル）が堆積している。丘陵地にある坂田小学校付近には、東流する川の流域と西流する川の流域との境界（分水嶺）が通っており、その最も低い標高はおよそ 70 メートル程である。与那原町との境界をなす運玉森は、標高 158.1 m と高くない山ではあるが、山の形の美しいことで広く県民に知られている。また、去る沖縄戦では日米両軍の間で激しい攻防戦が行われた場所としても知られている。丘陵と低地の境界は急斜面地からなり、両者の境界は現地においても明確に区別できる。

町内では長期にわたる気象観測は実施されていないので詳細な気候状況は不明であるが、隣接する

那覇市において長期にわたる気象観測が行なわれている。本町より数キロ離れた場所での観測であるがその気候状況は、本町にもあてはまると考えられる。那覇市に所在する沖縄気象台が気象観測したデータをまとめたものがある。月平均気温が25度以上の月が6月から9月まで4ヶ月も続き、特に7・8月は28度を超えており、5月から9月までの相対湿度は79%以上もあり、夏はかなり蒸し暑いといえる。一方、最寒月である1月の平均気温は16.0度で、冬でも暖かいといえる。また、各月の平均風速をみると4.0m以上あり、その結果、夏の蒸し暑さが幾分やわらぐが、冬は気温の割には冷たく感じられるようになる（1961年～1990年の平均値、風速は1975年～1986年平均）。

年平均降水量は2,000mmを超えており、かなり多い。各月とも雨は多く降っており、最小雨月の2月でも100mm以上ある。特に、梅雨期の5・6月と、台風の影響を受ける8月に多く降る。沖縄の降雨の特性としては、年平均降水量は多いが、年によるばらつきが大きい。降雨量は、5・6月の梅雨期、8月の台風期および10月上旬の秋雨前線南下の時期に集中し、しかもこれらの時期には豪雨が多い。また、雨域が狭いために観測記録に残りにくい雷雨やスコール性降雨も多い。さらに、沖縄の雨は雨滴が大きいこと、強雨型（6mm／10分以上）ほどより大きな雨滴が多くなるという（翁長1969）。

西原町内の植物分布をみると、丘陵地・低地ではヤブニッケイ・タブなど、丘陵地および斜面地ではリュウキュウマツ・オオバギ・アコウ・アカギ・ハマイヌビワ・ガジュマルなど、海岸付近にはイソフサギ・シマハママツナ・ハマササゲ・グンバイヒルガオ・クサトベラなど、人工改変地ではギンネム・タチアワユキセンダンゲサ・アフリカヒゲシバナなどが見られる。

集落の立地をみると、古い集落の大半が低地と丘陵の境界付近に立地しており、これらは水および耕作地の確保の上から有利な位置を選定した結果だと考えられる。町の中央部に位置する低地帯は、水田からサトウキビ畑へと変化をしているが、王府時代から現在まで常に本町における農業生産の中心地であることからも理解できよう。一方、丘陵地にある上原集落は、気象面（霧が多発）や水の確保の面で古い集落に比較して条件的に厳しかったと推察される。上原集落付近の本格的な開発は、1970年代後半に琉球大学が移転して以降であり、1985年（昭和63年4月20日設計の概要の認可）に土地区画整理事業（上原棚原土地区画整理事業）が導入された後は、当該集落付近の開発が一層加速化された。町内には、北と南を結ぶ2本の幹線道路（国道329号線、県道29号線）と東と西を結ぶ2本の幹線道路（県道38号線、県道34号線）の計4つの主要幹線道路が通っている。北と南を結ぶのは、東側を通る国道329号線と西側を通る県道29号線である。国道沿いおよびその東側には事務所、工場および製油所など事業所が数多く立地しており、町内でも最も工業開発の進んだ地域である。県道29号線は、道路拡幅や歩道設置などの整備が行われた結果、那覇市周辺地域の都市化現象の顕在化もあって、近年その道路沿いの開発が急速に進んでおり、特に県道38号線との交差点付近（県立西原高校付近）の開発は急激である。また、県道宜野湾西原線の敷設により、県道29号線との交差する付近から上原・棚原・坂田地区あたりへの開発は、町内でも最も住宅等の建設が著しいところであり、上原・棚原土地区画整理事業の効果で都市的住環境のまちへ大きく変容している。

2) 歴史的環境

西原町は、古くは西原間切として広域に及んでいたとされる。「にし原」の意は北原とされ、広く中頭方面を指して称していたとされる。さらには南原に相対しての名称であったとともに、首里畿内の北境の一角を形成していた村であったと記録されている。特に首里周辺に近接して位置する真和志・南風原・西原の各地域は「古くは首里三平等と呼ばれた地域であった」とされている。

村落の構成においても、各時期において間切内への編入出の変遷をたどっており、「17世紀中期ごろには、津堅島・あめく村・めかる村・泊村」と実に現在の2市（那覇市・うるま市勝連）の一部までをも広範囲に包括していたとされる。また、西原間切は、その広域を広く覆っている肥沃なジャガル土壌地帯を有していたことから、早くから田畠の農業生産の地として位置づけられていたことがわかる。首里に隣接した地域の一つであることも起因していたと思われるが、早くから、首里王府の直轄領に組み込まれていたといわれている。このように西原という地域が古くから、よく知られた地域として、幾多にわたる歴史の流れの中に村落の変遷をたどっていった跡が分かる。

ところで、この西原地域に最初の人間活動の舞台として遺跡が形成されるのは古く、沖縄貝塚時代の前期後半の時期にまで遡りうる。表面踏査の段階ではあるが、現在の棚原集落の北東方に位置する棚原貝塚で確認することができる。しかし実質的に、この西原地域が広域的に有効的に利用されていくのは、やはりグスク時代へ入ってからで、西原平野に広がるジャガル土壌地帯の開墾政策の始まりにもあるとされている。グスク遺跡として呼称されている中には、イシグスク、棚原グスク、幸地グスク、チキンタグスク等が存在する。現在までに確認されている遺跡の90%までが、歴史時代で中世～近世にかけて形成されたものである。小集落が点々と散在していたと考えられる。

また、西原町嘉手苅においては、第二尚氏の祖である尚円王の旧宅として知られる内間御殿の屋敷跡が存在する。東西の二殿（東江、西江）からなる。東江御殿はサンゴ石灰岩を素材として周囲を石垣で築いてある。東殿周辺からは、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦など赤色瓦と灰青色瓦の二種類が採集されている。近世期の沖縄産瓦とされている。

古く沖縄の歴史の流れの中に、首里王府との関連で、西原一帯が強力に関与していた地域の一つであったことが、ここにおいても確認できる。内間之御殿由来記に関する記録として中山家文書の中に見ることができる。

4. 西原町の沖縄戦と戦争遺跡

1) 西原町の沖縄戦

1944年（昭和19）3月、南西諸島を守備する大本営直轄の第32軍が創設された。当初、創設の主目的は「航空基地の建設」にあったが、同年6月米軍がサイパン島に上陸して以降、南西諸島にも米軍進攻の可能性が現実味を帯びてきたことから大本営は第32軍に地上戦闘部隊を編入し、南西諸島の防備を強化することを決定した。

当時の西原村には東部の小那覇から仲伊保に至る海岸平地に陸軍の沖縄東飛行場（西原飛行場）が同年5月から建設され、徴用労務者には地元西原村民がすでに沖縄中（嘉手納）や沖縄北（読谷）の飛行場工事に徴用されたため、島尻や離島の住民を徴用し工事にあたった。同年9月、第32軍の航空作戦準備のため飛行場設営の促進命令を発し、地上戦闘部隊の兵力を飛行場工事に投入して飛行場の完成をめざした。しかし、西原飛行場は強化の対象とされずに事実上放棄される状態に置かれた。飛行場用地一帯は地盤が軟弱なため、工事の先行きが困難視されたためといわれる。一方、地上戦闘部隊は8月中旬、第62師団歩兵第63旅団歩兵第11大隊約1,200名が西原国民学校や村内の各字に駐屯するようになった。

1944年（昭和19）10月10日の米軍による南西諸島全域への空襲、いわゆる「十・十空襲」では西原村では兼久にあった製糖工場や西原飛行場などが爆撃された。「十・十空襲」以降、本島南部に駐屯していた第9師団が台湾へ移駐したことなどから、第32軍は作戦方針を戦略持久作戦へ転換し、それに伴い本島内の部隊配置も大幅に変更されることになった。そして、米軍の沖縄上陸が必至であると判断した軍司令部は、軍民あげて持久戦に備えるよう指示し、強固な陣地壕や待避壕を構築することを命令した。また、沖縄県庁をはじめ各警察署は重要書類の保管や戦闘中でも会議が開ける壕の構築を行うようになった。それに呼応して各市町村でも重要書類の保管を行うための役場壕を構築するようになり、西原村でも1944年（昭和19）6月から地元の人夫数名を雇って壕の掘削作業が行われた。

1945年（昭和20）4月1日、米軍が本島中部西海岸に上陸して以降、首里に所在する第32軍司令部を目指す米軍とそれを阻止する旧日本軍との激しい戦闘が約2ヶ月に亘って中部地区で展開された。米軍上陸時、首里に程近い西原村では第62師団を中心とする各部隊が防衛陣地を形成していたが、米軍の攻勢を受け第32軍は4月22日、本島南部に配備していた第24師団を中部戦線へ投入する。第24師団は首里の東方を中心に西原村の運玉森、小波津、翁長、幸地にそれぞれ配備された。5月4日、第32軍は総攻撃を行い、西原村の小波津、翁長、呉屋、棚原、幸地一帯では日米両軍の激しい戦闘が展開されるが、総攻撃は失敗に終わる。5月6日、軍司令部は持久作戦に方針を転換し、現時点で保持している西原村では運玉森・桃原・幸地南方の高地を第一線とし、部隊の再配備を行った。米軍は首里に向けて徐々に南下し、特に運玉森では5月25日に米軍に占領されるまで激しい攻防が繰り広げられた。そして、5月27日、第32軍司令部は首里を放棄し摩文仁への撤退を開始することとなった。

一方、西原村の住民は東海岸の集落民（小那覇、嘉手苅、兼久等）が本島北部へ避難したのを除き、それ以外の集落民は米軍上陸直後、村南部の池田ヘンサスクー一帯に避難しており、首里、中城方面からの避難民も合わせて約2万人余いたといわれる。4月24日、第32軍は戦況の悪化を受け首里周辺に避難していた非戦闘員（主に住民）に南部への移動を命じた。しかし、住民が南部への移動を始めたころは西原村一帯でも米軍の攻撃が集中し、多数の住民が犠牲となった。第32軍が首里を放棄し摩文仁へ撤退すると、西原村をはじめ中部地区の住民が多数避難した南部での戦闘に巻き込まれ、さらに多くの犠牲者を出すこととなった。

沖縄戦における西原村の住民の戦死率は約63%に達し、中部地区の市町村では最も高い戦死率を数

える。その要因として、西原村は第32軍司令部が所在した首里に程近く、旧日本軍の防衛陣地が集中して構築されており、多数の兵が駐屯していた。住民は旧日本軍とともに行動するのが安全と考え、米軍上陸後も池田ヘンサスクなど村内の避難所に留まっていたが、軍からの南部への避難命令が出るころにはすでに北部への避難経路が絶たれていた状況であった。避難先の南部においても6月以降の南部掃討戦にも巻き込まれる形となり、犠牲者が続出する事態を避けられない状況があったと考えられる。

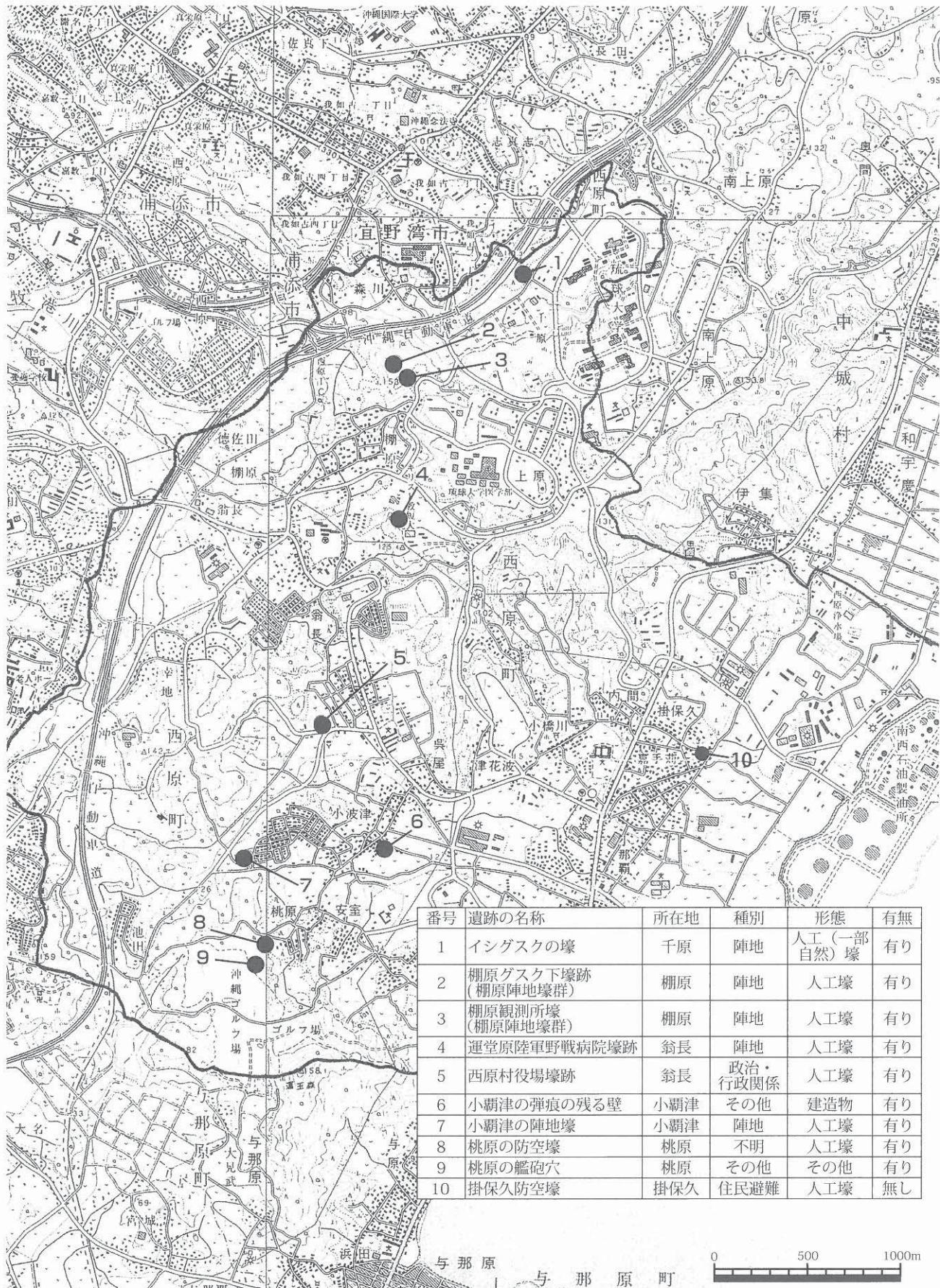
2) 西原町の戦争遺跡

沖縄県内でも西原町は「戦跡考古学」(當眞 1984)が提唱された1980年代から戦争遺跡の調査を行ってきたところである。宇森川の「フニムイ」と称する丘の中腹に掘られていた森川陣地壕は旧日本軍の陣地壕で、地元住民からの聞き取り調査では、1944年(昭和19)8月頃から1945年(昭和20)1月にかけて第62師団(石部隊)の弾薬や食料を貯蔵する目的で近隣の住民を徴用して掘られたものである。この壕が沖縄自動車道の開通によって壊されることになったため、町教育委員会では1985年(昭和60)2月に急遽調査を実施することになった。壕は第3紀砂岩(ニービ)や第3紀泥岩(クチャ)を基盤とする標高127mのフニムイの中腹に、南斜面を開口部にして掘られている。全長は約38mで西原町内に所在する壕の中では比較的規模の大きな壕である。内部は不発弾が多いため発掘することを控え、専ら表面踏査によって床面に散乱している戦争遺物の位置を壕の平面図にプロットした。採集された遺物は発炎筒、不発弾、軍靴、空缶、茶碗類、手榴弾などであった。なお、戦死者の遺骨はなかった。

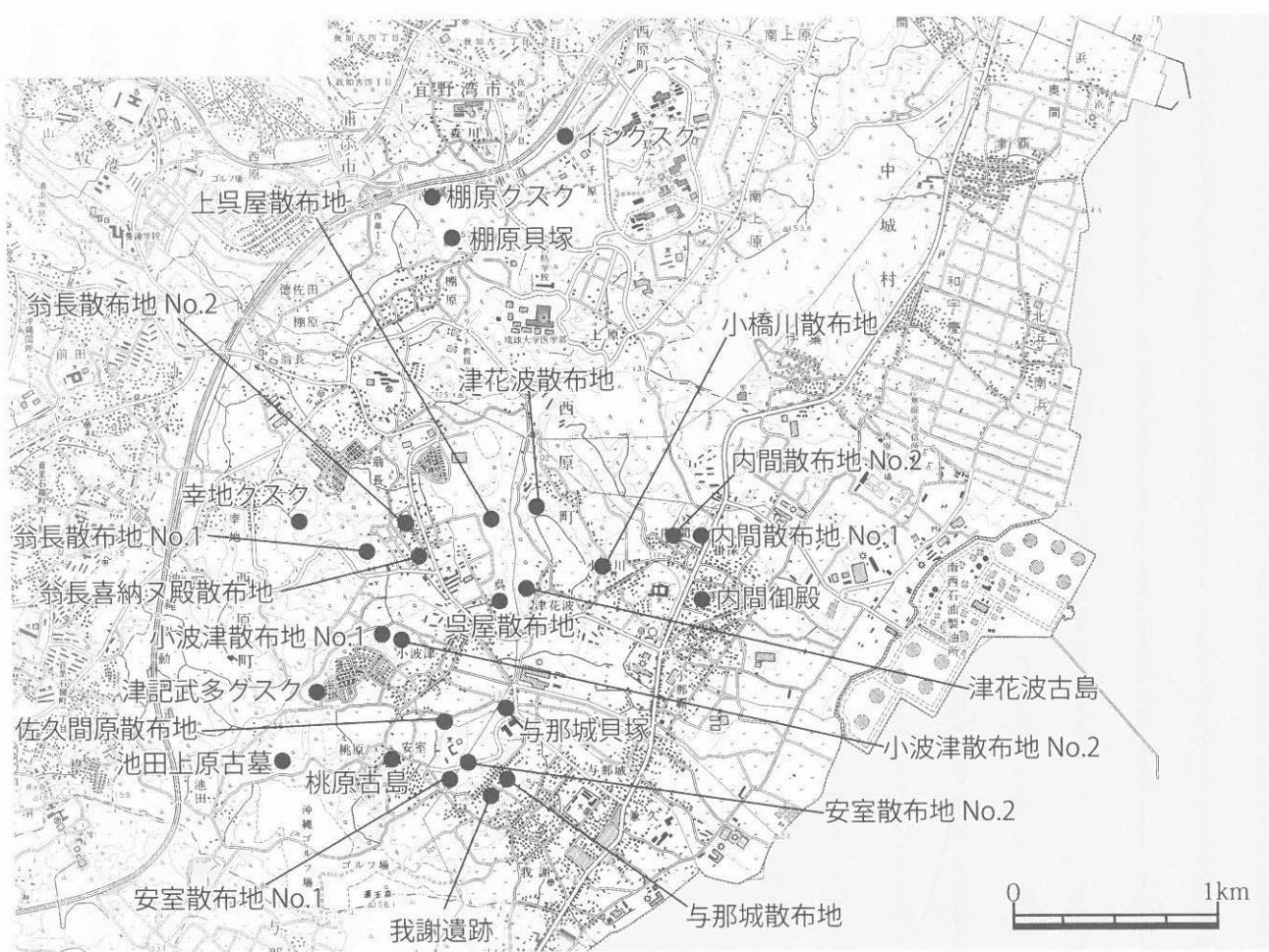
同年の9月には翁長に所在する西原村役場壕の発掘調査が行われた。役場壕はニービに掘りこまれ、ホール型をしており、全体が約40m²の面積である。ホールの中央には1m角の2本の柱を残して掘られ、落盤防止にあてている。1980年頃土建業者によって道路に面した部分が抉られ大きく開口し、現在は棚と入口が設置されているが、ここは壕の最も奥の部分にあたるところである。壕内からは頭蓋骨の破片や砲弾の薬きょう、ジェラルミン製の水筒、飯ごう、鉄製のコップなどの遺物が出土した。2000年(平成12)、西原町が町制20周年記念に役場壕の保存・公開事業を実施し、案内板が設置された。

2000年(平成12)度には沖縄県立埋蔵文化財センターが調査主体となって行った沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業の本島中部地区の調査で、西原町は先述した西原村役場壕を含め9箇所の戦争遺跡が確認されている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2002)。西原町の戦争遺跡の特徴として、9箇所の内5箇所は旧日本軍関係の人工の陣地壕で、他の市町村で見られるような住民避難等で利用された自然のガマは戦争遺跡として報告されていない。西原町の地質はニービやクチャを主とした第3紀島尻層群が広く分布しており、琉球石灰岩の地盤がほとんど見られない地域である。沖縄戦時、西原町は旧日本軍関係の施設が集中して構築されていたが、戦後、宅地造成などの地形改変によって沖縄戦当時の防空壕や各種の施設が相当数破壊されたものと思われる。また、比較的軟らかいニービやクチャの岩盤に掘り込まれた壕は、戦時中は落盤等を防止するために坑木等で補強していたが、戦後は放置されて年月の経過とともに自然に落盤、埋没した壕も多数あるものと推測される。

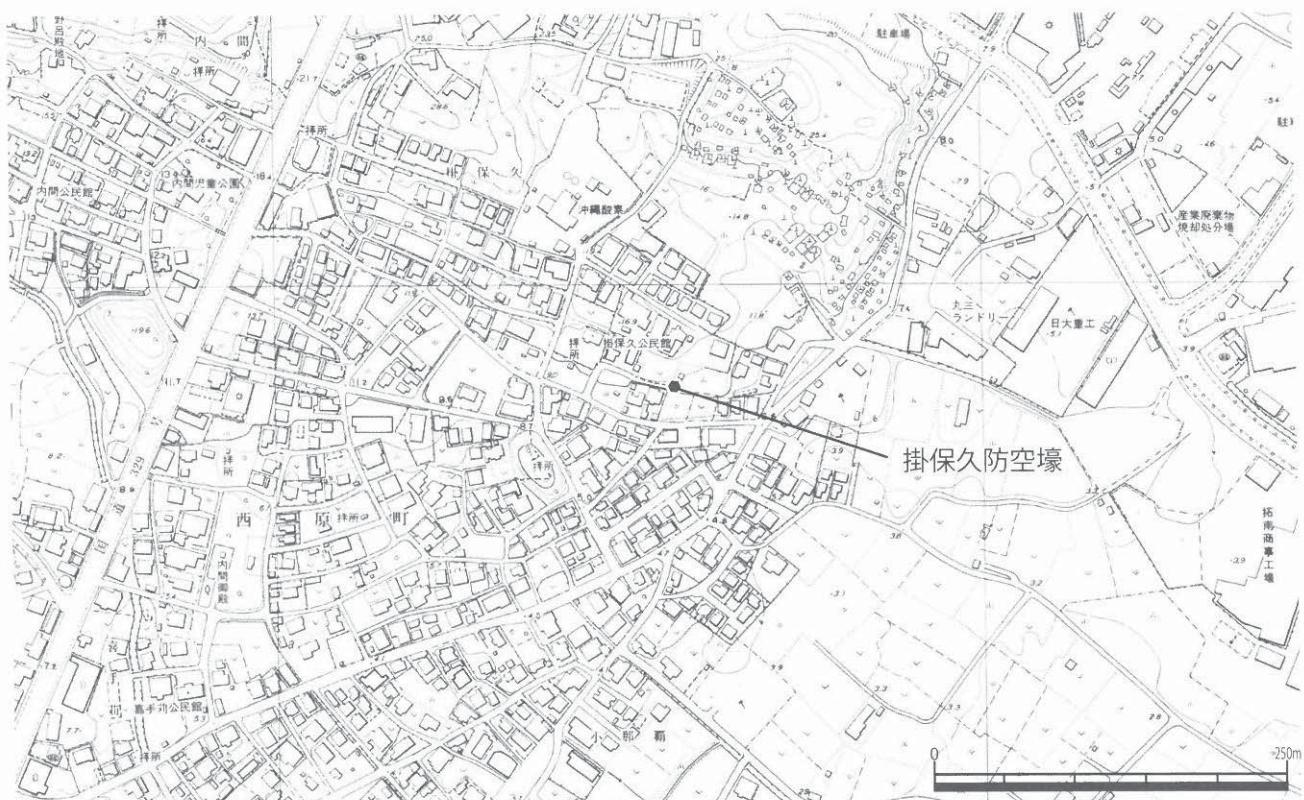
今回報告する掛保久地区の防空壕のように、現在はその存在を知られることなく地下に埋もれていたものが、こうした形で発見されるような事が今後においても十分予想される。



第1図 西原町戦争遺跡分布図 (『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(II) -中部編-』から抜粋)



第2図 西原町の遺跡分布



第3図 掛保久防空壕の位置



写真 1.
西原村役場壕跡入口



写真 2.
西原村役場壕跡内部状況



写真 3.
棚原陣地壕群跡入口



写真4.
小波津の陣地壕跡入口



写真5.
小波津の陣地壕跡内部状況



写真6.
イシグスクの壕跡入口

5. 遺構

1) 立地と調査経過

当該の防空壕跡は下水道の配管工事で掘削した際に発見され、沖縄戦で使用されたと思われる防空壕である。防空壕が所在する一帯は現在、掛保久地区の住宅地域で、沖縄戦当時に比べると、地形が改変されている。壕の周辺は西側に掛保久地区の公民館、南西側に掛保久集落の御願所であるクシマーモー、北側の小高い丘陵地一帯には墓地群がある。

配管工事のため未舗装の小道を重機で掘削した際に壕の天井の一部が崩落した。発見時、崩落した箇所の直下には大量の本土産近現代磁器が積み重ねられ、沖縄産無釉陶器（壺）、人骨も散乱していたという。しかし、協議を経て本格的な発掘調査を開始する前に、発見時に確認された遺物はすでに取り上げられていた。

2) 形態的特徴

壕は第3紀砂岩（ニービ）に掘り込まれており、平面形で「L」字状に構築している。崩落して壕内に進入出来る箇所はL字の角の部分にあたり、調査前に取り上げた遺物が出土した場所でもある。北向きの通路には奥壁が見られるため、東方向に壕の入口があると判断し、流入した土砂の除去を行った。東向きの通路は奥に進むにしたがって土砂の堆積が厚くなり、その奥一面には土砂が詰まっている事などから、通路の最奥部が壕本来の進入口であることは分かったが、これ以上掘削すると、土砂が崩落する危険性があったため、壕本来の入口の形状等を確認するまでには至らなかった。

内部は重機で掘削した際に崩落した進入口以外に崩落箇所はなく、保存状況としては極めて良好である。天井の形状はアーチ状で、丁寧に成形されている。比較的加工しやすい砂岩地帯に掘り込まれていることもある、壁面には掘削痕が至るところに見られる。壕内部の計測値は東向きの通路が幅は0.7～1.0 m、高さは1.2～1.3 m、奥行は3.6 mを測り、北向きの通路は幅1.2 m、高さは1.3 m、奥行は2.7 mである。

3) 遺構内の様相

壕内部に流入した土砂を取り除くと、壕の中で使用していたと思われる当時の床面から遺物が検出された（第4図）。遺物は東向きの通路から主に出土し、特に通路の最奥部から西側約1 m以内にまとまって見られた。床面から検出された遺物は鉄製の鍋、本土産近現代磁器、沖縄産施釉陶器（壺）ガラス瓶、セルロイド製の歯ブラシ、硯等である。また、頭蓋骨の一部も確認し、発見時に確認された人骨も頭蓋骨の付近にまとめていたとのことであった。通路の中央部には床板と思われる木製品が2箇所残存しており、床板の下部には幅約20 cmの溝が確認された。一方、北向きの通路には大型の鉄鍋（シンメーナービ等）が側壁に掛けられた状態で残存していた。

床面から出土した遺物を取り上げた後（但し、北向きの通路で出土した大型の鉄鍋は持ち出すことが出来ず、壕内に残した。）、完掘すると床板の下部から確認された溝は最奥部（入口側）で床面の右寄り（南側）に掘られ、一旦20 cm程壕を造っている。それからまた溝が再開し、内部に行くにしたがって中央部に移行しながら立ち消える。幅は約20 cm、深さは6～8 cmで推移し、入口から内部へ向け若干傾斜している。また、床面の一部では約60 cmの範囲で火を受けた痕跡が確認された。



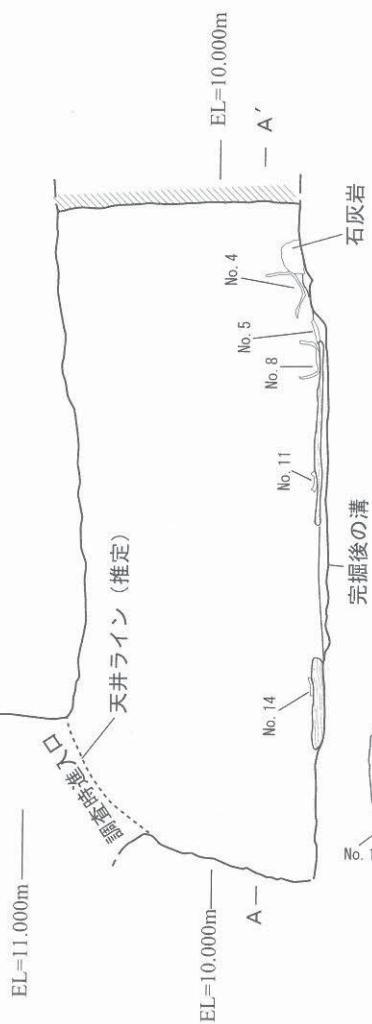
写真7. 掛保久防空壕遠景 [南より]



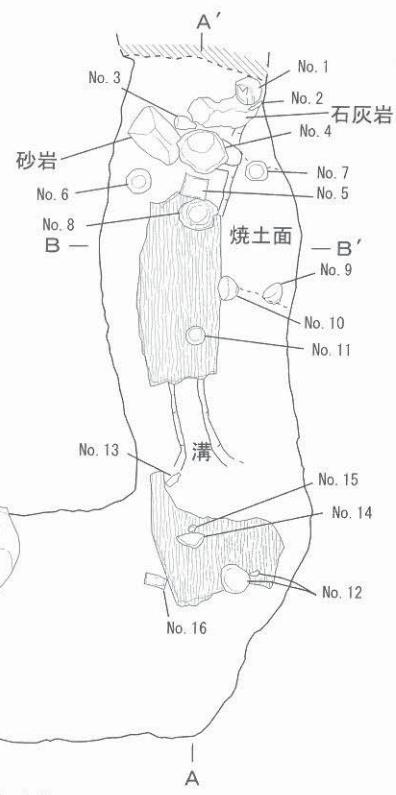
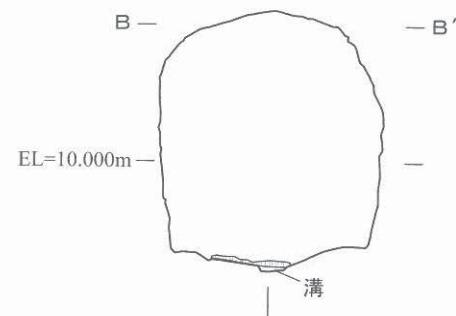
写真8. 掛保久防空壕発見位置 [北より]

地表面 内部断面図 (A-A' ライン)

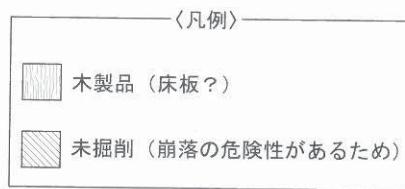
EL=12.000m



内部断面図 (B-B' ライン)

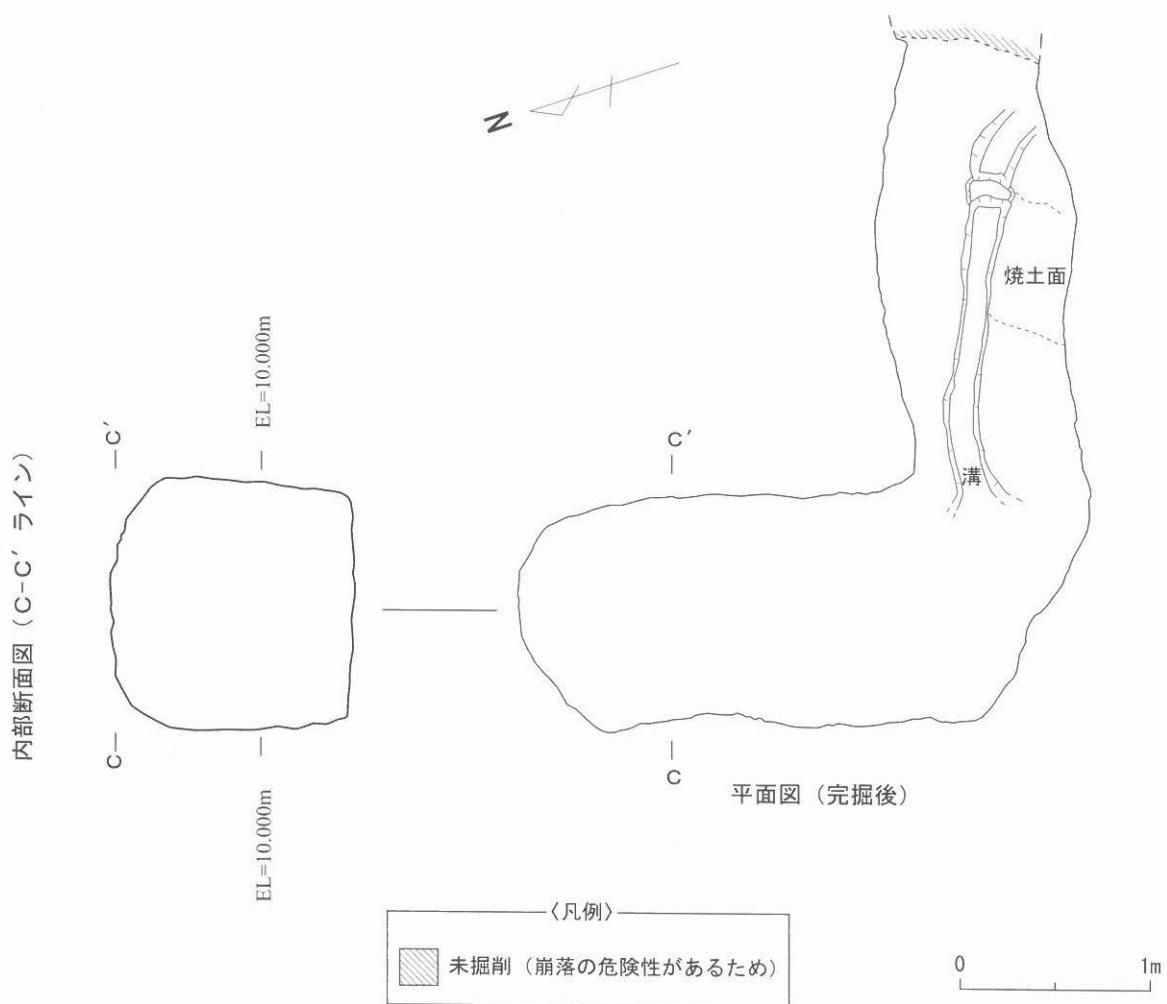


平面図 (遺物出土状況)



0 1m

第4図 掛保久防空壕実測図① (遺物出土状況)



第5図 掛保久防空壕実測図② (溝検出および完掘状況)

第1表 出土遺物一覧

No. 1	沖縄産施釉陶器 (小壺)	No. 10	本土産近現代磁器 (碗)
No. 2	沖縄産施釉陶器 (蓋)	No. 11	本土産近現代磁器 (蓋)
No. 3	本土産近現代磁器 (瓶)	No. 12	人骨 (頭頂骨)
No. 4	鉄製品 (鍋)	No. 13	ガラス製品 (小瓶)
No. 5	ガラス製品 (不明)	No. 14	本土産近現代磁器 (碗)
No. 6	染付 (碗)	No. 15	本土産近現代磁器 (小杯)
No. 7	鉄製品 (不明)	No. 16	石製品 (硯)
No. 8	鉄製品 (鍋)	No. 17	鉄製品 (鍋)
No. 9	本土産近現代磁器 (碗)	No. 18	鉄製品 (鍋)

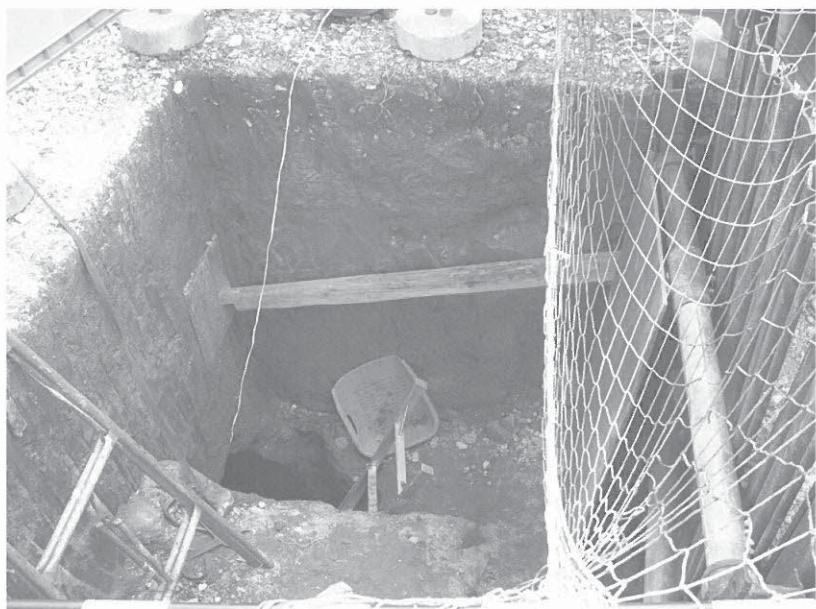


写真9.
防空壕発見地点 [北東より]

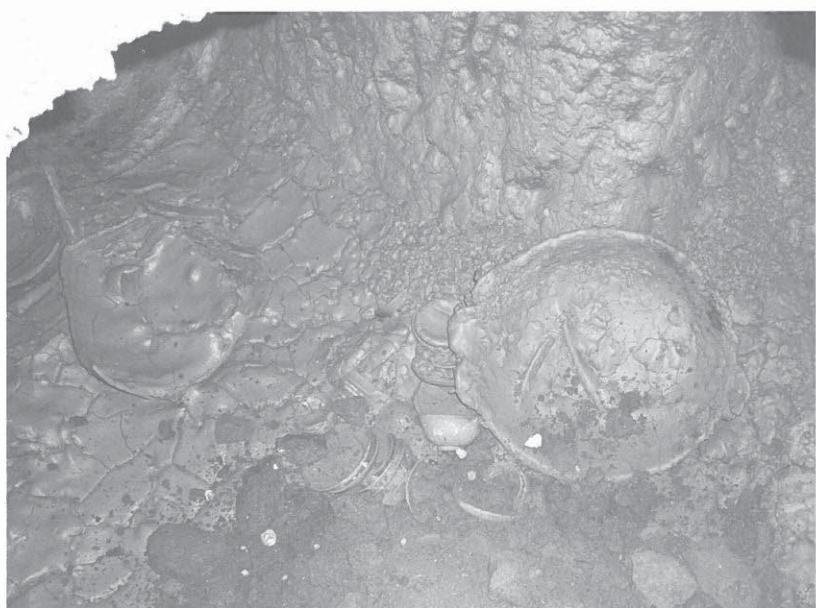


写真10.
壕内調査前状況② [西より]

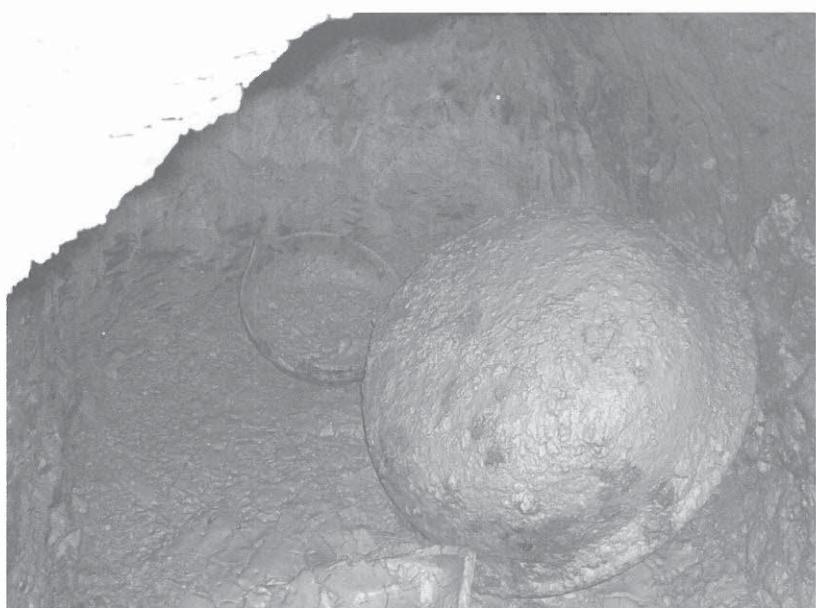


写真11.
壕内調査前状況③ [南西より]



写真 12. 遺物検出状況① [南西より]



写真 13. 遺物検出状況② [北西より]

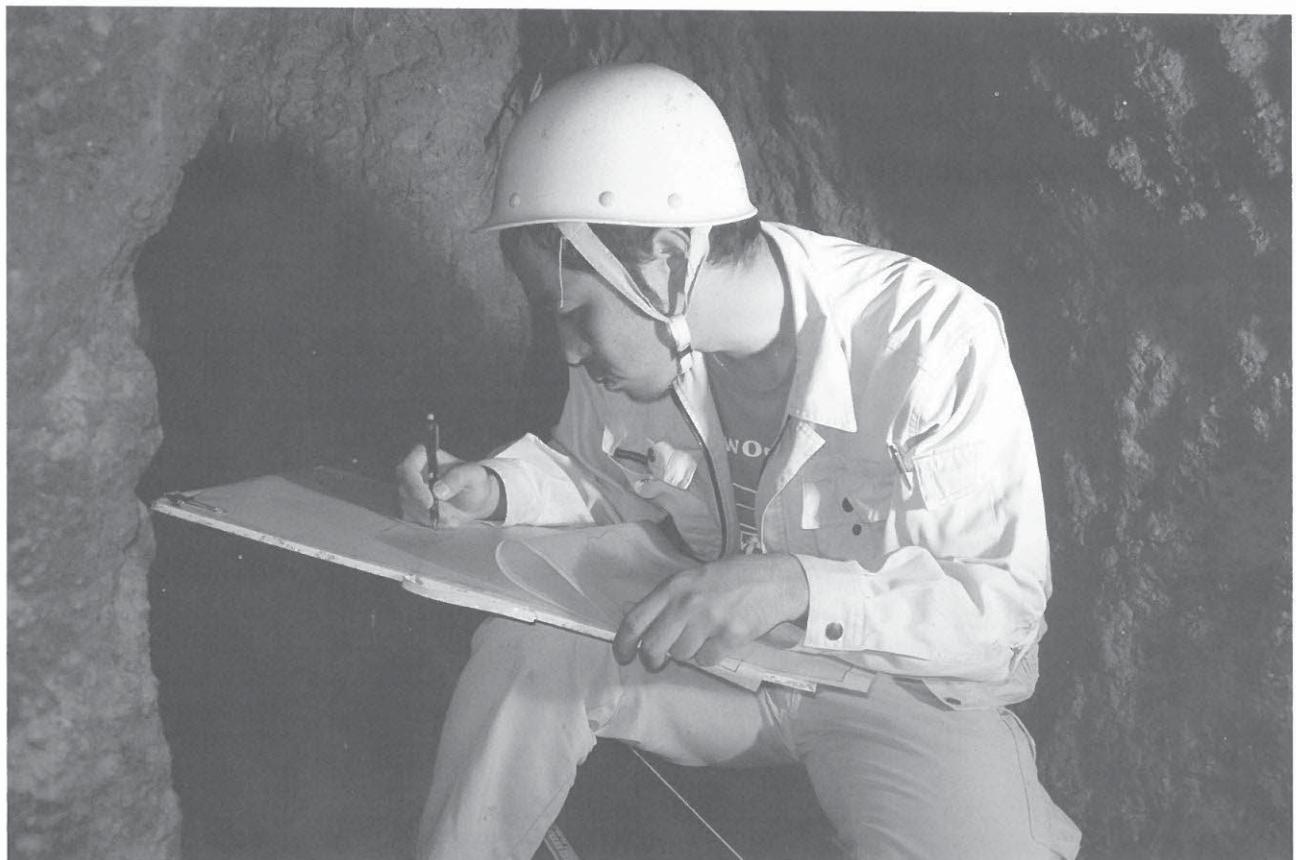


写真 14. 遺構・遺物実測作業 [北西より]

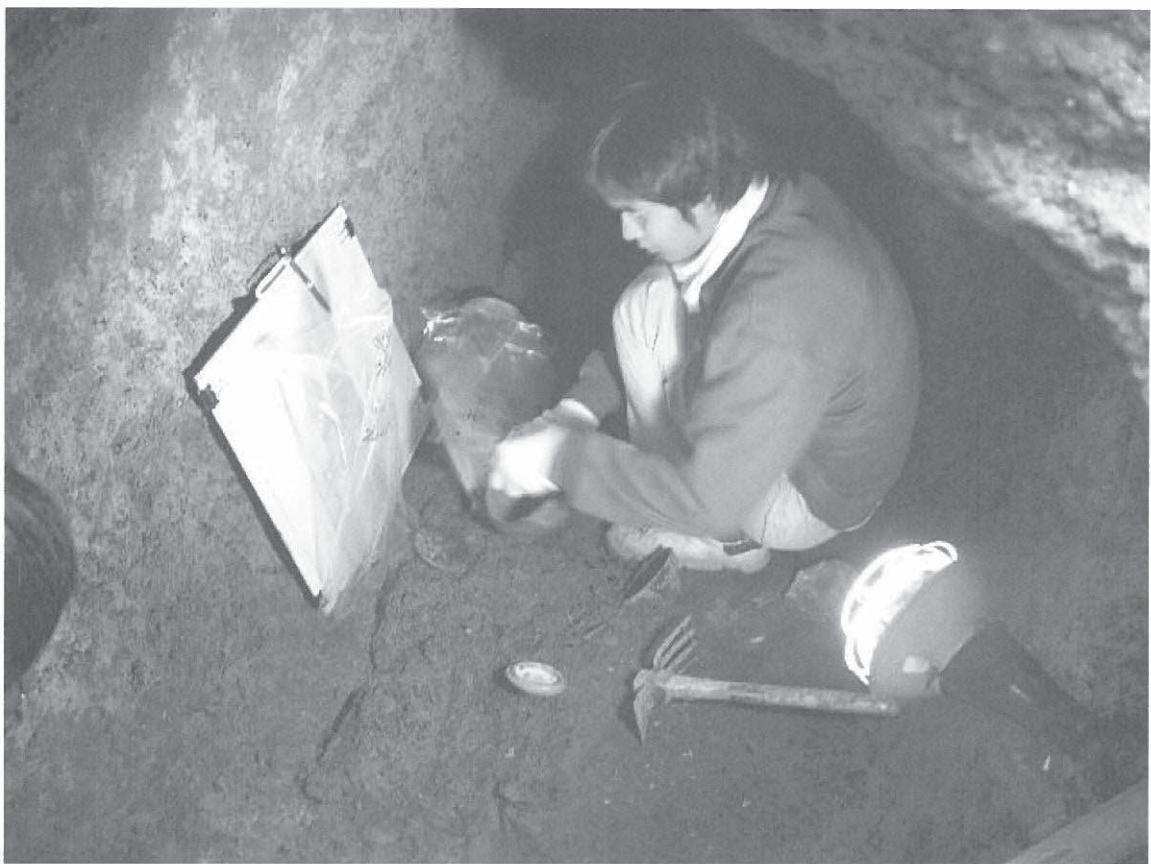


写真 15. 遺物取り上げ作業 [西より]



写真 16. 溝検出・完掘状況 [北西より]



写真 17. 壁面掘削痕 [南西より]

6. 遺物

今回の調査で壕内から総数 83 点の遺物が得られた。遺物の種類は染付、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産近現代磁器、鉄製品、瓦、石製品、ガラス製品、セルロイド（プラスチックの一種）製品。以下にそれぞれの特徴について記述する。

1) 染付（写真 18）

染付は総数 2 点出土した。二つとも同じ文様の碗で、18c～19c の徳化窯系。高台が高く、高台径も大きい。腰部が丸みを帯び、口縁部が弱く外反する。外面胴部には寿字文と梅花文が、腰部には簡略した蓮弁文、見込みには不明文が描かれている。口縁部両面に一条、高台脇・見込みに二条ずつ圏線が入る。全体に青味を帯びた釉が掛かる。畳付は釉剥ぎ。左（図 No. 6）は口径 14.5 cm、器高 6.7 cm、底径 5.9 cm、右は口径 14.4 cm、器高 6.4 cm、底径 7.1 cm。

2) 沖縄産無釉陶器（写真 19 左）

沖縄産無釉陶器は壺が 1 点のみ出土。一部欠損しているが、口縁部から底部まであり、全体の形が窺える。外面の口縁部から肩部まで泥釉が掛かる。外面肩部に三条の圏線、その下に一条の圏線が入る。両面に轆轤痕が見られる。素地は赤褐色。口径 12.6 cm、器高 45.8 cm、底径 20.5 cm。

3) 沖縄産施釉陶器（写真 19 右）

沖縄産施釉陶器は、小壺（第 4 図 No. 1）・蓋（第 4 図 No. 2）の総数 2 点出土しており、これら二つで一組の資料と思われる。小壺は頸部から口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。外面胴部に二条の圏線が入る。外面の口縁部から高台脇まで黄褐色の釉が掛かり、口唇部と畳付は釉剥ぎされている。両面に細かい貫入が入る。口径 9.3 cm、器高 10.7 cm、底径 7.3 cm。蓋は黒褐色の釉が甲部のみに掛かり、縁端部は釉剥ぎ。甲部に二条の圏線が廻る。素地は橙色。縁径 10 cm、器高 2.6 cm。

4) 本土産近現代磁器（写真 20～22）

本土産近現代磁器は総数 57 点出土しており、遺構内から一番多く出土した遺物である。碗は 19 点出土しており、その内 7 点は型紙刷りの印判染付である。小碗は 6 点全て色絵である。皿は 13 点、小皿 15 点出土しているが、全て銅板転写の印判染付である。その他に瓶 1 点（No. 3）、クロム青磁の小杯 2 点（第 4 図 No. 15），白磁の蓋（第 4 図 No. 11）が 1 点出土している。

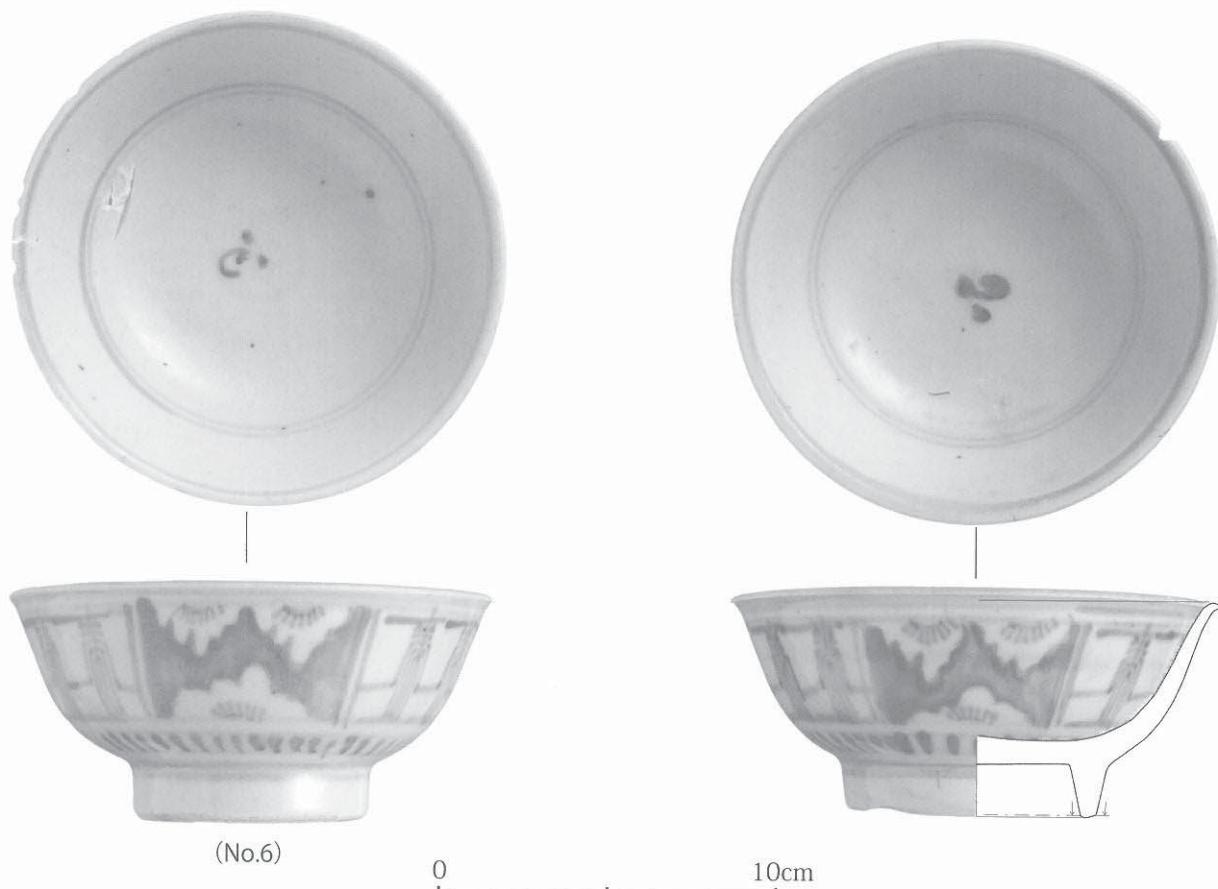


写真 18. 染付

0 10cm



写真 19. 沖縄産施釉・無釉陶器



写真 20. 本土産近現代磁器（碗）



写真 21. 本土産近現代磁器（皿）

5) 鉄製品（写真 23）

鉄製品は鉄鍋 4 点、釘 1 点、不明製品 1 点（第 4 図 No. 7）の総数 6 点が出土。鉄鍋の内 1 点（第 4 図 No. 17）は大きく、重量もあり、壕内から持ち出すことが困難なため写真と図面で記録したのみにとどめた。鉄鍋のもう 1 点（第 4 図 No. 4）は取り上げた後に、粉々に破損したため、掲載しなかった。厚さの薄い鉄鍋（第 4 図 No. 8）は全体に青い塗装がされている。釘（未掲載）は丸釘が 1 点のみである。

6) 琥珀（写真 24 右下）

石製の琥珀が 1 点（第 4 図 No. 16）のみ出土しており、一部欠けているが全体の形が窺える。墨で擦つたと思われる溝状の使用痕がある。長さ 11.7 cm、幅 6 cm、厚さ 1.5 cm、重さ 231.6g。

7) 瓦（写真 24 右上）

瓦片が 7 点出土しており、全て平瓦で、凸面はナデ、凹面は布目痕が入る。素地は明褐色。

8) ガラス製品（写真 24）

ガラス製の瓶が 5 点、板状製品が 1 点（第 4 図 No. 5）の総数 6 点出土。瓶は、飲料水用と思われる瓶が 3 点、薬品用と思われる瓶が 1 点、用途不明瓶が 1 点（No. 13）。

9) セルロイド製品（写真 24 左下）

セルロイド製の歯ブラシが 1 点出土している。

7. 人骨（写真 25）

今回の調査で、一体分（全部位の骨は確認できず）の人骨が出土した。人骨は調査前に壕内からほとんど取り上げられていたため頭頂骨（第 4 図 No. 12）以外の出土位置・状態は記録できなかったが、聞いた話によると、取り上げた人骨は、頭頂骨付近に集中していたとのこと。これらの骨を接合した後に、資料を琉球大学医学部の土肥直美氏に見てもらい、確認していただいたところ、この人骨の年齢は 60 歳以上の老年男性ということが確認できた。戦時中または戦後に、何らかの事情で亡くなつた方と思われる。出土した人骨（接合不可能な細かい骨片を除く）は写真 25 に載せた。

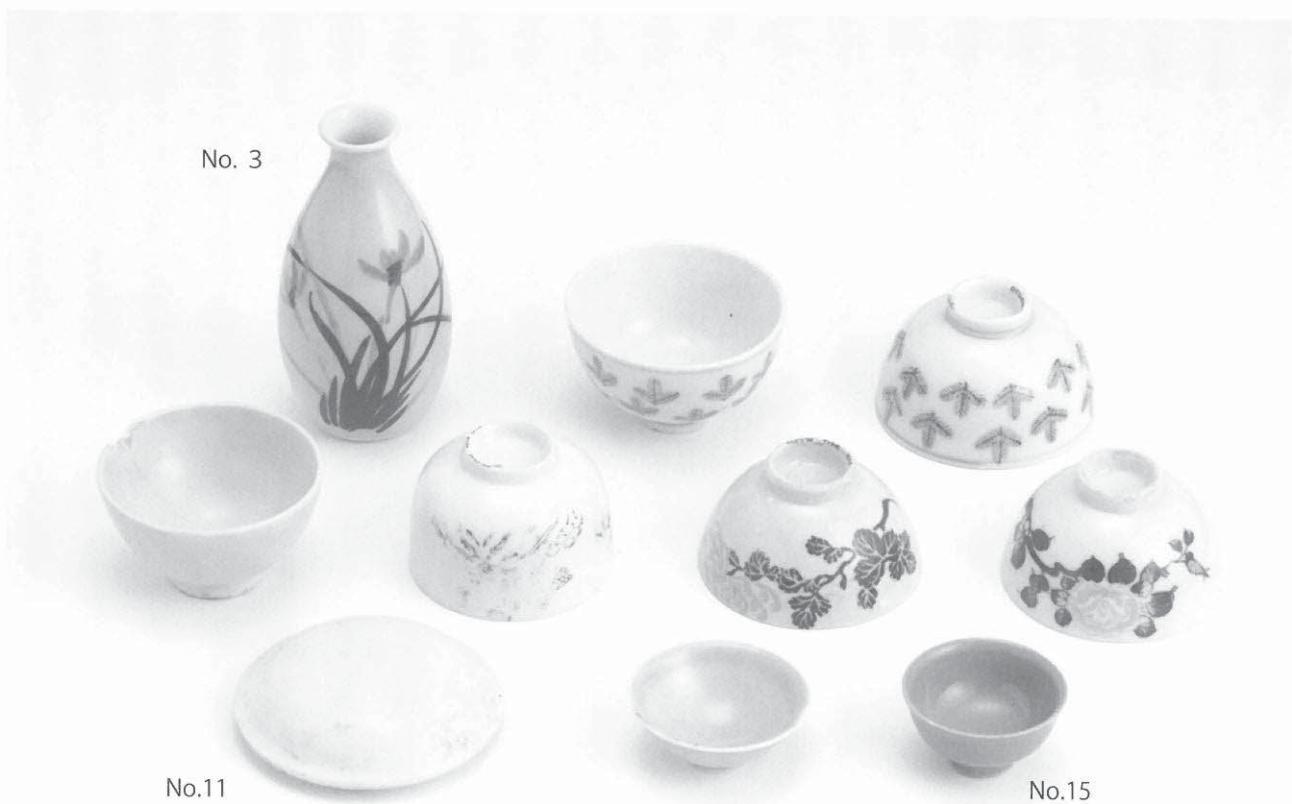


写真 22. 本土産近現代磁器（小碗・小杯・瓶・蓋）

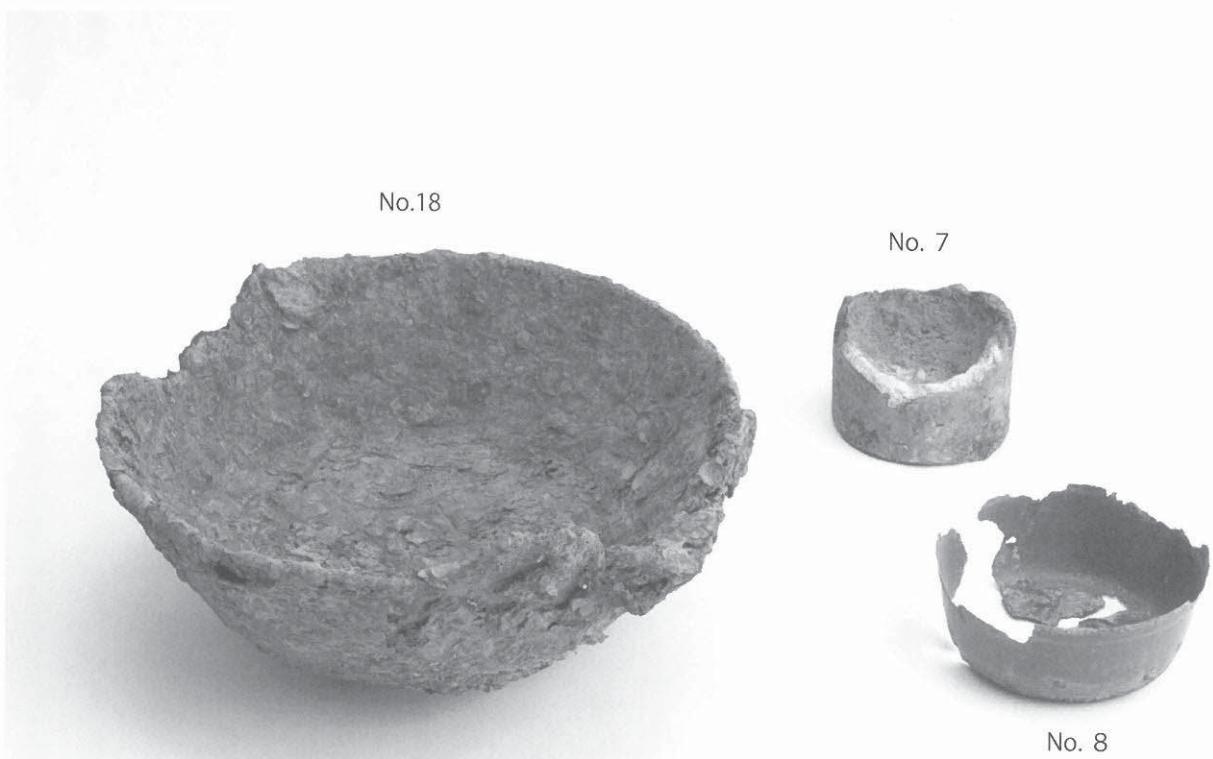


写真 23. 鉄製品（鍋・不明製品）

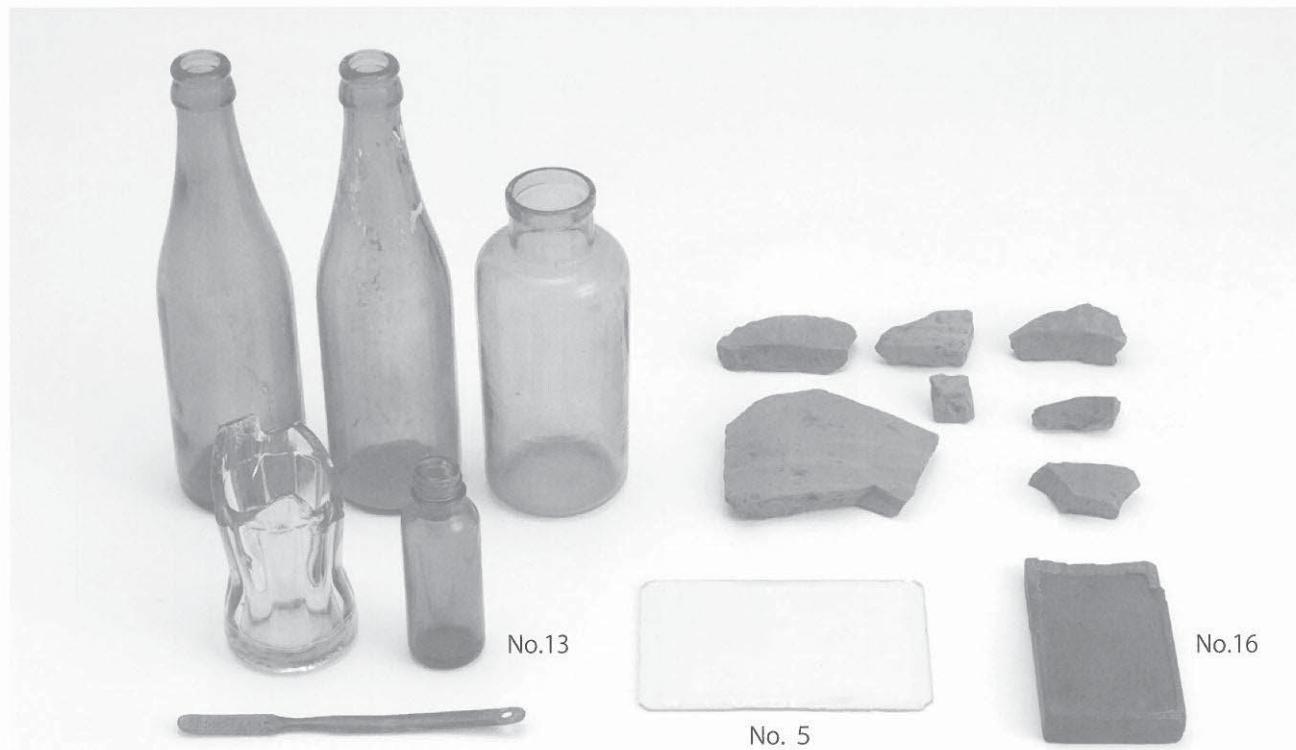


写真 24. 瓦・硯・ガラス製品・セルロイド製品

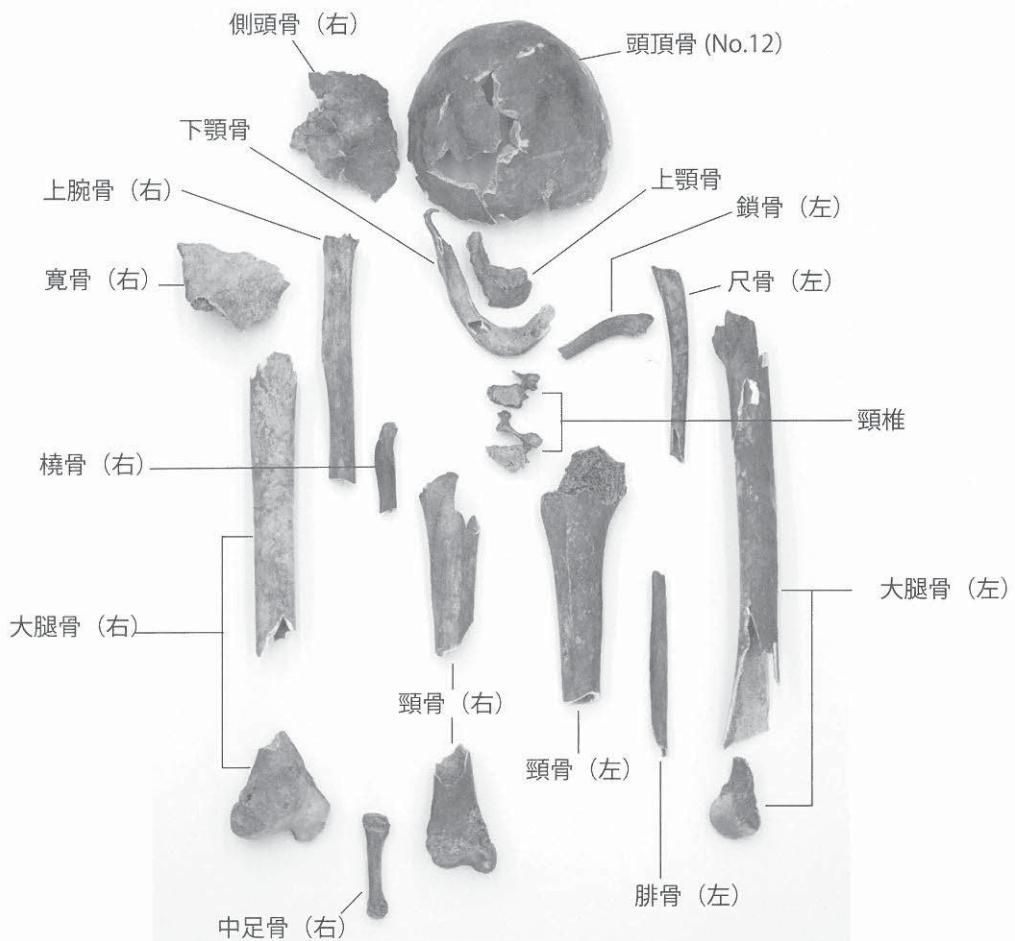


写真 25. 人骨

8. 聞き取り調査

今回調査した壕や戦時中の掛保久地区の状況についての聞き取り調査を行うため、掛保久地区的自治会長である玉那覇整氏を介して、戦前の掛保久について詳しい方を紹介していただいた。調査に協力していただいた方は掛保久在住の玉城善長氏（大正3年生）である。玉城氏は1945年（昭和20）1月に与那原に駐屯していた陸軍の特攻艇部隊に招集されるまで、掛保久に在住していた。

聞き取り調査は、掛保久公民館と、当該の壕が所在した場所にも同行していただき、戦前の掛保久の状況や、今回調査した壕について伺った。なお、以下の記述は玉城氏の証言を基に筆者が要約したものである。

1) 戦前の掛保久

玉城氏によると、戦前の掛保久には旧日本軍の駐屯地はなかったものの、集落内の何軒かの家は軍に供出されていたという。また、1944年（昭和19）5月から始まった沖縄東（西原）飛行場の建設で、建物の基礎の下に轢く補強のための石として利用するため、集落内の各家を仕切る石垣を接收されたとのことであった。

掛保久に住民の防空壕が構築され始めるようになったのは1944年の秋頃で、翌1945年の初めには各家に造られていたそうである。防空壕といつても、家の床下や庭の敷地内で地面を掘り込み、天井は板を敷いてその上に土や草を被せて擬装する簡易的なものであった。また、集落の避難壕も3箇所造られ、玉城氏自身も壕の構築作業に携わったという。避難壕は集落北側の丘陵の麓に5m程掘り込まれた天井のない塹壕のような形態であった。そして、米軍が上陸する直前の1945年の3月頃からは掛保久にも空襲や艦砲射撃が行われるようになり、住民は集落を離れ、村内の池田や本島北部へと避難し始めたとのことであった。

2) 今回調査した壕について

玉城氏によると、今回調査した壕のように横穴式に掘られた壕は集落内では他に見たことがないということで、当該壕の存在をご存知ではなかったが、壕が確認できた地点まで同行していただき、当時の状況をお聞きすると、戦前は当該壕周辺に南北方向に走る土手が形成されており、土手の東側斜面から掘り込まれた壕ではないかとのことであった。土手の東側には畠や井戸があったという。また、現地で記録した壕の実測図を見てもらうと、避難した住民が爆風などを直撃しないようL字状に構築されているのではないかとおっしゃっていた。

次に、『西原町史 第3巻』「西原の戦時記録」から戦前の字掛保久住宅地図（第6図）を見ていただき、当時の土手があった位置を、大まかではあるが地図上に押さえることができた。当該壕の所有者については、同文献の字掛保久の世帯別戦争被災者状況一覧表（第2表）も参考に見ていただき、お聞きしたところ、当該壕周辺には何件か民家があることから、壕の所有者を具体的に特定することは出来ないが、壕周辺にある各民家の状況を伺うと、第6図⑫の玉城（屋号：東前門）さん老夫婦の避難壕である可能性が高いのではないかとのことであった。

その他に、壕に関する興味深い話として、戦前には民間で壕掘りを請け負う人たちがいたそうで、経済的に裕福な民家だとその人達を雇って防空壕を造らせていました話を聞いたことがあるという。丁寧に成形された当該壕は、人夫達を雇って造られた可能性は十分に考えられるとのことであった。

この話に付け加えて当時、東前門の玉城さんの家は比較的裕福で、しかも夫婦二人暮らしだったことから、当該壕は東前門の玉城さんが、人夫にお願いして造ってもらった壕ではないかともおっしゃっていた。

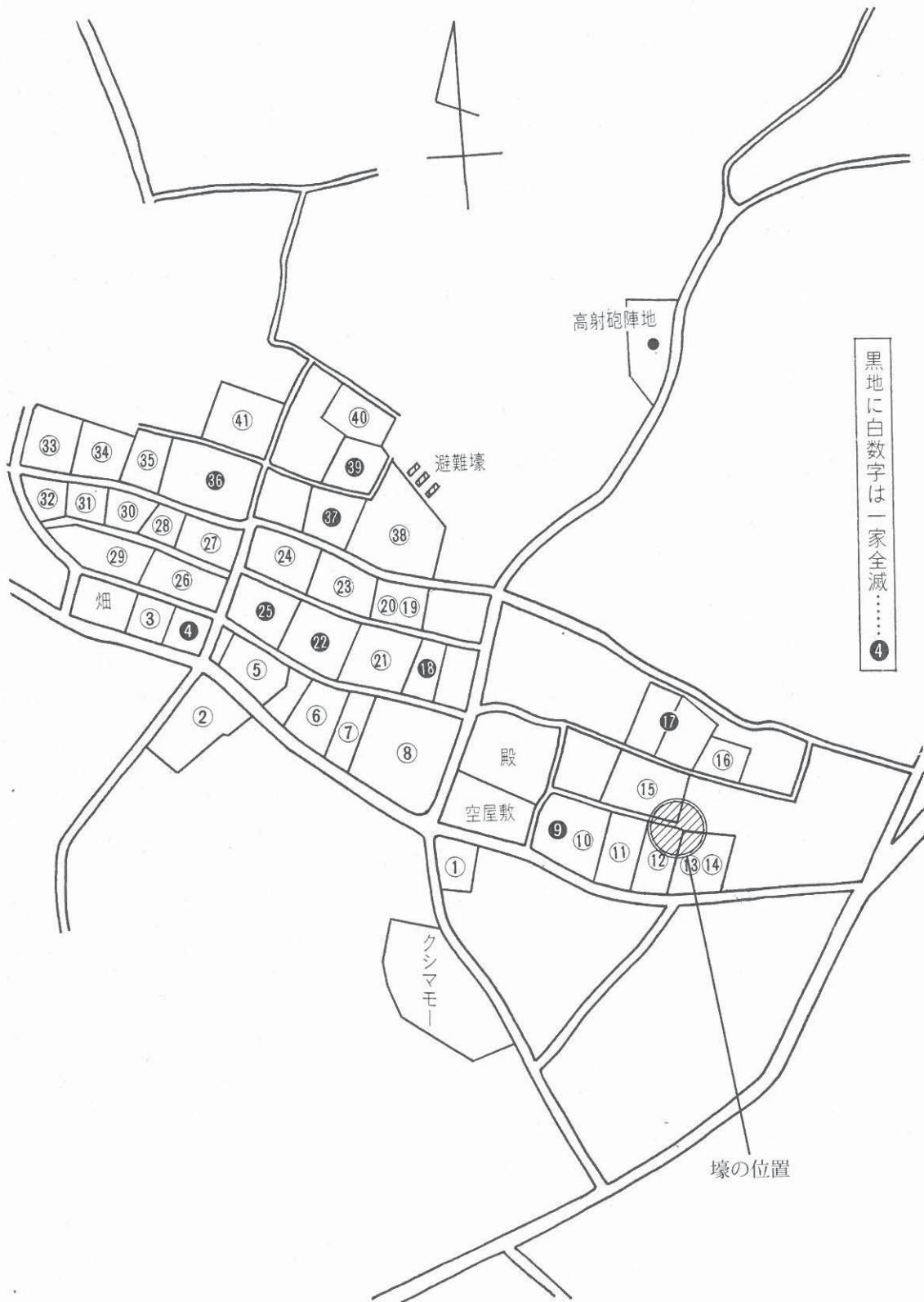
第2表 字掛保久の世帯別戦争被災者状況一覧表

(『西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録』から抜粋)

地図番号	屋号	門中	世帯人員			戦没者			備考
			総数	男	女	総数	男	女	
1	仲前ン田(ナーカメンター)	前ン田(メンター)	0	0	0	0	0	0	・宮崎へ疎開(S19.8)
2	新前小波津(ミーメークファチ)	中城村和宇慶の出身	5	3	2	1	1	0	
3	前新屋敷(メーミーヤシチ)	玉城(タマグスク)	6	4	2	3	2	1	
④	大城小(ウフグスクグワー)	ウニ	1	0	1	1	0	1	一家全滅
5	新前ン田(ミーメンター)	前ン田	3	2	1	1	1	0	・大阪在
6	仲前ン田(ナーカメンター)	前ン田	12	7	5	5	3	2	・父系は山原出身
7	前玉城(メータマグスク)	玉城	2	1	1	0	0	0	・宮崎へ疎開(3人)
8	玉城(タマグスク)	玉城	7	4	3	2	1	1	
⑨	上城間(イーグスクマ)	城間(グスクマ)	1	0	1	1	0	1	一家全滅
10	城間(グスクマ)	城間	2	0	2	0	0	0	
11	下ヌ前ン田(シチャヌメンター)	前ン田							・南洋在 ・空屋敷
12	東前門(アガリメージョウ)	玉城	2	1	1	0	0	0	
13	美里(ンザトウ)	玉城							・サイパン島(S14)
14	牛玉城(ウシータマグスク)								・サイパン島(大正末)
15	上ヌ前ン田(イースメンター)	前ン由(元家)							・空家
16	東リ前(アガリメー)	玉城	3	0	3	2	0	2	・大正期に南洋へ
⑯	城間ヌ前(グスクマヌメー)	城間	1	0	1	1	0	1	一家全滅
⑯	宮里(ナーザトウ)		1	1	0	1	1	0	一家全滅 ・首里出身
19	世利ン田(シリンター)	玉那霸(小那霸)(タンナファ)	6	2	4	5	1	4	
20	世利ン田(シリンター)								・空家
21	前門(メージョウ)	城間	1	0	1	0	0	0	
㉑	新前門(ミーメージョウ)		6	3	3	6	3	3	一家全滅
㉒	上ヌ前門(イースメージョウ)	玉城	9	3	6	7	3	4	・南洋テニアンへ
㉓	仲前門(ナーカメージョウ)	玉城	2	0	2	1	0	1	・アルゼンチンへ
㉔	新前ン田小(ミーメンターグワー)	前ン田	6	2	4	6	2	4	一家全滅 ・当時ハワイ
㉕	新城間小(ミーグスクマグワー)	城間	2	1	1	1	0	1	
㉖	仲前門小(ナーカメージョウグワー)	玉城	3	1	2	1	1	0	
㉗	三男前世利(サンナンメーシリー)	新川(小那霸)(アラカ)	4	2	2	2	2	0	
㉘	城間小(グスクマグワー)	城間	12	7	5	1	0	1	
㉙	玉那霸小(タンナファグワー)	城間	5	2	3	1	1	0	
㉚	翁長前門(ウナガメージョウ)	翁長前門(ウナガメージョウ)	4	2	2	3	2	1	・ハワイへ(男1人女1人) ・佐世保へ(男1人)
㉛	三男城間小(サンナングスクマグワー)	城間	3	1	2	0	0	0	・サイパン島(男1人戦死)
㉜	与儀小(ユージグワー)	城間	4	2	2	0	0	0	
㉝	次男前世利(ジナンメーシリー)	新川(小那霸)	6	5	1	2	2	0	
㉞									・サーダヤー
㉟	徳前門(トウクメージョウ)	玉城	2	1	1	2	1	1	・ハワイへ 一家全滅
㉟	新屋敷小(ミーヤシチグワー)	玉城	1	0	1	1	0	1	一家全滅 ・大正末頃サイパンへ
㉟	上前ン田(イーメンター)	前ン田	11	5	6	4	2	2	
㉟	稻福小(イナフクグワー)	大城(内間)(ウフグスク)	2	1	1	2	1	1	一家全滅
㉟	上ヌ城間小(イースグスクマグワー)								空屋敷 ・当時サイパン島
㉟	知念(チニン)			2	1	1	0	0	・首里出身
	合計		137	64	73	63	30	33	

総世帯数	35戸
総世帯人員	137人
総戦没者数	63人 (46.0%)
一家全滅世帯	9戸 (25.7%)
一人以上戦没者の出た世帯	27戸 (77.1%)
戦争孤児の出た世帯	1戸 (2.9%)

※○の地図番号は一家全滅世帯



第6図 戦前の字掛保久住宅（屋号）地図
 （『西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録』から抜粋）



写真 26. 聞き取り調査（防空壕があつた地点にて）[西より]



写真 27. 聴き取り調査（掛保久公民館内にて）

9. まとめ

今回調査した掛保久防空壕は西原町字掛保久 33-1 に所在する。下水道工事のための緊急発掘調査を西原町教育委員会が主体となって、沖縄県教育庁文化課と沖縄県立埋蔵文化財センターが協力して実施した。発掘調査は平成 17 年 11 月 15 日～11 月 18 日まで実施し、資料整理は平成 17・18 年度に沖縄県立埋蔵文化財センターにて実施した。

掛保久防空壕は下水道工事のためバックホウによって掘削中、大きな空洞が現れて、空洞内から磁器製の碗・皿、鉄鍋等の食器を中心とした遺物と人骨が出てきたことから確認できたものである。

防空壕の形態は L 字状の構造をしており、第 3 級砂岩（ニービ）を基盤とする土手（聞き取り調査で確認）を横穴状に掘り込み形成したものである。防空壕本来の入口は大量の土砂により埋まっていて、崩落の危険性があるため、入口の形態を確認するまでには至らなかった。

壕内に流れ込んだ土砂を取り除くと、床面から、中国産染付、本土産近現代磁器、鉄製の鍋、石製品（硯）、ガラス製品（瓶・不明品）、セルロイド製品（歯ブラシ）が出土し、床板の一部と思われる木製品も確認することが出来た。

遺物を取り上げた後、床板の下部からは一条の溝が検出され、さらに、溝の周辺には火を受けた痕跡も確認された。壕内の造りは、天井や壁面が丁寧に成形されており、規模は横幅が狭く、奥行は短いため、家族単位の避難壕と考えられる。

壕内は下水道工事の掘削で一部崩落した箇所を除き、保存状態が良好なことから、爆撃など戦争の被害を被っていない壕で、且つ、軍事関係の遺物が出土しないことから軍事に使用された痕跡は見られず、旧日本軍にも当該壕の存在を知られていなかったと考えられる。それに伴い、壕内で出土した遺物も発見時に取り上げたものも含め、住民の生活用品で占められる。また、遺構においても床板の下に掘られた溝などを見ると、構築時から形成されたものではなく、壕内で生活する中で必要に応じて加工していた可能性も感じさせる。戦時における住民の壕内での生活がある程度窺える状況を保っていたことは貴重な成果だと言える。その中で、老人男性の人骨が出土したことから、どういう経緯で亡くなったのかは明確でないものの、沖縄戦における一つの現実を思い知られ、心が痛むものである。

また、今回の報告に伴った聞き取り調査でも重要な成果を得られた。当該の壕が構築された当時の地形、集落内で避難壕が構築される時期や米軍上陸直前に住民が掛保久から避難させられた等、戦前（昭和 19 年）から地上戦に突入する直前（昭和 20 年 3 月頃）までにおける掛保久の状況をある程度把握することが出来た。そして、当該の壕の所有者は具体的に特定することは出来なかったものの、戦前には民間で壕の掘削を請け負う人たちがいて、住民がその人夫を雇って防空壕を造らせていた等、戦時における住民避難壕に関する興味深い話を伺うことが出来た。

戦後、60 年以上経った現在においても聞き取り調査は、戦争遺跡の調査に関する有力な手掛かりとなることを認識することができ、その重要性を改めて痛感させられた。しかし、今後において聞き取りの対象者はさらに限られてくることは確実であり、聞き取り調査も時間との戦いになることは言うまでもない。

以上のことから、掛保久防空壕は、発掘調査、『西原町史 第 3 卷 西原の戦時記録』等の文献、聞き取り調査で得られた情報から総合すると、人骨の出土状況が不明瞭なこと等、いつ頃まで使用されていたかは明確には出来ないが、少なくとも地上戦開始（昭和 20 年 4 月）以前から使用されていた可能性は高い。遺構、遺物の出土状況を見ても、どちらかと言うと地上戦開始以前の生活状況が色濃く窺える、貴重な事例を示すことが出来たと言える。

今回の報告では、戦争遺跡の発掘調査、聞き取り調査を通して、沖縄戦の一つの実態を示すこととなっ

た。沖縄県教育委員会が行ってきた沖縄県戦争遺跡詳細分布調査事業（平成17年度を以って終了）により、具体的な調査成果と基礎資料の充実を図ることが出来た今日、県内の戦争遺跡を取り巻く状況は新たな局面を迎える。現在も県内各地に見られる戦争遺跡にはそれぞれの遺跡固有の情報が内包されており、その中には未確認の情報も多く含まれていることが想定される。今後において戦争遺跡をより詳細に調査・検討をしていくためにはやはり考古学的な調査手法が軸になっていく（池田2003）と思われるが、聞き取り調査等も可能性のある限り行っていく必要性は当然ながら有り、沖縄戦の更なる実態を掘り起こす努力を継続していくことが求められる。

資料整理にあたり、人骨調査では琉球大学医学部の土肥直美氏に御指導・御協力をいただいた。また、聞き取り調査においては、戦前時の証言者である玉城善長氏、掛保久地区自治会長である玉那覇整氏に御協力いただいた。そのほか、本報告作成にあたって沖縄県立埋蔵文化財センター調査課の方々にご尽力いただいた。記して感謝を申し上げる次第である。

（しまぶくろ ともゆき：西原町教育委員会）

（いは なおき：調査課 嘴託員）

（やまだ ひろひさ：調査課 嘴託員）

【引用・参考文献】

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（I）－南部編－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第5集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（II）－中部編－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第12集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 『首里城跡－繼世門周辺地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第9集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 『真珠道跡－首里城跡真珠道地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第32集
- 西原町教育委員会・沖縄県立埋蔵文化財センター 2006 「池田上原古墓」『紀要 沖縄埋文研究』4 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 當眞嗣一 1984 「戦争考古学のすすめ」『南島考古だより』第30号 沖縄考古学会
- 西原町史編纂委員会 1987 「西原の戦時記録」『西原町史』第3巻資料編2 西原町役場
- 西原町史編纂委員会 1996 「西原の考古」『西原町史』第5巻資料編4 西原町役場
- 南風原町史編集委員会 1999 「南風原が語る沖縄戦」『南風原町史』第3巻 戦争編ダイジェスト版（一部改訂）南風原町役場
- 大城将保 1999 「第32軍の沖縄配備と全島要塞化」『沖縄戦研究』2 沖縄県教育委員会
- 南風原町教育委員会 2000 『南風原陸軍病院壕群I』 南風原町文化財報告書第3集
- 池田榮史 2003 「特論3 沖縄戦の遺跡」『沖縄県史』各論編第2巻考古 沖縄県教育委員会
- 佐敷町教育委員会 2004 『平良川原遺跡 島宜原遺跡 役場壕』 佐敷町文化財調査報告書第5集
- 山本正昭・伊波直樹 2006 「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査の成果と課題」『日本歴史』第703号 吉川弘文館

海からの贈り物 — 沖縄貝塚時代後期の文化 —

Maritime Gifts

岸本義彦

Kishimoto Yoshihiko

ABSTRACT : The latter half of the Late Okinawa Shell-mound Period corresponds to the Yayoi Period of the Kyushu district. The culture of this period in Okinawa is characterized by an extensive use of shells, reflecting the fine maritime environment of the islands. The agricultural economy prevailed over Kyushu at that time, and in order to display their social power local chiefs of northwestern Kyushu preferred to own shell bracelets made of large conches such as gohoura (*Strombus Latissimus*) and imogai (*Conidae*) from the southern islands,. Such conches naturally became the major trade goods in Okinawa, and the shell-mound builders had received much benefit from the ocean, that is, "maritime gifts" .

この原稿は、平成 18（2006）年 8 月 12 日（土）に、佐賀県吉野ヶ里遺跡において講演した「吉野ヶ里考古学講座」の発表要旨を、佐賀県教育庁埋蔵文化財課の厚意によりまとめたものである。

沖縄の位置と環境

九州の南端から台湾までの間に、あたかも花綵のように連なる列島を南西諸島とか琉球列島と呼んでいますが、その中ほどから南の部分が沖縄県となっています。さらに沖縄本島を主島とした地域を沖縄諸島、宮古島と石垣島を主島とした地域を先島諸島と称しています。

沖縄諸島と先島諸島の先史時代文化のあり方は異なっており、すなわち前者が各時期をとおして九州地域の影響を受けながら独自の文化を育んできたのに対し、後者は台湾やフィリピンなど南方からの文化伝播による独特の先史文化を形成していました。そのことは、沖縄本島と宮古島の間が約 300km も離れていることが最大の要因で、航海技術が発達していなかった時代は双方の文化交流がなかったことがうかがえます。このようなことから、沖縄諸島および奄美諸島を北琉球圏、先島諸島を南琉球圏と先史時代文化を区分することができます（図 1）。両者が同一文化圏になるのはわずか 800 年ほど前で、それまでは全く異なった文化圏を形成していました。

ここでは九州からの文化の影響を受けた沖縄諸島について述べることにします。各島の地形を見ると、比較的高い山からなる島（高島）と琉球石灰岩の台地からなる島（低島）があります。沖縄本島はその両方の地形からなり、北部が高島、中南部が低島となっています。現在の人口比率もそうですが、開拓に恵まれた中南部に遺跡が集中し、立地もオープンサイトの台地上や海岸砂丘地に形成され、時期によってすみ分けていることがわかります。それに対し、北部では海岸近くまで山が迫り、限られ

た海岸砂丘地に各時期とも遺跡が形成されています（図2）。サンゴ礁に囲まれ、リーフの内側にある波おだやかな浅い海（礁池）はイノーと呼ばれ、数々の魚や貝などの海産物が採れ、古来より「海の畠」と称されています。

沖縄の貝塚人たちもその恩恵を受け、危険を冒して外洋まで出漁することなく、おだやかな海での漁を行っていました。遺跡から出土する貝類は平均で130種ほどあり、さまざまな貝を食していたことがわかっています。また、魚類も50～60種ほどあり、イノーに生息する魚を捕食していました。ちなみに、外洋性の魚類はほとんど出土しません。

このように、周りを海に囲まれた島国ならではの生活があり、沖縄の人たちの海との関わりは計り知れないものがありました。



図1 二つの琉球文化圏

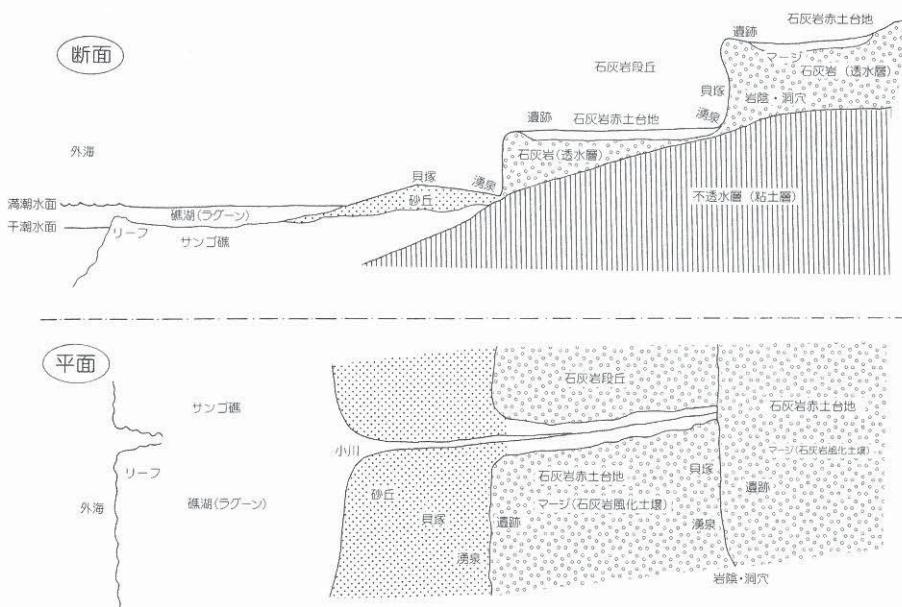


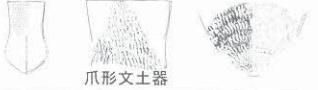
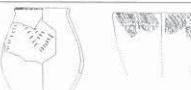
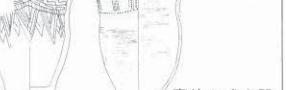
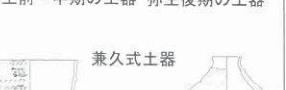
図2 地形の概念図

沖縄の先史時代

沖縄の先史時代文化は九州からの影響を断続的に受けながら、独自の文化を展開させてきました。旧石器時代は那覇市の山下町第一洞穴（約32,000年前）や八重瀬町の港川フィッシャー（約18,000年前）などから化石人骨が見つかっていますが、旧石器そのものは未だ発見されていません。そのため、この時代の詳しい様相がわかつておらず、これからの課題となっています。

縄文時代に相当する時代において、現在見つかっている最古の土器は爪形文土器と呼ばれているもので、およそ7,000年前のものとみられています。九州の爪形文土器は縄文草創期に属し、約12,000

沖縄諸島と奄美諸島の土器編年

沖縄現行編年	高宮編年	沖縄諸島の主要土器	奄美諸島の主要土器	九州
旧石器時代	旧石器時代			旧石器時代
貝塚時代	前Ⅰ期	 爪形文土器		早期
	前Ⅱ期	 条痕文土器	 室川下層式土器	前期
	前Ⅲ期	 仲泊式土器	 面縄前庭式土器	中期
	前Ⅳ期	 伊波式土器	 嘉徳Ⅱ式土器	後期
		 大山式土器	 面縄東洞式土器	
	中Ⅰ期	 宇佐浜式土器	 喜念Ⅰ式土器	晩期
	中Ⅱ期	 仲原式土器	 宇宿上層式土器	
	後Ⅰ期	 阿波連浦下層式土器	 弥生前期の土器	前期
	後Ⅱ期	 大当原式土器	 弥生前～中期の土器	中期
	後Ⅲ期	 アカジャンガー式土器	 兼久式土器	後期
	後Ⅳ期	 フェンサ下層式土器		古墳時代～平安時代

年前のものと考えられています。このことや土器の特徴などから、沖縄の爪形文土器とは別系統のものと思われ、沖縄のものは南島爪形文土器と称され、その出自が問題となっています。

縄文時代前期に大きな文化的影響が現れます。それは曾畠式土器の流入で、北谷町の伊礼原C遺跡や名護市の大堂原遺跡などで搬入品が見つかっています。また、現地で製作された曾畠式土器も読谷村の渡具知東原遺跡で出土しています。その後、在地化した室川下層式土器と呼ばれる条痕文系土器が現れます。

縄文時代中期には九州からの影響がほとんど見られず、沖縄独自の土器文化が生まれました。面縄前庭式土器と称される一群の土器で、沖縄諸島と奄美諸島で盛んに用いられていました。

縄文時代後期に市来式土器や出水式土器などが出土することから、再び南九州からの影響を受けたようですが、それ以上に沖縄独自の土器文化が花開き、伊波式や荻堂式、大山式土器などと呼ばれる土器が盛行します。また、これまで奄美諸島と同じ土器文化を有していましたが、この時期になると奄美と沖縄でも土器が異なり、より沖縄らしさが出てきます。

縄文時代晩期になると、これまで比較的安定していた沖縄でも動きが出てきます。縄文時代後期は奄美諸島とは異なった土器文化を有していましたが、この時期に同一の土器文化圏を形成するようになります。沖縄の宇佐浜式土器と奄美の宇宿上層式土器は形などがそっくりで、類縁関係にあったと思われます。また、沖縄には産しない黒曜石がいくつかの遺跡から出土し、石鏃などの原材料として持ち込まれています。その原産地は分析の結果、ほとんどが佐賀県腰岳産ということがわかりました。さらに、新潟県糸魚川産のヒスイも九州を経由して持ち込まれるなど、九州との断続的な関係は続いていました。しかし、この時代までの交流はほとんど九州から沖縄への文化の持ち込みにとどまっていて、一方通行的なものであったことがうかがえます。

沖縄貝塚時代後期

この時期は、2,300年前頃から800年前頃までの期間を指し、九州の弥生時代から奈良・平安時代までに相当する時期で、およそ1,500年もの間続きました。この時期の前半が弥生時代に相当するわけですが、これまでの一方的な文化流入から大きな転機が訪れました。それは、北部九州の弥生人が南の海に産する大型の巻貝（ゴホウラ・イモガイ）を素材とした貝輪（腕輪）に魅了され、それを入手するための活発な交易によるものです。当時の北部九州は大陸から農耕文化を導入し、稻作を中心とした生産経済社会に変わっていました。これまでの採集経済社会とは大きく異なり、土地や水利、労働を管理運営する組織的な共同体が形成され、強い統率者（首長）のもとにムラやクニが出現しました。首長層は民衆とは一線を画し、特權階級として君臨していたことから、その力を維持・強化するために、ムラやクニの成員にその権威を示す必要がありました。そこで着目されたのが、南の海でしか採れない珍しい大型貝で作った貝の腕輪で、これを身に着けて人々に見せびらかし、特別の人物であることをアピールしたものと考えられます。貝輪は、彼ら支配層のシンボルとして身に着けていたのです。

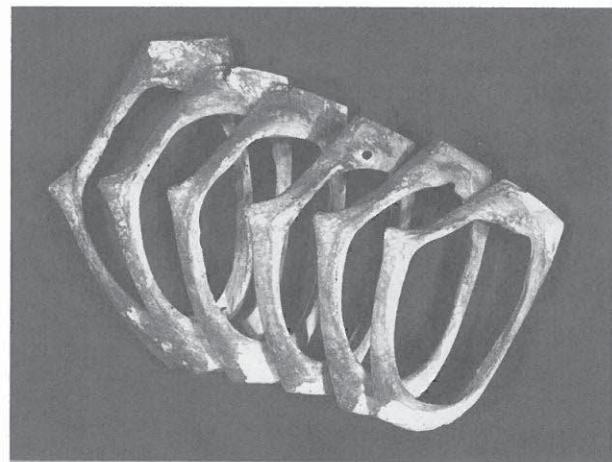


図3 立岩型貝輪

貝輪の材料である大型貝の産地であった沖縄では、その頃まだ自然採集経済社会が続いていて、稻作農耕は行ていなかったようです。人々は海の近くの砂丘に住み、サンゴ礁に囲まれた浅海で魚や貝、海草などを採り、山ではイノシシなどを狩って日々の生活をしていました。海の幸のひとつである貝は食料としてだけではなく、容器や匙などの生活用具に、そしてペンダントなどの装身具の材料としても活用され、豊かな貝器文化を醸し出していました。

このような暮らしをしていた沖縄の原始社会に、農耕・金属器文化を身につけた九州弥生社会の人々が貝の交易のために現れたのです。沖縄の遺跡からゴホウラやイモガイを集め集積した遺構が数多く見つかっており、十数個から百個以上の貝を一箇所にまとめて保管し、交易に備えていたことがうかがえます。これらの貝は「貝の道」とよばれる島伝いルートで九州に上陸し、そこから各地へ運ばれたと考えられています。

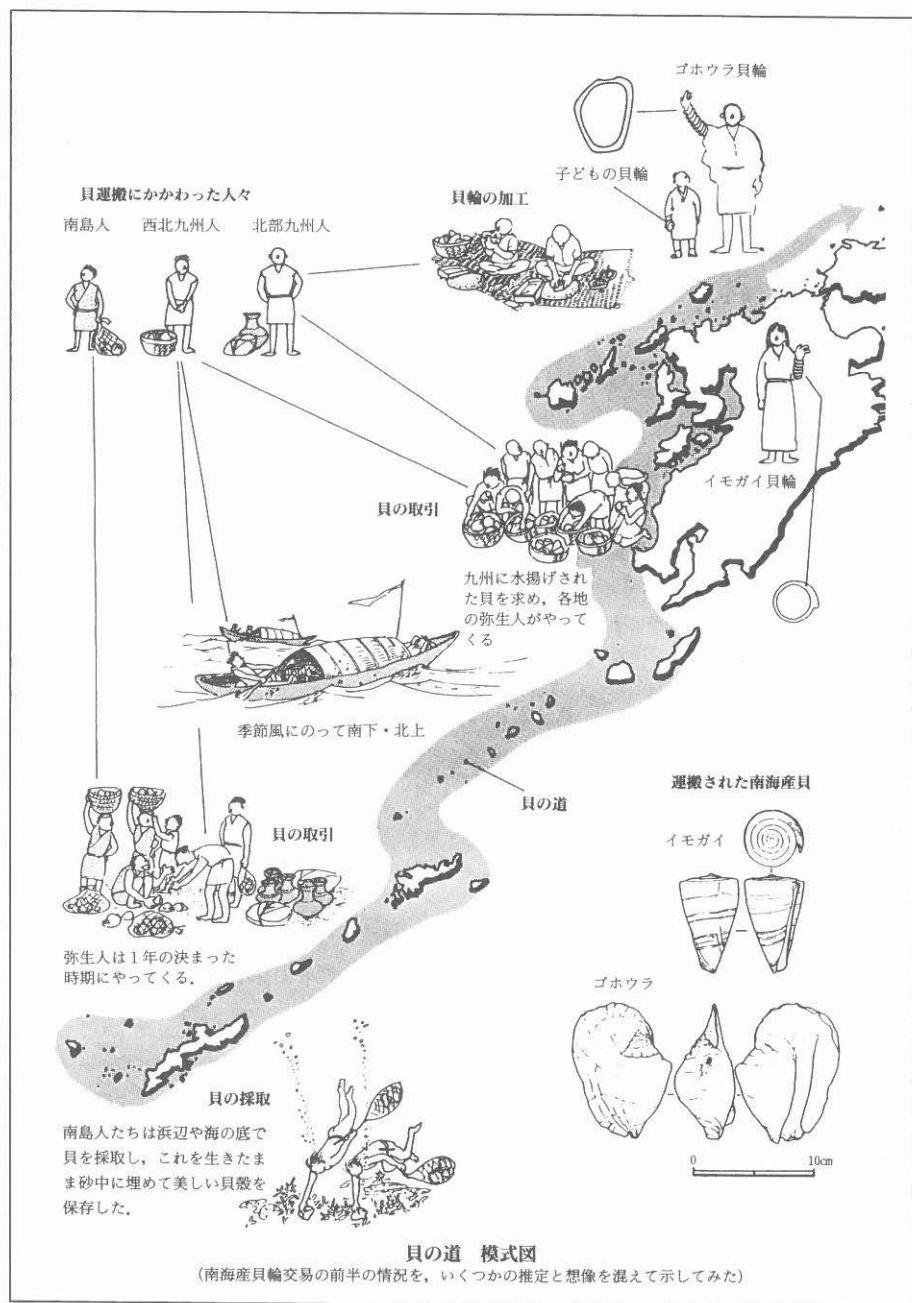


図4 貝の道 模式図 (木下尚子原図)

このように、沖縄側から交易品として貝殻を供出していますが、その見返り品は何だったでしょうか。これまでの調査によって搬入された弥生土器や磨製石鏃、鉄斧・銅鏃などの金属製品、ガラス小玉などが確認されており、これらが交易品の一部であったことがわかります。特に鉄斧の切れ味は非常に魅力的であったと思われます。弥生土器は、沖縄でも土器を製作していたことから、それほどメリットは無かったと思われ、土器に入っていたもの、例えば米などの穀類が交易品であった可能性があります。その他に、遺物としては残っていませんが、織物などもあったと思われます。

沖縄の貝塚入たちは北からの珍しく貴重な交易品に魅せられ、一生懸命に貝を採取し、ストックして交易の民が現れるのを一日千秋の思いで待っていたと考えられます。

このように、沖縄の貝塚時代後期前半の人たちは、貝交易によって入手した弥生時代の文物を大事に扱い、自分たちの生活に反映させていたものと思われます。



図5 ゴホウラの集積(伊江島阿良貝塚)



図6 イモガイの集積(瀬底島アンチの上貝塚)

文献紹介 多和田眞淳「東苑隨想」・「東苑隨想 その二」

BOOK REVIEW: TAWADA SHINJUN "TOEN ZUISO", "TOEN ZUISO 2"

安里 嗣淳

Asato Shijun

ABSTRACT : Tawada Shinjun is one of the pioneers of Okinawa archaeology. His paper, "Distribution of Shell Mounds and a Concept of Chronology in Ryukyu Islands", published in 1956, became a foundation for Okinawa archaeology. Two years earlier, Tawada also had written two articles related to this paper for a local newspaper, but these articles were not included in his anthology, published in 1980. This review aims to re-introduce those articles in order to further the development of Okinawa archaeology.

多和田眞淳は沖縄考古学の開拓者である。彼が 1956 年に発表した「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」は、沖縄考古学の基礎的論考である。しかし、彼はこの編年につながる別の論考を、その 2 年前にすでに地元の新聞に発表していた。それは 1980 年に編まれた『多和田眞淳選集』には掲載されていない。したがって、沖縄考古学研究に資するためにこれらの新聞論考を、あらためて活字化して紹介することとした。

論考は 2 編である。

「東苑隨想 奄美大島の貝塚分布」『琉球新報』1954 年 1 月 8 日～14 日・7 回

「東苑隨想 その二 沖縄列島の貝塚分布」『琉球新報』1954 年 3 月 10 日～14 日・5 回

私はさきに「多和田編年成立の背景と後期区分の再評価」『南島考古』No.26 2007においてこれらの新聞論考の一部を紹介し、同論考が 1956 年の「多和田編年」へつながることを指摘した。また、これらの新聞論考発表の背景・動機についても触れた。さらに同年 6 月 3 日の「多和田眞淳先生生誕百年記念シンポジウム」において、多和田編年の分析と評価を提示した（同レジュメ集『沖縄考古学の現状と課題』）。

したがって、ここでは文献解題を付した紹介はしないので、上記の拙文を参照されたい。

ただひとつ、上記レジュメ集でも触れたことであるが、くりかえし指摘しておきたい。「東苑隨想 奄美大島の貝塚分布」の冒頭に「私は去年の十二月二日から三十日までの約一ヶ月間奄美大島地方の林業調査を行った・・・以下略」とあり、新聞の日付「1954 年 1 月」と照合すると奄美調査は「去年」の「1953 年」となる。しかし、続く文章や他のいくつかの論考から、それは「1952 年」が正しいことは確実である。これは「多和田編年」がいつから熟成されていったかを把握する上できわめて重要なことである。

東苑隨想

・・・奄美大島の貝塚分布・・・

多和田真淳

一、筆を執る様になった動機

小生は去年の十二月二日から三十日までの約一ヶ月間奄美大島地方の林業調査を行ったが多年小生が研究している貝塚を通しての日本民族移動を調査するのも個人的な大事な目的であった。琉球新報の国吉真哲氏からその結果を発表するようにすすめられたが延々となってしまった。

最近那覇高校の金城氏から琉球貝塚の分布に関する執筆を依頼され現在資料整理中のところ、本日（一九五四年一月四日）はからずも大毎鹿児島版昭和二十八年十二月二十三日発行第一面三千年前の人骨発掘完全な形で出水貝塚から、常楽院や桜島など第二次県指定文化財に答申の表題記事中「なお復帰する奄美大島が南方動植物の宝庫であり各島の民族文化は琉球のそれと深い関連を持っている点から同日の専門委員会では奄美大島の文化財調査のために十分予算措置を講ずるよう要望した。」に大なるショックを受け矢も盾もたまらず筆を執った次第である。

二、旅日記

調査に関する旅日記は後//研究家に必要な資料となるので文語口語混じりの至って拙いものながら左に掲げる。

十二月二日 晴、夜雨風

午後一時美島丸那覇出港、洲鎌君が見送ってくれた、桟橋に林清国氏と十幾年ぶりで会う、官房長か誰かの見送りに見えていた、その他は見知らぬ顔ばかり。海は静かでよい出港日和だった。港外から眺めた沖縄南部の姿は戦争直後と較べて復興の一途をたどりつつあるたくましい頼もしさとでも表現し様か。読谷山、座喜味城跡を遙かに見はるかす国頭連山のすみ絵のような美しさ、それを背景にした大那覇港の姿を今更の如く眺めた事だった。一寝入りして波のうねりを感じた。どれ位走ったらうか、へさきへあたる波が強くなりそのしぶきが左舷を洗うようになり船は左右動を初（始）めた。走航すること八時半向い風で波強く惜しいことに逆航して本部と瀬底との海峡に避難せねばならなかった。

三日午後三時半出帆曇

四日、午前十一時半名瀬着、雨

夜エール大学嘱託鳥類の小野氏と共に林野関係職員の歓迎会を受く。

五日、午前九時名瀬発新村十二時半着。八野国有林採集、今年最低の底冷に会う。

六日、午前新村役勝採集十二時半新村発午後四時半古仁屋着。田崎君の出迎を受く（曇天）

七日、午前九時半海津崎採集、雨天。

八日、雨採集不能、古仁屋初校付近クロガネモチ熟す。ユスラヤシ町内に栽培、町内川辺アコウらしき物（オウバアコウ近品）あり。夜七時半出帆篠川に向う、サルベージ船新光丸故障し夜となる、やむなく昭和丸（篠川定期）にて夜九時前着

九日、曇時々雨、篠川発新村に向う、途中深山苗畑の杉広葉杉苗を見る。杉の二カ年大苗施肥したもの五尺以上となり移植に不適な程也、苗木は叫佐則常庸夫よく經營す。古仁屋より三島広助氏（森林主事湯湾駐在）同伴

十日、晴、曇、時々雨、新村発湯湾へ、揚子木という樟科の小けう木（アオモジ）、ウシクサの大型品等を途中見る。湯湾近くタネツケバナ類似大型品水中に生ず、田畔ヨメナに近き品あり。

筒状花の集合直径小舌状花の紫色濃く甚だ長し、晩三島氏持参のシマミカン（シーカーサーに似て甘く美味）を鱈腹食う作島君塙サバを食い番茶を急須の三杯も飲む。○美人揃の部落。

十一日 晴天、湯湾発、福本着。三島氏同伴湯湾岳登山、珍種多し、午後五時頃マンガン鉱山で河野森林主事に会い河野氏先導福本部落に向う。夜は福本移住部落民と懇談、移住民の苦境を聴く、援助の要を痛感す。（小生は八重山移住の専任技師であったし、第二回目までの移住は小生が担当した。）

十二日 朝雨、後晴。福本発、大兼久、音勝着。

大和旅館で林務係官榎氏と同宿。榎氏の好意により明日は岩崎山採集行と決す。ハブの話に花が咲く。

十三日 音勝泊、晴天。

海岸にてカナムグラ採集、笠利村に多き由。岩崎山採集ヒメナベワリを二、三採る。川中でヒメハブ（クファー）川岸で五尺二寸のハブをしとめる。ナゴラン見えず、チケイラン、エリヤ一種等を探る。

十四日 晴、音勝発名瀬着。名瀬発赤木名泊。

午後二時名瀬発赤木名行自動車に乗る。五時半着、郷土博物館職員山下氏、林務官上野氏同伴す、大島教職員組合の井上氏と四人宿泊。

十五日 晴、赤木名、宇宿、笠利泊。

宇宿貝塚にて土器発掘。綾丸岬にてヤマラッキヨウ、オウマツバシバ採集。宇宿にては小学校長松田氏の好意に接し、笠利にて名瀬警察署長松井氏と同宿、村有志と酒を汲み交す。佐仁小学校長安田氏の好意により二日間氏をわざらわす。

十六日 雨、笠利発、用、佐仁、赤木名着。

マルバグミ開花、屋仁耕地整理田ぼの近辺にて採集。佐仁岬にてオウシマノジギクの他シマチカラシバを見、ヒオウギの野生化を見る。

十七日 雨、宇宿貝塚発掘。

校長以下職員の援助を受く、面白き土器の破片出ず。

十八日 晴、赤木名発名瀬着。支庁林務に寄る。郷土博物館にて考古学資料写真を撮る。

夜、山下君の家へ行き馳走にあづかる。熱心なる郷土研究家也。資料多数の中、入ずみ集異彩を放つ。

十九日 晴、午前九時名瀬発、鬼界島へ行く。波少しく荒し、次第に和ぐ。午後菅原神社を中心に貝塚らしき感あり、調査す。

二十日 鬼界町、湾発小野津行き、途中伊佐根久部落が貝塚の跡らしく感ず。小野津かり又水、源為朝のカブラ矢の抜け跡より発せりという泉を見る。鬼界島のシマアザミは純粋なる紫色で丁度イリオモテアザミの如し。伊佐根久貝塚つきとめ得ず残念也。

二十一日 午前雨、午後曇。

昨夜より海荒れ出し、今朝は時化となる。当分出帆の見込なし。午後から中里部落砂丘貝塚探索、発掘す。中心地は破壊せられたるが如し。宇宿貝塚似の浮紋一個の他皆無紋也。帰途湾菅原神社貝塚を探索す。或はこの貝塚も破壊せられたるか、これは余程大なる貝塚なりしやと思わる。日暮れ明朝を期す。

二十二日 晴、天気和らぐ。朝菅原神社一帯を調査、湾小学校長の好意で道具を借りて発掘。有紋土器破片は只一個のみ。午後より校長同伴荒木貝塚へ、荒木校に立ち寄り職員生徒の手をかりて発掘。貝は多きも土器未発見、近辺より発掘せる石おの荒木小学校にあり。此の貝塚は未知数なり、住居らしきもの多数あり、特に有孔虫砂岩を巧みに利用せる精巧なるたて穴あり、注意を要す。

病（二カ）十三日 晴 鬼界島発名瀬着

天神丸は午前十時ごろ出帆、午後二時ごろ名瀬着、林務を訪ね松本氏の案内で名瀬苗畑見学、やせた段々畑にて苦勞多きものと認む。杉の実生の赤渋的な目的現象は何？ 米国樹種は良好なる方なり、日暮

れて帰館す。博物館の山下氏と夜十一時ごろまで放談す。

二十四日 午前十時ごろ名瀬発徳の島に向う、瀬戸内入口辺で風向転じ時化模様追手が向風となりしたため案外時間がかかり夜八時半ごろ亀徳着、営林署退庁せるため電話不通、政田旅館宿泊。

二十五日 雨模様、営林所クリスマスのため電話不通、こくて営林所へ行く、隣接の小学校長大川氏に聞き所長宮古氏訪問。林務課の大城君が来ている事が分る。琉球松種子の件なり、本日出帆の由なるも如何なりしや午後徳和瀬苗畠へ所長並に米田氏案内にて訪う。比較的成績良好、特にイジュの実生苗は上成績なり、米国種子の方も幾分発育する見込み、明日は面縄貝塚行。

二十六日 晴 亀津小校長、中校社会科教員並に米田氏同伴面縄貝塚行、第一貝塚弥生式、第二貝塚繩文式、喜念小学校の砂丘貝塚殆んど無紋、喜念県道筋古墳発掘跡地等を見る。アキグミの一種珍しきものあり。

二十七日 晴 三京行（みきよ）

徳之島営林所長以下米田氏、福富氏玉本氏、松岡氏、その他の所員、中学校教員、小学校教員と賑やかに出発、山道を採集しながら行く皆熱心なり。午後二時過ぎ教員団は帰る。所員は三京事務所に夕刻着、晩は暖かき食前の宴を開き、徳之島音楽を三京の老人により演奏、興味津々たるものあり、夕食は三京乙女等の手になるシイタケ料理なり、十一時寝につく。

二十八日 夜中雨降りあやぶまれたが幸晴れ上り、九時半出発。出発に先立ち福富氏指導のシイタケ人工栽培地を見学、二カ年目なる由、数株昨夜の雨で発生、写真にした。夕べ参集されし担当区員をも含せ母間（ぼま）へ出る林道を採集、談笑しながら行く、よき採集行なり。午後四時過ぎ母間に着き支那そばに舌づみを打ち、四分の三トラックにて亀津帰所、途中亀徳にて便船の都合をきく、明後日出帆の予定なり。家の事を思い帰心矢の如し、天気の都合なれば如何ともし難し。夜徳之島担当員営林所員よりの忘年会兼採集会の慰労宴に招かれ感激を新にした。

二十九日 晴 又曇、波は少し荒いが出帆すること。午前中亀津小学校・中学校の採集植物鑑定を終え、午後二時亀徳へ向け三輪車を走らす。午後五時半頃スキウス丸出帆。営林所長宮古氏他職員の見送りを受く、有難きことなり、航くにしたがって波は静かになり三十日晚沖縄本島の美しき夜景を遠望しながら七時半安謝に入港。一ヶ月に亘る旅行これで終る。

三、貝塚分布

1. はしがき

球陽に太古混沌（こんとん）たる時代に東の海の波は西の海へ西の海の波は東の海へ越えていたと書いてあるが、これは単なる“つくりごと”ではなくて我が琉球列島はその昔は支那大陸と陸続きであったが、地殻の変動によって支那大陸から離れ、その上或時代にはその大部分が海中に沈み又或時代には浮上りこれを幾度か繰返して現在に至っている。

現在の琉球列島は沈下したのが浮上りつつあるので、我々が見ている現在の姿はかつて支那大陸の一部であった時代の琉球太古山脈の残骸である。

琉球では標高三百米の丘陵地にも珊瑚礁がある。之はかつて此の部分まで海中に沈んだ証拠である。琉球列島の珊瑚礁地帯を遠くから眺めると海岸から段々をなし、幾つかの段丘を形造っている。之を海岸段丘と名づける。此の海岸段丘上に歴史以前の人類が住んでいて貝塚を造ったのである。学者は貝塚は昔の海岸地帯に多く出来たと解釈するので、いくつかの貝塚所在地に印をつけこれ等を結ぶとその時代の海岸線が復元されると考えている。

琉球の貝塚は大体海拔三十米から二百米の間にがあるので今試みにそれだけ我が琉球を沈下させたとして地図を作るなら、それがその当時の海岸線でなければならない。今沖縄本島に例をとるならば現在

の沖縄本島は南北に長く如何にも沖に縄が浮いた格好をしているが、貝塚時代にはこの縄が切れ切れていた。即ちこの切れ切れの縄は幾つかの地塊で縄の切れ目は水道をなしていたことになる。

球陽の著者はこれをいと簡単に説明したに過ぎない。この球陽の記事は非常に大事なものでこれが充分納得できなければ琉球の貝塚を充分にせん（せつか）明することはできない。

なぜなれば琉球の貝塚は幾つかの遠くあるいは近く離れた帶状の島々に住んだ人々によって造られたからだ。筆者の研究では奄美大島から沖縄本島に至る縄文式土器は総べて密接な関係があり、又彼等の石器材料は時に火山岩が使用されており、甚だ特異な例としては遠く南洋群島の石器が持込まれているのから推して見た時相当の航海技術と造船術が発達していたと見なければならない。之無くして次の弥生文化への移行即ち農業技術特に稻其の他の種子移入は考えられないである。

民族移動の場合に稻種子等を持ち込んだとする考えは早計であろうと思われる。

筆者は奄美大島群島貝塚土器を見て弥生式土器は縄文式土器から次第に発達して来たのではないかと云う考え方を持つものであるが之と同様、狩猟文化から農業文化への移行も奄美大島特に徳之島で見たのではないかと云う考え方抱くものである。これは今後の学者の調査にまつ事にして次の各論で貝塚の分布を述べて学者の調査資料にしたいと思う。

2. 各論

便宜上大島本島、徳之島、鬼界島の三つに分けて解説する。沖之永良部与論は未調査につき言及することは出来ない。

イ、大島本島

A. 深道貝塚

宇宿小学校東北方の隆起珊瑚礁類似の丘陵上にあって一部分道路開通のため破壊され夥しい貝類が道路上に遠く散乱している。種々の変化形式のある縄文土器がでるが殊に著しいのは琉球列島で未発見とされていた尖底土器底の出土することと弥生式土器への移行を（示す？）土器口縁の出土することである。

土器紋様は琉球共通の沈線紋、爪形文を主とするが中に奄美産弥生式くし目土器に見られるくし紋のあるのが注目に値する。

B. 宇泊貝塚

宇泊小学校を中心に附近の墓地を合せたのが此の貝塚で之は全く破壊され調査困難な状態にある。

C. 其他

名瀬市付附近から出土した黒色の弥生式有紋（くし目・波状紋）並に無紋の壺が名瀬市郷土博物館に数個保存されている。奄美大島にはけんもん（木の精）の持ち運んだと云われる貝の山が山地の容（榕か）樹下にあると聞いたが之は弥生式文化との何らかのつながりがあるものと著者は見ている。

ロ、徳之島

A. 面縄第一貝塚

面縄第一貝塚は面縄小学校敷地にある第二貝塚から二百米位離れた隆起珊瑚礁崖下に形成されているもので明らかに縄文土器紋様の退行現象が見られると同時に弥生式土器の限界内に入っていると思われる。つまり日本本土の如く弥生式土器に影響された縄文土器でなくここでは縄文土器から弥生式土器へ発展した初期弥生式貝塚土器と思われるものが見られる。

日本の如く突然発生している弥生式貝塚でなく、面縄第二貝塚から移行した貝塚である。土器の頸部から口縁部へ反り、底部と胴部との交点の反っているのが他の琉球縄文土器との大なる相違で、第一、無紋の場合もあり第二、肩に隆起紋のある場合もあり、第二の場合には頸部にくし目のある場合と、

粗い斜線の沈線紋のある場合とがある。この肩部の隆起紋は明らかに琉球における現在使用されている壺類の隆起紋に続くものである。同貝塚の貝類は琉球一般の貝塚の貝類とは余程趣の異なるもので時代を決定するのに重要なものである。即ち面縄第二貝塚と比較すると、第二貝塚では外海の貝類を捕集しているのに対し第一貝塚では内海的波の静かな泥土せい息の貝を主としている。それで第二貝塚から第一貝塚に至るまでには相当地形的变化が認められると同時に或は水田に続く波静かな浅海の貝を捕集したのではないかと推察する。

B. 面縄第二貝塚

面縄小学校地続きにある貝塚で砂丘上に形成され、一部は海水にさらわれて消滅しているが、ほとんど未発掘のままだから将来琉球縄文貝塚の研究資料として甚だ貴重なものである。土器は他の貝塚とは著しく相違した赤味の強い特徴のある砂混りの土が使用され、他の貝塚土器と比較して紋様が奔放で線の巾が広く、かつ深く勢よく刻まれているのが特徴といえる。

殆んど他の縄文貝塚と同じ紋様を使用してこれ程著しい感じを与える貝塚は琉球には他にない特異な現象である。

C. 喜念貝塚

喜念小学校隣りの砂丘貝塚で弥生式と思われる土器を出す。口縁が丸くて厚く殆んど現在琉球で使用されている那覇市壺屋製の壺の口を思わせるもので、口縁部に隆線文のあるのは琉球では甚だ珍らしい事例に属するものである。

D. 喜念県道筋古墳

亀津町から喜念部落へ行く途中県道右手にある古墳でドルメン式のものでなく自然に崩落したと思われる珊瑚礁の岩が上からかぶさって出来たトンネルを利用したと思われるものだが内容は持ち去られて今は石器の破片等により僅かにそれと分る程度になっている。

E. その他

伊仙村の佐弁貝塚は都合により調査することができなかった、徳之島では亀津町付近、母間附近にまだまだ発見されると思われるし、田地に近い貝塚は特に注意して調査する（必）要があろう。

ハ、鬼界島

A. 菅原神社貝塚（湾貝塚）

湾小学校裏手神社境内並にその付近一帯が貝塚であるが大部分破壊されている。

縄文式土器破片は一個しか採集されず、他に耳付土器破片（把手）が得られた。特に著しいのは土器底が現在見るような上底高台がでたこと、その底に四個の小穴をあけて紐を通すようにしてあること、又口縁の形式等からして弥生式貝塚に近いものではなかろうかと思われる。

B. 中里貝塚

字中里の県道筋の貝塚で道路工作のため破壊されている。縄文土器破片一個を得たが道路工事中多数の石器が出たが人夫達によって散々に割られ打ち捨てたらしい。

C. ケンドンガサキ、シチロウガハナ貝塚群

これは中里貝塚と一群にすべき貝塚群で中里から東西に伸びる内陸砂丘（こんな砂丘は琉球では鬼界島だけである）上数カ所に形成されたもので今のところ無紋破片ばかりしか見つからないが中里貝塚同様、縄文貝塚に属するものと見ている。ケン殿が崎、七郎が端等人名の残っているのも面白く、砂丘の所々から土器破片が出る。珊瑚礁上でなく、砂丘上に出来た琉球の貝塚は異例に属するもので注意に値する。

D. 荒木貝塚

荒木小学校東方約五百米位の村はずれにある貝塚で未だ発掘品を見ないが、石器、土器が以前その付近から出たらしい、夥しい貝層からなっているが未だ未知数の貝塚で、今後の発掘研究にまたねばならない。たて穴式の隆起珊瑚礁に人工を加えたらしい住居跡と思われるものから見て、又その付近から出た土器を売り食いした人の居る点から見て弥生式貝塚ではないかと思われるが不明である。

E. 伊佐根又遺物散布地

伊佐根又部落とその付近を含む一帯がそれで、特に田ぼ寄りの神社境内付近から隣り合う泉の中に石器破片が多数見られ、それから二百米程へだてた西方畠地の小丘陵地に黒色の腐植土等がある。此の遺物包含地も未知数ではあるが、稻作を営んだ事が予想され、泉付近の田ぼの発掘等将来に興味を残している。

3 むすび

以上を要約すると

- A、琉球にも弥生式文化が存したのではないか
- B、弥生式文化は琉球で発祥したのではないか
- C、恐らく奄美大島古代文化の中心地は徳之島であったであろう。

ということになる。

参考にする文献一冊もなく、参考にすべき日本本土から出土した弥生式土器の一片さえもない現状の琉球でこのような発表をするのは実にけしからぬことではあるが、やみ難き事情から恥を忍んで書くことにした。

東苑隨想 その二 ・・・沖縄列島の貝塚分布・・・

多和田眞淳

はしがき

此處で云う沖縄列島とは琉球列島から奄美群島を除いた全島嶼を指すもので、沖縄本島地方と先島地方の総称に外ならない。

筆者は琉球の貝塚土器は眞の縄文土器ではないと云う声を度々耳にしているが、それは東京の科学博物館あたりで実際に縄文土器を見日本本土の貝塚発掘等を実際に見聞している人の言であるから、或意味に於て一理はあるものと思う。この点からすれば琉球の縄文土器は縄文式系土器という方が一段はっきりするに違いない、しかし日本本土の縄文土器にしても必ずしも常に縄文が伴うものではなく九州地方では初期には縄文がなく縄文が顕著になったのが後期だと沖縄概観で八幡一郎氏が述べられているのを見ても強いて縄文式系土器といわんでも呼び馴れた縄文土器で結構だという考えを持っている。又かく呼ぶ裏には琉球にも真正、縄文を施した土器が出てほしいという一種の期待もあるわけである。

しかば今まで出土した琉球の縄文土器の特徴はどこにあるかというと、筆者をして簡明にいわしむれば終始一貫したほとんど円曲線を使用しないヘラガキの沈線文だと答える。

爪形文も捺印文も隆起文もあるにはあるが著しい特徴には入らない。徳之島の面縄第一貝塚や、屋我地島の運天原サバヤ貝塚土器に隆線文があつても種々の点から弥生式土器への胎動とみる筆者には縄文土器に包含さるべき性質のものではないと思っているし、所々の貝塚から出るくし目文土器も縄文

土器から除外すべきものと思う。

今一つ縄文土器に入れて不都合なのは、所々の貝塚から出る現在那覇市壺屋産かめと同一形式の口をもった土器であり、特に喜念貝塚から出土した口唇部に直角に二個の著しく隆起した隆線文のある土器に於て然りである。琉球に如何にして稻が渡来し、又琉球の金石併用時代の有無等についても各論でいさかふれて見たいと思う。

各 論

一、沖縄本島地方

1. 北部地区

(イ) 屋我地島運天原サバヤ貝塚

屋我地島の運天港に面した運天原のサバヤという洞穴の直下にある貝塚がそれで、大部分破壊され一部見事な貝層が残されている。サバヤという洞穴は住居跡であるが殆んど古代人が住んだ跡方がないまでに遺物は湮滅している。この洞穴のみね続きに一方は粘土を道路工事に運搬して低い断崖となり反対側は畠地として耕作されその間に人一人通れる小路が馬の背になっている箇所があるが、この馬の背は木灰の包含層で明かに住居跡である。粘土を取去らなければ住居跡が判明しあつたものを知らぬが故にかかる貴重な文化財が次々に破壊されて行くことは惜しみても余りあるものである。

貝層の中から出土する隆線を有する土器片は徳之島の面縄第一貝塚系で今のところこの系統の土器は二カ所の他知られていない。この形式の土器は琉球地方で直接農耕文化とつながりを有するものと考えられるもので沖縄の戦国時代各部落々々の按司または世の主なるものが支那大陸と直接交易をした時代の土器形式の祖形と見られるものである。

この貝塚の遺物は一部は水田になっている低湿地へ埋没し、一部は部落の埋立に使用されたため現在残っている貴重な包含層は学者による発掘以外みだりに破壊することは慎しむべきである。

(ロ) 屋我地御嶽貝塚

屋我地島最高の御嶽で全体が貝塚であるが沖縄普通の貝塚とは形式が異っている。即ち断崖下に形成されずに岡全体が貝塚でその点八重山の川平貝塚と似ている。この貝塚は未発掘であるし破壊もされていないので如何なるものが出土するか分からぬが表面採集の結果からするとサバヤ貝塚と同一系統に属する。

(ハ) 辺土上原遺物包含地

去年放水路掘さく中人骨と石おのが出てその現品は琉球新報社に保管されている。今年の一月ごろ琉大美術部学生山入端君が貝塚土器破片を採集しているが未発掘故同君の調査により貝塚として近日発表されるものと期待している。種々の点から考察して沖縄普通の縄文土器が得られると思う。沖縄本島北端の遺物包含地として重要視しなければならぬものである。

2. 中部地区

(イ) 長浜貝塚

読谷村字長浜にある貝塚でティランジューという入江を眼下にひかえた断崖下に形成された琉球普通の縄文土器を出す大部分破壊されているが遺物はほとんど残っていた。戦後は未調査のため現在どうなっているか分らない。

(ロ) 牧港貝塚

沖縄で一番低地にある貝塚でわずかに櫛目文土器片が出土する。

(ハ) 崎樋川貝塚

那覇市近ぼうの靈所崎樋川の隆起珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出土する。戦後大

部分破壊されている。

(二) 城嶽貝塚

珊瑚礁上に形成された珍しい貝塚でしかも那覇市唯一の貴重なものであったが心無き人々により殆んど跡方なきまでに徹底的に破壊された遺跡である。此処から出る縄文土器の文様は一種特別なもので、其他土器形式の異なる土器片も出土した記録がある。八幡一郎氏に従えば琉球で新しい貝塚に属し支那の戦国末から秦代にかけて通用した明刀錢という刀形の貨幣が出土し後世の混入でないからこの貝塚だけは絶対年代が推せるとなっている。大体二千二百年前と思えば間違いないであろう。

(ホ) おぎ堂貝塚

中城々跡付近のおぎ堂部落ナンジャジー（銀岩）にある貝塚で学者から今まで沖縄最古の貝塚とされていた。琉球普通の縄文土器を出す。

(ヘ) 仲宗根貝塚

越來村仲宗根御岳東方珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出す。仲宗根御岳内の珊瑚礁上からはそのまま無造作に置かれた多数の見事な磨製石おの打製石おのその他石器類が多数発見されたことがある。

(ト) ヤシマ貝塚

越來村胡差農業指導所付近ヤシマガードという泉上方崖下にある貝塚で住居跡を伴い琉球普通縄文土器中おぎ堂の文様と同一な土器を出す。小型石おのと鹿角器を出土したのが注目に値する。鹿角器は未だ他の貝塚からは発見されていない。確かにこの貝塚形成当時まで沖縄に鹿がせい息していたことを物語っている。この貝塚はおぎ堂貝塚よりも古いものである。

(チ) 大田貝塚

中頭郡具志川村字大田にある墓地マチクー原の断崖下にある貝塚で墓地に被われ破壊されてはいるが琉球普通の縄文土器を出す。

(リ) アカジヤンガー貝塚

大田貝塚と一群をなす貝塚で大田貝塚から約二百米位離れた道路脇の段畠上に形成され、独立した隆起珊瑚礁岩塊の横穴住居を伴うている。

(ヌ) 天願貝塚

戦前の天願小学校敷地にある貝塚で琉球普通の縄文土器片を出すこの貝塚の石おのは他の貝塚のものと少し形式が異っている。天願川は最近人工を加えて水路は変更されたものであって昔の天願川は貝塚に沿うて流れていたのである。付近にジチグシク。天願タロージ等貝塚と関連する地名がある。

(ル) 伊波貝塚

琉球最大の縄文貝塚で松村博士の石川チヌヒンチャーベ塚がこれで大山柏氏の伊波貝塚もこれである。伊波城跡付近から下方断崖下チヌヒンチャビラ付近にかけて住居跡貝塚、貝塚時代墓地と広大な面積を有する遺蹟である。

日本の大学者でさえ別々に二つの名前を与えた程の貝塚だから今ごろの素人研究家が往々新発見だとさつ覚を起すのは当然とすべきだが琉球普通の縄文土器を出すが特に此の貝塚の特徴は貝器の多い事で学者仲間で有名である。琉球に稻の種子をもたらしたのは此の貝塚人だと考察される節がある。

(ヲ) 勝連南風原貝塚

かつて新聞に発表された貝塚名であるが筆者は未調査につき不明である。

(ワ) 与那城村宮城島シヌグ堂貝塚

宮城島シヌグ堂の隆起珊瑚礁断崖下にある貝塚で琉球普通の縄文土器を出す。

(カ) 中城渡口洞穴遺物散布地

琉球でニービと云う微粒質砂岩にうがたれた洞穴内の壁とその付近一帯に無紋土器破片が見られたが戦後は不明になっている。牧港貝塚系と思われるが今後の研究にまつより致し方がない。著しく退行した土器であり新しい貝塚土器であることには間違いない。附近にサンスクリットの碑がある。

(ヨ) 其他

喜屋武城跡、中城城跡、越来城跡、具志川城跡は貝塚時代人と関係があり石器或は土器片を出すが充分研究されてはいないので後考にまつ。

3. 南部地区

(イ) 与座嶽住居跡

高嶺村与座嶽拝所は穴居住居跡で数個の石器が工事中出て土器破片も伴ったらしいが惜しいことに数個の石器が首里博物館に蔵せられたのみで島有に帰した。

北方断崖面に貝塚があると思われるがこれまた地均しの為多量の土砂石塊が覆い被され今の所発掘困難である。

(ロ) 知念村具志堅ウージ遺蹟

このウージ洞穴のクチャの上部にたい積した粘土層内から鹿の化石が出るが、新石器時代の貝塚とは無関係のようである。しかし今後充分なる注意の下に発掘しなければ明言できないが、今までの発掘作業から考察すればこの鹿の化石と同じ層から消炭の小塊が出土しているから石器時代人に何らかの関連があると見て差し支えなかろうと思う。

鹿化石包含層よりも上層に一時的に新石器時代人がこの洞穴を住居にしていたと見えてわずか乍ら縄文土器の破片が洞穴入口の土中から見出される。

(ハ) 知念上原遺物散布地群

知念上原から王城城跡一帯の断崖上断崖下の所々方々から石器並に土器の破片が得られるので何れかに大きな貝塚があるものと予想されるが未だ発見されていない。

(ニ) ミントン城遺跡

この遺跡は稻作と関係のある貝塚人の住居跡らしくこの点民間伝承とも一致するものの様で、著しい磨製石器と櫛目土器に属すると思われる土器片が出る。

初め稻種子を得様（得よう？）としたのは伊波貝塚人らしく安南辺に出かけて種子を得玉城百名のミー原海岸で難破したらしく、伊波貝塚人のもたらした種子を得て稻作を始めたのがミントン貝塚人の様である。（速断はゆるされんが民間伝承と貝塚土器等からの考察である）

ミントン城遺跡は知念上原遺物散布地群内にあるけれどもその群からは除外すべきものと思われる。ミントン城遺跡の土器片は面縄第一貝塚土器、運天原サバヤ貝塚土器、具志頭城跡（島尻具志頭）土器等と関係があるものと筆者はみている。

(ホ) 豊見城城跡遺物包含地

城跡は採石したため殆ど原形を失っているが、城の北方の一角にわずかながら遺物を包含したところがあるが大きな期待はかけられない。縄文土器系統と思われる。

(ヘ) 糸満町稻峯屋取遺物散布地

稻峯屋取の水田と湧水を前にした墓地付近に遺物が散布しているが遠く離れた水田の土手からも土器破片が得られた。

(ホ) (ト?) 保栄茂城跡

島尻郡保栄茂城跡からも一種の土器破片が出るが今の所判然としない。

その他南山城、首里城等今後の研究にまたねばならぬ個所が多く特に首里城の如きは専門家の手をわざらはさねば分からぬ不可解な様相を帶びた遺跡である。国頭郡大宜味村の謝名城も発掘せねば判明しない遺跡で遺物が表面に露出していない所にかえって興味がある。

(ト) (チ?) 国吉城跡遺物散布地

糸満町と凹地をへだてた南方の丘陵地で城跡と云はず付近一帯道路上で石器並に石器破片が得られる、道路上の石器破片が濃密な点からして此の付近に貝塚が発見される公算大である。

(チ) (リ?) 久米島の石剣

昭和七年久米島に植物採集を試みた際仲原善忠氏採集と称する石剣二丁を得たので貝塚発見につとめたが果たさなかった。あの石剣は石材が沖縄本島のものとは異なるし沖縄でかゝる石剣は出土していないので注意を要する。

4. 金石併用時代

こゝでいう金石併用時代とは石器を使用しているが貝塚土器は出土しないで磁器の出土するものを指す。従って支那、安南、朝鮮等と交易したと思われるので鉄器等の金属器を使用したと思われるが朽ち果てゝ今は発見できないものと仮定しての時代である。

(イ) 恩納城

恩納と大田部落の境界にある古城でこの古城を築いた時代この地は小さい岬の突端であった事が明白である。天然の隆起珊瑚石灰岩を巧みに利用した本丸があり石垣は天然石で築かれ琉球の古城跡中で非常に古いものと思う。六百年程前北山に滅ぼされる以前この按司は一国の世の主として外国と交易したと思われ各種の磁器破片が出土する。石ふその他の石器も得られる 二の丸までは存するが惜しい事に三の丸と覺しき個所は石材採取のため跡方もなく運び去られ生々しい白膚を見せ、その上層に真黒い遺物包含層たる腐植土が天に冲してバスの上からでもはっきり分かる。

(ロ) 山田城

恩納村山田城の西方崖下の岩影を利用した住居跡で自然の扁平な石を敷ならべた石器時代の住居跡に似た金石併用時代の住居跡である。ここでは磁器破片とともに新石器時代から退行した土器破片も出土する。同じ山田城でも他の個所に形成されたものは歴史時代のものだから混同せぬ様注意しなければいけない。

(ハ) 兼城御岳

糸満町に近い兼城村字兼城にある御岳は琉球の新石器時代から歴史時代への移り変りを示す遺跡である。この一帯にも支那方面と交易した世の主がいたに違いない。

(ニ) 具志頭城

島尻郡字具志頭には二つの城があるがその一つはタダナ城で今一つが具志頭城である。字具志頭の古島はタダナ城を中心にして出来ていたらしい形跡がある。具志頭城はタダナ城より古い城で此の城に二つの中心地点がある。一つは拝所で今一つはハクスイの塔の立っている地点で時代的に開きがあらうと思はれる。拝所を中心とした個所からは弥生式系と思はれる土器が出る、此土器は明かに面縄第一貝塚系土器に縁があるにちがいない。ハクスイの塔を中心とした個所からは磁器其他陶器 土器破片が出るが之が世の主時代の遺跡と見て差し支へないとと思ふ、つまり琉球の金石併用時代の遺跡である。

二、先島地方

1. 石垣島

(イ) 川平獅子森貝塚

石垣島字川平には三つの貝塚があって何れもスリ鉢形の岡に形成されているのが著しい特徴である。此の獅子森貝塚は遺跡が二重になっていて上層は歴史時代の仲間村遺跡であり下層が石器時代の遺跡と見るのが至当であろう。

(口) 第二貝塚

(ハ) 第三貝塚

第二、第三ともに最近の発見になる貝塚で未発掘であるが形式系統全く獅子森貝塚群に属する。川平貝塚群の出土品は歴史時代のものと混同していると見られる節があり再検討を要するもので今後の慎重なる調査研究にまたねばならない。

(二) 大浜フルスト原貝塚

大浜赤蜂の居城であったフルスト原がそれで日本軍の飛行機誘導路工事の際露出されたものであるが川平貝塚群同様系統の判明しない貝塚である。

その他

八重山群島では石垣島、西表島よりもむしろその周辺の隆起珊瑚の小島を調査することによって多くの発見がなされるのは火を見るよりも明らかである。

沖縄本島の国頭山地が居住地たる中南部地区或いは周辺離島の食糧補給地だったと同様其の法則は直ちに石垣、西表の両島にあてはまるものである。

与那国島と波照間島は文字通り絶海の孤島であり言語風俗を異にする他国との接触点にある重要な島であり此の両島が或程度琉球文化の謎を解く鍵を持っているに違いないと考へるのはあながち筆者一人の思い過しでもあるまい。

尖閣列島には貝塚人の遺跡は皆無であり、宮古諸島は地下水が極端に低いため調査は困難を極めるのは必定である。然し古代人がせっかく見つけた島影をむげに見捨てるはずはなく、何か残して行っているに違いない。古代人がなせしごとく困苦欠乏に打ちかって不斷の努力を払ってこそ発見の喜び研究の喜びに与えられるのである。

結 び

琉大を初め各学校各文化研究会等の茶飲話の中にそんなに貝塚が沢山あるのはおかしい、とか貝塚は案外最近のものだと色々私見なるものが乱れ飛やに聞いているが筆者はむしろ少な過ぎると思っている。一帯古代人の遺物なるものは石灰質の土質には良く保存されるものであるが、国頭郡等の古生層地帯では石器土器以外は朽ち果てて消え去る場合が多い訳で例えあっても発見が困難である。このような湮滅遺跡、発見困難な遺跡を合せるともっとたくさんあって良い訳である。また遺跡と遺物というものは長年月永住した場合にも一時的仮住居の場合にも残されるもので、古代人の頭数と遺跡の数との比を数字的に誤算してはならないのである。

貝塚は極最近の遺物には違いない。人類が地上に現われたのがわずかに百万年位前である。しかし沖縄の貝塚は日本本土の貝塚にくらべて新しいという段になると話はまた別である。何を根拠にかくいうかとなればこれまた何の根拠もないである。日本の大学者達さへ沖縄の貝塚は新しくないと見てている。比較的新しい城岳貝塚さえ約二千二百年を経ている。その他の古い貝塚は推して知るべしである。金石併用時代が約千五百年から以前と見て差支えながらうと思う、琉球におけるおもろ研究家はこの辺までさかのぼらねば充分な成果を収める事は不可能であろう、琉球貝塚の発見史は文献が無いため他日にゆづり度いと思う、此の戦争で多くの文献を失ったのはかえすがえすも残念な事である。

訂正 筆者奄美大島の貝塚分布記事に尖底土器とあるのは丸底土器の誤りにつき訂正する。

紀 要

沖縄埋文研究 5

発 行 2008年（平成20）3月28日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193番地の7
TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

印 刷 丸正印刷株式会社
〒903-0211 沖縄県西原町小那霸1215番地
TEL 098-835-8181(代) FAX 098-835-8184

BULLETIN OF THE ARCHAEOLOGICAL STUDY OF OKINAWA

No.5

Papers

Reorganization of the Skeletal Remains from Shiitachi Site, Gushikawa Island Katagiri Chiaki, Kobashigawa Takeshi, Shimabukuro Rieko, Doi Naomi (1)

History of the Study on Southern-island Nail-marked Pottery Culture Ito Kei (25)

Trade Ceramics Study in Okinawa Seto Tetsuya, Niou Kouji, Tamashiro Yasushi, Miyagi Hiroki, Azama Mitsuru, Matsubara Satoshi (55)

Summary of Excavation

Temper Analysis and Verification of Artifacts Excavated in Ouchibaru Site, West Sector, Shuri Castle Site Yamamoto Masaaki, Ueda Keiichi, Yahagi Kenji, Ishioka Tomotake (77)

Kakeboku Bomb Shelter Nishihara-cho Board of Education / Okinawa Prefectural Archeological Center (111)

Reports

Maritime Gifts Kishimoto Yoshihiko (141)

Book Review

TAWADA SHINJYUN "TOEN ZUISO", "TOEN ZUISO 2" Asato Shijun (147)

2007

OKINAWA PREFECTURAL ARCHAEOLOGICAL CENTER